Kaizô

新刊發賣!!

◇プーシュキン作
米川正夫譯
（シエルバコーフ氏裝）

オネーギン

これは珠玉の如き洗練された詩形に複雜な近代心理を盛つた驚くべき物語である。ド翁は本書を評して、天衣無縫の靈筆を以て露國の過去現在を表はすと共に儚なく美い特性を含む未來をも暗示した名作と讃美してゐる。私は此飜譯の難事業が或程度迄の成功を贏ち得た事を自負して謙抑なる喜悅を感じてゐる。（譯者）

◇◇定價貳圓八拾錢◇◇
送料金拾貳錢

◇武者小路實篤著

友情

長編小說

◇定價金壹圓四拾錢送料金八錢◇

この本は「幸福者」と「耶蘇」との間に書かれた。主人公は戀であるが友情の色彩によつて濃く染めくれたので「友情」とした。新しき村でかういふことが起つたらどうなるか自分は知らない。しかしどつちにころんでも自己の力だけのものを獲得して起き上るものは起き上ると思ふ。（著者）

武者小路實篤著

幸福者（拾八版）定價壹圓廿錢 送料金拾六錢

人間的生活（九版）定價金壹圓 送料金六錢

東京牛込神樂町二　**叢文閣**　振替東京二八八九



萬年筆は
サンエス！
爽やかなる
ペンの運び
インキは
サンエス！
鮮美極まる
永久不變色

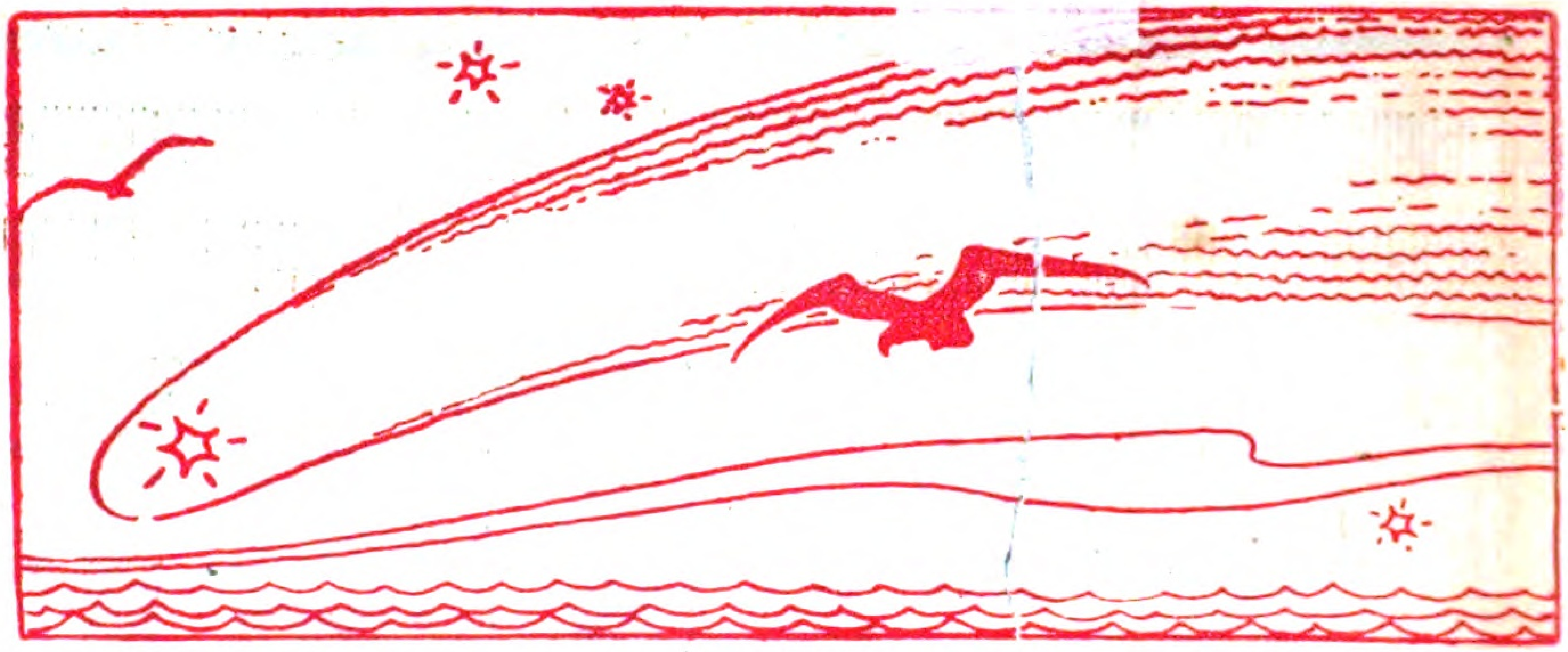
東京馬喰町

細沼株式會社

支店出張所　大阪＝福岡＝名古屋＝金澤＝札幌



改造六月號目次



大好評第四版發賣

月見草

相本まさを女史新著

津田敏子女史裝幀
島成園女史挿繪

玄文社發行

全國各書店販賣定價貳圓五拾錢

大阪時事新報懸賞小說第一等に選ばれた傑作幽かに艶めく月見草のやうな女性や、執拗な男や、情熱に燃ゆる青年や、或は小さな野心を持つ婦人や、更にまた可憐な性格を持ちながら色々の事情に制せられて、ともすると妾といふ暗い生活に這入つて行く女主人公が、歡樂と、苦惱と、悔恨と、自責の悲しい運命の淵から逭れようとする。細微な心理と環境が、赤裸々に描かれて、而もその愼ましい筆致は、最も藝術的な苦心の潜んだ、近來の力作である。

新刊長篇小說

戀草

田山花袋新著

三五版五百十頁
定價貳圓拾錢

戀草は著者の近作中最も力を注いだ力作である。最も深く人生に觸れた、最も男女の問題に密接な關係を持つた傑作である。從つて著者が最も得意とする作であることは言を待たない。殊に女性の細かい心理を深い洞察と同情とを以て描寫した點に於ては、數多い著者の作中にも他に多く類を見ることが出來ないであらう。戀の中に人生を見、人生の中に戀を見、更に歡樂の避くべからず、罪の避くべからざるを其背景となしてゐる。此作の世を動かし、讀者を熱狂さすもの、全く我々の日常の心持ちを遺憾なく描いたからである。

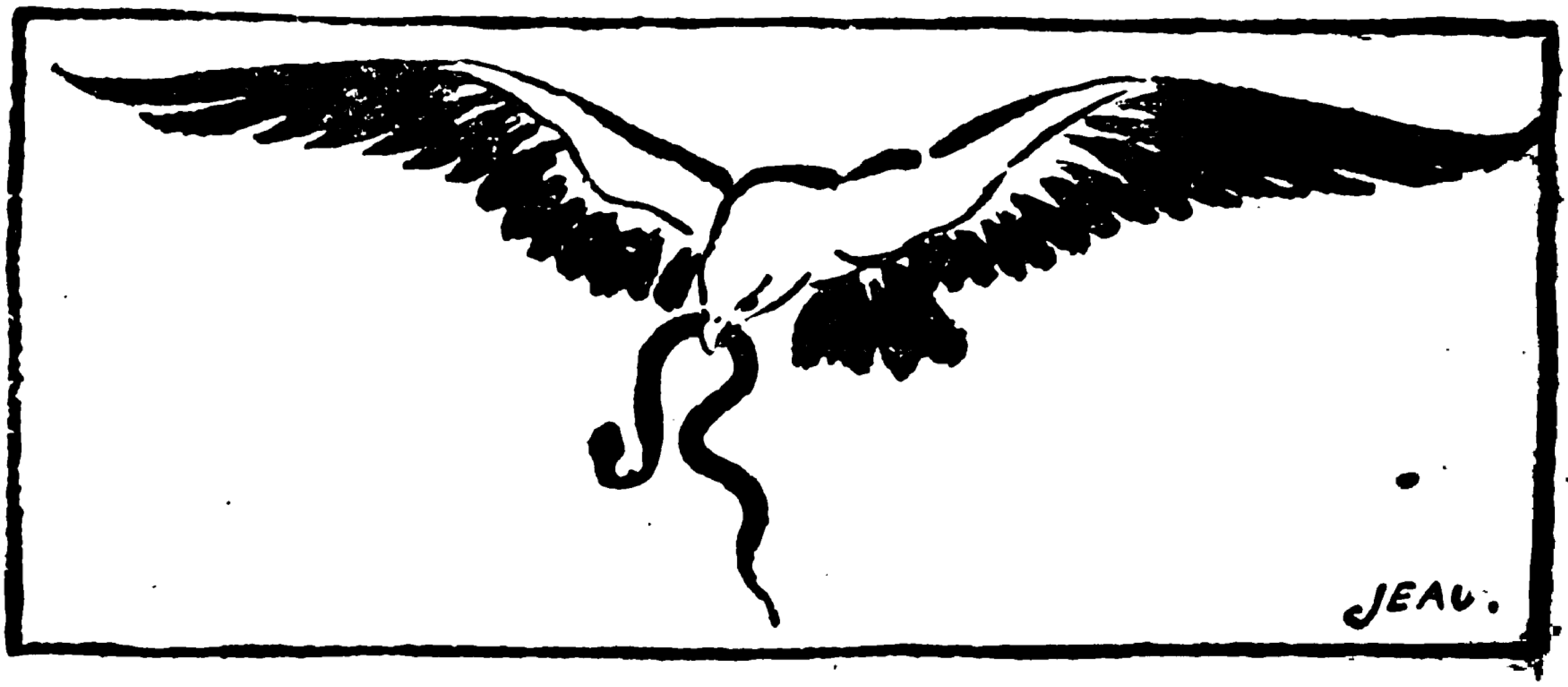
蛙 戯曲小說詩集 森林太郎譯 五版貳圓五拾錢

初戀 川路柳虹著 四版壹圓貳拾錢

几帳のかげ 伊藤燁子著 十三版貳圓五拾錢

花道 上司小劍著 四版貳圓五拾錢

くれなゐ 田山花袋著 五版貳圓參拾錢



―（改造六月號）―

五月九日の夜

五月九日の夕、何氣なく神田青年會館の前を通りかかつた、血眼になつた巡査や警部はまるで戒嚴令下に活動する如く、群衆を叱咤したり、格鬪したり、聲を嗄らし、肩を聳かし、力のつづく限り民衆の雪崩を喰ひとめておる所であつた。暫くすると、幾人もの角帽や、婦人や、紳士が幾人の、幾十人の巡査に警固されて警察へ引つ張られて行く、引つ張られて行く男も女も爭鬪の形相の凄じく、陰慘の空氣が漲つて一種云ひ知れぬ氣持を喚び起させた。

引き張られて行く人の社會主義同盟に走せ加はるものであることは勿論だが、彼も人の子、取締る巡査も同じ人の子、ああもして取締るのが國家自衛のために得策であるが、ここを眞劍に考へねばならぬ、單に當面の問題としてでなく、多望なる我日本の將來のためからして。

警官諸君も同胞である。我等は限りなき愛と、限りなき敬意とを諸君に捧つ、我等は引き張られゐる諸君、引き張る諸君が均しく人類のいとしい間柄であり、なつかしい我國民であることを忘れない、そしてその双方が互に呉越の想ひをしておることがどれだけ我等の心胸を痛めることだろう。また、一歩を進めて、國粹會の諸君でも、無政府主義の人々でも、人類の愛、生物の消長を共調として我々及び兒孫百年の長計のためによりよき生活に推し進め、よりよき世界に住むことを念とせねばならぬ。

骨肉の愛、同胞のなつかしみがありながら、初めから呉越の想ひをなし、血と血とを洗ふことを覺悟してかかることの人類としていかに無意義であるかを鑑みなくてはならぬ。

何にも好んで十字架にかかる必要はない、我等は人間の理智、道義を推廣めて十字架にかかる必要なき迄の正しい世界とし、理解ある人間とするまでだ。我等は罪さるる人、罪を申渡す人のなくなるまでの清純な世界に推し進めたい。

神よと叫ぶ時代はまだ闇黑を象徴しておる、神の存在は闇黑の世界が必要であり、光りの世、正しく輝いた世界には人類それ自身が神になるのだ、我等は所謂神の存在を我々の正義のために必要とはせぬ。

この心と、決心と、清純さと、勇猛心とを以つて當局者は政治の大本とし、綱要とし、その心本とせねばならぬのだ、吉野紙を連想せしめる程に血も涙もない取締り方はもう過去帳のものにして貰ひたい、お互はモット活力ある思念の世界、モット親み多き涙と涙との世界に棲りたいために。



價格闘爭より厚生闘爭へ

(Vom Preiskampf zum Wohlfahrtskampf)

——殊に厚生闘爭としての勞働爭議——　（其二、完結）

福田德三

八

今日の流通生活に於ける價格の決定は懸引（bargaining; Verhandlung）によるものである。英國に於て勞働協約（共同勞働契約 Tarifvertrag, contrat collectif de travail, contratto collettivo di lavoro）のことを普通に共同懸引（collective bargaining）と稱して居るのは、一見甚だ不精確な用語の樣であつて實は誠に能く其の眞相を語つて居るのである（拙著『改訂經濟學考證』二二九頁以下參照）。勞働團結が如何に發達し仲裁調停の機關が如何に整頓して居て

も、今日の流通生活の組織にして變ぜざる限りは、勞働關係は一の懸引であり、勞働協約は唯だ一の進步した懸引の形式たるに止るので、決して其以上に出づるものではないのである。唯だ從來の勞働契約に於ては其懸引は孤立的に強き雇主と弱き勞働者との間に行はれ居たのに反し、勞働協約に於ては勞働者は團結の力によつて力強き若くは對等なる懸引者となり得ると云ふのである。但し事實に於ては勞働協約存する場合に於ても勞働者が眞に雇主と對等の強さを持つ當事者となり得ない場合は澤山あるのである。然し假りに勞働協約により若くは協約なくとも團結の力によつて勞働者が雇主と眞に對等の強さを持つ取引者となつた場合を想像して見よう。此場合に於ける賃銀懸引は商品の賣買者間に行はるゝ賣買懸引の理に從ふものである。故に煩を忍んで此場合に就て先づ説明を試みよう。

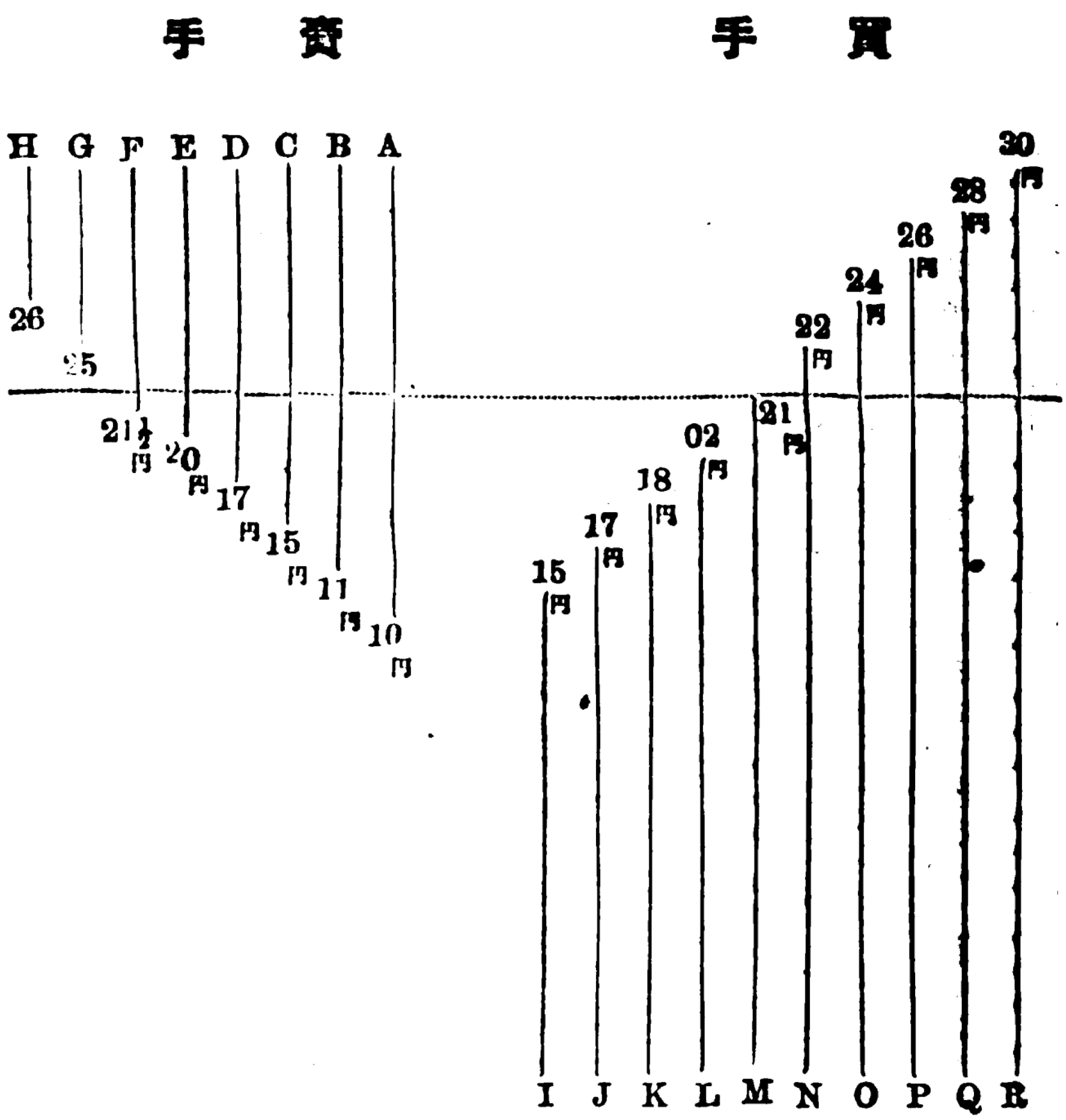
最も簡單な場合を例に取つて見る。甲は一頭の馬を有し之に對して乙一人が買手であるとする。此場合に於て乙が支拂はんとる最高の價格が甲が賣らんとする最低の價格に達せざるときは、價格は成立せず取引は行はれぬは言ふ迄もない。例へば甲は最低十五圓に賣らんとし、乙は最高十二圓までは支拂はんとする場合の如き是れである。然るに甲は最低十五圓まで賣らんとし、乙は最高十八圓までは支拂はんとするときには、賣買は行はれ價格は成立する。其成立する價格は十八圓と十五圓との間の或點たる可きである。其或點なるものは如何にして定まるか。其當事者が互に相手の立場を知らないときは此點は懸引の巧拙によつて定まり、相手の立場を知るも力對等ならざるときは力の強弱によつて定まるの外はない。甲は乙が十八圓までは忍んで支拂ふ可きを熟知するに、乙は甲が不得已場合には十五圓にて賣る可きを知らざる場合には、甲は飽く迄十八圓を得んことを主張して其價格を得るなる可く、反對に乙は甲が十五圓までは忍ぶ可きを知るも甲は乙が十八圓まで忍んで支拂ふ可きを知らざるときは、乙は十五圓にて甲の馬を購ふことを得るであらう。甲乙共に相手の極限を知らないときは、双方探合ひを爲し、此以上の要求は相手が應ぜざる可しと推定する點に於

て讓歩する外はない。『懸引の巧拙』とは此場合に行はるゝことである。而して以上何れの場合も當事者各一人のみの場合卽ち競爭なき場合のことである。然るに當事者が二人以上あるときは競爭が行はれる。先づ競爭が一方にのみ行はれる場合を考へて見よう。馬の賣手は甲一人であるが買はんとするものは乙丙の二人ありとする。而して乙丙共に最高十八圓までは支拂はんとするものと假定する。此場合に於ては甲は乙に賣るも丙に賣るも全く同じ事で、乙丙をして互に競爭せしめて結局十八圓と云ふ價格で乙なり丙なりへ已の有する馬一頭を賣れば宜いのである。次に乙丙二人各支拂はんとする價格を異にし例へば

甲の賣らんとする價格	乙 }の買はんとする價格	丙 }の買はんとする價格
二十圓		
十九圓	十九圓	
十八圓	十八圓	十八圓
十七圓	十七圓	十七圓
十六圓	十六圓	十六圓
十五圓	十五圓	十五圓
	十四圓	十四圓

なりと假定する。乙の最高限は十九圓、丙の其れは十八圓である。此の場合に於ては、乙丙の競爭によつて定めらるゝものは實際の價格其ものではなく其が下り得る最低限である。乙と丙とは十八圓までは互に競爭するに相違ないから、實際決定せらるゝ價格は十八圓以下たる氣支はないのである。卽ち乙丙の競爭は此の最低限を十八圓と定める作用を爲すのである。實際の價格は此最低限の十八圓と乙の最高限の十九圓との間に定めらる可きである。而して、其點は決して競爭によつて定まるのではない、何となれば十八圓以上の或點に於ける價格に就ては丙は全く局外に立つて乙は無競爭の地位に立つからである。此點は買手乙と賣手甲との間の懸引によつてのみ定められるので、其は懸引の巧拙又は懸引に於ける力の强弱によつて定まること無競爭の場合と全く同じである。

最後に賣手買手の兩方に於て共に競爭の行はれる場合を考へて見る。例へば馬の賣手ABCDEFGH八人ありとし、其賣らんとする馬は全く同質のもので、賣手八人共市場の情況に通ずること全一なりと假定する。但し其最低要求價格は其々に異なるものとする。買手はIJKLMNOPQRの十人あつて、其提供せんとする最高價を異にするものとする。即ち假りに圖示して左の如くなりとする。



今價格十圓なるときは賣手はA一人で、買手はIよりRまで十人悉く共れである。ソコデ十人の買手は互に競つてAの一頭の馬を得んとして競爭が行はれる。其結果價格は十圓以上に上る。上つて十一圓となれば賣手はAB二人となる。然し十人の買手は依然競爭を繼續するから十一圓で買ふことは出來ないで價格は更らに上る。上つて十五圓となれば賣手はABC三人となる。然し買手中の三人のみに買はせて他の七人は之を傍觀するやうな事はないから價格は更らに上る。上つて十五圓五十錢となればIなる買手は脫退する。彼は最高十五圓までを拂はんとするものであるから十五圓五十錢では買手とならぬ。然し未だ九人の買手が三人の賣手と相對して居

る。かくて價格は更らに上つて十七圓五十錢となれば賣手は一人殖へ買手は一人減ずる。然しまだ賣手四人に對し買手は八人殘つて居る。二十圓に上れば賣手は又一人殖へ買手は一人減る。其結果賣手五人に買手六人となる。更らに上つて二十一圓を超へるときは買手は更らに一人減つて、賣手五人に買手五人となる。二十一圓五十錢となれば賣手は六人となり買手は依然五人であるから、價格は成立せぬ。乃ち成立す可き價格は二十一圓以上二十一圓五十錢以下であらねばならぬことは明かである。然し其れが例へば、二十一圓十錢、二十錢、三十錢、四十錢の何れである可きかは未だ分からぬ。賣手は成る可く二十一圓五十錢に近づけようとし、買手は成る可く二十一圓に近づけようとするに相違なく、必竟は賣手全體と買手全體との懸引の巧拙又は力の强弱によつて定まるゝのであつて、當事者の一方間に於ける競爭は此點を決するものではない。當事者間の競爭が決定するものは、二十一圓と云ふ低限と、二十一圓五十錢と云ふ高限丈けで實際の價格其ものではない。實際の價格其ものは結局に於て懸引の巧拙、力の强弱によつて定まるものである。されば此點から見れば、競爭が價格を決定すと云ふ經濟學の通說は誤まつて居るので、價格懸引の高低兩限を決定することを見誤まつたのである。從つて正當なる意味に於ては競爭價格（Konkurrenzpreis）など云ふものはあり得ないのである。競爭は價格闘爭の範圍を定めるに過ぎない、價格闘爭其ものではない。價格闘爭は競爭の定めた此範圍内に於て、而して闘爭者間の力と巧拙とによつてのみ行はるゝのである。

（九）

以上の說明によつて懸引は需要供給角逐の行程であり、從つて其れによつて定められた價格なるものは、其角逐に於ける需要供給兩者の巧拙、力の强弱を反映するものなることが粗ぼ明かになつたと思ふ。此で所く定められた價格は又

だ反對に需要供給を支配するものである。前例に於て二十一圓十錢、二十錢、三十錢、四十錢等の價格はＡＢＣＤＥの五人をして賣手たらしめ、ＮＯＰＱＲの五人をして買手たらしめるのである。其以外の賣手と買手とは斯く定められた價格の爲めに取引市場以外に驅逐せられるのである。是れを經濟學の通説に於て疎外せられた賣手に買手（excluded buyers & sellers）と名けて居る。之に對して定まつた價格に於て現に賣手となり買手となるものを現實の賣手に買手（effectual buyers & sellers）と名けても差支ないであらう。イクラ善良な商品を生產したものでも、其生產費の高いが爲め定まつた價格に於ては現實の賣手となり能はざるもの、イクラ買はんとする念強く之を購ひ得れば人を益し己れを利する見込確實な者でも其定まつた價格を拂ひ得ざるものは共に右の價格の爲めに疎外せられ驅逐せらるゝを免れない。是れが價格本位たる今日の流通經濟生活の根本的特色であるのである。

賃銀闘爭としての勞働爭議は其形式に於ては一の價格闘爭である。即ち以上説明した懸引の上に於ける爭である。從つて其れは勞働全收の爭でもなく、又た元より生存闘爭でもない。其爭議の對象は勞働者の生存其ものでもなければ、生產上に於ける其の貢献でもない。而して又た流通經濟內に於ける所得總額に就て爭ふものでもない。懸引上の爭議たる賃銀爭議は勞働者が生產上に於て爲す所のこと、又は爲す可き所のことの全體に就て爭ふのでないと共に、其爭はるゝ賃銀なるものは勞働者が勞働者として收得する所の所得其ものを指して云ふのではない。

價格の決定には二つの作用を區別せねばならぬ。（一）は各單位の現實價格の決定であり（二）は賣買せらる可き單位數の決定是れである。前例に就て云へば二十一圓三十錢てふ價格の決定は馬各一頭に就て二十一圓三十錢てふ現實價格を決定する所以であると共に、かく價格が定まれば其價格に於ては六頭は賣買されず四頭は賣買されずして、五頭のみが賣買せらるゝと云ふことを決定するのである。此の賣買單位數の決定は現實の賣買對象例へば商品に就て云へば現實賣買商

る。かくて價格は更らに上つて十七圓五十錢となれば賣手は一人殖へ買手は一人減ずる。然しまだ賣手四人に對し買手は八人殘つて居る。二十圓に上れば賣手は又一人殖へ買手は一人減る。其結果賣手五人に買手六人となる。更らに上つて二十一圓を超へるときは買手は更らに一人減つて、賣手五人に買手五人となる。二十一圓五十錢となれば賣手は六人となり買手は依然五人であるから、價格は成立せぬ。乃ち成立す可き價格は二十一圓以上二十一圓五十錢以下であらねばならぬことは明かである。然し其れが例へば、二十一圓十錢、二十錢、三十錢、四十錢の何れである可きかは未だ分からぬ。賣手は成る可く二十一圓五十錢に近づけようとし、買手は成る可く二十一圓に近づけようとするに相違なく、必竟は賣手全體と買手全體との懸引の巧拙又は力の强弱によつて定まるゝのであつて、當事者の一方間に於ける競爭は此點を決するものではない。當事者間の競爭が決定するものは、二十一圓と云ふ低限と、二十一圓五十錢と云ふ高限丈けで實際の價格其ものではない。實際の價格其ものは結局に於て懸引の巧拙、力の强弱によつて定まるものである。されば此點から見れば、競爭が價格を決定すと云ふ經濟學の通説は誤まつて居るので、價格懸引の高低兩限を決定することを見誤まつたのである。從つて正當なる意味に於ては競爭價格（Konkurrenzpreis）など云ふものはあり得ないのである。競爭は價格闘爭の範圍を定めるに過ぎない。價格闘爭其ものではない。價格闘爭は競爭の定めた此範圍内に於て、而して闘爭者間の力と巧拙とによつてのみ行はるゝのである。

（九）

以上の説明によつて懸引は需要供給角逐の行程であり、從つて其れによつて定められた價格なるものは、其角逐に於ける需要供給兩者の巧拙、力の强弱を反映するものなることが粗ぼ明かになつたと思ふ。處で斯く定められた價格は又

た反對に需要供給を支配するものである。前例に於て二十一圓十錢、二十錢、三十錢、四十錢等の價格はＡＢＣＤＥの五人をして賣手たらしめ、ＮＯＰＱＲの五人をして買手たらしめるのである。其以外の賣手と買手とは斯く定められた價格の爲めに取引市場以外に驅逐せられるのである。是れを經濟學の通說に於て疎外せられた賣手に買手（excluded buyers & sellers）と名けて居る。之に對して定まつた價格に於て現に賣手となり買手となるものを現實の賣手に買手（effectual buyers & sellers）と名けても差支ないであらう。イクラ善良な商品を生產したものでも、其生產費の高いが爲め定まつた價格に於ては現實の賣手となり能はざるもの、イクラ買はんとする念强く之を購ひ得れば人を益し已れを利する見込確實な者でも其定まつた價格を拂ひ得ざるものは共に右の價格の爲めに疎外せられ驅逐せらるゝを免れない。是れが價格本位たる今日の流通經濟生活の根本的特色であるのである。

賃銀鬪爭としての勞働爭議は其形式に於ては一の價格鬪爭である。卽ち以上說明した駈引の上に於ける爭である。從つて其れは勞働全收の爭でもなく、又た元より生存鬪爭でもない。其爭議の對象は勞働者の生存其ものでもなければ、生產上に於ける其の貢献でもない。而して又た流通經濟內に於ける所得總額に就て爭ふものでもない。駈引上の爭議たる賃銀爭議は勞働者が生產上に於て爲す所のこと、又は爲す可き所のことの全體に就て爭ふのでないと共に、其爭はるゝ賃銀なるものは勞働者が勞働者として收得する所の所得其ものを指して云ふのではない。

價格の決定には二つの作用を區別せねばならぬ。（一）は各單位の現實價格の決定であり（二）は賣買せらる可き單位數の決定是れである。前例に就て云へば二十一圓三十錢てふ價格の決定は馬各一頭に就て二十一圓三十錢てふ現實價格を決定する所以であると共に、かく價格が定まれば其價格に於ては六頭は賣買されず四頭は賣買されずして、五頭のみが賣買せらるゝと云ふことを決定するのである。此の賣買單位數の決定は現在の賣買對象例へば商品に就て云へば現實の賣買商

品と疏外實商品とを分界裁定することであり、將來の供給對象に就て云へば供給（從つて又た需要）の割合を決定することとなるのである。

勞働の價格たる賃銀も一の價格である、然るに勞働なる商品は現實の商品ではない將來商品である。是れが商品として見た勞働の根本的性質で從つて其賣買懸引が現實商品の賣買懸引とは甚だ異なる所以である。マルクスは勞働力も一の商品なりてふ眞理を力說するに甚だ勉めた、而して今日に於ては勞働を商品として見ることは經濟理論に於て誰人も之を拒み得ざることとなつた（但し拙著『暗雲錄』十四『勞働非貨物主義の公認』を併せ見られたし、此文は嘗て『改造』に揭げたるものなり）。乍併マルクスは商品としての勞働力の特質を勞働其ものの性質上からは可なり周到に說明したが、其れが將來商品であつて現在商品でないと云ふことを十分に明かにしなかつた。ブレンタノ氏はマルクスとは獨立に勞働者が商品の賣手としての特殊の性質を甚だ詳密に論ぜられて經濟學上の定論を打立てられた。マーシアル氏はブ氏の說を其『原論』に採用して、賃銀論の基礎とした。乍併兩氏とも勞働契約が將來給付契約なることに殆んど論及して居られぬ。從つて價格鬪爭としての賃銀爭議の根本的特質が十分に明かにせられずにある。此事は經濟學の純理の上に於ての一大缺陷たるに止まらず、實際の勞働問題解釋の上にも累を成して居るのである。殊に賃銀制度全廢を高唱する人々就中近來の流行論たるギルド・ソシアリズムに於て其廢す可しとする所の賃銀制度とは何を指して云ふものであるかが判然として居らず、徒らに一の『ロゴメキー』logomachy たるの觀を脫して居らぬのである。

勞働の給付は過去生産の結果を提供するのではない、勞働は勞働するによりて給付せらるゝのである、勞働雇傭契約は將來給付の契約であつて契約締結の瞬間に於ては其給付對象は未だ存せざるものである。從つて契約に於て定むる賃銀なるものは、現實商品に對する價格の謂ではなく、將來給付の場合に於ける價格算出の割合、報酬の基本率たるに過

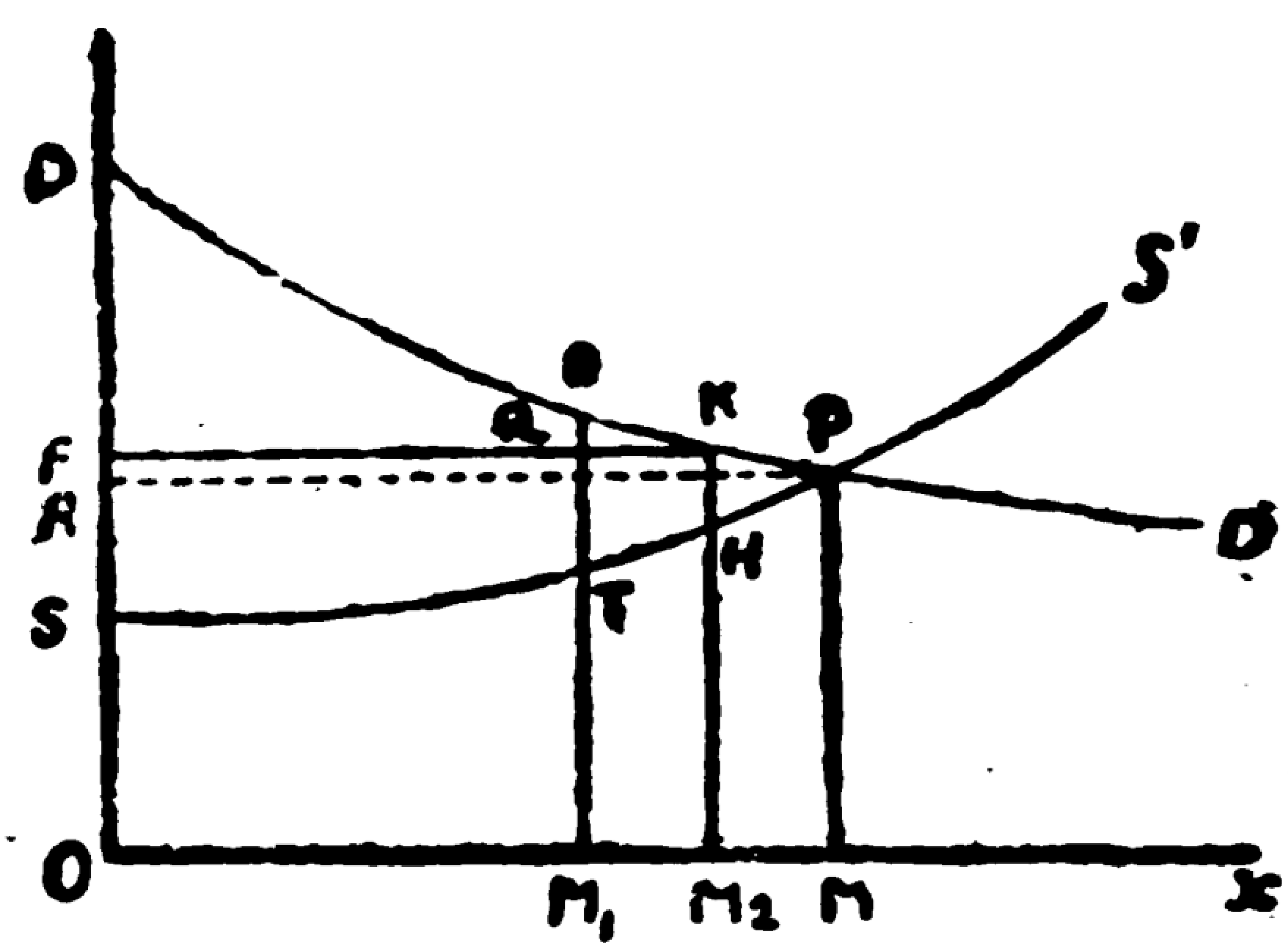
ぎざるものである。故に賃銀爭議とは現實價格の大小に關する爭議ではなく將來價格算出の定率の大小に關する爭議である。賃銀懸引は現實賣買の懸引でなく定率懸引、割合取引たるに止まるものである。言葉を換へて云へば勞働者と雇主とが賃銀の引上げ又は引下げに關して爭ふと云ふのは一定給付に對する報酬額を多くす可し少くす可しとて爭ふのではない。人或は所謂生活賃銀、最低賃銀（living wage, Existenzlohn; minimum wage, Minimallohn）の爭は報酬全額、勞働所得額其ものに關する爭なりと誤解するかも知れぬが、是れとても割合の爭、定率の爭に過ぎないのである。今日の流通生活の根本的性質一變せざる限りは此以外に出づるものではない。是れ生活賃銀の要求を以て生存權の要求と同一視す可からざる根本の理由である。近頃森本厚吉博士は生存權の要求の如きは何れ解決のつく可き比較的簡單な事項である、我々は更らに進んで生活權の確立を唱道せざる可からざるものとし（例へば大正九年十二月社會政策學會大會報告に於て）吉野作造博士も亦其說に贊和せられて居るが（例へば『文化生活』の廣告文）、我々から見れば是れは驚く可き主張である。生存權の確立とは斯くの如き容易なる事項ではない、未だ〳〵永い〳〵奮鬪を犧牲とするとを要する重大案件なのである。——（アントン・メンガーは生存權の眞の確立は無政府主義の實現したる曉にあらざれは之を望む可からずとさへ主張して居るのである。筆者は左樣には考へぬが、然し其重大さを認むることはメンガーと同じである）——米國あたりの學者（例へば森本博士の推稱せらるゝライアンの如き）の生活權と云ふものは、歐洲學者の生存權論を生吞活剝したものに過ぎない、決して新說でも創案でもない。我々は忠實に、從順に、歐洲先進學者の跡を追ふを恥ぢざるものである。事實に於て生存權と生活權とを區別す可き理由は我々は不幸にして之を見出さぬが、假りに其區別ありとすれば、生存權の確立甚重大なるに、其を平易に一蹴して更らに生活權の確立を提唱すると云ふことは、我々如き者の到底敢てし得ざる大膽勇敢な企と考へざるを得ぬ。吾々現流通組織の下に於ける生活賃銀の確立さへ

未だ〱幾多の犠牲を拂つて後望み得可き難条件であると確信するものである。

（十）

勞働者報酬、勞働者所得の全體の多きか少きかは、係爭の對象となり得ないと云ふことが、今日の流通經濟生活の根本的特徴である。一週何程、一日何程と約束した賃銀は單に一の割合、一の基本率たるに過ぎない、之に乘算す可き單位數（週數、日數、時間數）は勞働者が勞働を給付し終りたる後に於て定めらるゝのである。日給五圓を契約するてふことは其勞働者に月收百五十圓ありと云ふことにはならぬ、請負賃銀一單位につき何程と定むること例へば炭坑夫の出炭一車に付金何程と定むると云ふことは、其坑夫の所得若干と定むることとは同一ではない。仕事の分量勞働給付單位の數は賃銀爭議の對象ではない。否、極言すれば、一週何程、一單位何程と定めたりとて、其全部を缺勤すれば所得は皆無である、報酬は零である、賃銀何程と定むと云ふことは唯だ報酬支拂の割合を定めたと云ふに過ぎない。換言すれば今日の勞働雇傭契約は單に勞働給付に對する報酬基本率を契約するもので報酬其ものを契約するものではない。故に我民法六百二十三條の『雇傭ハ當事者ノ一方カ相手方ニ對シ勞務ニ服スルコトヲ約シ相手方ガ之ニ其報酬ヲ與フルコトヲ約スルニ因リテ其効力ヲ生ス』獨逸民法第六百十一條の『雇傭契約ニ因ツテ勞務ヲ約シタルモノハ其ノ約束シタル勞務ノ給付、其相手方ハ約束シタル報酬ノ給與ノ義務ヲ負フ』とある。其の報酬なる文字は實際の事實に適合せしめん爲めには『報酬ノ割合』『報酬ノ基本率』と改む可きである。若し報酬其ものを約束するとならば同時に給付單位數をも約束せなければならぬ筈である。其れは今日の流通生活に取つては架空の事に屬するのである。故に經濟上の術語に於ては、勞働給付の取引、勞働雇傭の取引は需要曲線上に於て行はれるので、契約曲線上に於て行はれるものでないと云ふ

のである。其理を簡單な數學的說明を以て示して見よう。（ピグー氏『産業平和の原理及方法』附錄Aより取る）。



Ox線に沿ふて、給付せらるゝ勞働の單位を測し、Oy線に沿ふて支拂はるゝ價格の單位を測して見る。

DD′を雇主の需要曲線、SS′を勞働者の供給曲線とする。

DD′に於ける一點Pを取り、之れよりOx線に直角の一線PMを引くときは、PMはOM量の勞働を購ふ場合に於て第OM位の勞働單位に對し提供せらるゝ賃銀率である。

今勞働爭議の結果賃銀率がQM_1なる率に定められたりとせよ、此のQM_1はPMより大なるか小なるかなる可し

先づQM_1がPMより大なる場合に就て考へて見る、QはDD′曲線迄達せざるものとして見る。而してQM_1の率でOM_1量の勞働が購はるゝものとする、Qを通してXなる軸線に併行してFQKなる一線を引き、此線はKなる點に於て需要曲線DD′を切るものとせよ。而してKを通してyなる軸線に併行してKHM_2なる一線を引き、此線はHなる點に於て供給曲線SS′を切るものとせよ。

然るときは需要曲線の性質上、QM_1なる率に於ては雇主はOM_1量を購はんとし、其以下の如何なる量よりも寧ろ其量を購ふを利とすと云ふ結論が生ずる。從つて、勞働者にして之に反對せざる限りは、兩當事者の妥協點は需要曲線上のKたる可きである。

處がKM_2はHM_2より大であるから供給曲線の性質上、勞働者としてはOM_2量の勞働を賣らんとす可く、其以下の如何なる量も之を賣らんと欲せざる可しとの結論を生ずる。而して勞働者は其供給する勞働量に就て共同せざることが原則で

から、共同行動によつて此結論が妨げらるゝ場合はないものと假定す可きは勿論である。

かくて賃銀率がQM_1に定めらるゝときは、雇主も勞働者も共にOM_2量の勞働を賣り又買はんとす可く、其以下の量を賣り又は買はんとはせざる可きである。反對にOM_2量以上を賣り又は買はんともせざる可きは別に立證を要さない所である。乃ち兩當事者の妥協點は需要曲線DD'上のKなる點に定めらるゝのである。

次にQM_1がPMより小なる場合に就ても右と全樣に妥協點は供給曲線SS'上の或點に於て見出さる可きである。

ソコデ吾々は次の如く言ひ得るのである。賃銀率の設定は需要曲線か供給曲線かの何れかの線上の或一點に妥協點を定める。其線上以外には妥協點は定まり得ぬと。

其の妥協點は如何にして定まるかは、前段馬の賣買に就て說明した通り兩當事者間の懸引の巧拙、實力の強弱によるの外はないと答ふ可きである。賃銀爭議とは即ち此妥協點に關する爭である、而して此妥協點とは一の割合點、一の基本率點たるに外ならないものである。

(十一)

賃銀爭議は斯く妥協點の爭であり基本率の爭であると云ふことから、玆に重要な特質が生じて來る。其は何であるかと云ふと、賃銀爭議に勝つも負くるも其は勞働者の受くる報酬の爭に於ける勝であるか負であるかが分らないと云ふこと是れである。妥協點たる基本率を引上ぐることに成効しても却て其は勞働者の不利となることもあり、反對に引下げを已むなくせられても却つて勞働者の利となることがあり得るのである。係爭の對象が現實確定のものたるときは勝てば勝つほど利多く、負ければ負けるほど損を蒙る可きであるは勿論であるが、單に基本率たるに過ぎない賃銀の爭は其

對象が現實確定のものでない故に、其引上げは必ずしも勞働者の利益となるとは云はれないのである。引上げらるゝものは勞働が報酬せらる可き割合に止るのであつて、報酬其ものが引上げられるのではない。報酬高が引上げらるゝや否やは其丈けでは分つて居ないのである。其の故は、割合の引上げは賣買せらる可き高を含んでは居らぬ。割合が或度以上に高まれば買手は其引上げられた割合に於ては、買ふ可き高を減ずるかも知れぬ。然るときは勞働者は割合は多く收得しても結局却つて少き賃銀額をしか得ないことになるかも知れぬのである。此場合には賃銀の引上げは實は賃銀の引下げとなるのである。從つて生ずる事實は懸引としての賃銀決定には前に説明した最高限、最低額に更に制限の制限が加へられ假令懸引上は更により多くかより少くかの點まで進み得ることが明であつても、當事者の利益は其處まで進むことを不可なりとし、其れ以前の或點を事實上の極點とするに至るのである。

雇主と勞働者と双方の側に於て完全な競爭が行はるゝ場合には、兩者懸引の結果必ず確定の一妥協點に到着するのである。其點は前例によればDD′曲線上にあるかSS′曲線上にあるか兎に角或る一定點（前例のK點の如き）である。從つて或る勞働者が雇主に對し此點以上の賃銀率を要求するときは、雇主は決して彼を雇入ぬのである。何となれば他に其事に於て雇はれんことを欲する勞働者がある可きであるから、雇主は之を雇入る可きは言ふまでもない處である。其反對に或雇主が其點以下の率の賃銀にて勞働者を雇入れやうとすれば、其勞働者は其率を支拂ふ他の雇主へ赴いて其雇主に雇入れられることを肯ぜざる可きである。之れは双方の側に完全な競爭の行はれる場合の事である。然るに實際にては此く完全に競爭の行はるゝことは寧ろ例外である。勞働團結存せざるか又は存するも、其の力弱き場合には、賃銀は一方的にのみ定められる。一方的に定めらるゝと云ふも、市場一般の狀況、勞働需給の關係を全く懸け離れて定めらるゝものではないが、其等は賃銀範圍を支配するもので賃銀其ものを決定するものではない。結局現實の賃銀決定點よ

雇主が強制的に命令的に一方的に定めるのである。之れに反し勞働團結の力稍々強くして其れが賃銀率決定に參與することを得ること英國のトレード・ユニオンの如き場合、殊には勞働協約てふ共同懸引の事情の存する場合に於ては、賃銀は競爭によつては定められないで、此の勞働團結と雇主一人又は雇主團結との間に於ける懸引によつて定められるのである。我邦の如き將來賃銀の決定に勞働者が團結として參與すること殆んど之なき處に於て起る賃銀爭議は、多くは解釋爭議たるに止り將來爭議たること少なきは言ふまでもない。英國の如き團結の發達し從つて賃銀爭議が解釋爭議たるに止まらないで將來爭議たる國に於ては、勞働者は一體となつて此懸引の當事者たるのである。換言すれば日本の勞働者は鬪爭者として初めから極めて不利なる立場に立つもので、賃銀決定の上に於て、不完全なる今日の流通生活の樣式が與ふる丈けの地位すらも之を有して居らぬのである。懸引によつて賃銀が定めらるゝ今日の流通生活の樣式が甚だ不完全なるものなるに、其下に在りて團結なき我邦の勞働者は更らに不利なる地位に立つ當事者たるのである。英國の勞働者の如きは少くとも懸引當事者となり得る丈けの地位にあるのである。

處で勞働者が其團結によつて懸引當事者たる場合其懸引に一の特色が生じて來るのである。其は別事ではない、其懸引の決定する賃銀率は決して單一なる一點ではないと云ふこと是れである。其決せらるゝ賃銀率は或る度まで不確定的のものである。即ち術語にて『賃銀の不確定列』("Range of Indeterminateness") と名ける範圍内に賃銀は往來するのである。

勞働團結は競爭率以上の賃銀率を得んとし、雇主又は雇主團體は其以下の率を諾せしめようとする。然し乍ら或點以上に賃銀率を高めるときは雇主は其需要を減ず可きを知るときは、勞働團結は其點以上を要求することを斷念する、反對に或他の點以下に率を低めるときは勞働の供給が減ず可きを知るときは、雇主は其點以下に引下げを要求することを斷

金する。此二つの點が賃銀率不確定列の兩限を形つくり實際の賃銀率は此の二點内に於て決定せられる。例へば最高限が五圓で最低限が三圓であるとする。然れば三圓乃至五圓と云ふのが不確定列を限るのであつて、此列以外に出でないと云ふことは雇主勞働者双方の利益が之を命令する所である。換言すれば此場合の賃銀闘爭は三圓乃至五圓てふ不確定列の内で行はるゝものである、從つて不確定列は此場合全時に賃銀闘爭列ともなるのである。勞働爭議が如何に激烈に鬪はれるとも今日の流通生活の樣式にして一變せざる限り其戰鬪部面は斯く限局せられたものであるのである。勝負は必ず此く限られた戰場に於てのみ得られなければならず、其以外に於ての勝負は戰局に關係ないのである。而して此不確定列、此の戰鬪部面は、其勞働に對する雇主の需要が伸縮性（彈力性）を有すること少ければ少い程廣く、伸縮性を有すること多ければ多いほど狹く、又た勞働が雇主の提供する其仕事に對する需要の伸縮性少いほど廣く、多いほど狹いものであることは、マーシアル氏の需要伸縮性論が十分に明かにした所である（大塚金之助教授邦譯『經濟學原理』並に筆者の舊著『經濟學講義』を見られたし）。

（十二）

勞働者も雇主も賃銀に就て爭ふときには、其爭の爲めに幾何の犧牲を要す可きか、爭の後に定まる可き賃銀は何程以上又は以下なるを得ざる可きかを考慮するは當然である。其考慮の結果或點までは爭ひを開始するよりも寧ろ讓歩するを利とすることを知る可きである。此點を名けて懸引の把住點（Anhaltspunkt; sticking point）と云ふ。爭の犧牲大にして其結果得らる可き條件の不利なる可きを知るときは、把住點は低かる可く、爭の犧牲左まで大ならず其結果有利なる可きを知るときは把住點は高かる可きである。即ち前の假定によれば三圓より著しく低きこともある可く五圓より

も著しく高きことある可きである。勞働者の把住點が雇主の把住點よりも低いときは此兩把住點は現實懸引の範圍を限るものである。例へば勞働者が爭ひを開始するよりも寧ろ三圓二十錢を以て忍ぶ可しとし、雇主は爭を開始するよりも三圓七十錢までは支拂ふ可しとなすときは、三圓二十錢乃至三圓七十錢が現實賃銀の範圍を定めることゝなる。然るに勞働者の把住點が雇主の把住點より高き場合、例へば勞働者は最低三圓五十錢までは忍ぶ可しとするも、雇主は最高三圓三十錢までしか支拂ふを肯ぜざるときは、此くの如き範圍の生ずる餘地はなく、從つて兩者は鬪爭を開始する外妥協の途を有さないのである。而して此場合、勞働者雇主の双方が賃銀鬪爭の結果決定せらる可き賃銀率に就て同樣な見込を有し、且つ其鬪爭には若干の犧牲、若干の費用を要することを熟知するときは、勞働者側の把住點は必ず雇主側の把住點より低からざるを得ぬ。其結果現實懸引の範圍に多少の餘地を殘すこととなる。乍去此場合鬪爭によつて賃銀引上げを實現し得可き期待が雇主側に於けるより勞働者側に於て強いときは、其鬪爭が若干の犧牲を要することを知ると雖も、現實懸引に餘地を餘さず、鬪爭を開始することもあり得るのである。或は其の期待は双方同一なりとするも鬪爭が必ず自己に利益ある結果を齎らす可きを知るときも亦同樣であり得る。

勞働者側の把住點が雇主側の把住點より低いときは、兩把住點間に横はる諸々の賃銀率は『現實懸引列』を作ることとなる。例へば勞働者側は鬪爭を開始するよりは寧ろ三圓二十錢を以て甘んぜんとし、雇主も爭を始むるよりは寧ろ三圓七十錢を拂はんとするときは、三圓二十錢乃至七十錢が現實懸引列となるのである。乍去此の現實懸引列なるものは不確定列以外に出るものでないことは之を注意せねばならぬ。兩當事者の一方が鬪爭を開始するよりは寧ろ不確定列以外に渉る賃銀率を忍諾しようと思つても、相手方は不確定列以外に出づることを肯ぜない。從つて勞働者側の把住點以上、雇主側の把住點以下にして不確定列以外に及ぶ賃銀率なるものは全く何等の作用をも爲さないのである。故に鬪爭

を開始するよりは寧ろ忍諾せんとする現實懸引列なるものは、必ず勞働者側の把住點以上、雇主側の把住點以下であつて、不確定列の範圍内に屬する賃銀率のみを以て形づけられねばならぬのである。

處が不確定列の範圍は其當事者の各々の需要の伸縮性（彈力性）によつて決せられるものである。現實懸引列は此く決せられた範圍以外に出づるものではない。此範圍内に於ては、此列は勞働者の把住點を引下げるか雇主側の把住點を引上げるかの事情によつて其幅を廣めるものである。勞働者側の把住點を引下ぐる事情とは例へば賃銀闘爭の爲めに要する犧牲の增加の如き其重なるものであり、雇主側の把住點を引下ぐる事情とは闘爭の爲めに蒙むる可き損失の增大の如き其重なるものである。勞働者團結の實力增進し其結束强く其戰闘力大となれば、闘爭の爲めに勞働者の被むる損失を輕減し、反對に雇主側の損害を大にする作用を生ずる。其結果は勞働者、雇主双方の把住點を共に引上げることになるが、兩點の距離は其爲めに延長せられるか否かは一概に言ふことは出來ぬ。兩點共に同程度に引上げらるゝこともあらう。然る場合には其兩點間の距離は依然として同一である。反對に雇主の力增大すれば兩把住點共に引下げらるゝであらう。然し今日の實際の發展は（少くとも英獨米等に於ては）一方の團結力の增進は相手方の團結力の增進を喚起することを示して居る。されば實際の事實としては力の增進は双方に起つて、從つて闘爭の犧牲を增大する結果を招致すと云はねばならぬ。從つて勞働者側の把住點は引下られ、雇主側の把住點は引上られ、不確定列の範圍を超へざる限りに於て、現實懸引列は兩方面に向つて延長せらるゝか、又は現實懸引列の存せざりし場合には、新たに此くの如き列を生ずることゝなつて、闘爭の機會を減少することになるのである。國際關係に於て各國の實力の增進は戰爭の機會を少くすると云ふ一部の眞理と其理甚だ相似て居る。但し國際關係に於ては他の作用が甚だ複雑であるから實力の增進却つて戰端を繁くすることもあつて、單純に右の如く云ふことは出來ないが、勞働對雇主關係に就ては此理は甚だ顯著に行

はるゝことは之を否定することは出來ぬのである。殊に勞働の團結が全國的となり一產業の全體を包含するようになれば地方的、部分的であつた場合に少しも存せなかつた現實懸引列が新たに生じ、鬪爭に訴へずして賃銀の引上げを實現し得ることも屢々あるは、歐米諸國の實例が有力に之を證明しつゝあることである。

（十三）

以上說明し來つた處を要言して次の如き結論を下すも差支ないと思ふ。勞働の團結有力となるに從ひ、輕微なる事柄殊に解釋上の爭議に就ては現實懸引の範圍著しく擴大し、鬪爭の機會は從つて著しく減少し、勞働爭議の形を執らずして勞働者は其要求を貫徹し得ることゝなる。雇主も勞働者も鬪爭によらずして問題を解決する餘地を廣く有するによつて、大抵な小問題、解釋上の意見の相違は平和の間に解決せられ得ることゝなる。乍併事の性質重大な場合には決して右の如く云ふことは出來ぬ、大事件大問題に就ては勞働團結の力如何に增大するとも、必ずしも現實懸引の範圍擴張すると云へない、否或は却つて其範圍を狹くし、鬪爭によるの外解決の道なきに至ることは決して稀有な事ではないのである。乍併其反面に於て現實懸引列が存すれば必ず常に平和的解決が就くものと速斷してはならぬ。現實懸引列の存すると云ふことは平和的解決の道が幾多存すると云ふ意に外ならない。處が勞働者も雇主も出來る丈け自己に利なる條件を獲得しようと勉めつゝあるものであつて、而して相手方が鬪爭を避けんが爲めには果して眞に那邊まで讓步す可きかを適確には知らぬものである。勞働者側は三圓以下の賃銀なれば鬪爭を開始せんと決心し、雇主側は三圓五十錢以上なれば鬪はんと決心したりとして見る。此場合の現實懸引列は三圓乃至三圓五十錢間の諸金額例へば三圓十錢、二十錢、三十錢、四十錢等である。而して双方共相手方に右の如き把住點あるを知るものとする。而かも三圓十錢とす可きか三圓

三十錢とす可きかに就ては、双方の考は一致せず、勞働者は四十錢としようとし、雇主は十錢としようとする。從つて出來る丈け相手方を屈せしめて自己の要求を貫徹しようと勉むる。雇主は十錢以上一文も出さぬと頑張れば勞働者は屈服するだらうと考へ、勞働者は四十錢が一錢欠けても厭だと主張すれば雇主は之を忍諾するだらうと考へる。從つて十錢か四十錢かに就て兩者相鬪ふことになることもあり得る。此くの如き場合の鬪爭は平生勞資間の意思能く疏通し居り兩者の關係圓滿であり又は仲裁調停の機關備り其が有力に發動するときは之を避け得可きも、然らざる場合は鬪爭を免れないことゝなる。而して現實懸引列の幅廣ければ廣いほど此種仲裁調停が効を奏し得る機會は多いのである。但し其れは其仲裁機關の裁定が有力であり決定的、終審的である場合に限るので其發動に勞資双方又は一方が容喙干渉するときは、却つて反對の結果を生ずることゝなる。何となれば現實懸引列の幅廣いほど容喙干渉の範圍も亦廣く、從つて双方思惑的の主張を固執し、仲裁を無効ならしめ結局鬪爭によつて解決する外ないことゝなる可きであるからである。

勞働爭議の仲裁調停とは勞働の自然價格又は平準價格を人爲的に決定する所以ではない。然るに社會政策學者の中には仲裁調停は兩當事者の知識足らず計量完からざるを補ふもので、勞資の双方が自然價格平準價格を算出する資格を十分に具備して居れば相互間の懸引のみで當然到着す可き妥協點を、勞資兩者に代つて見出す作用を爲すものであると論ずるものがある。これは甚だしき誤解速斷である。更らに此誤謬に基いて所謂協調主義の効能を說いて、仲裁的協調は勞資の双方又は一方が己れに利ありとして鬪爭を開始せんとする場合に鬪爭の結果必然的に到着す可き妥協點を、鬪爭によらず協調によりて見出し決定するものであると說くに至つては、寧ろ有害な主張と斷ぜねばならぬ。係爭の本體が勞資兩當事者によつて十分に諒解せられ知悉せられて居るときと雖も現實懸引列は決して單一點に存するものではない。元より諒解あり合理なる仲裁は其裁定を現實懸引列の範圍内に見出す可きものであるは勿論であり、而して又た鬪

する賃銀率は此範圍内の一點たる可きも亦以上の說明によつて明白な處である。然し乍ら此の賃銀率が勞資兩當事者が爭の結果到着必然的に忍諾せねばならぬ唯一確定の點であると思ふのは誤である。鬪爭が何等かの犧牲、何等かの費用を要する限り現實懸引列は決して此の一點に限られたものではないのである。言葉を換へて言へば鬪爭を避くるための仲裁調停は決して絕對最終のものでもなく唯一排他的のものでもない。仲裁者次第によりて多少の上下あり得る處の或る幅を有して居るものである。其幅は即ち勞資双方又は一方が今日の流通生活に於て收得する所の餘剩價値（此語の意義はマルクスの其れと同じではない。拙著『國民經濟講話』改訂版八四頁以下を見られたし）を含んで居るものである。雇主强くして仲裁が多少なりとも其影響を被むるときは此幅は雇主の餘剩價値を多く含み、反對に勞働者强くして仲裁が多少なりとも其れによつて左右せらるゝときは、此幅は勞働者の餘剩價値を多く含むものである。即ち仲裁調停成立する場合と雖も兩當事者の力の强弱（及其巧拙）は餘剩價値をより多くしより少くすることを免れないこと（八）の初めに於て單純なる賣買の場合以下に就て說明した通りであるのである。

從つて次の結論を生ずる。今日の流通生活の樣式にして一變せざる限りは、協調仲裁調停は武裝せられたる平和であらねばならぬ。最後には鬪爭に訴へると云ふ可能性なければ仲裁は勞働者の餘剩價値を少くし、雇主の餘剩價値を多くすることを避け能はぬ。鬪爭の準備充實すると云ふことは双方の力を强くし、現實懸引列の幅を廣くし以つて仲裁の發動と其成効とをより有望ならしめる。背後に鬪爭の可能が控へて居るにあらざれば仲裁は其發動と成効の見込とを著しく減ずることになる。今日の流通生活が懸引生活である限り而して賃銀決定も懸引による外なき限り、結局の決定者最後の裁定者は力の强弱である。仲裁は强弱の力を平和的に角逐せしむる、鬪爭は戰の上に於てこれを角逐せしむると云ふに外ならない。

（十四）

以上流通經濟の純理の上から賃銀爭議の根本的特質を說明して粗ぼ讀者の諒解を購ひ得たと信ずる。筆者が稍々繁を厭はずして此種の說明を試みた所以は必竟次の一事を立證せんが爲めである。曰く、賃銀爭議の形に於ける勞働價格鬪爭は今日の流通生活組織の內に在りては、當事者の力の强弱による角逐の一形態であつて、而して平和的解決たる仲裁調停も仝じく力の强弱角逐の他の一形態であること、而して其の角逐の決するものは勞働報酬、勞働者所得其ものではなく之を算出し其供給と需要とを喚起す可き一の基本率であること、而して此基本率は又た勞資兩當事者の收得する餘剩價値の率を決するものであること是れである。然れば此の意味に於ては賃銀鬪爭は一の餘剩價値鬪爭（Mehrwertskampf）である。決してピグー氏の說くが如き國民分配分分前の鬪爭ではない。通說經濟學の造語を以て云へば、賃銀鬪爭は單純なる意味に於ける分配鬪爭（Verteilungskampf）でもなければ、又元より按分鬪爭（Zurechnungskampf）でもないのである。

より多き價格とはより强き要用を言表はすに過ぎない、より大なる滿足を意味するか否かは一概に斷言し得られないものである。所謂『價値法則の矛盾』（Widerspruch des Wertgesetzes; Wertantinomie）は能く此理を說明するものである。物の供給少きほど之れに對する要用は强く從つて價値は多い、他の事にして仝一なる限り、價値の多いのは供給少きことを意味す、供給少ければ滿足は又た小である。滿足小なるほど價値は增し價値が增すほど滿足は小となると云ふのが所謂『價値法則の矛盾』と云ふものである。換言すれば、價格高ければ滿足少しと云ふことになる。勞働者自らの爲めに如何に希はしくとも勞働の價格たる賃銀の高まるは、國民社會全體より見ればより小なる滿足を意味するもの

ならば、賃銀鬪爭は單なる一の價格鬪爭であつて、元より厚生鬪爭たる意味を有せぬものである。即ち價値法則の矛盾の一例たるの外は無かる可きである。然るに賃銀鬪爭は決して單により大なる價格を得んとの鬪爭たるに止まるものでなく、其基本率の爭であり、其基本率には不確定列あり、又た現實懸引列あり、其範圍に廣狹あり、其廣狹に從つて餘剩價値に多少あり、其多少を爭ふのが、即ち賃銀鬪爭であつて、單に要用をより强めんとする爲に起るのでなく、又犧牲をより小にせんとするものでもなく、餘剩價値の割合を大にせんとするものであるを稍細かく說明し終つた以上、賃銀鬪爭を單なる價格鬪爭と認むるの不可なるは十分に明かになつたかと思ふ。

賃銀鬪爭を純然たる一の價格鬪爭と見た爲めに生じた幾多の謬說が經濟學にある。而して其等は何れも其時々の實際勞働運動の思想的背景を成したものであるが故に、單に學問上のみならず勞働問題の發展に頗る重要な關係を有して居る。其重なるものは所謂『勞銀基金說』と『勞銀の鐵則』是れである。而して此兩說を打破して生じ來つたマルクスの勞働價値說も——其れが一つの勞働全收權論であるが爲なるは無論として——又た賃銀鬪爭を價格鬪爭と見た誤から出立して居るのである。極言すれば、今日までの勞働運動は其理論的根據を何れも價格鬪爭論の上に置いてあるが爲に、甚だしき誤謬に陷つて居るので、其爲めに過去に於ける勞働運動に害を成したこと甚だ重且大なるものありと云つても誣言ではないと思ふ——近刊『商學研究』掲載梅田商學士論文『社會運動の思想的背景としての賃銀理論』は此點を詳密に立證したものである、參照を乞ふ——際が新らしい——或意味にては最も新しい——學者の中更らに同樣なる誤まれる立場から有力の一新說を唱出したものがある。其は數理經濟學者中現存の巨匠たる伊太利のヴヰルフレド・パレト氏である。氏は其『經濟學教科書』(Cours deconomie politique) に於ても更らに又新著たる『經濟學綱要』(Manuale di Economia politica) に於ても所得統計の研究を基礎とし、更に詳密な數學的說明を加へて、次の如き法則（之れを所

得の『パレト法則』と名く）を打立てて居る。

（一）（A）最低所得の増大（B）所得間の不平均の減少は、所得が人口の増加よりもより速かに増加するに非ざれば、（A）（B）同時にも又は別々にも起り得ぬ。

（二）反對に、所得額の増加が人口の増加よりより速かなる毎に、換言すれば各個人平均の所得額が増す毎に、次の結果が同時に又は別々に生ずるものである。（一）最低所得額の増加（二）所得不平均の減少。

(A) 1. Un aumento dell' entrata minima; 2. una diminuzione della disuguaglianza delle entrate, non possono avere luogo, congiunte o separate se non accade che il totale delle entrate cresca piu rapidamente che la popolazione.

(B) Ogni qualvolta il totale delle entrate cresce piu rapidamente che la popolazione, ossia quando cresce la media delle entrate per ogni individuo, si producono, separati o congiunti, gli effetti seguenti, 1. Un aumento nell' entrata minima; 2. una diminuzione della disuguaglianza de'le entrate.

(Pareto, Manuale di economia politica con una introduzione alla scienza sociale. 1909. pag. 372—373. 佛譯本. 1909. p. 392)

従つて氏は斷言すらく、貧民生活改善の問題は結局富の生産の問題であると（Cours d'economie politique p. 408）

賃銀基金説によれば、賃銀平均額の増進は勞働人口の減少か賃銀基金額の増加によるの外之を望むことは出來ない、故に勞働者の得る賃銀を増さうとするには人口の減少せさる場合には賃銀基金を増す外なく、賃銀基金を増すには一國の資本を増す外なく資本を増すには國の富を増さなければならぬと説いて居る。所謂『パレト』法則なるものは同工異

曲の一說たるに過ぎない。而して其何れに從ふも價格鬪爭たる賃銀鬪爭を以つて絕望的と諦らめなければならぬのである。勞銀鐵則も亦然りである。此等の詳細は本題の範圍を餘りに狹めることになるから今省きて論ぜぬ。志ある仁は此問題に就て權威とす可き小泉信三教授の近業『經濟學說と社會思想』を一讀せられんことを切望する（但し前揭福田氏論文に於ける小泉說の批評も同時に併せ讀まれんことを希望する。マルクスの勞働價値說に就ては拙著『國民經濟講話』勞働の篇に稍々詳しく論評して置いたから今全く論及せずに置く）。

所得の問題を富の生産の問題とすることは之を國民分配分の問題とするピグーよりも遙かに劣つた考へ方であるが、其は架說するまでもないとして、所得の全體が增さなければ最低所得額も增さず所得の不平均も減ぜずと云ふは、所得の形式論としても甚だ誤つた說である。況んや之を以て賃銀引上げの唯一の可能とするが如きは今日の流通生活の本質を殆んど全く無視した思想と云はざるを得ぬ。

（十五）

賃銀鬪爭に於て爭はるゝものは所得其ものではない所得の基本率のみである。所得の基本率を爭ふは基本率其ものを爭ふ爲めではなく餘剩價値率を爭ふものである。所得の全體增さゞれば餘剩價値率は增さずと云ふのはマルクスの相對的餘剩價値論（『國民經濟講話』改訂版七二二頁以下）に對してすら劣る考へ方である。而して厚生經濟學の立場より見れば寧ろ有害なる思想と斷ぜざるを得ぬのである。

賃銀鬪爭はより高き價格の爲めの鬪爭ではない。より大なる滿足の爲めの厚生鬪爭である。餘剩價値卽ち費用以上に超過する利用（要用にあらず）を增大せんとするのは、卽ちより多く厚生的ならしめんとすることである。勞働者が鬪

爭により多き餘剰價値率を收め得ることは前段稍々詳しく説明した處である。而して其れは國民所得全體其ものを少しも増大することなくして行はれ得ることも玆に細説を須たない。所得の高底はピグー氏の所謂國民分配分を些しも増すことなくして猶ほ懸引の巧みにより、力の强きにより勞働者はより多くの餘剰價値率を獲得し得る。賃銀闘爭は其れが現に戰はるゝ場合並に現に戰はるゝことはなきも平和を保障する武裝として此懸引に於て勞働者をより巧ならしめより强くならしめる大なる作用を有して居る。これ筆者が賃銀闘爭も亦た結局は一の厚生闘爭であつて決して單なる價格闘爭でないと斷言する所以である。

然らば何故に勞働者がより多くの餘剰價値率を獲得することが此く厚生的意義を有するか。ピグー氏は他の點の考察から稍々此間に答ふ可き説明を試みて前段（前號十四頁）示した如く次の如く言つて居る。『他の事にして均しき限り國民分配分中貧民に歸着す可き割合の増大は經濟的厚生を増大す可き蓋然性を有す』と。

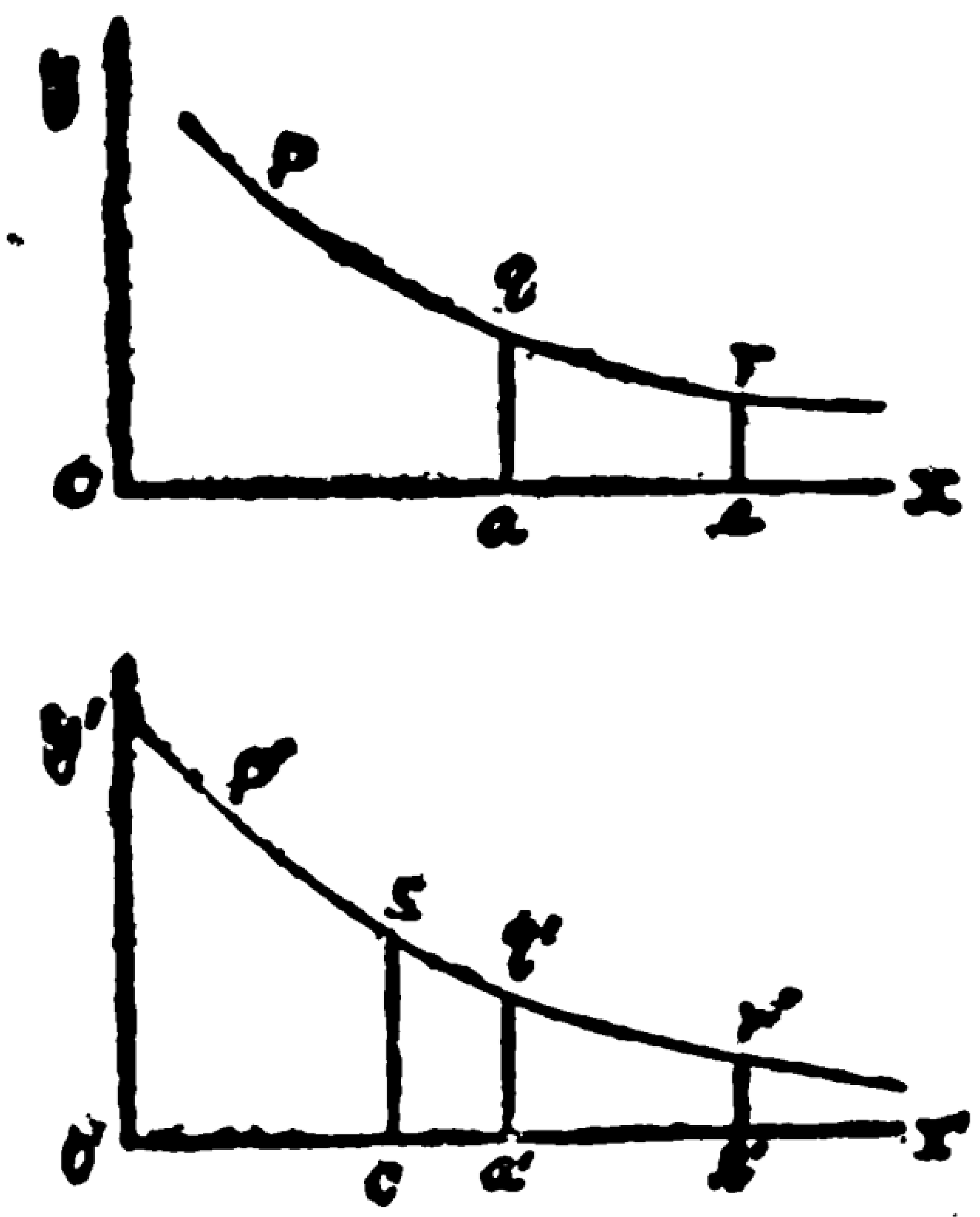
筆者の右問に對する答は更らに細論を要するが今簡單に説明するには經濟學の通説に於て有名な一『パラドックス』を以てするに若かずと思ふ。其れはジェヴォンスが其『經濟學純理』(Theory of Political Economy 4th edition P.142ff) に於て批評したジョン・スチュアート・ミルの國際貿易利益論是れである。今小泉信三教授の邦譯書（第一五八頁以下）から其一節を引いて見る。

ミルの國際貿易論は甚だ巧妙にして、且つ余の所見を以てすれば殆んど常に當を得たれども、而も彼は其理論より下の如き結論を引き來れり。曰く『最有利なる條件にて外國貿易を行ふ國は、自國の貨物が最も多く外國にて需要せられ、自己は外國貨物を需要する事最も少き國に外ならず。其結果として最も富裕なる國は一定量額の外國貿易に依つて利益する所最も少き國たる可し。蓋し富國は一般に貨物を需要する事大なるを以て外國貨物に對しても需要大なる

可く從つて交易の條件を己れに不利ならしむ可ければなり。勿論富國は貿易を大規模に行ひ、大量消費の利益を受くるを以て外國貿易全體の利益は一般貧國より大なれども消費されたる各個貨物に就ての利益は却つて小なり」(原論第一篇十八章第八節末項)

之に對しては別に反對の說明なきを以て此一節は外國貿易の利益は交換の條件によりて定まり、且又國際貿易は貧國よりも富國に取りて有利ならずとの意味なりと解釋せざる可からず。然し乍ら此くの如き結論は二つの異なるもの——貨物の價格と其總利用——を混同せるものなり。一國は貨物を賣買し、價格の差額に由りて利を收むること單に一個の商事會社の如きものに非ず。一國は消費の目的を以て貨物を購入す。

第七圖



然るに一消費者が一貨物より受くる所の利益を計量するに方りて其標準となす可きものは、貨物の總利用にして、交換條件の由て定まる最終利用にはあらざるなり。此の眞理を說明する爲め余は第七圖の曲線を用ひて二貨物の利用函數を表はす可し。今濠洲の羊毛を ob にて表はし其濠洲に取りての總利用を obrp なる面積にて示し、次に第二の貨物例へば木綿の濠洲に對する利用を同樣に下段の曲線にて表はし o'b' を以て該貨物の分量を測り o'p'r'b' を以て其總利用を表はすとせよ。

濠洲が其羊毛の半分即ち ab を與へて其代りに木綿貨物の分量 o'a' を得ば aqrb なる利用を失ふも其より大なる面積 o'p'q'a' を得可く、從つて交換の眞の目的なる利用の純收あり。假りに濠洲が更らに低き價格を以て羊毛を賣り値に o'c' 量の木綿貨物を得るとしても其利用 o'p's'c' は濠洲が之が爲めに投じたる利用即ち aqrb よりも大なる

可し。由是觀之、ミルの說は全く誤れり。余は信ず、眞理は寧ろ其反對にあることを。通則としては一國が他國の生產物に對し高價を支拂ふ意思並に能力を有すと云ふことは其國が其貨物の輸入に由て受くる利益の大なる事を示めすものに外ならず。(下略)

是れは無論ジエヴオンスの反對說の方正しくミルのパラドックスは誤である。然し其はミルの考へ方其ものが根本的に誤つて居るのではない、根本的の考へ方はミルもジエヴオンスも同一なのである。唯だミルは其推論を誤まつたのである。卽支拂價格の高低のみを見て利用の大小が之と對立することを見なかつたのである。國際貿易に於ても個人間の流通行爲に於ても其利不利を決するものは支拂價格其ものでないことは正さにジエヴオンスの云ふ如くである。然し乍らジエヴオンスは之に對して唯だ總利用のみをあげたのは不十分な說と云はざるを得ぬ。流通行爲の利不利を決するものは費用たる價格のみでもなければ利用のみでもない、兩者の差たる餘剩價値是れである。高き價を拂ふも利用大なれば餘剩は大である。安き價を拂ふも利用小なれば餘剩は小である。費用を節するのみが經濟の要旨でない如く利用のみを見て費用を顧みざるも亦經濟の要旨ではない、要は其差たる餘剩の大小是れである(此事は拙著『國民經濟講話』改訂版第九六頁以下に粗ぼ說明して置いたから其一節を見られたし)。

そこで筆者は、細論を他日に保留して、假りに右のミルのパラドックスを應用して次の如く結論して本論の筆を擱かんと欲するのである。今日現在の流通生活の下に於ては、均しく餘剩の增進であつても、其れが勞働者側に起る方が雇主の側に起るより殆んど常に一國の經濟的厚生を增大するものである。而して賃銀鬪爭(ミルの國際貿易に倣ふ)に於ては、勞働者の勝利は其れが不確定列を破らざる限りに於ては、雇主の勝利よりも殆んど常により大なる餘剩を與ふるものである、從つて勞働者の勝利は其れが不確定列以外に涉らざる限りは殆んど常により大なる經濟的厚生を持ち來た

す。されば賃銀鬪爭は其れが不確定性の範圍內に於て行はれる限り——而して今日迄の賃銀鬪爭は殆んど皆此範圍內に於てのみ行はれ來つた——厚生鬪爭として重要なる意義を有すと。(終)

本稿の構想は本文中に引用した諸書の外猶左の諸書に負ふ所多いものである。

Pareto, Traité de sociologie générale. 1919.——Graziani, Istituzioni di economia politica. 3a. ed. 1917.——Wicksell, Vorlesungen ueber Nationaloekonomie auf Grundlage des Marginalprinzips. 1913.—— Liefmann, Grundsaetze der Volkswirtschaftslehre. 1919——Lescohier, The labor market. 1919——Askwith, Industrial problems & disputes. 1920——Urwick, A philosophy of social progress. 2. ed. 1920 ——J. A. Hobson, The industrial system.—— The same, Economics of distribution. 1903.——

不勞取得と土地社會主義

（一）

小泉信三

文明諸國の法制史は土地私有權の發達形成が動産に對する夫れと全然趣を異にすることを示して居る。土地私有權が動産私有權よりも著しく遲れて發達した許りでなく、土地の私有が承認せられた後に於ても、土地所有者は社會公共の利益の爲めに他の一般財産所有者よりも多くの制限を課せられるのが常である。所謂土地社會主義者（Agrarsozialisten）は此程度の差別的取扱に滿足せずして地主の獨占的利益を排する方向に於て更に現法制の急激なる變革を要求するものである。乍併彼等が要求する變革の程度は必しも一定して居ない。土地「社會主義」なる名稱は今日必しも嚴格な意味に用ゐられては居ないので、土地私有の廢止を要求するものが是に屬するのは當然であるが、土地私有を否認する迄には至らずして唯其私有から生ずる特別の利益を國家若しくは他の公團體に收用することを主張するもの或は土地兼併の弊を除かんが爲めに土地均分、或は少くも其方向に傾く改革を要求する者も屢々此名稱の下に一括せられるのである。例へばヘンリイ・ジョオジは地主の地代收得を以て百害の泉源と認めながら、猶ほ土地私有其者の廢止は主張せずに唯所謂土地單税に依て此の不勞所得の全額を國家の手に移さうと主張するに過ぎないが彼を土地社會主義者の中に數へるのは普通の事と認められて居る許りでなく、ヘンリイジョオジの土地國有主義と云ふ言葉すら人は屢々怪しまずに用ゐて居るのである。土地私有は何故一般動産の私有と受ける待遇に差別があるか。其理由の一は土地が天與の賜であると云ふ簡單な事實に在る。勞働を以て私有權承認の論據とする學說は學說としては特定の代表者を持つて居るが、財産又は所得は勤勞煩勞犧牲の報償としてのみ正當に取得收受せらるべきものであると云ふ普通人の抱いて居る感情は決して

個々の學者を俟つて始めて投けられたものとは思はれぬ。而して此感情を以て臨めば、土地と動產との間には甚だ容易に區別が認められる。動產の所有者が多くの場合必しも其物の生產者其人ではないが、其源に遡れば何人かの勞働の生產物であつた事を以て其私有の論據とする事が出來るのに反して、土地は一見何人の所產でもなく凡ての人間に共同平等に投けられた自然の恵與物と見られるからである。「何人が土地を造りしか。神なり。然らば、地主よ汝は去れ」（プルドン）なる語は甚だ俚耳に入り易いのである。其故に一般的には私有財產制度に對して毫も疑問を介まぬ論者の間にも屢々土地國有が主張せらるる事があるし、又一般的に私有財產制度を敵視する論者も屢々先づ或は重に土地私有に攻擊を集中するのである。

土地社會主義者と稱するものは他の國からも出て居る。乍併大地主制度の弊害の特に甚しい爲めか、或は「土地所有が比較的少數者の手に漸次兼併されて來たために、地主の事實上の勢力が非常に薄弱となつた」（アントンメンガア）爲めか、今日迄最も多くの有力なる土地社會主義者を出し又土地社會主義の最も勢力を扶植し得たのは英吉利である。英吉利社會主義は十八世紀以來半ば土地社會主義から進化したと云つて好いのである。

（二）

十八世紀末英國の土地論者中最も代表的なるものはトマス・スペンス（一七五〇——一八一四）ヰリヤム・オジルビイ（一七三六——一八一三）及びトマス・ペイン（一七三七——一八〇九）の三者であつて、何れも自然法思想を基礎として土地社會主義的結論に到達したのである。乍併此學說は遡尋すれば既にジョン・ロックの私有權論中に其萠芽を認めることが出來る。ロックは其「政府論二篇」（一六八九）中に於て勞働を以て私有權承認の論據として居るが、其中の兩三節は若しそれを擴充すれば現行土地私有制度の根本的改革の要求論據となり得るのである。彼は先づ一般に勞働に依つて私有權の制度を是認する。神は地を人の子に與へた。それを人類に共同に與へた。然らば或人の或物を私有することは如

、[illegible]い。曰く土地と一切（[illegible]し所有權を[illegible]何人と雖も之に[illegible]そ[illegible]もまた[illegible]ものである。彼の肉體の勞働、及び彼の手の作業は當然彼のも[illegible]事が出來やう。故に彼の[illegible]らざる所有物なる勞働を加へてそれと結合せしめたものは彼の所有物であつて、彼以外何人も之に對して權利[illegible]ことは出來ぬのである。「泉に流れる水は凡ての人のものであるが。而かも器の中に於てはそれがそれを汲來つた人のみのものなる事を誰か疑ひ得るか。彼れの勞働はそれが共同に等しく凡べての人に屬して居つた自然の手から取り來つた。而して其に由て之を己れのものとしたのである。」果實は之を聚集したもの、野獸は之を射たものゝ所有に屬するのである。乍併之は土地の果實、地上に棲息する動物のみならず、土地其者に就ても亦同じである。人が耕耘し改良し栽培し、且つ其生產物を使用し得る丈けの土地は即ち彼の所有物である。彼は其勞働に依て之を謂はゞ共有地から圍墻に依て區別する。「神は世界を人類に共同に與へた時、また人に勞働を命じた。神と其意志は人に土地を克服すべきこと、即ち人生の利益の爲めにそれを改善し、其處に彼自身の或物即ち彼れの勞働を投ずべきことを命じた。此の神命を奉じて土地の或部分を克服し、耕し、蒔きたるものは其に依て他人がそれに對して權利なく侵害なくして之を取ること能はざる其所有の或物をそれに附加する」のである。然らば人は勞働の投下に依て欲する限り有ゆる物を如何なる程度迄も其所有に移すことが出來るかと云ふにロツクは人の欲望を標準として一種の制限を加へようとする。即ち彼に從へば吾々に所有權を與へる自然の法則はまた其所有權に制限を加へる。神は吾等に有ゆる物を豐富に與へたが、其の之を與へたのは之を享樂する爲めである。故に「或人がその腐朽するに先だち何等か人生の利益の爲めに供用し得る丈けに對しては彼は勞働に依て所有權を定める事が出來る。それを超過するものは彼れの分前以上のもので、他人に屬する。如何なるものも神に依て腐朽破壞する爲めには造られぬ」(Civil Government §§ 31) のである。故に「自然は人間勞働並に生活の便宜の程度に依て明かに所有の限界を定めた。何人の勞働も一切の物を克服し占有する事は出來ず、又彼れの事業は其の一小部分以上を消費することは出來ぬ。從つて斯くして或一人が

他人の權利を侵犯し、或はその隣人を害して自ら財產を獲得することは不可能である。……此制限は世界の原始時代に於て各人の所有物を甚だ過大ならざる程度即ち何人を害することなくして占有し得べき程度に制限した(§35)のである。

（三）

以上の引用句に含まれて居る思想からロック自身は何等の土地社會主義的主張を發展せしめず、右の章句は猶久しく顧みられずに過ぎた。然るに十八世紀末年に至つて、直接には所謂「圍墻」運動の爲め、小農、勞働者の地位が甚だ脅かされた事に刺戟せられて、自然法的國家觀社會觀から出發する急進的な土地所有制度改革案を提議するものが漸く現はれた。此等の論者に共通の一特色は、その一方に於ては文明社會の弊害と對照して原始的自然狀態に對する憧憬を懷くと共に、他方に於ては所謂文明に伴ふ利益は明かに認めて此二者に各々伴ふ長所を採らうとするか、或は二物の取捨に迷ふと云ふかの觀を呈する事に在る。第一に擧ぐべきものはトマス・スペンスであらう。彼は私有地を公團體の地に返付し、之を耕やす農民から徵收する地代を以て一切の租稅に代らしめようとする點に於て或は後年の土地單稅論者の先驅と認められて居る。彼は勞働者の家に生れ獨學に依て學校教師となつたが、一七七五年鄉里ニユウキヤスルの哲學協會で試みた講演の後に「眞人權」（一七九三年）又は「自由の正午日」（一七九六年）と題して公にされたものゝ中に彼れの土地社會主義は說かれて居る。

スペンスは謂ふ、一國は自然の狀態に於ては其人民に共同に與へられて居る。各人は平等の所有權と、已れ自身及び家族を動物果實其他其國の生產物を以て養ふ自由とを有する。「彼等はその棲む國の生產物に由て生活しなければ何に由て生活するか。彼等に此權利を否認すると事實上彼等の生存權を否定する事である。」「されば一國若しくは其附近の土地は其地上地中並に之に屬する一切の物と共に何時にても平等に其國又は附近の住民に屬する事は明白である。何となれば前述の如く、土地並に其生產物に賴るにあらざれば活きる途がない。而して吾々はそれ無くしては活き能はざるも

のに對しては吾等の生命に對すると同じ所有權を有つからである」と。然るに土地の私有は此の權利の平等要求と相容れぬ。其處で土地私有の制度を廢して各人に其平等權の享有を保障する途を講じなければならぬ。今スペンスの提案の大略を云へば、先づ各寺區の土地は凡て之を其寺區又は自治體の所有に移し、寺區は其土地に對して莊園領土が其土地家屋に對すると同じ賃貸修覆變更の權を持つ。さて如何なる小面積の地と雖も之を手離す事を許されないのである。さてその寺區所有地はより多數の人に業を授け且つ食物生產高を增加せしむる爲め、小農園に分割して小作せしめ、借地人は其の占有する土地の面積地味便宜等に應じて寺區に地代を納める。其曉に於ては、「右記の地代以外…彼等の間に於て土着人に依ても外人に依ても何等の租稅通行稅が拂はれない。政府貧民道路等は前述の如く凡て寺區に依て地代を以て維持される。其が爲め一切の商品製造工業、差支なき職業若くは行爲は全然課稅を免ぜられる。如何なる事をなす自由も之を買ふ事は出來ぬ。一事は例へば窃盜殺人の如く全然禁止せらるるか又は租稅若くは料金なく全然自由なるかである。地代は、それを以て有ゆる事が爲されるに拘らず猶ほ從來僅かに少數の傲慢忘恩の地主を養ふ爲めに徵收せられた程高くない。何となれば最大の費用吸收者と云つて好い政府が物產稅吏も收稅官も軍隊も年金受得者も、又其れに似た害虫をも養ふ必要がないので容易に滿足し且つ政府若しくは寺區に就て絕對的に必要なる以上に吏員が雇備せられず且つ彼等の俸給は正に適當に彼等の位置を保つに必要なる丈けに過ぎぬからである。」

スペンスは此講演の爲めに鄕里を去つて倫敦に上るの已むなきに至り更に倫敦に於ては彼は有ゆる革命運動に參加して、投獄せらるゝ事二回であつた。彼れの死後その崇拜者は叛亂に依て亡師の主張を貫徹しようと試みたが、政府に依て防壓せられ、スペンスの主義は遂に永續的の勢力にはならずして終つたのである。

（四）

土地は萬人共同に與へられたるものなしとの思想と、勞働の所產は、勞働者の所有に屬すべきものなりとの思想との調

和は必しも容易でない。勞働が土地に加へられた場合、其土地は無條件に勞働者の有に歸すべきものか、或は土地の中の勞働に依て造られた或物だけが其人に屬して、他は依然として萬人共同の所有に屬すべきものなるか。ロックの立場から出發すれば、此問題の解決は決して簡單ではないのである。ヰリヤム・オジルビイが一七八二年匿名を以て公にした「土地所有權論」は稍々詳細に此問題に觸れて居る。

オジルビイに從へば凡そ一切所有權の基礎たるべき原則は二つある。占有と勞働とが是である。然るに土地は共同に人類に與へられたものであるから、各人は他人と均等に土地を占有耕作すべき權利あること、猶はその自由に空氣を呼吸し、自由に流れを汲むの權利を有すると異なるところはない。故に如何なる個人も此の一般的占有權を根據としては自國の土地の均等分以上に對して、權利を主張することは出來ぬ。彼が現在より以上を保持するの事實まだ斯る均等分を有せざる他人の要求を排除する理由とはなり得ないのである。此の土地均等分に對する權利は、各市民が依然として保持する天賦權である。「各國家若しくは各社會は當然その全市民の爲めに、何時にても彼等がそれを欲する時、此の天賦權とその自然的職務に就きそれに復歸し、それを回復するの機會を留保しなければならぬ」のである。未開社會に於ては此天賦權が尊重せられて居たが文明の進歩に連れてこれは忘却閑却の中に埋沒される事になつた。然るに「此平等權は國法に先して存するもので、國法に依て廢止せらる可きものではない。」玆に別に考へなければならぬのは勞働に基づく土地所有權である勞働に基づく土地所有は、天賦權に基づく土地所有權とは異なり。その範圍は必しも均一ではない。彼の地主の、本來の均等分に千倍する面積を以て成る、その領地に對する權利は、決して上記の一般的占有權に基づくものではなくて、彼自身、又はその先祖、或は彼に土地を賣渡した當の所有者が、其土地の肥化改良に投じた勞働に基づくものであつて、「此點まではそれは自然で、且つ正當である。乍併斯る勞働に基づく權利は、他の九百九十九人がその本源的狀態に於ける土地均一分に對して有する、自然的占有權を排除する事は出來ぬ」のである。

「各人が本源的狀態に於ける土地の均等分に對して權利を有する事は、自然法の大則と認むべきものである。同じく各

人は土地がその勞働に依て豐沃の度を增したる場合、その豐度に依て增加したる生產物、又は其價値に對して權利を有し、此權利を他人に讓渡し得ると云ふことも亦自然法の大則である。此二大則の第一に依て下層階級の自由と繁榮とは決せられ、その第二は農業技術及び國富增進の由て定まる所以である。」未開人は此二大則の第一に執着して第二を忘れ文明諸國民は第二に執着して第一を忘れて居る。凡て土地法の目的はこの二大則の正當なる結合を作ることに存しなければならぬのである。

(五)

凡そ土地が賣買せられる時、其購買者が支拂ふ價格は(オジルビイに從へば)三の部分から成立ものと考へ得られる第一は土地の本源的價値、即ち全く耕耘せられざる以前、自然の狀態に於てその有したる價値、第二は土地の添付價値又は增進價値、即ちその從來の所有者が加へたる改良及び耕作より得たる價値、第三は不定價値若くは增進し得べき價値、即ち將來の耕作及び改良から生ずる、而して斯る改良を行ふ費用以上に生ずる價値、換言すれば斯る改良を行ふ排他的權利の價値が是である。而して若し適當の方法で是等の三構成要素を各々評定することが出來るならば、或一人が現に所有せる土地に對して、其の人は如何なる權利を何の程度まで有し、又如何なる權利が如何なる程度まで社會に屬するかを決定することは難事でない。「彼れの所有地中、國の領域が全市民に均分された場合、その受くべき分前に相當する部分の本源價値、增進價値、及び不定價値に對しては完全絕對的なる權利を彼れに許さなければならぬ。是に超過する面積に就ては、彼は自らその最初の改良者なるか、或は斯る改良者を相續したるか、又はその相續者又は讓受人から購入せるものなるかを問はず、その添付價値全額に對して完全なる權利を有する。乍併此の超過面積の本源價値及び不定價値に對しそは彼は完全なる權利は持たぬ。此の權利は依然として社會全體に屬さなければならぬので、それは一見閑却放棄せられて居るの觀があるが、公共管理人たる立法部及び司法官は隨時此權利を主張して差支ないのである。」

(31—14)

以上オジルビイ會自然的正義論に土地均分の論據を求めたが、同じ主張は功利論に依ても援護され得る。謂へらく、凡そ良政府の眞目的は、公共福祉の增進に在るが、此目的は必しも直ちに國富の增進、領土の擴張、人口の增殖に依て達せられるものではない。個人若しくは人間團體の幸福は、大體に於て彼等の德と價値とに比例するものなるが故に、市民の德を進めるに便なる生活方法は彼等の爲め政府に依て奬勵助長されなければならぬ。然るに此點に於ては適度の獨立を樂しみ、勞働産物の正當なる分前を受けて土地の耕作に從事するものが、他の如何なる階級よりも優つて居る。而して獨立農民の間に於ては人口の增殖が他の如何なる階級に於けるよりも速かであり、土地耕作に投ぜられた勞働は、他の如何なる目的に投ぜられるよりも國富を增加せしめる事が多く、獨立農民は他の如何なる階級よりも體力、清楚、健康の點に於て勝る。而して之が幸福と繁榮との最も誤りなき證據である。さて以上述ぶる所に依て考ふれば「その人民の幸福と人口とを增進せしむる爲めに、政府が取るべき最も明白、最も有効なる最良策は獨立農民の數を增加せしめ彼等の事業を奬勵し、領土の面積が許す限り多數の市民を此の幸福なる境遇に移す事に存する。領土の廣袤、人口數に於て相等しき二國民の獨立農民の數多き國は即ち一層幸福なる國民である。而して一國に於ける獨立農民の數を最大ならしむるの途は成年以上の市民に土地を均分するに在る。故に人間の自然權より論じても、最大多數の幸福から論じても、その到達する結論は同一だと云ふのである。

オジルビイが其要求實現の爲め詳說して居る實際的手段の細目は今此處に轉載するには及ばぬであらう。彼は其改革案の第一着手としては一の植民委員會を設け、其委員會をして相當なる價格を以て土地を購入せしめ、之を小農場に分割し、一定の地代支拂に對して希望者に賣渡さしめる事を以て滿足したのであつた。彼は議會の地主に依て支配せらるゝ英吉利に於ては、其改革案の實行せらるゝ望み少なきを知り、却て「從來人類の呵責とせられ來つた英雄征服者」が土地所有の眞原則を理解して其臣民の爲に地制の一新を斷行することの有り得べき事なるを夢み、此意味に於て彼はフ

リイドリヒ大王に望を囑して其著書の一部を王に獻じたりと傳へられて居る。

（六）

假令勞働產物は勞働者其人に屬すべきものなりとの原則を承認しても、人間の勞働はたゞ土地の上、若しくは中に、價値ある或物を造り出すに止まつて、決して土地其者を造る事は出來ぬ。然るに天與の土地其者と土地に加へられた價値ある或物とは、之を引離す事が出來ないので、故に其土地は何人の有に屬すべきものなるかの難問を生ずる事は、旣にオジルビイの所論に徵して明かである。トマス、ペインも亦其著「土地正義」Agrarian tustice（一七九七年）に於て同じ問題を解決しようとして居る。

ペイン曰く所謂文明生活の利益を保存し、同時にその產み出した弊害を救治する事が改革立法の第一の目的でなければならぬ。「恐らく謬つて文明と誤稱せらるゝ狀態が、果して人間の一般的幸福を長ずる事が多かつたか、害する事が多かつたかは、容易に答へ難き問題である。觀者は、一方に於て壯麗なる外觀に眩惑せられ他方に於ては極端なる窮厄に胸を衝かれる。而して兩者は共に文明の產出するところである。社會の狀態が如何にある可きものなるかを解する爲めには、人間の自然的原始狀態を少しく知る事が必要である。此狀態の下に於ては、歐羅巴到處の都市街路に於て、貧困と缺乏とが吾人に示すところの人間慘苦の光景は皆無である。故に貧困は所謂文明生活の所產であつて、自然狀態に於ては存せざるものである。併し又他方に於て、自然狀態には彼の農業學藝工業から生ずる利益がない。故に文明は、若しくは文明と稱せらるるのは、社會の一部を、その自然狀態に於てある可かりしよりも富裕にし、他の部分をある可かりしよりも貧窮ならしめる。」そこで爲す可き事は前述の如く、文明の利益を維持しながらその弊害を矯める事に存する。文明時代に生れた凡ての人の境遇は、その文明時代以前に生れた場合の境遇より不良であつてはならぬのである。然るに現狀がさうでないのは土地私有制度の爲めである。

尤來土地は其の自然未耕の、狀態に於ては、人類共同の所有であつた。然るに耕作に依て土地に加へられた改良は、之を土地其者から引離す事が出來ぬ故、此の不可離の關係から土地私有の觀念が生じて來たのである。「乍併個人所有物たるものは改良の價値のみであつて、土地其者ではない。」故に既耕地の所有者はその占有する土地に對して、社會に一種の地代を納めるべき負債がある。而して此地代が、地主の獨占の爲め、その天賦權を侵害せられた凡べての人の爲め賠償の資源となるべきものである。今ペインの案は「國民的基金を設け、各人が廿一歲に達したるとき、土地私有制度發生の爲め、その自然的相續權を喪失したる賠償の一部として、金十五磅、又凡べて五十才以上の人に、年々十磅の年金を此中より支拂ふ事」であつた。而して右の基金を設定する爲め、ペインは土地が相續に依て所有者を代えるに際して、之に課稅すべき事を提議する。蓋し此場合には死者に於ても相續者に於ても苦痛を感ずることがないからである。

ペインは其提案が「慈善にあらずして、權利、補助にあらずして、正義」の爲めにするものなる事を力說する。誤つて文明とせらるゝ今日の社會に於ては、人が貧窮に陷つた場合、之に救助を與へるのが常である。乍併單に「經濟の問題としても、彼等が貧困となるを防ぐ手段を講ずる方が遙かに勝つては居らぬであらうか。而して之は各人が廿一歲に達したる時先づ發途の爲めに多少の元資を相續せしむる事に依て最もよく行はれる。凡ての國の貧民の大多數は遺傳的の種族となつて居て、彼等が自力を以て其境遇を脫する事は殆ど不可能に近い。而して又此貧民の大衆は凡ての所謂文明國に於て增加しつゝあることを注意しなければならぬ。年々それから脫出するよりも多くの者が是に陷りつゝあるのである。

以上がペインの土地改革論の大要である。

（七）

土地を以て本來人類の共同財産たるきものなる事を認めると同時に、勞働産物の當然勞働者に所有せらるべきものなる事を切論するのは、十八世紀の土地改革論者に共通の著しき一特徴である。乍併勞働産物の、勞働者に歸屬する事の正當を信ずる事が愈々厚ければ、之と相並んで不勞者の財産取得又は所得收得は愈々不當視されなければならぬ。故にオジルビイは曰く報酬は勞働と比例しなければならぬ。故に彼自身又は祖先の勞働努力に比例せざる所得を受くるものは、社會を欺瞞し掠奪するものである。然るに大地主の世襲的收入は彼れの勞働と全然無關係で、土地を耕やすもの、勤勉に比例し、何等彼れの努力なくして増加すると。今此傾向の論に、地代の不勞働所得たる性質を明にして、的確なる經濟的理論上の根據を與へたのは云ふ迄もなくリカルドオの地代學説である。

天與の土地と、投資に依て之に加へられた價値とを區別する事はオジルビイ、ペインも既に試みたが、リカルドオは土地の使用に對して支拂はれる地代をば、固有不可滅の地力に對して支拂はれる部分と、投資に由て土地に加へられた或物に對して支拂はれる部分とに區別した。而して彼れは此の前者のみを支配するものとして其地代法則を立てたのである。今此法則に從へば、地代は凡ての土地から生ずる一般的所得ではなくて、比較的生産力優れたる土地の地主に歸する餘剩所得である。人口が增加し、從て穀物に對する需要が増進すれば益々劣等地、即ち生産費を要する事益々多き土地を耕やさなければならぬ。その結果として穀物價格は騰貴し、それと共に比較的良地の地代は絶えず騰貴する。即ち地代は土地の缺乏と云ふ特殊の事情に由て發生增加するので、決して勞働資本の投下に由て生ずるものではない。今學者に依て説かれ、俗人に依て久しく懐かれ來つた、一物は勞働の所産としてのみ正當に收得所有する事が出來ると云ふ思想を以て臨めば、地主の地代收得は如何にして之を辯護し得るか。リカルドオ自身は其地代論から何等の土地社會主義的結論を演繹し來らず、たゞ之を穀物自由輸入の論據とするに止まつたが、彼の友人ジエムス、ミル、及び其子スチユアト、ミルが、課税に依て地代を公有の有に移すべき理由ある事を論じ、更にヘンリイ、ジョオジがリカルドオの説を利用して、(論の當否は問はず) 推論の最も明快精緻なる土地「國有」論を唱へ出すに至つたのは最も自然の事と云は

なければならぬ。

ヘンリイジョオジは其著「進步と貧困」（一八七九）に於て先づ問題を提起する。今日文明諸國に於て富の增加と技術の進步とあるとに拘らず貧困の益々甚しきを加へるのは果して何の原因に基づくか。之を說明するものは地代論である。地代とは、人力を以て生產增加する事能はざる、自然的要素の私有せらるゝ事から生ずる獨占價格であつて、一定地の地代は其土地の生產額が、同量の資本勞働を投じて、現に耕作せらるゝ最劣等地から收め得べき生產額に超過する、その差額に由て決せられる。從て資本及び勞働は、如何なる土地に投ぜられても、その最劣等地に投ぜられた場合の收益以上を、利子賃銀として受ける事が出來ぬ。如何に生產力が增進しても、地代が之と步を共にする限り、利子賃銀は增加する事が出來ないで、餘剩部分は悉く地主に歸するのである。即ち彼は一切の禍根は地代に在ると云ふ結論に到達する。從て之に處するの途も亦地代に收得を廢止するに在る事は明白である。彼れに從へば、元來所有權是認の理由は人間のその勞働果實に對する權利以外に之を發見する事は出來ないが、土地は天與物であつて、何人の生產物でもない。故に人が土地の使用に就て平等の權利を有すべきものなる事は、猶ほその平等に空氣を呼吸する權利を有すべきものなると擇ぶところはないのである。但しヘンリイジョオジは形式上に於ては土地私有の廢止を主張せず、所謂土地單稅に依て一切の地代を國家に吸收すべき事を主張した。斯くすれば實質上地主の特殊利益は消滅して、從來一階級に獨占せられて居た利益は社會全體のものとなると云ふのである。

（八）

スペンス、オジルビイ、ペイン等から、ヘンリイ、ジョオジに至る土地社會主義者の所說を通觀すれば、論の寬嚴精疎に於て、固より其間に相違はあるが、彼等の凡てに共通するところは、人間所產にあらざる土地の私有、或は地方の自然相違に基つく地代の收得即ち何れも勞働の投下に依らざる財產又は所得の取得を不當とする思想である。ジョン、

ロック等に依て唱へられた、私有財産承認の根據を勞働投下の一事に求める説を、擴充徹底せしめるならば、上記諸論客の土地私有制度に對する批評は勿論是認せざるを得ない。故に鴻儒ブレンタアノも曰く、「私有財産を正當なりとする理由が、その勞働の產物なる一事に求めらるゝ以上は、リカルドオに依て普及せしめられたる如き地代論は、必然的に獨占的地代を生ずる土地私有權の廢止を求めるヘンリイ、ジヨオジの要求に導かれなければならぬ」と。たゞ彼等の著作を讀んで起る疑は、勞働に由らざる財產又は所得の取得は果して、土地又は地代の場合にのみ限らるゝかの一事である。スペンス以下十八世紀の論客は姑らく不問に附するとしても、土地が唯一の收利財產たりし時代の既に遠く過ぎた十九世紀後半に於て、猶ほ一般財產所得と特に地代とを區別したヘンリイ、ジヨオジは多少の批評を辭する事を得ないのである。

リカルドオの地代理論は彼れの系統中最も重要の位置を占め、且つ最も生命長き學說であるが、此學說と雖も今日まで何等の批評を受けずして傳はり來つたのではない。たゞ是に對する有力なる批評は此學說の否定よりは寧ろその擴張の方向に傾きつゝある。リカルドオに從へば、地代は土地に投ぜられ同量の資本勞働が、異量の收穫を擧げる場合には必ず發生し、而して一定の地代額はこの收穫差額に由て決せられると云ふのである。乍併同樣の現象は必しも土地には限らぬ。既にリカルドオの死後間もなく、獨逸の學者ヘルマンは優劣ある二箇以上の機械が同時に使用されるとき、地代と同じ現象が起ることを注意し、其後マンゴルトも亦た「地代は農業地の場合に於ては、最も明白大規模に現はれるか、資本を增加する事の困難なるか、又は僅かにそれを一層高價、若しくは生產力劣れるものを以て代置し得る場合にはまた同じく明白である」と云つたが、英米に於ても重なる學者は概ね地代論の擴張を試み、マアシヤルは既に其原論の第一版に於て地代の「獨立せるものに非ずして、大なる屬中の重なる種に過ぎぬ」事を云ひ、クラアクは抽象量たる資本と具備物たる資本財とを分ち、資本の生ずるものを利子、資本財の生ずるものをレントとして、土地レントはレント中の一に過ぎぬ事を力說し、セリグマンの如きは是を祖述して、土地と資本、土地と勞働との差別を minimize して、

地代法則を一切の所得に適用しようとして居る。今この地代說の擴張が成功するとすれば、其れに基づくヘンリイ「ジヨオジの土地「國有」論も亦た擴張を要する道理ではないか。シドニイ、エッブがヘンリイジヨオジの主張を擴充し、地代論を基礎にして、單なる土地國有論を一般的產業國有論に發展せしめたのは、當然起る可き企てであつたと云はなければならぬ。地代法則を以て一切の所得を律しようとする企てには、未だ必しも承し難き點があるけれども、今日地代が唯一の不勞所得でない事は最早議論を要せぬ程明白である。故に地代が不勞所得なるの故を以て土地の私有を廢せざる可からずと主張し得るならば、私有を廢せざる可からざるものは獨り土地のみではない。故に今日土地社會主義者は偏頗不徹底の譏りを受ける事なくして、土地の私有、地代の個人收得のみを攻擊する事は出來ぬであらう。土地又は地代は、その不勞財產又は不勞所得たる性質が特に他に先じて顯著であつた爲め、一般的には未だ財產、財產所得の當否を疑ふの遑なきものも、先づ此財產、此所得の不當を鳴らしたのである。土地私有並に地代收得は不勞取得の性質最も露骨なるものとして、先づ攻擊を受けたのである。從て、思ふに地代が不勞所得として獨特のものでない事が明になれば土地社會主義者の或者は必ず社會主義者に進化するであらう。現にトオマス、スペンスの如きはその一實例であつた。土地社會主義は多くの場合に於て社會主義に到る一階梯に過ぎぬ。十八世紀以來の英吉利社會主義史は這般の消息を說明する多くの材料を供給して居る。

カール・マルクスの階級觀批判

高畠素之

（一）

私は曩に『階級の概念と其近世的體現』（『解放』三月號）と題する一文を草し、中に階級の概念を決定して次の如く言つた。

『階級とは、同一社會内に搾取と被搾取、又は支配と服從との優劣關係を構成して對立せる社會團體を云ふ。』今、此概念に照してマルクスの階級觀をざつと論評して見る。

マルクスの名著『共産黨宣言』は『從來に於ける一切社會の歷史は、階級鬪爭の歷史である』との斷案に筆を起してゐる。然るにマルクスは抑々階級なるものを如何やうに解してゐたかマルクスの所謂階級とは何かと云ふ問題になると、彼れの頭は遺憾乍ら頗る混亂してゐたやうに見受けられる。

『階級を構成するものは何か』――マルクスの大著『資本論』第三卷は此問を以て中挫してゐる。マルクスは結局、之れが解答を與へなかつたのである。之れに就て我々がマルクスから學ぶ所は、階級の概念は單なる社會團體の概念と混同すべきでないと云ふ事だけである。醫師社會と官吏社會とは夫々異れる社會團體であるが、決して階級と云ふ事は出來ぬ。社會的分業は社會の階級組成とは全く異なるものである。原始社會にも既に職業分化の初徴は現はれてゐる。然し原始社會は決して階級社會とは申されない。將來の社會主義社會に就ても同じ事だ。社會主義社會に於ては、階級は廢止されるであらうが分業を廢するといふことは無いであらう。

要するに我々がマルクスから學ぶ所は、如何なるものが階級ではないかと云ふ事である。反對に、階級とは如何なるものかと云ふ事に就ては、マルクスは『資本論』に於ても其他の著述に於ても、何等明確なる概念を與へて居らぬ。しかのみならずマルクスは階級と云ふ言葉を、種々樣々の、甚だしきは全く矛盾せる如く見ゆる意義に使用してゐる。

地代法則を一切の所得に適用しようとして居る。今この地代說の擴張が成功するとすれば、其れに基づくヘンリイ「ジヨオジの土地「國有」論も亦た擴張を要する道理ではないか。シドニイ、エッブがヘンリイジヨオジの主張を擴充し、地代論を基礎にして、單なる土地國有論を一般的產業國有論に發展せしめたのは、當然起る可き企てであつたと云はなければならぬ。地代法則を以て一切の所得を律しようとする企てには、未だ必しも承し難き點があるけれども、今日地代が唯一の不勞所得でない事は最早議論を要せぬ程明白である。故に地代が不勞所得なるの故を以て土地の私有を廢せざる可からずと主張し得るならば、私有を廢せざる可からざるものは獨り土地のみではない。故に今日土地社會主義者は偏頗不徹底の譏りを受ける事なくして、土地の私有、地代の個人收得のみを攻擊する事は出來ぬであらう。土地又は地代は、その不勞財產又は不勞所得たる性質が特に他に先じて顯著であつた爲め、一般的には未だ財產、財產所得の當否を疑ふの遑なきものも、先づ此財產、此所得の不當を鳴らしたのである。土地私有並に地代收得は不勞取得の性質最も露骨なるものとして、先づ攻擊を受けたのである。從て、思ふに地代が不勞所得として獨特のものでない事が明になれば土地社會主義者の或者は必ず社會主義者に進化するであらう。現にトオマス、スペンスの如きはその一實例であつた。土地社會主義は多くの場合に於て社會主義に到る一階梯に過ぎぬ。十八世紀以來の英吉利社會主義史は這般の消息を說明する多くの材料を供給して居る。

カール・マルクスの階級觀批判

高畠素之

（一）

私は曩に『階級の概念と其近世的體現』（『解放』三月號）と題する一文を草し、中に階級の概念を決定して次の如く言つた。『階級とは、同一社會內に搾取と被搾取、又は支配と服從との優劣關係を構成して對立せる社會團體を云ふ。』今、此概念に照してマルクスの階級觀をざつと論評して見る。

マルクスの名著『共產黨宣言』は『從來に於ける一切社會の歷史は、階級鬪爭の歷史である』との斷案に筆を起してゐる。然るにマルクスは抑々階級なるものを如何やうに解してゐたかマルクスの所謂階級とは何かと云ふ問題になると、彼れの頭は遺憾乍ら頗る混亂してゐたやうに見受けられる。

『階級を構成するものは何か』――マルクスの大著『資本論』第三卷は此問を以て中挫してゐる。マルクスは結局、之れが解答を與へなかつたのである。之れに就て我々がマルクスから學ぶ所は、階級の概念は單なる社會團體の概念と混同すべきでないと云ふ事だけである。醫師社會と官吏社會とは夫々異れる社會團體であるが、決して階級と云ふ事は出來ぬ。社會的分業は社會の階級組成とは全く異なるものである。原始社會にも既に職業分化の初徵は現はれてゐる。然し原始社會は決して階級社會とは申されない。將來の社會主義社會に就ても同じ事だ。社會主義社會に於ては、階級は廢止されるであらうが分業を廢するといふことは無いであらう。

要するに我々がマルクスから學ぶ所は、如何なるものが階級ではないかと云ふ事である。反對に、階級とは如何なるものかと云ふ事に就ては、マルクスは『資本論』に於ても其他の著述に於ても、何等明確なる概念を與へて居らぬ。しかのみならずマルクスは階級と云ふ言葉を、種々樣々の、甚だしきは全く矛盾せる如く見ゆる意義に使用してゐる。

(二)

一例を擧ぐれば、マルクスは其著『獨逸に於ける革命及反革命』中で、革命勃發當時の獨逸國民は、封建貴族と、ブルヂオアと、小ブルヂオアと、大中地持農民と、小自由農民と、封建的小作農民と、農業勞働者と、工業勞働者との諸階級から成つてゐたと言つてゐる(一)。即ち當時獨逸には、八種の階級があつた譯である。二月革命中及び其後に於ける佛蘭西に就ても同樣に、マルクスは多數の階級を區別し、就中小ブルヂオアと小地持農民との兩階級が演じた社會的役目に對して特別の注意を拂つてゐる。極小地持農民(パルツェレンバウエル)に就ても、マルクスは之れを特殊の一階級と認め、帝制成立の上に決定的役目を演じたものとしてゐる。彼れは曰く、『ボナパルトは一階級を、而も佛蘭西の社會に於ける最も成員多き階級たる極小地持農民を、代表せるものである』と(二)。

(一)『獨逸に於ける革命及反革命』一八九六年獨逸版、第七―一一頁

(二)『ルイ・ナポレオンのクーデター』一八八五年版

然るにマルクスは同じ著書の中で、極小地持農民なるものは或意味に於て階級とは認められぬと言つてゐる。彼れは曰く『幾百萬の家族は、其の生活樣式、其の利害及び其の敎育をば他階級の夫れと分離對抗せしむる經濟的生存條件の下に生活する限りに於て、一階級を構成するものである。極小地持農民達の間に存するものが單なる地方的聯絡のみであつて、利害の共通に依り彼等の間に何等の共同關係、何等の國民的結合、何等の政治的組織生ぜざる限り、彼等は何等の階級を構成するものでない』と(三)。

(三)前揭書、第九八頁。

斯くの如く、マルクスの見る所に依れば、極小地持農民なるものは或意味に於ては階級たらず、或意味に於ては階級たるものである。要するに、彼等は階級であるのか無いのか分らぬと云ふことになる。

だが、『利害の共通が彼等の間に何等の共同關係、何等の國民的結合、何等の政治的組織をも生ぜしめざる』が故に、極小地持農民は階級でないとすれば、小ブルヂオアの階級的資格も亦怪しくなつて來る。三月革命當時に於ける獨逸の小ブルヂオアは獨立の政黨を組織する力がなかつた。彼等は此點に於て、佛蘭西に於けるルイ・ナポレオン當時の極小地持農民と、少しも違はなかつたのである。即ち小ブルヂオアも亦、『或意味に於ては』階級でないと云ふ事になる。斯くてマルクスが近世社會の裡に發見せる幾多の階級中、滿足に階級の資格を備へてゐるも

のは幾許も殘らぬ事になつてしまひ、我々は結局アダム・スミスの分類に從つて、地主と資本家と勞働者との三階級以外の階級を近世のブルヂオア的社會内に認めることが出來なくなるやうに見える。否、之れでもまだ充分でない。勞働者の階級的資格が抑も問題だ。

マルクスは幾度びか勞働者を、プロレタリアを、特殊の一階級として取扱つた。然しながら右にいふ如く、農民や小ブルヂオアが或意味に於て階級でないとすれば、それと同じ理由でプロレタリアも亦其發達の一定段階以前に於ては階級でないと云ひ得るのである。現に『共産黨宣言』その者が、當時プロレタリアはまだ階級でなかつた事を認めてゐるではないか。即ち此宣言に曰く。――『共産黨の直接の目的は、他の總てのプロレタリア黨の目的と同じく、プロレタリアを階級たらしむるに在る』と。又曰く、『プロレタリアを階級隨つて政黨に組織せんとの企圖は、勞働者自身の間に行はるゝ競爭に依つて、絶えず又破碎される』と(四)。果して斯くの如くんば、プロレタリアを階級たらしむることは、尙いまだ達成せられざる目的と見るの外はない。即ちプロレタリアなるものは、少なくとも當時に在つては未だ階級を構成して居らなかつたと云ふ事になる。

（四）『共産黨宣言』一八九一年刊、第一六及一八頁。

（三）

マルクスの階級觀は斯樣に驚くべき自己矛盾に陷つてゐるのであるが、マルクス自身の腦裡には斯る矛盾を矛盾たらしめざる論據が無意識的になりとも存してゐたものと解されぬでもない。例へば彼れは其著『哲學の窮乏』中に斯う言つてゐる『多數の人民を最初勞働者化せしめたるものは經濟事情である。資本に依る支配は、之等の人民の上に共同の位置、共同の利害を造り出した。斯くて彼等は資本に對しては、既に一階級たりしものであるが、彼等自身としては未だ階級でなかつた。我々が既に其二三の段階のみに就き特徴を示した爭鬪に於て、彼等は互に結合し、彼等自身としても階級を構成するに至るのである。彼等が擁護せる利害は、階級的利害となる。されど階級に對する階級の鬪爭は、一の政治的鬪爭である』(五)。之れは又ブルヂオアに就ても同樣である。マルクスはブルヂオアの發達を二箇の段階に區別してゐる。即ち『一は、ブルヂオアが封建制と專制君主制との支配下に階級を成すに至つた段階、他は既に階級を構成し、社會をブルヂオア的一社會たらしむべく封建的支配と君主制とを顚覆せる段階これである。右の中第一段階は其期間より長く、且より大なる努力を要したものである』(六)。

（五）『哲學の窮乏』一八八五年獨逸版、第一八〇頁。

（六）前掲書第一八〇頁。

斯くの如く、社會階級なるものは、其發達中二箇の段階を通過する。即ち最初は、それ自體としては階級たらず、たゞ他階級に對してのみ階級となり、次にはそれ自體としても階級を構成するに至り、斯くて一社會團體の階級成立は完成されるのである。依是觀之、曩に知れる如くマルクスが極小地持農民に對して階級的資格を否認せるは、彼等がそれ自體としては階級でないと云ふ事を言はんとしたものに違ひない。又場合に依つて彼等を階級扱ひしたのは、他階級に對しては既に階級であつたと云ふ意味であつたに違ひない。同樣に、プロレタリアも『共産黨宣言』起草の當時、ブルヂオアに對しては既に階級を成してゐたが、それ自體としては未だ階級でなかつたのである。

斯くの如く、階級形成段階を對他的と自立的とに兩分する見解は、思ふにヘーゲルの純粹實在論に立脚せるものであらう。蓋しヘーゲルに依れば、純粹實在なるものは、自己を否定するに依つて他の爲の實在となり、更らに此否定を否定するに依つて自己の爲の實在となるのである。マルクスが同一の社會團體を目して、或場合には之れを階級なりと云ひ、或場合には又之れを階級ならずと云つたのは、畢竟するに、此團體の通過せる異れる發達段階の立場から之れを批判せる結果である。

（四）

斯く解する時、マルクスの階級觀の矛盾として現はれた所は實は論理上の矛盾ではなく、寧ろ言ひ現し方の不用意に基けるものであることが分る。マルクスに依れば、社會階級なるものは宇宙間に於ける一切の事象と同じく發達上の法則に從ふもので一階級の各發達段階は他の段階の有せざる決定的特徴を保有するものである。階級鬪爭は常に政治的鬪爭なりとは、マルクスの強調せる所であるが、之れは未だ構成せられざる階級と階級との代表者間に生ずる衝突に就ては當て嵌らない。二月革命以前に在つては、プロレタリアは政治部面に何等の大なる役目を演じて居らなかつた。而も資本家と勞働者との衝突は、資本制生産方法と等しく古いものである。個々の勞働團體が同盟罷工を行つても、それはまだ階級鬪爭とは申されぬ。隨つて、それは政治的鬪爭ではない。階級が構成せられざる限り、其代表者達が他階級の利害とは對立せる共同の利害に立つ所の固く結合した一團であるとの自覺を有するに至らざる限り、斯る衝突には尚未だ階級鬪爭の特徴が缺けてゐるのである。されぱこそ、マルクスは『共産黨宣言』の中で、『勞働者の幾多の局部的鬪爭

を集中して一箇の階級鬪爭たらしめ』、或に——畢竟同じ事に歸するが——純經濟的衝突をば政治的鬪爭に轉化し、プロレタリアを『階級隨つて政黨』に組織するは、共産黨の最も重大なる任務なりと言つてゐるのである。

階級と單なる社會團體との區別は先づ、種々異れる社會團體の經濟的利害は互に一致するを得るが、一階級の經濟的利害は他階級の夫れと必然的に對立すると云ふ點に存じてゐる(七)。然らば階級的社會の決定的特徴たる、斯くの如き必然不可避なる利害對立の基礎を成すものは何であるか?之れに對するマルクスの解答は簡單明瞭である。曰く、一切の階級的對立は、若干の社會團體が他の社會團體の剩餘勞働を占有すると云ふ點に存ずる所の、近世社會の基礎的對立を言ひ現はしたものに外ならぬ。されば、社會の階級組成なるものは、各時代に專ら行はるゝ對抗的生産方法の社會的一表現であつて、不拂剩餘勞働の存ずる限り、社會は其の階級的性質を失はないのである。

(七)カウツキー稿『階級的利害——個別的利害——共同的利害』ノイエ・ツァイト誌、第二一卷、第二册、第二四一頁。

原始社會には剩餘勞働なるものが無かつた。隨つて、原始社會には階級的性質が缺けてゐた。勞働者から剩餘勞働を汲み取る事は、何等かの種類の強制に依つて始めて可能となるのである。而して斯る強制こそ、搾取者と被搾取者との間に行はるゝ避け難き利害衝突を指示するものである。斯くして階級的社會は成立する。

以上說く所を基礎としてマルクスの階級概念を綜合して見るに、マルクスは階級なるものを結局次の如く解してゐたやうに見える。曰く、階級とは、若干の社會團體が他の若干の社會團體の剩餘勞働を占有する過程に於て互に類似の一地位を占め其の結果、共同の經濟的利害と共同の對敵とを有するに至る人々より成る一の社會團體を云ふ。要するにマルクスの階級概念の根抵を成すものは、搾取被搾取と云ふ一點に盡きてゐる。マルクスに依れば、此搾取被搾取の對立に依つて制限された社會團體が則ち階級なのである。

(五)

そこで此の階級觀をば、冒頭に掲げた私の階級觀と比較する時如何なる異同が見出されるか?先づ階級なるものを單なる社會團體にあらずして、特殊の性質を帶びた社會團體と見る點は兩者に共通してゐる。次に斯る特殊の性質として搾取被搾取の對立を持出した點も共通してゐる。たゞマルクスは搾取被搾取の對立のみに注目せるに反し、私は其の外に尙支配被支配を持

出してゐる。之れは兩者の歷史哲學觀の相違に基くものであつて、マルクスの唯物史觀から云へば支配被支配なる概念は搾取被搾取なる概念中に包含せらるべきものである。私は此點に於ても唯物史觀の立場を取らない。之れに就ては何づれ稿を改めて詳述するつもりであるが、此際一應私の立場を明かにして置く必要があるので前掲拙稿中から左の一節を引抄する。

『政治的階級と經濟的階級との構成者が同一の社會團體なる事即ち搾取階級は同時に支配階級であり、被搾取階級は同時に支配階級であり、被搾取階級は同時に服從階級である場合は、屢々見られる所である。

『けれどもかゝる結果は或條件の下にのみ實現さるゝものであつて、右二對の階級が直ちに本質上同一物であるとの斷定は成り立ち得ない。蓋しかゝる斷定は、兩階級對立の發生過程と各階級成員の心理上の反映とに就て考ふる時、容易に顚覆せらるゝ事となる。元來、支配階級の原始的發生は、社會的分業の形態として端を開いたものである。原始人の一群中に特殊の能力を抱ける者が現はれ、其の能力の發揮が此の群全體の欲求に一致した場合、彼は從來の一般的なる生活を更めて、特殊の動作に出づる事となる。是れ即ち社會的分業で、其の原始的なる種類は魔術師、斷醫師、武將等であつた。彼れの此の地位は全群をして彼れの命に聽從せしむる事となる。こゝに政治的階級の端は開かれたのである。此の支配者が若し自ら經濟的欲望を旺盛にし自己の特權を利用して、搾取の行爲に出たとするか、或は他に搾取階級が出現して此の支配者の地位を奪ふなり此の支配と抱合するなりするとすれば、搾取と支配とが一體となり、一種の階級對立は同一の構成者に依つて存在する事となるが、それは斯くなるべき條件の下に於ける一變化の結果たるに過ぎぬのである。

『更に之を心理的に觀察すれば、政治的階級の獨立なる存在が一層明かとなる。蓋し、人類の欲望は、之を順次單純なる形態に約元して行く時、食慾、性慾、優勝慾の三欲望のみの時代に到達することゝなる。而して支配の欲望は優勝的欲望の手段として、かゝる原始的形態の欲望より直接派生し來つたものである。

『他方、現在に於ける資本家の心理に就て考へても、搾取は經濟的欲望の充足に基くものではなく、搾取に依つて得らるべき蓄積を他に誇示せんとする優勝の欲望に基くものである。搾取が若し單に經濟的欲望に因るものとすれば、有限なるべき經濟欲の爲めに無限の蓄積は必要でない。他を凌駕する事を條件とする優勝の心理に出づればこそ、蓄積の願望は必然無限に進む

事となるのである。

『若し、支配に對する欲望が、搾取に對する欲望より派生したものであるとすれば、支配は搾取より派生する所であり、隨つて政治的階級は經濟的階級の反映に過ぎずとの見解に一根據を投ずる事となるが、支配と搾取との欲望は、等しく優勝の欲望より對立して派生したものであつて、二個の欲望は各々獨立せるものなる事を考ふれば、支配も亦搾取より獨立して存在し得べく、隨つて政治的階級と經濟的階級とは本質上相互獨立せるものと見られるのである。』

（六）

マルクスの階級概念と私の階級概念との差異は、單に右の如く支配被支配を搾取被搾取と對立させるかさせないかと云ふ點に盡くるものではない。今一つ著しい差異がある。それは、マルクスは搾取被搾取の對立を有する社會團體を直ちに階級と見たるに反し、私は其上に尙『同一社會內』と云ふ制限を與へてゐる。即ち搾取と被搾取（又は支配と被支配）との優劣關係はそれが同一社會內に成立する場合に限り、階級構成の要素となるのである。然るにマルクスは此點を全然無視してゐる。

尤も『同一社會』と云ふ用語は聊か不完全である。之れを更らに嚴密に言ひ換へるならば『組織ある同一の社會』は又『同一の組織を以て統合せられたる社會』と云ふことになる。然るに組織なるものは權力に依つて表現せらるゝものであるから、右は更に『同一の權力に依つて統一せらるゝ社會』と云ふ事になり、結局『同一の國家』と云ふが最も手取り早い事となる。但し斯く云ふに就ては、前提として國家の意味を『組織ある、又は權力に依つて統治さるゝ社會』と解すべきは勿論である。

思ふに階級の存立は、其背後に之を支持すべき權力の存在することを條件とする。なぜならば、支配階級と搾取階級とは、被支配階級と被搾取階級とに比べて成員の數少なく、隨つて其物理力は遙かに微弱である。それにも拘らず、彼等が尙且つ物理力の行使を要すべき支配及搾取を繼續し得るは、要するに權力の支持を背景とするからである。換言すれば、權力なるものが一方の社會團體に支配及搾取を許容し、他方の團體に服從及被搾取を強要するのである。

然らば權力の實體は仰も何ぞ。之れは別個の問題に屬するがついでながら簡單に一言して置く。曰く、權力の實體は組織された社會意識である。或は組織された社會規範と言つても宜い。要するに、社會成員が、全成員の欲求なりとして意識せる對象である。換言すれば、各個の成員が、自己以外の一切の

の欲求なりとの意識を以て抱く觀念これである。此觀念上の對象に當面する時、人は何づれも羊の如く従順となるの外はない。蓋し之れに反抗するは、自己一人を以て全成員に反抗する事になると思惟するからである。

右の觀念は、其内容が錯誤に出づる場合と雖も、換言すれば社會の全成員が事實に於ては斯樣な欲求を抱いて居らぬ場合と雖も、實際抱いてゐるやうに各人の主觀に意識さるゝ時は、斯る欲求が事實に於て存する場合と同一の壓力を以て各人を屈從せしめるのである。之れは丁度、お伽噺に出て來る馬鹿王樣の家來達に於けると同一の心理である。王樣は裸體にて坐し我衣は不忠の臣の目には見えないと云ふ。群臣一人として王の衣を見ないが、誰れも彼れも見えるやうな顔付をしてゐるので、みな自分ばかりが見えないものと思込み謹んで王の衣の美しきを讃美したと云ふ。社會意識も亦斯種の壁から出た眞たる場合が多い。我々は之れを。社會意識の魔術性と呼ぶ。

社會意識が全成員の組織ある批判力に投影せらるゝ時、玆に始めて權力となるのである。而して曩に説ける如く、階級成立の基礎たる支配及び搾取の存續し得る所以は、優勝團體が此權力に支持さるゝ物理力を行使する結果に外ならぬ。

されば、支配團體と被支配團體、搾取團體と被搾取團體とが斯る權力に依つて統一された同一社會内に於て對立するに非ざる限り、それらの團體は決して階級的に對立するものとは云へない。英吉利の支配者は日本の被支配者に對しては階級たらず日本の資本家は佛蘭西の勞働者に對しては階級を構成しないのである。

總ての階級闘爭は其根底に於て政治的闘爭であると解したマルクスが、階級概念の決定に於て斯る重大の一要素を見逃がした事は驚くべき錯誤と云はねばならぬ。なぜならば、彼等が階級闘爭を政治的闘爭と解したのは、國家は階級支配の一器官であり、而して被搾取階級はたゞ政治的革命に依つてのみ自己を解放し得ると信じたればこそである。階級支配の存立上かくも重要なる國家を、彼れは何故階級概念の決定に算入しなかつたのであらう乎。

（マルクスの見解を叙述せる部分はすべてツガンバラノウスキー著「マルクス主義の理論的基礎」に依る）

勞働運動リーダー論

——指導を斥けることの不條理を論ず——

生田長江

改めて説くまでもなく、人間は孤獨に生きて行かれるものでない。社會的生活をなくした彼は、臍帶を斷たれた胎兒にもひとしい。

求道者の往々にして山に隱れるのは、やがて大に近づかんが爲めに、暫く人間を遠かるのである。もしくは形に於てこれを疎んじ、心に於てこれを親んでゐるのである。

或は、思想家としても、その社會から沒交渉に思想してゐるのは、その時代の潮流から取殘された思想へ、後生大事に取縋つてゐるのは結局本當に生きてゐるのでない。生きながら既に死んでゐるのである。

しかしながら、かくの如き思想家とは全然種類を異にした、むしろ正反對とも云ふべき時代錯誤の思想家もあることを知らなければならぬ。時代の潮流に對して、尋常人よりも遙かに敏感なるが故に、ひとり先んじて次ぎの時代へはいつて行くところの、卽ちフリイドリツヒ・ニイチェの言葉遣ひに於ける如き『季節はづれの考察』をのみなすところの思想家もあることを知らなければならぬ。

尋常人と共にその時代を生きた上に、更に進んで來るべき時代をも生きてゐるところの敏感者が、その時代にすら追ひつくことの出來ない、その時代にすら生きてゐないところの鈍感者と取違へられる——これより遺憾なる事はない。

近頃、社會問題勞働問題などの提供解決に主力を傾注しようとしてゐる新聞雜誌類を見てゐると、勞働運動に若しくは勞働團體に一切の指導者を無用とし、有害として斥けるやうな傾向がかなり廣い範圍に亘つて、まだかなり進んだ頭をもつてゐる人々の間に、侮りがたき勢力を獲て來てゐるやうである。

の欲求なりとの意識を以て抱く觀念これである。此觀念上の對象に當面する時、人は何づれも羊の如く從順となるの外はない。蓋し之れに反抗するは、自己一人を以て全成員に反抗する事になると思惟するからである。

右の觀念は、其内容が錯誤に出づる場合と雖も、換言すれば社會の全成員が事實に於ては斯樣な欲求を抱いて居らぬ場合と雖も、實際抱いてゐるやうに各人の主觀に意識さるゝ時は、斯る欲求が事實に於て存する場合と同一の壓力を以て各人を屈從せしめるのである。之れは丁度、お伽噺に出て來る馬鹿王樣の家來達に於けると同一の心理である。王樣は裸體にて坐し我衣は不忠の臣の目には見えないと云ふ。群臣一人として王の衣を見ないが、誰れも彼れも見えるやうな顏付をしてゐるので、みな自分ばかりが見えないものと思込み謹んで王の衣の美しきを讃美したと云ふ。社會意識も亦斯種の嘘から出た眞たる場合が多い。我々は之れを。社會意識の魔術性と呼ぶ。

社會意識が全成員の組織ある批判力に投影せらるゝ時、玆に始めて權力となるのである。而して曩に說ける如く、階級成立の基礎たる支配及び搾取の存續し得る所以は、優勝團體が此權力に支持さるゝ物理力を行使する結果に外ならぬ。

されば、支配團體と被支配團體、搾取團體と被搾取團體とが斯る權力に依つて統一された同一社會內に於て對立するる限り、それらの團體は決して階級的に對立するものとは云へない。英吉利の支配者は日本の被支配者に對しては階級たらず日本の資本家は佛蘭西の勞働者に對しては階級を構成しないのである。

總ての階級鬪爭は其根底に於て政治的鬪爭であると解したマルクスが、階級概念の決定に於て斯る重大の一要素を見逃がした事は驚くべき錯誤と云はねばならぬ。なぜならば、彼等が階級鬪爭を政治的鬪爭と解したのは、國家は階級支配の一器官であり、而して被搾取階級はたゞ政治的革命に依つてのみ自己を解放し得ると信じたればこそである。階級支配の存立上かくも重要なる國家を、彼れは何故階級概念の決定に算入しなかつたのであらう乎。

（マルクスの見解を叙述せる部分はすべてツガンバラノウスキー著「マルクス主義の理論的基礎」に依る）

勞働運動リーダー論

――指導を斥けることの不條理を論ず――

生田長江

改めて說くまでもなく、人間は單獨に生きて行かれるものでない。社會的生活をなくした彼は、臍緒を斷たれた胎兒にもひとしい。

求道者の往々にして山に隱れるのは、やがて大に近つかんが爲めに、暫く人間を遠かるのである。もしくは形に於てこれを疎んじ、心に於てこれを親んでゐるのである。

或は、思想家としても、その社會から沒交渉に思想してゐるのは、その時代の潮流から取殘された思想へ、後生大事に取縋つてゐるのは結局本當に生きてゐるのでない。生きながら既に死んでゐるのである。

しかしながら、かくの如き思想家とは全然種類を異にした、むしろ正反對とも云ふべき時代錯誤の思想家もあることを知らなければならぬ。時代の潮流に對して、尋常人よりも遙かに敏感なるが故に、ひとり先んじて次ぎの時代へはいつて行くところの、即ちフリイドリッヒ・ニイチェの言葉遣ひに於ける如き「季節はづれの考察」をのみなすところの思想家もあることを知らなければならぬ。

尋常人と共にその時代を生きた上に、更に進んで來るべき時代をも生きてゐるところの敏感者が、その時代にすら追ひつくことの出來ない、その時代にすら生きてゐないところの鈍感者と取違へられる――これより遺憾なる事はない。

近頃、社會問題勞働問題などの提供解決に主力を傾注しようとしてゐる新聞雜誌類を見てゐると、勞働運動に若しくは勞働團體に一切の指導者を無用とし、有害として斥けるやうな傾向がかなり廣い範圍に亙つて、まだかなり進んだ頭をもつてゐる人々の間に、侮りがたき勢力を獲て來てゐるやうである。

尋常人より鈍感でも敏感でもないヂアーナリストとしては、單に斯うした傾向を注目したり指摘したりするだけでも足りるであらう。斯うした傾向を無批判に迎合したり、謳歌したりするなぞは、大に大向ふ連の拍手喝采を博する所以であるかも知れない。

しかし、現代に生きると共に次ぎの時代にも生きてゐる批評家としては輕卒なる一部の讀者からして、時勢後れの考を述べてゐると誤解されることの危險を冒してさへも、『指導者然として』もしくは『指導顔をして』ゐたりゐさせたりするのが何故に惡いか、何故に惡くないかの問題を、自由に、大膽に、傍若無人に取扱つて見なければならないのである。

勞働運動をかりに所謂勞働者の團體運動といふほどの狹い意味に限定してもよい。そのまた團體を、どれほど嚴密に職業の種類を一にしてゐるものの意味に取つてもよい。

その團體の各員が人間として、あたかも一の型にはめて造り出したかの如く、全然同樣の性質、能力、才分等を賦與されてゐるといふのは、所詮あり得べからざる事に屬する。彼等の長所はその短所と共に彼等の面貌の悉く相異つてゐる如く相異つてゐる。

團體の各員にしてそれ〴〵に相異れる長所を有つてゐるとしたならば、如何に彼等が共同目的の下に相結んでゐるにもせよその目的を實現する爲めの相互扶助に於て、それ〴〵に相異れる努力をささげ合ふべきは、極めて當然なる事ではないか。

即ち、階級戰の實際に於ても、例へは特に法律上知識を有する者がその知識を以て、特に財界の消息に通じてゐる者がその洞察を以て、特に言論機關を利用することに經驗ある者がその經驗を以てする如く、それぞれに相異れる方面から、相異れる貢献をなして行くといふのに、何の怪むべき事があらうか。

ところで斯樣なる場合、或る種類の貢献を特に重要視するならば、その種類の貢献をなすところの者は、自からにして共同體內に於ける特に重要なる人物となる。所謂中心人物となる。團體の全的活動が彼を中心としてなされてゐるかの如き觀を呈して來る。

所謂中心人物となつてゐるとは團體の全的活動を、支配してゐるかの如き觀を呈してゐるのは、彼自らが意識してゐるゐないに係らず、彼自らが希望してゐるゐないに係はらず、所謂指導者の地位に立つてゐることの事實にほかならないではないか。

かりに今日の團體的勞働運動に於て、何よりも先づ、法律上經濟上知識を有してゐることと、歐米に於ける勞働運動の歴史に

通じてゐること、言論機關を利用する上の才分又は經驗をもつてゐることなどが、最も重要なる貢獻を生み出すものとされてゐるならば、特にそれらの知識、才分、經驗等を豊富に所有してゐるところの人物が、その團體の中心人物になり、從つて所謂指導者になるといふのに何の不都合な事があるであらうか。

資本家との肉迫戰に於て、最も先づ、最も屢々、敵陣からの砲彈に見舞はれるのは、各種の一時的及び持續的團結に中心人物となり、指導者となつてゐるところの勞働者である。

ところでそれらの勞働者がくびきられて、同一場所の、又は同一職業の勞働者でなくなつた場合（時としては、普通の勞働者とは非常に遠いものにさへなつた場合）、その團結なり團體なりから、永久に彼等を送り出してしまはねばならないとしたらそれはどんなに馬鹿々々しい、どんなに忍び難い損失であらうぞ。

さうした場合、彼等が少くともその團體に對する客員としてでも、援助者としてでも、在來の貢獻を持續して行き、その指導者的地位を棄てないで行つたとする。或は行かせたとする。それに伴ひ易い弊害の如何は暫く措く。その事自體に何の不都合があらうか。寧ろ當然さうあるべき事柄ではなからうか。

既に同一場所の、又は同一職業の勞働者でなくなつたが故に或る勞働團體に一員たることの正面的資格をなくしたところの人物であつても、尚ほ且つその團體の指導者となり、またならしめて、何等の不都合もないものとする。

さらば何が故に一歩を進めて、未だ同一場所の、又は同一職業の勞働者でない、けれどもその團體の根本精神に共鳴して居り、その目的の實現に必要なる力量手腕等を備へて居るところの人物を迎へ、彼の、彼等の指導を仰いで進退するといふの同じく當然の事であるとは云へないであらうか。何が故にさは云へないであらうか。

翻つて思ふに、個々の勞働團體なるものも、單にそれ自體の直接利益をのみ眼中に置いて存在すべきでない。それはより遠遠な利益を圖る爲めに、それを包括してゐるところより包括的な各種の團體へ奉仕する爲めに、最後には勞働階級全體の解放といふ大きな目的の爲めにも活動しなければならないのである。

そして斯うした方面の使命に重きを置いて考へれば考へるほど團體の内部に於て見出されるよりも、ずつとよい適當した、よい立派な指導者が、屢々團體の外部に於て見出されるといふのは、益々自然な事になつて來るではなからうか。

勞働運動は必ずしも、所謂勞働團體としての運動だけに限ら

るべきものでない。

一般に勞働階級に屬する人々が、彼等自身を今日の奴隷狀態より解放する爲めに、その解放に近づく爲めに、或は團體的に或は個人的になすところの各種の努力活動を、總括して勞働運動であるとする。

この場合、苟くも自ら勞働階級に屬して居り、その解放が自己の問題であることの自覺をもつて居る限り、何等かの傑出した手腕力量を有する人物が、その手腕力量をもつて勞働運動に自ら指導者たらんとするのは、もしくは指導者として遇せられるに至るのは、とり分け當然なる事であると思ふ。

原則的に云ふと、群衆の中の一人は、彼がたゞ獨りでゐた時よりも、より少く理性的に、より多く本能的になつてゐる。乃ち群衆の心理が動もすれば、外界からの理性の補足を、理性的指導を必要とするに至る所以である。

勞働運動の指導者が、彼自らのなまなかなる本能によつて、民衆を率ゐて行かうとすることの無用にして且つ有害なるは、考へられないこともない。

彼がその傑出したる理性的方面の才分に依つて、民衆をその正路に繋ぎ止めて行くことの權利と義務とは、恐らく何人からも承認されなければならない事であらう。

——大抵の場合に於て、指導される者の生々として本能が遠心力として働き、指導する者のしつかり練れきつた理性が求心力として働かねばならないのだから。

指導が主として理性的指導であるならば、所謂指導人物を知識階級から出す場合が多いといふのに、何の不思議もない筈である。

知識階級に屬する各種の勞働者等が、自ら勞働者であるといふことの自覺へはやばやと到達してくれないのを、待ち遠しがり歯がゆがつた人々の、彼等に對する侮蔑は、非難は、罵倒は決して理由のないものであるとは云へなかつた。

けれども、それらの知識階級に屬する勞働者等か、自ら勞働者であるといふことの十分なる自覺へ到達して、徐に階級戰に參加し、また時にはその陣頭に立つて進まうとする時、彼等が自分達ほどに『勞働者』らしくなく、自分達ほどに純粹の『勞働者』でないとふやうな偏見の下に、動もすれば彼等を疎外したり排斥したりするところの一部の勞働者等の態度は、どう考へて見ても理不盡である。

かくの如き理不盡なる態度をとるところの一部の勞働者等と彼等の歡心を買はうとする徒輩とが、勞働運動に指導者を要しないと高唱しながら、これに依つて體よく、知識階級に屬する

勞働者等との[illegible]しまらうとしてゐる（勿論大衆の場合無意識中意識的に）ことの事實を洞察して置きたい。

そしてかくの如き場合、[illegible]などとして[illegible]される一部の勞働者等の賤劣なる心情に對しても、我々は固よりあまりに峻嚴なる道德的批判を下さうとするものでない。ただ、さうした心情から生れた彼等のさまざまなる言動を、あまりに寛假して置き過ぎるのが全的勞働運動の進捗に對して、意外の障礙となり得べきことを思はずにゐられないのである。

自ら特に勞働者らしき勞働者を以て、特に純粹なる勞働者を以て任じてゐる一部の勞働者等は、知識階級に屬する勞働者等の觀察主張要求等を、無造作に机上の空論であると喝破し去らうとする。

彼等自身がその初め、それらの空論家のある者によつて覺醒され、啓發されたのであることを言つて、彼等の忘恩を云々するのはどうでもよい。

ただ、彼等が今日尚ほ、それらの空論家からして多くの學ぶべきものを有つてゐるにもかかはらず、既に自からを完全なる『卒業生』であるかの如く過信してゐることの愚かさ、あぶなつかしさを思ふだけである。

更に彼等の理由なき己惚と輕蔑とは、第一の戰線に立てる士卒等が、彼方の司令部などに對して往々反目するところの、かの笑ふべき自惚と輕蔑とに比してもよい。

勞働運動は所謂指導者の[illegible]ることを認容するのは、勞働者階級が〇〇〇〇となり得た暁に於て、その〇〇階級を〇〇するところのより支配者階級の生ずることを認容するものにほかならないと、一部の人々は言つてゐる。

成程それはさうかも知れない。

しかしながら、所謂〇〇〇〇〇〇となつた暁に於て、特に有力なる小數勞働者等が、より〇〇〇〇な地位を占めるといふのは、甚だ自然な事であり、また極めて當然な事ではないか。そして二者の對立が、だん／＼著しいものになつて行き、遂には一方をあまりに奴隷的なものにし、他方をあまりに奴隷所有者的なものにするやうになつた時、その時はまたその時の解放運動を要求されるだけの事ではないか。

曾つて第三階級の勃興した時、その指導的人物として階級戰に從つた有力者等は、〇〇〇〇〇〇となつた暁に於て、その階級を新しく〇〇るところのより〇〇的な地位を占めて見せたではないか。そして其二者の對立がだん／＼と著しいものになつて來て、遂には一方が今日の如きプロレタリア階級となり、他方が今日の如きブルヂョア階級となつた時、その時はじめ

るべきものでない。

一般に勞働階級に屬する人々が、彼等自身を今日の奴隷狀態より解放する爲めに、その解放に近づく爲めに、或は團體的に或は個人的になすところの各種の努力活動を、總括して勞働運動であるとする。

この場合、荀くも自ら勞働階級に屬して居り、その解放が自己の問題であることの自覺をもつて居る限り、何等かの傑出した手腕力量を有する人物が、その手腕力量をもつて勞働運動に自ら指導者たらんとするのは、もしくは指導者として遇せられるに至るのは、とり分け當然なる事であると思ふ。

原則的に云ふと、群衆の中の一人は、彼がたゞ獨りでゐた時よりも、より少く理性的に、より多く本能的になつてゐる。乃ち群衆の心理が動もすれば、外界からの理性の補足を、理性的指導を必要とするに至る所以である。

勞働運動の指導者が、彼自らのなまなかなる本能によつて、民衆を率ゐて行かうとすることの無用にして且つ有害なるは、考へられないこともない。

彼がその傑出したる理性的方面の才分に依つて、民衆をその正路に繋ぎ止めて行くことの權利と義務とは、恐らく何人からも承認されなければならない事であらう。

——大抵の場合に於て、指導される者の生々として本能心力として働き、指導する者のしつかり練れきつた理性が求心力として働かねばならないのだから。

指導が主として理性的指導であるならば、所謂指導人物を知識階級から出す場合が多いといふのに、何の不思議もない筈である。

知識階級に屬する各種の勞働者等が、自ら勞働者であるといふことの自覺へはやばやと到達してくれないのを、待ち遠しがり齒がゆがつた人々の、彼等に對する侮蔑は、非難は、罵倒は決して理由のないものであるとは云へなかつた。

けれども、それらの知識階級に屬する勞働者等か、自ら勞働者であるといふことの十分なる自覺へ到達して、徐に階級戰に參加し、また時にはその陣頭に立つて進まうとする時、彼等が自分達ほどに『勞働者』らしくなく、自分達ほどに純粹の『勞働者』でないとふやうな偏見の下に、動もすれば彼等を疎外したり排斥したりするところの一部の勞働者等の態度は、どう考へて見ても理不盡である。

かくの如き理不盡なる態度をとるところの一部の勞働者等ど彼等の歡心を買はうとする徒輩とが、勞働運動に指導者を要しないと高唱しながら、これに依つて體よく、知識階級に屬する

勞働者等との提携の忌避し去らうとしてゐる（勿論大抵の場合無意識乍意識的に）ことの事實を洞察して置きたい。

そしてかくの如き場合、羨望嫉妬などとして暴露される一部の勞働者等の陵劣なる心情に對しても、我々は固よりあまりに峻嚴なる道德的批判を下さうとするものでない。ただ、さうした心情から生れた彼等のさまざまなる言動を、あまりに寬假して置き過ぎるのが全的勞働運動の進轉に對して、意外の障礙となり得べきことを思はずにゐられないのである。

自ら特に勞働者らしき勞働者を以て、特に純粹なる勞働者を以て任じてゐる一部の勞働者等は、知識階級に屬する勞働者等の觀察主張要求等を、無造作に机上の空論であると喝破し去らうとする。

彼等自身がその初め、それらの空論家のある者によつて覺醒され、啓發されたのであることを言つて、彼等の忘恩を云々するのはどうでもよい。

ただ、彼等が今日猶ほ、それらの空論家からして多くの學ぶべきものを有つてゐるにもかかはらず、既に自からを完全なる「卒業生」であるかの如く過信してゐることの愚かさ、あぶなつかしさを思ふだけである。

更に彼等の理由なき己惚と輕蔑とは、第一の戰線に立てる士卒等が、後方の司令參謀などに對して往々經驗するところの、かの笑ふべき自惚と輕蔑とに比してもよい。

勞働運動は所謂指導者のあることを默容するのは、勞働者階級が○○○となり得た曉に於て、その○○階級を○○するところのより支配者階級の生ずることを認容するものにほかならないと、一部の人々は言つてゐる。

成程それはさうかも知れない。

しかしながら、所謂○○○○○となつた曉に於て、特に有力なる小數勞働者等が、より○○○な地位を占めるといふのは、甚だ自然な事であり、また極めて當然な事ではないか。そして二者の對立が、だん／＼著しいものになつて行き、遂には一方をあまりに奴隷的なものにし、他方をあまりに奴隷所有者的なものにするやうになつた時、その時はまたその時の解放運動を要求されるだけの事ではないか。

曾つて第三階級の勃興した時、その指導的人物として階級戰に從つた有力者等は、○○○○○○となつた曉に於て、その階級を新しく○○るところのより○○的な地位を占めて見せたではないか。そして其二者の對立がだん／＼と著しいものになつて來て、遂には一方が今日の如きブルヂョア階級となり、他方が今日の如きプロレタリア階級となつた時、その時は

て今日の如き解放運動を要求され出したのではないか。

私のこれまで機會ある度毎に指摘して置いた如く、今日の世界全體を通じて、資本家階級と勞働者階級との對立が、マルクス派學者等の所謂搾掠的階級と被搾掠階級との對立が、文化史的に如何ほど重要なる意義をもつてゐるにもせよ、又此對立の事實及び事實を招致したところの原因を明らかにすべく努力した點に於て、マルクス派學者等の貢獻がどれほど尊敬すべきものであるにもせよ、たゞに近代のみならず、過去の如何なる時代にあつても、資本家對勞働者の如き經濟的階級別があつたと說き、しかもさうした經濟的階級別が常に最も重要なものであつたやうに、否殆んど唯一のものでさへもあつたやうに言ひ做すのは、マルクス派學者等の誇張であると思ふ。

なぜと云つて、過去のある時代には明白に、宗教上特權を有するものと有しないものとの對立が、今日の資本家と勞働者との對立に讓らないほどの、重要なる意義をもつた階級別であつた。卽ち、當時豫言の能力を有するもの、魔法巫術をよくするものなどは、一般人に對する立派な支配階級權力階級であり得たのである。

また過去の或る時代には明白に、武力を有するものと有しないものとの對立が、今日の資本家と勞働者との對立にも讓らないほどの重要なる意義をもつた階級別であつた。卽ち當時弓矢をとつて一騎當千の實力あるものなぞは、百姓町人共に對する支配階級權力階級の中に、しかも取分け大なる特權をもつてゐたものである。

所謂近代的資本主義經濟組織の出來上るに至らないでゐる過去のあらゆる時代にまで溯つて、經濟的階級鬪爭觀の適用を重要視せんとするのが、マルクス派學者等の意識的或は無意識的誇張であると見る私は、他面また彼等が資本主義組織の解體と共に、一切の階級的差別も鬪爭も消滅するもののやうに考へてゐるのを、餘りにも理想派な考へ方であると言ひたいのである。

なぜと云つて、無限に遠い昔からして人類の歷史を支配して來たやうな一大原理が、二十世紀の初年に於て、晩くとも其中葉に於て、絕對に其作用を停止するものと考へる如きは、餘りにも科學的可能性及び蓋然性を無視したものであり、基督再來說にも讓らないほどのお伽噺じみたものであるからである。

無限に遠い過去からして存在してゐた階級鬪爭は、當然また無限に遠い將來にまで存在し續けるであらう。私共はどうしても斯様に考へざるを得ないのである。

しかし乍ら、階級を差別するところの標準は、並びにその階

級闘争を特色づけるところの方法手段等は、時代と共に限りなく推移して來て居り、また限りなく推移して行くべきものであらう。私共はどうしても斯様に考へざるを得ないのである。

例へば、現在の資本主義制度が解體してしまつたとする。その場合、資本家對勞働者の階級闘争が跡を絶つてゐるのは言ふまでもない。そして、その限りに於て現在よりもより善き社會になつてゐるのである。

けれども、資本家對勞働者の階級差別が跡を絶ちつゝあつた時、夙くも已に他の何等かの新しき階級的差別の發生しはじめてゐたことをも想像しなければならぬ。そしてそれから後の人々にとつては　その新しき階級的差別が追々に新しき重荷になつて來べきことと、その新しき問題が結局また新しき階級闘争によつてのみ解決さるべきことをも想像しなければならぬ。

これを我々はどうすることも出來ないのである。

階級闘争としての勞働運動は、結局今日の階級別を徹廢し去らうとする運動であり、從つて現代の社會組織を根本的に改造しようとする運動である。

ところで現代の社會組織を根本的に改造することによつてはじめて救はれるのは、單に勞働者階級に屬するところの人類はからうであらうか。換言すれば、資本家階級に屬するところの人類もまた同樣に、現代社會の〇〇〇〇に、痛ましき犧牲者とされてゐるのではないかどうか。

此問題に就いて、私よりさきに、私より以上の卓拔なる意見を陳べた人のあるかないかは知らない。少くとも私ほど熱心に執拗に、また精細に觀察しつづけて來てゐる人は、たしかに一人もないやうである。

その私が、殆んど何等の反響をも見出さないのに係はらず、これまで幾度となく反覆して來てゐるところのものを、今一度簡潔に反復することを許して貰ふならば、今日勞働者は惡しき勞働をのみ強いられて居り、惡しき生活資料をさへ十分に與へられて居らない點に於て、資本家は惡しき勞働をさへ爲すことの機會を有つて居らず、惡しき生活資料をのみ十分過ぎるほど與へられて居る點に於て、共にともに同一の、横暴殘虐なる資本主義經濟組織の鐵鎖にいましめられたる奴隷的存在である。此儘に放置すれば、所謂肉體的にも精神的にも、結局は同一の敗滅に終るべき人間である。

從つて、現代の社會組織を根本的に改造せんとする運動は、單に勞働者階級の爲めになされねばならないのみならず、資本家階級の爲めにもまたなされねばならないものなのである。そして共自覺の下に奮起して、右の運動に參加しようとするとこ

ろの資本家階級の何人かがあつたとする。

その場合、彼等が彼等自身に都合よき破壞と建設との方へその改造運動を導いて行かうとするのは、勞働者階級の或る者が彼等自身有利なる破壞と建設との方へその改造運動を導いて行かうとするのと同様、その當然の義務でもありまた權利でもあるだらう。

偖て勞働運動の徹底したものが、一般的根本改造の運動であるとしたならば、また直接になり間接になり、その運動を自らの欲する方向へ引き寄せたり押しやつたりするのが、總じて指導であるとしたならば、資本家階級の中からさへ勞働運動の指導者——十分なる自覺と善き良心とをもつた——は出て來ることを許されるのである。加之、出て來なければならないのである。

以上述べ來つた如く、勞働運動を如何に狹義のものに限つて見ても、如何に廣義のものに解釋して見ても、これに指導者を要しないと云ひ、指導者があつてはならぬと云ふやうな理屈にならない。

そして勞働運動を最も廣い意味にとつた場合、最も重要なる指導者とならなければならないものは藝術家である。藝術家的人物である。

なぜと云つて、殆んどすべての勞働が器械化された勞働であり、没個性的の勞働である現在の社會に於て、僅かに除外例的に人間らしき勞働を個性的勞働を爲しつつあるのは、少くとも爲さんとして苦んでゐるのは藝術家であり、藝術家的人物であるから。そしてそれ故に、藝術家もしくは藝術家的人物だけが來るべき新社會の生活を、今日已に見本的に生活してゐるのだから。

藝術家は今日已に次ぎの時代を生活してゐる點に於て非常に幸福であり、さうした生活を今日の時代に適應させようとすることの無理算段に於て此上もなく不幸である。

彼等はその幸福を羨望されると共に、その不幸を憫察されなければならぬ。

社會の根本的改造に於て、藝術家が最も重要なる指導人物とならねばならぬといふこと、換言すれば來るべき新社會の一員的生活を、見本的に預示してゐないやうな者が、所詮本當の藝術家であり得ないといふことなどに就いては、更に他日の機會を利用して、より念入りに論證し説明して見たいと思つてゐる。

世界民の愉悦と悲哀

京大講師　恒藤恭

一

私は生まれ落ちると同時に『日本國民』とされた。

生まれ落ちた刹那に、私自身の意識の裡に意志のはたらきと名狀し得るやうなものが微塵も無かつたことは、恐らく疑ひを容れない事實だ。だから私は生まれ落ちると同時に日本國民となつたと言はないで、日本國民とされたと言ひ度いのだ。

私の母とても別に私を日本國民にする目的で私を生んで呉れたのでないことは確かだ。それでは一體私は何者によつて日本國民とされたのだらう？　斯う云ふ子供じみた疑問に向つて解答をあたへて呉れるおせつかいな人間がある。その名を法律學者と謂ふ。――『汝は日本帝國の法律によつて日本國民とされたのだ』と。彼れ法律學者は雜作もなく答へるであらう。

孰れにせよ、私が日本國民といふ名義を有つに至つたのは、私の自由な意志に基くのではなくて、私にとつては單なる偶然の事實に因るのである。何故と云ふに、私の意志の欲求した結果として發生したところの事實だけが、『私にとつての必然』の心證に參かり得るからである。その他の一切の事實はおしなべて偶然性の塵溜の中に掃き捨てられてしまふ外はない。その點から考へると、私が日本國民とされたといふことは、私の生まれた日に偶々つめたい小雨が降つてゐたと云ふやうなことと同樣に、私にとつては何等の必然性をも意味するものではない。

社會契約說に共鳴を感じてゐる國家哲學者が斯樣な私の言を聞いたならば、『汝は現在日本國民の一人たることを自覺してゐるではないか、その自覺が嘗つて汝の意識のうちに現れたとき以來汝が日本國民たることは、汝の論理から考へても、最早汝にとつて單なる偶然の事實ではなくて、否定す可からざる必然の事實となつたのだ』と私を詰るであらう。それに對して私は敢て異議を申し立てようとも思はないが、それかと云つて、私が生まれ落ちると共に日本國民とされたのは、私にとつては全く偶然の事實に過ぎないといふ私の主張を撤回する必要があらう

とは毛頭考へない。私が滿二歲二日本國民とされて後、日本國民たる自己を承認するに至つたまでには、時間の上に於いて著しい間隔が介在してゐる。此の時間の距たりを、國家哲學者は單なる時間の經過量として論理的に無視さるべきものと看做すかも知れないが、現實の人間としての私にとつては、此の時間の距たりには忘れることの能きない貴重な意味が結び付けられてゐるのだ。寧ろ私の論理においては、此の時間の距りこそは、幾多の結論を生み出す可き力を具へた儼然たる前提なのだ。『全體の自己を國家に向つて捧げよ、全き自由は其處から生まれる』と教へる社會契約說の論理と、『自己のその他のあらゆる部分は、國家のために讓渡することも敢て辭する所でない、だが自己を自己たらしめる自己の本質的部分は、自己自らのために、世界民たる自己のために、完全に留保して置かねばならぬ』と主張する私の論理との逕庭は、畢竟右の時間の距たりを非論理的な與件として簡單に無視してしまふ態度と、それを飽くまでも論理の過程において固執して已まない態度との相違に歸するのかも知れない。兎に角私を日本國民としたものは、私の意志以外の或るものだといふことは確實だ。

此の或るものは、法律學者の見解に從へば、日本帝國の法律である。——ところが、如何なる法律學者に訊ねて見ても、人が生まれ落ちる瞬間に彼れを『世界民』とする法律が有るとは答へない。事實私は日本國民としてのいろ〳〵の義務の履行を數へ切れないほど度々請求されたことはあるけれど、世界民としての義務の履行を強要された覺えは唯の一度もない。だから私を世界民にした法律は何處にも無いと斷言しても差支へないだらう。それだのに、私は世界民と爲つてゐる——少くとも自分ではさう思つて居る。そして世界民としての愉悅も經驗すれば、世界民としての悲哀も經驗する。して見ると、私が世界民であることは、私にとつては何等の偶然の事實にも基くものではなく最初から必然な事實に基くものと言はねばなるまい。なぜと言ふと、私に斯う云ふ名義をさづける力のあるものは、法律の外には私自身の意志があるばかりだから。そして私自身の意志は私にとつての一切の必然性の源泉なのだから。勿論、生を此の世界に享けたことは、私にとつて偶然性の至大な事實であるかも知れない。それにも拘らず、私が世界民となつたことは、私にとつて必然過ぎるほど必然な事實であると私は斷定する。それは矛盾だと冷笑する人があるなら、私はその評言を無條件に甘受するであらう。斯かる體驗をしも矛盾として排し去るならば、私の生きてゐる事實を意味づける唯一の索緣は永久に喪はれてしまふだらうから。

そこで私は獨りさけぶ。私にとつての必然は、私の意志にとつての眞實の自由である。だから世界民としての私は、自由民としての私だ、そして私は自由が好きだ、誰れが何と言つても好きだ。

世界民としての私の愉悦は、斯うして既に私が世界民となつた瞬間から約束されてゐるわけだ。

二

世界民はユトピアの民ではない。

ユトピアには時間は有るが歴史はない。そこでは初めが終りであり、終りが初めであつて、初めと終りとの中間はない。然るに世界民の生きてゐる世界は歴史の世界だ。此處ではあらゆる瞬間が變化であり發展であつて、一度び失はれた瞬間は永久に回り來る機會を有つてゐない。だから世界民は此の今の瞬間を何時でも問題として居なければならぬのだ。

ユトピアでは一切の現實がその儘理想であり、一切の理想が直ちに現實である。充されない願ひもなければ、酬いられない愛もない。それだからユトピアの民は悦樂は知つてゐるけれど、悲痛は知らない。恐らく彼れらはさうした悦樂に退屈してゐるだらうと思はれるけれど、彼れらにとつてはどんな退屈さも決して不平の種にはならぬらしい。それとは違つて世界民の感情はつねに揺いてゐる。彼れらは何よりも與へられた現實に執着を有つてゐる。現實をいとほしむ心が深いだけに、現實をより良くしたいと云ふ希望が、彼れらの胸に一杯にあふれてゐる。そこで現實のかげに僅かでも理想が姿を見せると、世界民はぢきに抑へ切れぬよろこびに涙ぐんでしまふ位である。だがそんな場合はどちらかと言ふと例外なのであつて、此の世界は何處まで世界民の願うてゐる方向とは反對の方向へ進んで行くのかしらと疑はれるほど、世界民の理想なんかには頓着なく歩みを運ばせるのが通常の有様だ。で陰慘たる顏色のうちに懐疑家めいた哀愁の表情を漂はせながら默り込んでゐるのが、屡々見受ける世界民のポーズなのである。

世界民がユトピアの民でない證據には、彼れは何處かの國家に籍を置いてゐる、例へばイギリスの國籍に、スペインの國籍に、ドイツの國籍に。つまり世界民は同時に或はイギリスの國民でもあり、或はスペインの國民でもあり、或はドイツの國民でもあるわけだ。尤も世界民はそれを單純な符牒と心得てゐる。マルクスは共産黨宣言の中で『勞働者には祖國が無い』と述べてゐるが、その心持はやがて世界民の心持なのだ。國民たると同時に世界民でないところの人間にとつては、彼れが若し日本國民であるならば、自ら以て日本國民と稱することが無限

の誇りであり、誤つて暹羅國民とでも呼ばれやうものなら、大層な恥辱を受けたかのやうに憤慨したりする。アメリカ國民、ポーランド國民、支那國民、某國民、々々々が、それ〴〵斯うした衿持をその國籍名に結び付けて有つてゐる。それは世界民が廃つて拋擲した衿持である。太陽は四六時中何處かしら世界の表面を照明してゐる。だから『自分の國の領土には太陽の沒する時がない』と謂ふイギリス人の自負心の如きは、世界民の唾棄する所だ。世界民には國境がない。世界のあらゆる部分は世界民のための共同の財産であるべき筈だ。同じやうに『すべての國の上にドイツ國を』打ち建てやうと願つたドイツ人の曾つての努力は、世界民にとつては全然無意味な努力であつた。近代においてフランスはすべての文化運動の先驅を爲した。そこでフランス人はほこらしく眼を輝かせて語るであらう、『フランス人を除いた總ての他の國の國民たちは二つの祖國を有つてゐる。その一つは彼れら自身の祖國であり、今一つはわれらのフランスである』と。ところが世界民は謂はゆる『彼れら自身の祖國』を持ち合せてゐないから、フランス人と一しよにフランスの文化においてat home に感ぜざるを得ないわけだ。むかしの支那人にとつては彼れら自身の祖國は世界の『中華』であり、殘の國々の人間はおしなべて夷狄であつたけれど、世界民の眼に映る人間は一人殘さず中華の民である。尤も世界民はユトピアの民のやうに歴史の無い時間の中に生活してゐるものでないから、歴史によつて形成された現實を無視してはならぬこと、否十分それを利用せねばならぬことをよく合點してゐる。だから國家といふ歴史的産物も、世界民にとつては彼れらの理想を實現するための大切な便利な手段の一つなのだ。世界民が同時にいづれかの國家の籍を有つてゐるのも其のためである。或る會に籍を置いてゐないと、或る音樂者たちの手によつて行はれるコンサートを聽くことが能きないとしたら、そのコンサートに興味を有つ者は、兎も角もその會の會員になつて置くだらう。世界民がいづれかの國家の籍を有つてゐるのも同じ樣な必要からである。從つてそれがどの國家の籍であるかと言ふことは、彼にとつては第四次の問題であつて、決して第一次、第二次の問題ではない。尤も世界民は彼れを取り卷く一切の現實に對して絕つ能はざる愛執のこゝろを抱いてゐるから、彼れが某國家に屬してゐることが第四次の問題だからと云つて、その事實に全然價値をみとめぬわけではなく、寧ろ彼れ自身は、その事實に對して最も正當な價値判斷を加へてゐるとさへ信じてゐる。そして彼は彼れの屬してる國家を愛する。彼れは彼れの使つてゐるペン軸に對してすらも、それの有つてゐる『存在』を

なつかしく思ふのだから。唯世界民は彼れの籍を置いてゐる國家と同じ國家に屬してゐる人々の大多數と一しよになつて、國家その者に對し、目的自體としての價値をみとめる心になることは到底能きないのだ。それは世界民のよろこびでもあれば、哀しみでもある。

三

一切の人間は世界民の友だちであり、同胞であるけれど、彼れらは悉く世界民たるものではない。人間を國民とする法律はあるが、世界民とする法律はない。人間を世界民とするものは、人間自身があるのみだ、人間自身の自覺があるのみだ。

自覺とは人間が自己自らのうちに自己の本質を見出す心のはたらきを指す。世界民の考へ方から言へば、人間が自己自らの内面に深く沈潜して、自己をして人間たらしめる至醇の本質をすつかり把握する刹那に、世界民としての彼れの生涯は始まるのだ。だから人間が眞實の自我にめざめるとき、彼れは自らを世界民として彼れの意識のうちの民籍に登錄するのであると、世界民は自ら省みて證言するのである。

與へられた自己は人間の一人である。本質的な自己は、此の與へられた自己と同じものではないが、あたへられた自己と絕緣すると共に、それは最早如何なる自己でもなくなつてしまふ。だから一個の人間としての自己に、みづからの存立を託するこ とは、本質的な自己の守らねばならぬ第一の約束である。この約束には更に必然に第二、第三の約束がつながつてゐる。本質的な自己は、既に與へられた自己にみづからの存立を託してゐることを肯定する以上、他の本質的な自己がやはり他のあたへられた自己にみづからの存立を託してゐる事實を承認しなければならぬ。そこで本質的な自己は、みづからの存立の支持者たる與へられた自己を愛護し尊重すると同樣に、おなじ務めを盡すところの他の一切のあたへられた自己をも、ひとしく愛護しひとしく尊重すべき筈である。これが第二の約束である。各人の自我の本質は、各人の生存と努力との全意義の源泉なのであるから、能きるだけ保存され發展されなければならぬ、そのためには、一方には本質的な自己の保存發展を礙害する一切の非本質的なものを征服することが能きるやう、あらゆる與へられた自已が互ひに協力することが必要であり、他方にはあたへられた自己が單獨では成就し得ない事柄を、他のあたへられた自己と協力して成就することにより、それぞれの自己の本質が深められ、擴大され、豐かにされて行く機會を獲得することが必要である。だから各個の本質的な自己は、みづからを支へてゐる所の與へられた自己を率ゐて、共同の使命を全く統一ある目的

體系に參加しなければならぬ。此れが本質的な自己のまもるべき第三の約束なのだ。現實にあたへられた一つ一つの自己が存在する限り、此の目的の體系は何處までもその範域を延長す可き筈であり、或は人種性の共通とか、或は民族性の共通とか、或は同一國家に對する共屬關係とか、或は宗教的信仰の同一性とかを標準として、その範圍が局限さるべき何等の理由もない。斯かる局限された範域の上に立つ目的の體系內に嵌入されることを以て滿足する者があるならば、それは自己の本質にめざめた人間の本領から遙かに遠ざかつた態度だと言はねばならぬ。偶然的標準による目的の體系の範域の局限は、やがてその中に在る各個の自己の不當な拘束であつて、そこには人間の享くべき眞實の愉しい自由のやどりがは剩されてゐないのだから、自由の熱愛者たる世界民は、かの窮屈な體系の中に囚はれてゐる數知れない人間の運命のために、ひそかに淚をそゝいで已まない。

あらゆる本質的な自己に課せられる以上のやうな必然的約束の內容を檢べてみたら、此れらの約束が忠實に履行され得るためには、あたへられた各々の自己が、世界民としての立場にみづからを置く外はないと云ふことが會得されるであらう。人間がほんとうに自覺するとき、卽ち自己みづからの裡に自己の本質を見出すとき、世界民としての彼れの生涯が始まると世界民が信じてゐるのは、かうした事情に基くのだ。ささやかな自己の存在すらも、一切の自己を包容する力のある絕大な目的の體系の一成分を支へてゐるのだと云ふことの認證は、なんといふ限りない悅びの體驗だらう、とは言ふものの、あたへられた自己の微力さと不純さとをかへりみ、おなじやうな微力さと不純さとを、數知れぬ他の自己に於いてみとめ、そしてかの壯麗な體系の實現を阻礙するところの抵抗が如何に强大なものであるかに想ひ到るとき、世界民は絕望に似た嘆息のうめきを覺えず洩らすことである。

四

世界民には法律がない。そして高い權力の座に立つて世界民に命令する立法者もなければ、法律の條文をかざして彼れらをさばく裁判官もない。尤も世界民は同時に何處かの國家に籍を置いてゐる筈だから、その國家の民たる資格においては、法律の要求するところの租稅も納めれば、法律によつて定められた役人の仕事にも敬意をはらふ。世界民がユートピアの民に歸化しない限り、此れらの事柄は、已むを得ない事柄でもあれば、必要な事柄でもある。

世界民には法律がない。斯く言ふ場合に法律といふのは、人

間がこさへた法律のことである。法律學者が丹精に研究するところの法律、辯護士が巧みに利得の資本につかふところの法律がそれである。さうした法律を世界民は一つも有つてゐない。けれども世界民には如何なる意味での法律もないと云ふわけではない。心の趣くまゝに行動していさゝかも則を超えないと云つたやうな境涯は、世界民と雖も心ひそかに愉悦してゐる所だけれど、もとより彼れらの中にさうした至人の典型にかなつた者を求めることは殆んど不能だから、世界民にも何等かの意味での法律が必要だ。ところが世界民は立法者を有つてゐない。だから世界民にも法律があるとすれば、それは人間がこさへたのでない法律でなければならぬ。人間のこさへた法律を人定法と呼び、それに對して人間のこさへたのでない法律を自然法とよぶのがむかしの法律哲學者なり社會哲學者なりの慣はしであつた。それらの學者たちは、自然法といふ概念にいろいろの獨斷的な理論を結び付けた爲に批難を受けたのだがそれかと言つて、人間のこさへたのでない法律を自然法とよぶ慣はしを排斥する必要もあるまい。世界民の法律は人間がこさへたのでないとすれば、それを自然法と呼んでも差支へはなからう。それは一切のあたへられた自己を其れの支へてゐる本質的な自己と共に洩れなく包容せむとする所の目的の體系において、各個の自己に課せられる社會生活の普遍的規範である。世界民としての自覺に達するといふことの中には、だから必然に斯かる意味での自然法の認識をも含んでゐるわけだ。權力が個人に向つて命令するところでは、本質的な自己にとつての發展の自由は存在しない。自由の民たる世界民が權力の法律を有たないのは、當然至極の事柄だ。

自然法は世界民にさづけるに次のやうな根本的權利と根本的義務とを以つてする――一切の權力に對してすべての人類の自由と幸福とを確保せむことを要求し得る權利、一切の權力をしてすべての人類の自由と幸福とのために作用せしめるやう努力すべき義務。世界民の權利は大であるが、その負擔も洵に重いと言はねばならぬ。

あらゆる權力の中で最も強大なるもの、最も確固たる組織を具へてゐるものは國家である。だから世界民の權利は、何よりも先づ國家に向つてすべての人類の自由と幸福とを確保せむことを要求し得ることでなければならぬし、世界民の義務の主要なものは、國家をして斯かる要求に應じてすべての人類の利益のために活動せしめるやう、國家を指導することでなければならぬ。世界民がいづれかの國家に籍を置いてゐるのも、斯かる權利を維持するため、斯かる義務を實行するための方便と觀ら

べきだ。

客觀的には各人の自由と利益、主觀的には各人の個性と幸福——此れらのものを現實の社會生活において確保し增進する目的のためにのみ國家的權力は權力として存立することが許される。言を換へると、かやうな目的のためにのみ國家は個人の意志を拘束することを許される。自然法はこの限度を超えて國家が個人の意志を拘束することを肯んぜないし、國家の活動の效果がこの限度以下に停滯することを是認するものでもない。世界民は斯かる自然法の原則を把持しつつ、一切の國家の行動に對して、忌憚なき批判を加へむことを期する。

個人は、三重の關係において、自己の自由と幸福との尊重を國家に向つて要求し得なければならぬ。個人がAなる國家に屬するとき、彼れは先づAなる國家その者により、自己の自由と幸福とを尊重されねばならぬ、次に彼れはAなる國家以外の國家、即ちBなる國家、Cなる國家、Dなる國家、その他のすべての國家によつて、自己の自由と幸福とを直接に尊重されねばならぬ。第三に彼れはB、C、D、その他のすべての國家が、彼れの屬するAなる國家の自由と幸福とを尊重することにより、自己の自由と幸福とを間接に尊重すべきことを要求し得なければならぬ。

たとへば、個人の自由と幸福とを維持增進するための最も重要な條件たるべき生存權について考へて見る。世界民は、各國家がその國民の全員に對し、平等の生存權が確保すべきこと、換言すればその國民の全員をして平等に人間らしき生活をいとなみ得させるやうな社會組織を構成することを、自然法の權威によつて要求し、ある國家がこの要求にかなつた社會組織を設定しない限り、その國家の秩序を攻擊して止まぬであらう。次に世界民は各國家がその領土內に在る一切の他國民に對し自國民と平等なる生存權を確保すべきことを要求し、もしもある國家がその領土內に住んでゐる他國民の全部又は一部に向つて自國民と平等な生存權を認めることを拒む場合には、その國家の政策の非人道性を、鋭く攻擊することに努めるだらう。更に世界民はそれぞれの國家を構成してゐる國民の平均的生活程度が、能ふ限り同一の高さに近づき得るやう、各國家が相互に他の國家に對して必要な生活手段を補給し合ふべき義務を履行することを希望する。即ち各國家に屬する國民の全員が總體として、換言すれば國家の名において、他の國家に對し生存權を主張し得ることを、各國家が承認すべきことを要請する。この義務の履行をよろこばぬ國家に向つて、正義の敵といふ汚名を世界民はさづけるだらう。

現存の國家が殆んど悉く、以上の三重の關係において人類の生存權を無視してゐることは、世界民のかなしみ憤る所である。唯めづらしくもロシア國において其の例外を見むとすることとは、世界民の〇〇〇〇〇〇〇〇〇を點するものである。しかもそのロシアの國民たちが、正義人道の擁護者を以て任ずるイギリス、フランス、アメリカ、〇〇などの諸國家によつて、數年來右の第三の意味での〇〇〇〇〇〇〇て來たことは、世界民にとつてはいたましきアイロニイであると言ふの外はない。おなじやうな生存權蹂躪の殘虐な事實は、老幼男女をこぞつて饑餓に苦しんでゐるドイツ國民の場合について、まざ〱と見せ付けられる。戰爭にも、まさる大規模の殺人事業が、謂はゆる正義人道を愛する國家によつて最も組織的に最も冷靜に行はれつつある。世界民は一九二〇年時代において斯かる悲しい經驗をしやうとは思ひもかけなかつた。

更に民族自決權の例についてかんがへてみる。民族自決權は如何なる人間の法律によつても認められてゐない。國際法によつても、いづれの國家の國法によつても、それは世界民の法律、卽ち自然法のみがみとめる權利なのだ。自然法の要求によれば、國家は個人の自由と幸福の維持増進のために存立する。だから個人はいづれの國家によつて自己の自由と幸福とを確保さる可きであるかを自ら決すべき權利を有するものと言はねばならぬ。民族自決權は斯かる個人の自決權の歸結として當然生ずる權利である。個人が個人として所屬國家を決定する權利を有する以上、個人の集團たる民族も亦同じ權利を有たねばならぬ。併しながら現存の國家は、大して自家の痛痒を感じない例外的な場合を除けば、個人に向つても、個人の文化的集團たる民族に向つても、其の正當なる自決權を承認しやうとしない。アイルランドの民の獨立運動につき、印度の民の獨立運動につき、その他すべて不當の壓迫を被りつゝある民族の獨立運動につき、いろ〱報道に接する毎に、世界民の顏の表情は或は晴れやかになつたり或は憂欝になつたりする。

民族自決權の據て存する本來の基礎は個人自決權である。だから民族自決權を主張する者にして、個人自決權を否認せむとするならば、それは自家の立場を覆さむとするものだ。たとへば濠洲人が『濠洲人は濠洲人によつて建設された國家の下に生活する權利がある』と唱へると共に、『黄色人は濠洲人の建設した國家に屬して自由に活動する權利を有たない』と主張するとき、彼れらは後半の主張によつて前半の主張の論理的根據を否定し去るものである。黄色人に國家所屬性を決定する權利をみとめることなくして、白色人に同じ權利をみとめる論理は、世

界民の斷じて許容せざる所である。もとより個人の團體は、その團體たる性質に基いて、ある事項については個人の有たない權利を有つこともゆるされるけれど、個人の權利を害するやうな權利を、團體が團體だからと言つて有つことは、世界民の法律において認められる限りでない。

五

世界民には、彼れが視て以て最もたふとい誇りとするところの特權がある。世界民としての立場から一切の事物を判斷し一切の行動をいとなむといふ特權が、即ち共れだ。

世界民の立場は、現實にも立脚して現實を超越しやうとする理想主義者の立場である。あらゆる偏見と我執とを拋擲し去り、同情にみちた洞察の眼を一切の事物の上に向けやうとする批判主義者の立場である。偏狹な國家主義、偏狹な民族主義を斥けつゝ、人類全體の利益と幸福とを標準として總ての社會的事象の價値を規定しやうとする世界主義者の立場である。曾つて第一階級、第二階級に反抗して立つたときに、第三階級が代表した民主主義者の立場である。現に第三階級に向つての反抗において、第四階級の據りつゝある社會主義者の立場である。社會生活において女性を男性と平等の地位に置かうとする兩性平等主義者の立場である。あらゆる偏見者、空想家、僞善者、壓制者、絞取者、好戰者に向つて、極力反省を促すところの、自覺せる人間の立場である。

世界民の立場は、因襲と偏見から解放され、人類の愉悦を愉悦とし、人類の悲哀を悲哀とするところの、純眞なたましひの所有者にあたへられた唯一の立場である。シルレルに對するゲーテの立場である。クレマンソーに對するウイルソンの立場である。マキアヴエリに對するグロチウスの立場である。ブルジヨア學者に對するマルクスの立場である。パリサイ人に對するキリストの立場である。

個人が社會と交渉する所のあらゆる接觸面において、世界民は自由な人間性を保持しつつ、各自の性格、各自の境遇をとほして此れに能ふ限り個性的な發展を與へやうと努力する。その爲めには、世界に現存する一切の文化は、世界民の共同の財産でなければならぬ。

『學問には國境が無い』と言はれてゐるが、世界民の見方からすれば、すべての種類の文化が國境を知らないのだ。もとより世界民は冷靜な現實の觀察者だから、さまざまの自然的原因並びに人爲的原因に基くところの文化内容の差別を閑却するものではないけれど、差別を發生させた原因に拘泥して文化内容の價値に差別を付けることは、世界民の甚だ快しとせざる所であ

る。世界民の價値判斷は、あらゆる民族の文化内容に對して全然公平であらねばならぬ。

例へば此處に日本國に籍を置く一人の世界民があるとする。一般に世界民は人生と歴史とに無限の愛着を有つてゐる者だから。此の一人の世界民は彼れの祖先たちが産み出した一切の日本人に特有な文化に對し、言ふまでもなく深い興味を寄せてゐるに相違ない。彼れは日本人の創り出した文化の内容については比較的に大なる理解力を有つてゐるだらうから、日本の文化をなつかしむ彼れの自然の感情は、他のいづれの國の文化に對するよりも、一層濃やかだらうと推察されるわけだ。おそらく彼れは雪舟や大雅の筆意のうちに漂渺たる山水の風韻を掬したり、廣重や寫樂の色調からあふれ出る人生の情味に官能を陶醉させたりすることにおいて、日本人の一人として育つた幸福をしみじみとかんがへるだらう。彼れはまた人麿だの實朝だの良寛だのの歌の中に、太祇だの芭蕉だの一茶だのの句の中に、晶のやうに透きとほつた生活經驗の核心をながめて、人類の文化の廣大な地盤の上に、さうした一隅をたがやして置いたところの、其れらの人々の努力を心から感謝したいと思ふだらう。能樂の鼓のひびきの冴えに、淨瑠璃の三味線のねいろの縺れに、彼れが結びつける聯想のかずかずは、どれも此れも彼れの心の大切な財産であり、緩やかな御詠歌のうたごゑに聞き恍れては、ひたすらに彌陀の慈悲にすがつて凡夫のあさましい悩みから解脱するみちを教へた聖僧を、祖先の中に見出すことをいともたふとしとするだらう。

日本國に籍を置く彼の世界民は、以上の推察を一々肯定した上、問はれるともなく次のやうに語るだらう——「だが、私の心は私の國の文化を味解するだけで滿足するものではない。勿論私の心が私の國以外の國々の文化を味解する能力は、私の國の文化を味解する能力に及ばぬだらう。然かし兩者の差違は、質の差違ではなくて程度の差違だと、私は信じてゐる。此の程度の差違は、必然的な普遍妥當的な知識の體系を築き上げて行く學問的文化については、極めて微小であり、宗教的文化、政治的文化、經濟的文化などについても左程大きくはなく、習俗的文化について稍大きく、藝術的文化、殊に言語を通じて表現される文藝的文化について最も大きからむとするだらう。けれども嚴密に考へたら、藝術的作品はその作家によつてのみ、少くともその作家とほぼ同じ深さの藝術的經驗を積んで來た人によつてのみ味解し得られると言はねばならぬ。われわれが文化の意味の理解について云爲する場合に、それほど嚴密な考へ方を採用しない限り、他の國民、他の民族の文化の意味に對する

吾々の理解力を、本質的に否定することは無益だらう。それよりも吾々の念とせねばならぬ點は、それが自分の屬する國で生まれたものたると、他の國々で生まれたものたるとを問はず、一切の價値ある文化內容を正しく深く味解して、自己の生活經驗な豐かにしやうと努力することであるべき筈だ。私は私が味解し得る限りのさまざまの國々のさまざまの文化內容を通じて、その國々の數知れぬ人々の生活の內容に沒入したい、それらの人々の悅びによろこび、それらの人々の苦しみを苦しみたい。私の屬してゐる國の全文化內容を殘らず撿べて見たところで、トルストイの小說の深刻さが求められやうか？レムブラントの絢爛の輝かしさが求められやうか？ベートーヴェンの音樂のうつくしさが求められやうか？ミケロアンジエロの彫刻の偉大さが求められやうか？プラトーの哲學のけだかさが求められやうか？李太白の律詩の雄渾さが求められやうか？羅馬人の法律技術の巧みさが求められやうか？イギリス人の政治生活の潤達さが求められやうか？印度人の宗教的冥想の神秘さが求められやうか？……斯うした疑問を起せば起すほど、文化の世界に國境を劃して、その內側に安住しやうとする人間たちの心持が愈々不可解となつて來るだらう。私たちの國の領土の上にすぐれた文化を築き上げて行かうとする懸命の努力を妨げるものは、あの依怙地な頑冥な國粹主義者たちのうるさい騷動だ！」

あらゆる優秀な文化產物は、世界民の誇りであり、富である。かぎりなく豐かな文化の構成層を歷史の斷面にたいて見渡しながら、其處に享樂の盡きざる可能性を想ふとき、世界民の愉悅は雙つの瞳に火とかゞやく。

六

『外來思想』といふ語がある、世界民の大嫌ひな語の一つだ。世界民は外國語といふ差別の範疇が無用となる日の到來することすらねがつてゐる。況んや、自分の屬する國家の領域の外部で成長した思想に對して狐のやうな疑ひ深い眼を向け、『外來思想』といふ貼札をつけて、警戒と憎惡との對象としやうとする怯懦な偏狹な人間の態度を、世界民は憐れみ且ついやしむこと甚しい。世界民にとつては、あらゆる正しい思想、あらゆる眞實な思想は、恰も彼れの心奧から生まれた思想であるかのやうに感ぜられる。反對に假令彼れの屬する社會で生まれた思想であるにしても、それが世界民としての立場と相容れないものであるならば、反つて「外來思想」と銘を打つても可い位におもふだらう。

世界民の心の扉は、一切の價値ある思想に向つて開かれてゐる。扉の外には批判の階段がある。彼れの屬する國家の民の祖

先が大切にして來た思想であつても、彼れの屬する國家の現在の民の大多數が抱いてゐる思想であつても、その階段で躓くものは、決して世界民の心の扉をくぐることを許されない。かたくなな官僚や、干渉好きの教育家やが、妄りに危險視する思想であつても、其處ではやす〳〵と階段をのぼつて行く。世界民の心の扉の内部は、だから不當に壓迫され、不當に排斥されてゐるところのあらゆる正しい思想の避難所だ。扉の内部をのぞいて見ると、そこでは世界民の各自の個性に切實な思想が、部屋の中心に座をあたへられ、さうでない思想が部屋の周圍にうづくまつてゐるだらう。扉の外では多くの珍らし好きの人々から盛んな歡呼をあびせられてゐる思想が、そこでは部屋の片隅にかがんでゐるやうなことは、十分有りがちな光景である。月日の經過に伴うて、部屋の中でのいろ〳〵の思想の居場所がかはる。其れは世界民の個性がそだつて行く證據だ。

世界民は彼れの生活してゐる社會の中へ、正しい思想、力ある思想、うつくしい思想が、他國の社會から潤澤にそゝぎ入ることに力を竭すだらうし、彼れの生活してゐる社會の有つてゐる所のねうちある思想を他國の社會に移入することにも、ひとしく心を勞するだらう。それについて世界民の頭をなやますものは言語の相違の問題だ。すべての世界民は各々他の國の言語をなるべく廣くなるべく深く學ぶことに努めるだらう。翻譯の方法によつて他國の思想を自國の言語の中に表現する事業にたづさはるだらう。藝術家たる世界民、科學者たる世界民、は一層その責務を痛感するだらう。世界共通語の問題、即ち各國の民が各々自國の言語を維持しつゝ新しい世界共通語を相互の交通において使用すべきであるか、又は孰れかの國の言語を世界共通語に採用すべきであるか、それとも一切の人類が從來の言語をすべて廢棄して新しい世界共通語のみを使用すべきであるか、又は孰れかの國の言語のみを世界共通語として使用し、他のすべての國語を廢棄すべきであるか等の問題は、世界民が甚深の興味を集中する問題である。世界共通語の問題自身の解決を待つまでもなく、現在あまりに多岐にわかれてゐる諸民族、諸國民の言語が、能ふ限り少數の種別にまで整理され、民族と民族、國民と國民の相互的理解の途が疏通されるに至ることは、世界民が希望して已まない所である。尙ほまた、完全に近い世界共通語は如何にして創り出し得られるかといふ問題の解決は、世界民のすべてに課せられた最も重大な任務の一つでなければなるまい。

七

世界民が立脚しやうとする世界主義の見地は、政治上殊に外

交上に於ける國家主義の見地と對照され、國際主義の見地と對照されることによつて、明確に諒解し得られるだらう。

國家主義には二樣の意味がある。先づ一つの意味においては、國民主義といふ概念は、社會組織維持の條件又は方法としての國家の存在價値を肯定しやうとする思想を指すのであつて、其れと對立を成す概念は、斯かる國家の存在價値を否定しやうとする無政府主義の概念である。世界主義は此の意味での國家主義と相容れないものではなく、それかと云つて此の意味での無政府主義と原理的に相容れないものでもない。但しこの意味での國家主義と無政府主義との對立において問題とされるのは、如何にして社會組織を維持すべきであるかと云ふ點なのだから、現實の人間の大多數が、强制權力の支配を前提することなしに能く平和的社會生活をいとなみ得るやうな道德性の水準に到達してゐないといふ判斷が、さまざまの客觀的事實によつて正當とされる間は、世界主義者はみづからの主張の貫徹の便宜上及び必要上、無政府主義に與しないで、國家主義に加擔するだらう。世界民がいづれかの國家に屬しつゝ、その國家に向つていろ／＼の要請を自然法の權威に據つて提起するのは、かうした見地を背景とするものである。國家といふやうな强制權力を有つ團體を構成することなしに能く平和的社會生活をいとなみ得るやうな高度の道德性にまで大多數の人間が淘冶されることは、世界民が何人にもまして切望する所だけれど、それは人間の教育の理想の問題であつて、現實の社會組織の維持條件の問題とは、論點を異にするものである。若しも右のやうな道德性の水準に近づいてゐる又は達してゐる人間だけを集めたならば、無政府主義的社會組織を實現することが能きる事は勿論だ。けれども假りにそう云う計畫が成立し得るとしても、世界民はさう云ふ計畫をもくろむ人々の心持に同情するだけで、その計劃自體にはあまり多くの價値をみとめないだらう。なぜかと言ふと、所要の道德性の水準に到達してゐない又は近づいて居ない所の澤山の人間たちを除外して社會を組織するやうなことは、世界主義の精神に叶はないからだ。世界民は比較的容易に出來上る小さな理想的社會の中で淸らかに暮すよりも、全人類を包含する不完全な醜惡な社會の中に生活して居たいとねがふだらう。

次に第二の意味においては、國家主義とは、社會生活において國家といふ團體その者に對し獨自の價値を認め、特定の國家の利害を標準として社會生活の全體を規定しやうとする思想を謂ふ。此の場合に國家その者に超越的實在性が認められるのが通常だけれど、必ずしもさうでなければならぬと云ふわけでは

ない。兎に角此の意味での國家主義の主張に從へば、國家といふ社會的形象は一切の社會的價値の根源であり、すべての他の團體なり個人なりの存在は、特定の國家の存立發展に役立つや否やを標準として、その價値を評定されるべきだ。言ひ換へると、すべての個人並びに特定の國家の以外のすべての團體は、それ自らの存在價値を有するものではなく、特定の國家の存立發展に仕へる手段として初めてその存在價値を有するのだ。此の場合に特定の國家以外のすべての團體といふ中には、或る國家から見て外國と呼ばれる團體が悉く含包されてゐることを、特に注意しなければならぬ。

この第二の意味での國家主義の中で、更に絕對的國家主義とも云ふべき思想傾向と、相對的國家主義とも云ふべき思想傾向とを區別することが必要である。或る國家との關係に於いて、他のすべての國家が、前者の存立發展のための手段としては存在價値を認められると云ふことは、此れらの兩樣の國家主義に共通な根本思想なのだが、絕對的國家主義は、特定の國家以外のすべての國家の存立なり發展なりに如何なる意味に於いても獨立の價値を認めないで、その全存在はかの特定の國家の存立發展のための手段としてのみ意義を有つと主張するに反し、相對的國家主義は、特定の國家以外のすべての國家の存在は、特定の國家の存立發展のために役立つところから價値を獲て來ることを主張すると共に、それ等の國家の存立發展その者に對しても亦、第二次的な價値ではあるが尙ほ獨立の價値たることを失はないところの目的價値を認めるものである。だから絕對的國家主義を採つてゐる國家の立場から見ると、すべての外國は、自己の存立發展のために全然任意に利用し處分さるべき單純なる材料であり、多くの場合において外國は自己の存立發展の障碍たるものだから、能ふ限りすべての外國を絕滅してしまふことが最良の國策であり、それが不能だとすれば、外國との交通を斷つて孤立の地位を守ることが、望ましく考へられる。それとは違つて、相對的國家主義を採る國家は、自己の存立發展の目的を遂げるためには他國の法理的人格を承認して相互の間に平和的交通をいとなむことが、否定す可からざる要件たることを認識し、そうした方針に基づいて外交政策を定めて行くのである。

第二の意味での國家主義の中で斯やうに相對的な傾向を有つたものを、特に國際主義的國家主義と呼ぶことが能きる。國際主義といふのは多數の國家が相互の間に利益の連帶の關係を有つてゐる事實、即ち或る國家の滿足な存在發展は、他の國家との平和的交通を持續することによつてのみ可能であるといふ事

實を根據として、多數の國家は相互に他の國家の法理的人格を承認すべきであると主張する思想である。かうした主張を立てる國際主義を中心として考察すると、多數の國家が相互に他の國家の人格を認めてゐる場合に、他の國家の存立發展には獨立の價値があるけれど、それは自國の存立發展のために間接に役立つからだと考へる傾向と、各個の國家の存立發展には、他の國家の存立發展のために役立つと否とに拘はらず一定の價値があると考へる傾向とが區別し得られるだらう。前者は國家主義的國際主義であり、後者は個人主義的國際主義である。

第二の意味での國家主義、即ち社會生活に於て國家その者が獨立の價値を有することを認め、特定の國家の利害を標準として一切の社會生活を規定しやうとする思想に對立するものは、個人主義である。後者の見解に從ふと社會生活において獨立の價値を有つものは個人であつて、國家は個人の生存向上に役立つ限りにおいてのみ存在の價値を有する。だからあらゆる社會的價値の根源たるものは個人の人格であり、個人の人格の維持發展の目的に役立つための手段として初めて國家の存在が意味づけられる。國家の一切の活動は斯かる標準に基いて行はれることを要し、國家と國家との關係においても、先づ顧慮さるべきは個人の人格の維持發展の目的である。個人主義にもいろくのタイプがあり、無反省な淺薄な個人主義は、國家が他の國家との關係において、他の國家の存在を否定しやうとしたり、又は全然孤立をまもらうとするやうな態度を是認する場合もあり得るけれど、最も合理的な個人主義の見地からすれば、個人の人格といふ場合の個人の範圍は、一切の人間を包含すべきであるから、他の國家との關係における國家の態度については、必然に國際主義を支持せざるを得ない。個人主義的國際主義は、各個の國家の存立發展に對し、他の國家の存立發展のために役立つと否とを問はず一定の價値を、認めると言つたが、その一定の價値とは、個人の人格を維持し向上するための手段としての價値である。若しも個人主義的國際主義を外交方針として採用してゐる國家があると假定したら、その國家は例へば自己の所有してゐる領土の一部分を他の國家に讓渡することが、その領土に居住してゐる個人の生存向上のために有利であり、且つその領土以外に生存してゐる一般の人間の生存向上のために惡い影響を及ぼさないと解つたならば、悅んでその領土を他の國家に割讓するだらう。又例へば自國の領域内に廣濶な人口稀薄な原野があり、誠實な人間たちが他國から來つてそこに居住することを願ふならば、彼れらの移住の結果、彼れらが從來居住してゐた國家の人民たちは新に生活の餘裕を見出し、

反對に自國の人民の平均的教養程度が多少低下するやうな惧れがあつても、その國家は意とすることなく移住希望者を迎へ入れるだらう。

世界主義が第一の意味での國家主義とは兩立し得るものであることは前に述べたが、第二意味での國家主義とは相容れないことは明白だ。何となれば、此の意味での國家主義は、ある特定の國家を他の國家に對して一段と優越せる地位に置き、そのために他の國家に屬してゐる人間たちの自由と幸福とを害する結果を招くからである。世界主義は、それが第一の意味での國家主義を支持する必要があると判斷してゐる間は、國際主義を援助するだらう。しかも世界主義の援助する國際主義が個人主義的なものでなければならぬことも瞭かだ。

現在の國家は殆んど悉く國際主義を採用してゐる。だが、其れは飽くまでも國家主義的國際主義の根本的性質を固執するものであり加ふるに各國の人民の大多數によつて力強く後援されてゐるものなのだ。所謂國民的外交があまねく國際關係において行はれるやうになつたところで、各國の人民の大多數が世界主義に共鳴するに至らない限り、各國の外交政策は到底世界民の希求するやうな公正不偏の方針を採るものではない。しかも各國の人民の大多數が、彼れらの本質的な自我にめざめる日は、いつになつたら來るだらうか、絶望的悽愴こそは、彼れの執るべき態度ではなからうかと、世界民は時に心細い思ひをする。

八

戰爭は人類の犯し得る最大の罪惡だ！

戰爭が國家と國家との間に開始されるとき、雙方の國民の感情は、獸のやうな憎惡の念に燃えあがる。その後のあらゆる戰鬪行爲は、悉く野獸的兇猛性の止め度のない發露だ。人類を殺戮することが、國家を愛することと爲るならば、愛國心とは最も恥づべき不德ではあるまいか？

正義のための戰爭なのだ、人道のための戰爭なのだと、戰爭論者は殊勝らしく辯解するだらう。だが、正義は誰れのための正義だらう？人道は殺人者のための人道なのか？大規模の殺人事業によつて正義が製造され、人道が製造されると言ひ得るならば、同じ論理に基いて、姦通から貞操が生まれ、詐僞から友情が生まれると主張し得ぬ筈はない。正義の女神を引き合に出したり、人道の天使の名を騙つたりする國家道德論者よりも、あからさまに上帝に楯突く惡魔は、いくら正直で、幾ら可愛いか知れはしない。

戰爭の暗雲が拂拭された後、新しい文化の太陽がさんらんと輝き出ることはあるにしても、戰爭によつて失はれた數知

生命の價は、如何程莫大の文化の財を積んだところで贖ひかへされるものではない。若しも强姦によつて生まれた兒が聰明であるならば、强姦の行爲が正當とされるだらうか？

　戰爭のいとふべく、悲しむべく、憎むべく、呪ふべきことを、世界民は何人にも劣らず深刻に感じてゐる。だから戰爭を防止し、戰爭の機會を減少することを目的とする制度なり努力なりに對し、彼れは滿腔の贊意を表する。軍備制限運動はもとより彼れの贊同する所だ。軍備撤廢運動は一層熱心に贊同する所だ。國際仲裁々判所の速かなる完成も、彼れの衷心から希望する所だ。

　國家主義が好戰思想の仲よい道連れであることは言ふまでもない。國家主義は國家の利害を標準として社會生活の一切の事象を規定しやうとする思想なのだが、謂ふ所の國家の利害の内容として、資本階級の利害を擧げるものは、資本主義的國家主義であり、軍人階級の利害を以て是れに擬するものは、軍國主義的國家主義だ。前者にとつては豐富な原料の産地を獲得したり、有望な商品の販路を開拓したりすることに役立つ外交政策が最も望ましく、後者にとつては武力によつて他國を威嚇し壓迫する外交政策が最も正しいと考へられる。此れから兩樣の思想傾向の合體したものは普通に帝國主義と呼ばれるものであつて、此度の世界大戰爭も終極においては帝國主義と帝國主義との睨み合ひにその原因を歸すべきだと云ふ意見は、公平な歴史家の否まない所だらう。ドイツの軍閥の巣窟が一掃されたことは、世界民にとつて會心の事柄だが、戰爭が殘して行つた一切のいたましい不幸、一切の怖ろしい禍ひの〇〇は、戰爭に參加したすべての國家が、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。無賠償主義、非領土割讓主義、民族自決主義の大旆を樹てて講和會議に向つた折りのウイルソンは、かうした意味での人類の共同の責任を自覺した偉大なる世界民の一人だつた。その後の彼れの讓歩について言議することは無益な仕業だらう。人種平等主義の承認を拒んだ講和會議に、多きを望むが如きは最初から愚かな過ちだつた。戰爭は終つたが、晴れやかな平和の光りは、世界的不安の密雲のために遮られてゐるではないか。それはさまざまの種類の固陋な傲慢な國家主義者たちの我慾が醸し出す惡氣ではないか。改造の叫びは至る處に聲高く聽かれるけれど、世界主義の大前提と、社會主義の小前提とを認めることなしに、どうして正しい改造の結論がみちびき出されやう。

九

　社會組織の維持者としての國家の存在價値を肯定する思想といふ意味での國家主義は、遠い未來の人類を問題としない限り世界民の支持する所だが、現存の多數の國家の間の錯雜せる關

係は如何にして整理さるべきかの問題に對して、彼れはいづれの見解に左袒するだらうか？

世界に現存する殆んどすべての國家が、兎も角も國際主義を採用してゐることは既に述べた。此の事實を形にあらはしてゐるものが、現在の國際團體だ。イギリス人がFamily of Nationsと呼び、フランス人が L'société des nations と呼び、ドイツ人が die Völkergemeinschaft と呼ぶのが其れである。それは社會組織として至つて不完全な體制を具へてゐるに過ぎないが、相當古い歷史を有つて居り、世界の文化の發達のためには、かなりの貢獻を致したことは爭はれない。此の國際團體の體制を支へてゐる精神は、前に説明した第二の意味での國家主義によつて制約された國際主義であつて、體制の不完全さは取りも直さず精神の幼稚さの發源だ。

世界民には自然法があり、國民には國家法があるやうに、國際團體の成員は國際法の拘束を受ける。國際法の發達の出發點をあたへたものは自然法の思想であつたが、それは十七世紀の歐羅巴人にふさはしい獨斷的な自然法の思想であつて、今日世界民の正義感情をみちびく所の自然法の思想とは同じものでない。それにしてもかの古い自然法の目指した理想の高遠さは、何人も否定し得ない所だが、それに比べると、現在の國際法を支へてゐる國際意識の幼稚さはあはれむべきものである。

國際主義の發達は、國家と國家との利益の連帶關係その者の發達、並びに此の事實を認識する意識の發達と並行して來た。國際的社會連帶の事實の發達は、先づ國際的經濟關係の巧妙複雜な構成として現れ、次いで科學、藝術、宗教、衞生、習俗などのさまざまな文化領域に於ける諸國民の相互的依憑性の旺盛な成長となつて人生のあらゆる方面を蔽ふに至つた。此の目覺ましい事實に照應して、各種の生活利益の維持增進のための國際的協力を目的とする萬國聯合の制度が、十九世紀の中頃から簇々と生れ出た。それ等の聯合はそれぞれ相當の成果を收めて、大抵は現在にまでその活動を續けて來てゐる。此れらの多數の機關を通じて次第に濃厚に表現され初めた國際意識に對し、統一的焦點をあたへやうとしたものは、第一回、第二回の萬國平和會議の試みであつた。皮肉にもそれは主として戰爭法規の制定機關となつた。形があたへたものの、しかもなる可く戰爭の機會を減少しやうとする希望、なる可く交戰行爲から生じる惨禍の程度を緩和しやうと云ふ希望を、列國の委員たちが眞面目に抱いてゐたことは爭へない。

かうした國際意識の順調な發達は、やがては世界主義の精神にまで向上して行くかも知れないと、世界民をして心ひそかに

期待せしめた程であつたが、其處に至るまでに人類がささげねばならぬ犠牲はまだまだ數多く要求し殘されてあることが解つた。世界戰爭の勃發は、さうした意味での偉大なる幻滅であつた。ドイツの愛國者たちが先づ國際戰爭法規を蹂躙した。イギリス、フランスの愛國者たちも、終に酬ゆるに怨を以てす可く、國際戰爭法規を無視して爭つた。すべてが文明的野蠻人の爭鬪であつた。强盗がカントの道德論を講義したら隨分滑稽だらう。しかし自分たちがこさへた國際法規を無視して數知れず殺人、掠奪、强姦をやつたドイツ人、イギリス人、フランス人たちが、お互ひに敵國人を正義人道違反者呼はりしたことは、もつと悲慘な滑稽ではなかつたか。さうした皮肉な事實に對して人間の判斷力を鈍らせるところの愛國心とは、なんといふ怖ろしい目つぶしだらう！

世界戰爭の激揺によつて國際秩序は無慘に破壞されたが、其反動として國際意識が新しい生命力を體得して成長し始めた。回復せる國際秩序の基礎の上に建設された國際聯盟のすばらしい組織は、此の新しい生命力の象徵だ。國際團體の成員たる國家の大多數は此の聯盟に競うて參加し、『戰爭に訴へざるの義務を受諾し、各國間に於ける公明正大なる關係を規律し、各國政府間の行爲を律する現實の規準として國際法の原則を確立し、且つ嚴に一切の條約上の義務を尊重し、以て國際協力を促進し、且つ各國間の平和安寧を完成せむ』とする聯盟の根本目的の履行に忠實なるべきことを誓うた。

國際聯盟その者は、從來列國が國際關係に於いて把持し來つた精神と趣を異にする所の全く新たな精神によつて建設されたものではなく、依然として國家主義的國際主義の立場を根抵とするものである。國際組織の改造は、直接に國際意識の根本性質を變改する力を有つものではない。國際團體の内部に國際聯盟といふ明確な組織が生まれたことは、國際意識の重厚度が增加した事實を裏書するものであるが、現實の國家を支配してゐる人々がその奉じ來つた國家主義の信條を頓かに拋ち去つて、世界主義に共鳴するに至つたのだと云ふ推定を、正當ならしめるものではない。けれども他方において吾々は組織が精神に及ぼす影響を看過することも能きない。たとへ唯物史觀を是認しないまでも、環境が人間の心理を規定する事實を否定することは正しくない。國際聯盟の組織がその機能を着實にはたらかせて行くならば、資本主義的經濟組織の胎内から社會主義的思想が生み出されたやうに、現在では人類の使命にまで自覺した小部分の人々の胸から胸へとながれてゐるに過ぎない世界的精神が、國際秩序の裡に滔々とみなぎり亙る日が到來せぬとも限る

まい。

國際聯盟に加入しないで、その傍らに佇んでゐる二つの大國家がある。右の方のはアメリカ合衆國で、左の方のはロシア社會黨ソビエット共和國だ。國際聯盟の標牌を國際聯合と謂ふのに書き替へやうと力んでゐるハーヂングの考へと聯盟諸國の國民に共産主義の洗禮をさづけてやらうと心構へてゐるレニンの考へと、どちらが世界主義の精神に、より近く立つてゐるだらうか？どちらが國際聯盟の將來を、否人類全體の將來を規定する力を、より多く有つてゐるだらうか？——世界民は斯う云ふ疑問を起して見て、しづかな微笑を唇邊にたゝへる。それはひとり世界民にとつてのみの問題ではあるまいけれど……。

十

われわれ人類の大部分は、幾十の集團に分れて其の數だけの國家を構成し、更にそれらの國家を通じて一個の國際社會又は國際團體を構成してゐる。此の人類的社會の改造は、如何なる方向を執つて行はれるだらうか？いかなる方向を執つて行はれるべきであるか？——それは人類にとつて最も普遍的な最も根本的な問題の一つであり、日夜世界民の念頭を去らない宿題である。それを明確に規定することは勿論不可能だけれど、問題の解決について大體の見當をつけることは、敢て至難の業といふわけではない。

現存の國際社會を改造して行く方法には、現存の國際社會の組織を先づ改造しやうとする途と現在の國際社會の組織其者には手を觸れずに、國際社會の構成單位たる國家を改造することによつて、國際社會の實質を改造しやうとする途との二つがあり得る。

國際社會の構成單位としての國家の改造の問題については、玆では單に國家の存在個數、即ち國際社會の構成單位の個數の問題だけを考へて見る。右に擧げた第二の途においては、國際社會の組織其者の改造は問題とならぬのだが、國際社會の現在の組織は國家の相互的平等の原則を前提としてゐるものであり、國際社會に關係する問題の解決に當つては、各個の國家が平等の發言權を有してゐるのだから、國際社會を構成する國家の存在個數の如何は、國際社會の發達に對して重大な影響を及ぼすべき問題たるわけだ。若しも國際社會の構成單位はなるべく少數であるのが、國際社會の合理的發展のために都合が好いとすれば、現在の多數の國家を整理して、少數の大規模な國家に改造すべきだといふ要求が生まれて來る。例へば歐羅巴の諸國が解體して一つの歐羅巴國をつくり、亞細亞國、亞米利加國、亞弗利加國などが其れに並行してつくられるとか——ラテ

民族を以て人口の大部分とする所の國々は悉く佛國に併合され、スラブ民族の國々は露國に、チュートン民族の國々は米國に併合されるといふやうな方法で、民族的大國家が建設されるとか──人種の如何を標準として、黑色人の國、黃色人の國、白色人の國が形成されるとか、いろ〳〵の仕方が幾らでも考へられるけれど、その實行には多大の困難が伴ふのみならず、假令その計畫が現實にされたところで、世界民が望むやうな世界主義の貫徹にまで、出來上つた少數の大國家が熱心に協力するかは頗る疑はしい。それによつて國家と國家との利害の衝突の機會なり原因なりは減少されるだらうが、國家と國家との利害の相反性はその深刻さを著しく加へるだらうし、國家の活動と個人の行爲とを距てる懸絕が非常に增大することも考へられねばならぬ。そこで國家の規模をなる可く小さくして、國家と國家との接觸面を增加する代りに利害の相反性を減殺し、國家作用に對する個人の參加範圍を擴大しやうといふ欲求がおこるだらう。この欲求に從へば國際社會構成單位の個數は、現在の其れの幾倍に、又幾十倍に增されることとなり、それらの諸國家の國際的利益連帶關係はおのづから密接となるだらうが、國際的紛爭は著くし滋くなるだらう。それを緩和し調整するために、さまざまの標準の孰れか一つ又は數個に基いて若干の聯邦國の中に澤山の小國家を包容するならば、前の主義と後の主義との綜合が成り立つわけだ。それと共に他方に於いては各小國家の權力なり權限なりに種々の制限を加へることに因り國際的社會生活の面目を改めやうとの主張も提起し得られる筈だ。

次には現在の國際社會を改造して行くための第二の途、即ち國際社會の組織を改造する途について考へて見ると、現在の國際的社會組織を支へてゐる法律秩序をして其儘國際性を維持せしめつつ、國際的社會組織の個々の部分に改造を加へて行からとする態度と、現在の國際的社會組織に本質的な改造を加へ、その組織原理を變更しやうとする態度との兩者の差違が思ひ浮べられる。前の態度を執るとき、最も便利であり最も手近な方法は、現在既に成立してゐる國際聯盟をして現在のすべての國家を包容させた上、聯盟の本質たる國際的集團性を保持させながら、聯盟の機關なりに改革をあたへる方法だ。その際國際聯盟といふ名稱を如何樣に變更しやうとも、それは關する所でないし、個々の組織部分に何等かの變改が施されたところで、聯盟の本質に變化を生じないことは言を俟たない。その外國際聯盟を利用しないで、それを廢止するか又はそれと並行して、英國だの、露國だの、米國だのといふ極めて有力な少數の大國家だけが聯合をつくり、それが國際社會の中央機關としての機

能をいとなみ、他のすべての國家は、重要な國際問題についてその指定に從ふと云ふやうな制度が、近い將來に於て實現されはしないかといふ蓋然性がないでもないが、さうした國際的アリストクラシイの出現は、世界民の斷じて許す能はざる所である。

現在の國際社會の組織原理を改造しやうとする態度の中でも、無政府主義的なものと、國家肯定主義的なものとの間には、著しい懸隔があるが、姑く後者だけについて考察すると、それは現在の國際的法律秩序から國際性を奪ひ、その代りに國家性を賦與しやうといふ態度を意味する。そしてあたへらるべき國家性が單邦的たるか聯邦的たるかに出つて、新たなる社會組織は或は、單邦的世界國として成立し、或は聯邦的世界國として成立することとなる。便宜のために前者を世界國、後者を世界聯邦國と呼ぶことにしやう。

現實の國際關係を離れて、論理的に世界聯邦國の內面的構造を思惟することとなると、前に考察した國家存在個數の決定の問題と關聯を求めねばならぬのだが、なる可く近い將來においての實現可能性の大きさうな狀態に目標を置かうとするときは、誰れでも既成の國際聯盟に着眼するだらう。卽ち國際聯盟をして現存のすべての國家を包含せしめた後、それらの國家の上に最高中央政府を設定し、各國人民はそれぞれ從來の所屬國の國民たると同時に、此の最高中央政府の統治權にも或る範圍において服從する義務を負はされる。最高中央政府には立法機關があつて、最高中央政府と各國の中央政府との關係、各國の中央政府相互間の關係、最高中央政府と各國人民との關係を規律する法規を制定し、最高中央裁判所がそれらの法規に據て司法作用を行ふ。最高中央政府の事務を處理する行政機關、殊に各國の恣意を抑壓するに足る武力を有つところの陸海軍が構成されるだらう。斯うして出來上つた世界聯邦國と現在の國際聯盟とを比較するとき、最も眼につく前者の特色は、後者の最高機關たる聯盟總會が列國の政府の派遣する政府の代表者を以て構成されてゐるに反し、前者の最高機關は恐らく各國政府の代表者の會議と、各國人を一體として其の中から何等かの標準に基いて選擧された代表者の會議との二つの合議體によつて構成される點にある。

やはり現實の國際的社會を左迄超越することなしに、世界國の理想を實現しやうとする途は、現在の列國をして、その各種の政治機關の大部分を備へた儘、地方的自治團體に化せしめ、その上に統一的普遍的政務を行ふ國家を樹立する方法である。勿論各自治團體の權限には重大な制限が加へられ、各自治團體が全然國家としての權力なり機能なりを保有し得ないやうにさ

れねばならぬ。改造の可能性を多少擴大して考へるならば、現在の各國は新しい世界の内部において全然その痕跡を殘すことを得ず、地方的自治體としても存續し得ないやうな狀態も思惟し得られる。此の場合には、現在の州だとか、府縣だとか、市町村だとかの孰れかが、最高級の自治體として世界國に直屬するといふやうな關係となり、自治團體の構成員たちの政治的眼界は極めて濶大たることを得るであらう。世界國の最高機關は、全國民即ち全人類の間から一定の標準によつて選出された代表者を以て構成されるだらう。此の代表機關その者の組織なり機能なりはさまざまの見地からその決定方法を考察されねばならぬことはいふまでもない。

十一

若しも世界聯邦國が實現されたと假定するならば、國際法はその存在を失ふであらうが、國際關係における國家主義は必ずしもその生命を終了することはなからう。勿論世界聯邦國の法律は、各支分國政府が反世界主義的政策を實行するのを抑制するやうな制度を設けねばならぬが、さうした法律を制定し、さうした制度を運用するためには、聯邦國の中央政府を組織するところの人々が、傳統的國家主義に囚はれることなく、人類全體の利害を標準として聯邦國の政策を決定するのでなければならぬ。更に進んで世界國が成立した場合を假定して見るに、そこでは最早國際關係に於ける國家主義、即ち國家主義の排他的方面も亦存在の餘地を失ふわけであるが、世界國の統治機關を構成する人々が、人種主義とか、民族主義とか、地方主義とか、階級主義とか謂つたやうな、あらゆる排他的政治思想から解放されない限り、公明正大な政治の實現を見ることは覺束ない。

世界聯邦國の國民や世界國の國民は、今日の各國の國民とひとしく、或は世界聯邦國の法律により、或は世界國の法律により、自己の意志如何を問はず、國民としての資格を背負はされるだらう、だから彼れらが人間の本質にめざめない間は、彼れらは單なる世界聯邦國民たり、世界國民たるものであつて、未だ以て世界民として認められることは能きない。反面から觀ると、世界民は必ず世界聯邦國民たり、又は世界國民たるではあらうけれど、彼れは自己の自由の全部を、世界聯邦國のために、又は世界國のために捧げるものではない。かへつて世界民は一切の法律の權威を超越するところの自然法の原則を把持しつつ、世界聯邦國や世界國やの法律に對し政策に對し、嚴正な批判を忌憚なく加へるだらう。世界聯邦國なり世界國なりが、如何ほど雄大な使命を有し、如何ほど宏壯な規模を有するにしても、世界民の眼に映じた其れらの國家の存在價値は、畢竟個人の純

眞な人格を維持發展するための手段としての價値を意味するに過ぎぬ。如何なる社會組織の動搖變動に際會しても、自我の核心たる自由を保持し得ることは、世界民のたのしみとする至大の特權である。

世界聯邦國にせよ、世界國にせよ、それが實現された曉においては、その法律なり政策なりの公正なる批判者として世界民を要するだらう。その權力の行使者、その制度の運用者として世界民を要するだらう。それに世界聯邦國だの世界國だのを實現する事業それ自身が、多數の世界民の努力を俟たずしては企及し得られぬだらう。だから世界聯邦國や世界國やの教育が、世界民たる國民の養成を最高の目的とすべきことは無論だけれど、それよりも第一に今日の現實の社會において、あらゆる教育の根本方針が、世界民としての自覺にまで個人をみちびくことに在らねばならぬと、世界民は確信にみちた斷定を下す。

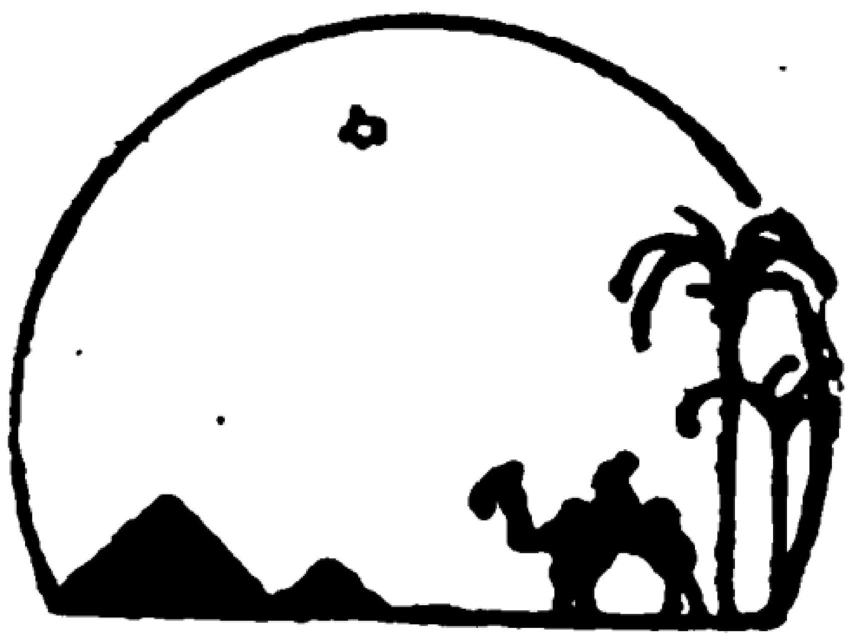
けれども世界民としての教育が可能たり得るためには、先づ教育者自身が世界民たることが肝要だ。だから世界民は世界民としての自覺を體驗した人々を自分の周圍の教育者たちの間に求め、求める人を見出したときは、幼な馴染の友だちに逢つたかのやうに無邪氣によろこぶか、さう云ふ機會は現在のところ至つて稀れであり、多くの教育者たちのかたくなら偏狹な精神が、世界民をして失望せしめ悲しましめる場合が通常である。

十二

深い青藍色にかぎりなく晴れひろがつた大空、そこにかがやく太陽の、萬人の心の隅の隅の暗さまで射とほすかと思はれる強い明るさ――さうした物象をながめる毎に、その下で絶え間もない殘虐な爭鬪に從事してゐる人間たちの世界のあることが、世界民にはつくづくと不思議に思はれる。

そのとき皮肉なリアリストが傍らに來て、『私はユトピアの民ではないと、おまへは繰り返しことはつたけれど、おまへのしやべることは、ユトピアの民の言ひ草と、あんまりかはりは無いぢやないか！』と罵るならば、世界民は微笑して首をかしげるだらう。そこでリアリストが心持ち焦れ氣味になつて、『おまへは人間としての自覺といふことを口癖のやうに言ふけれど、おまへ自身がその人間としての自覺といふやつをほんとうにもつて居るのかい？』とあざけると、世界民は顏を赤らめてうなだれるだらう。

リアリストが鼻唄をうたひながら歩み去つたあとで、世界民は俄かに周圍の空間のあかるさが堪らなく寂しくなり、急いで自分の家へ歸つて行くだらう。――そのとき彼れに、『世界民は愉悦と悲哀とどちらが多いかい？』とたづねて見たら、『私の心は世界苦の重さに壓されてゐる！』と吐き出すやうに彼れは答へるだらう。



自由の廢墟を見る

——アメリカニズム——

本社特派員　室伏高信

一

紐育の夜は寒かつた。その寒い紐育のうちで特別に寒いと思つた夜のことでした。私は中央公園に近い一つの見すぼらしい建物の二階に席を占めてゐた。集まつた人の數は私の豫想してゐたのよりも餘程少かつた。二階から私がおよそのところを數へた時には全體で四百人ばかりに見えた。この集まつた人の數の少なかつた割合には場内は非常に騷々しい聲に満ちてゐた。それは、多分十五、六人位ひはゐつたと思はれるほどの人たちが、みな手にいろ〳〵な雜誌や小册子をもにて場内を賣り歩いてゐたからである。その雜誌といふのは、「解放者」(リベレーダア)だとか、「先驅者」(パイオニーア)であるとか、その名前を聞いただけでも、こゝに集まつた人たちの如何なる種類の人たちであるかが直ぐと分るやうな、そんな八釜ましい種類のものであつた。また中にはシンフエーンの機關紙もあつた。また中にはロシヤ字の機關紙も少からず賣られてた。賣子の一人が——六十ばかりの老人であつた——自分の受持の分の少しも賣れないのを業腹に思つて、忌まへ〳〵しそうに立ち上がつて演説してゐるのさへもあつた。人々は興がつてこの老人の早口の演説に喝采したりしてゐた。この老人がやがて下の人たちに愛憎をつかして二階に上がつてきた時に私は氣の毒に思つて其一枚を買つてやつた。老人は非常に喜んで「ありがとう」といひながら、第三頁のところを擴げて、こゝを讀めと私にすゝめながら、ちつと私の顔をのぞきこんでゐた。老人の指したところを見ると、要するに社會黨に加はれといふことが書いてあつた。私が輕くうなづいて見せると、この老人はやつと安心をしたといふやうな樣子で靜に梯子段を降りてゆくのであつた。破れた靴、毛のすりきれた脊廣服、脂の枯れた老人の肉、どんなにか彼れの身體は今夜の寒さに苦るしいことであらう。否、この老人だけではなかつた。こゝに集まつた四百人ばかり人たちは、どうしてこうまでに醜に枯れた人たちであらう。この華やかな紐育の町において、こゝに集まつた人たちばかりは、古るびた山高帽子をきて、太陽の光から遮ざかつたような顔色を見せて、どことなくこの紐育、黄金の都を彼等の心に呪咀ひつゝあるやうに見えてゐる。會場の半ばは婦人によつて占められてゐたが、そしてこの婦人のうちには天性美しく生れついたものも少くはないやうであつたし、それに婦人の大多數は二十から三十位ひまでの若い女たちであつたが、髮は亂るに任せ、化粧の跡は枯るゝに任せてゐた。然りこれ等の人々は何れも勞働者であつた。勞働者の中でも現代から、現代の制度から、惠まれることの最も少ない——否な現代と現代の制度とから最も多く呪はれつゝある、不平なる勞働者の一團であつたのである。やがて八時がきた。司會者の一人が一とほりの挨拶を述べてから、ロベアト・マイノア君が熱烈な一場の演説を終つて、次にまた一人の、あまり榮えない演者があつてから、見るから巨大な一人の男、どことなく故ルウズベルトの面影があつて、それでもつと粗野でもあり、巨大でもあり、赤裸々でもあり、そしてもつと力

頭さを示してゐる、六尺ゆたかの巨大漢が壇上に姿を現はした。年の頃は何んでも五十二、三歳と思はれる。恐ろしく太ひズボンを穿いて、骨ばつた兩手を上衣のポツケツトの中に入れたまゝ、大股に演壇の横にまで進んだと思ふと今まで靜まり返つてゐた場内は遽にどよめき始めた。凡ての人たちは立ち上がつた。脊ざめた勞働服の若もの、髮に亂れた女、山高の老人、凡ての人たちは棒のごとくに立ち上がつた。そして手を振り上げた。そして床を蹈んだ。そして聲の限りに叫んだ『ヘイヴードー』『ヘイウードー』といふ聲が場内の隅から隅へと響き渡つた。この巨大漢こそ實にウヰリアム・デイ・ヘイウードであつたのである。繰り返していへばこの巨大漢こそ米國資本家階級の一大敵國として彼等の憎惡を一身に集めてゐる現代の惡魔、I・W・W・の最高の指導者、ウヰリアム・デイ・ヘイウードであつたのである。狂熱の五分間が續いて後に、彼れは除ろにその厚い唇を開いた。低くはあつたが、そしてまた音樂的ではなかつたが、腹のどん底から吐き出される聲に少しの餘り氣のない、ありのまゝの野人の言葉と、それからそれへと一寸の隙もない論理とは、一時間あまりに亘つて、强く人々の心に訴へた。彼れは鐵槌にて打つように米國の資本主義を打つた。彼れはナイフで抉ぐるように政治家の腸を抉ぐつた。そしてその資本主義とその代辯者の陰謀によつて今ま現に牢獄に繋がれつゝある彼れの不幸なる友、トム・ムーニイの解放のために、彼れの心からの叫びを叫んだのであつた。この一夜の會合とを實にトム・ムーニイの解放のための、勞働者の示威運動であつたのである。『米國の勞働者はもつと過激であれ、もつと革命的であれ』『勞働者、そして勞働者のみ、トム・ムーニイを彼れを產業の戰場から奪ひとるべく陰謀した資本主義から救ひ出すことができる。』『そして勞働者は、彼れの力を破壞せんと陰謀しつゝある資本主義から、彼れ自身を救ひ出さなくてはならぬ』――こうした言葉がヘイウードの口から一語々々吐き出されてゆく度びに人々は盛んなる喝采を送つて、壇上の人と壇下の人々と、同じの決心の持主であることを明らかにしたのであつた。

二

トム・ムーニイ、詳しくいへばトーマス・ヂエ・ムーニイとは如何なる人物であらうか。一九一七年まで、彼れの名を知つてゐた人は、桑港界隈のほかには、あまり多くはなかつたであらう。彼れの名は、日々の新聞紙を飾るほどの、美しい名ではなかつた。彼れはたゞの勞働者であつた。それも米國全體からいへば一つの田舍町、サン・フランシスコにおける一勞働者、垢じみた一勞働者、その勞働者の一指導者であるに過ぎなかつたのである。一九一七年に至るまでは、支配階級の多くの善男善女は、彼れの名を知ることなくしてすんだ。そして一九一七年以後においては、彼れの名は人殺ろし、恐るべき殺人犯人としてのみ知られたに過ぎなかつたのである。しかし私にとつては、この一人の殺人犯人の名こそ忘れることのできない、たゞに私の短い米國滯在中においてだけではなしに、恐らく終生忘れることのできない、痛ましい人の名となつたなつたのである。サン・フランシスコ私は米國へ來てからこの町に約半月を費した美しい町であつた。太陽の光の暖かなる町であつた。享樂から享樂へと、多くの善男善女が、夜の更けるのを惜しみつゝある町であつた。この町への數多き幸福なる旅行者たちは甘まい追憶のうちに、桑港の名を書きつけて立ち去つたであらう。そしてこの美しい町に文明の黑い影が何れかに悲しく訴へつゝある

ことを知ることとなくして立ち去つたであらう

しかし私は、こうした幸福な世界漫遊者の群に入つてゐることはできなかつた。サン・フランシスコの町は、私たちにとつては、昔つてはヂャック・ロンドンの筆によつて記憶されたところであつた。そして今、私たちは不幸なる一殺人犯人、トム・ムーニイの名を想ふことなくしては、金門灣頭の華やかなるこの一都市の名を想ふことはできないのである。

トム・ムーニイ、彼れは殺人犯人として知られた。彼は何故に殺人犯人として知られたか。彼れがこの罪惡を犯したがためであらうか？またこうした忌はしい嫌疑を懸けられるのに彼の名は應はしい名であつたであらうか？私たちはこの一人の勞働者が桑港の界隈にどうした地位を占めてゐたかといふ所有階級の人たちにとつては、何の必要もないほどの少さい事件から知つてかゝらなくてはならないのである。勿論、この享樂の町、サン・フランシスコにも勞働組合はあつた。それは東洋移民の排斥者として、長い間私たち日本人の間には知られてきた事實であつた。この組合の勢力は流石にこの町の支配階級もこれを計算のほかに置くわけにはゆかないのである。しかしこの組合といふのはゴムパアス派の組合であつた。それは半資本家的の組合であつた。それは「テブスの言葉に從へばウォール街に評判のいゝ組合であつた。この組合の榮ゆる幸福な桑港の町に、幸福な桑港の資本家たちはやがてトム・ムーニイの名を見出した。彼れは社會主義者であつた。ストライキの組織者としてのトム・ムーニイの名は、この界隈の勞働者の間に、次第に高まつてきたのであつた。勞働者の間にトム・ムーニイの名が高まつてきた時に、鋭敏なる資本家階級的自衛心は、惡魔としてのトム・ムーニイを見出したのであつた。然り、彼れの名は惡魔の名であつた。資本家階級の忠實なる代辯者としての多くの新聞紙の活字のうへにおいては、彼れの名は正に惡魔であつた。この惡魔さへなかつたら…、といふ陰謀が、カリフォルニアの多幸なる權力者の間に往來してゐたならば、機會は常に彼等を待つてゐた。人間は凡て平等に創造されたとは私たちが少年の頃に米國獨立宣言のうちから見出した美辭麗句であつた。その美辭麗句の國においても、機會は常に多幸なる權力者のためにのみ開かれてゐた。

……………………………………

一九一七年二月十七日のことであつた。不幸なるトム・ムーニイは、サンフランシスコの檢事局から、突然に、突然といふ以上に突然に、殺人犯といふ忌わしい罪名のもとに起訴されてゐたのであつた。それから五日、僅に五日の後であつた。彼れは絞殺の刑に處せらるべきものだといふの、極刑の宣告をうけた。殺人犯！そして絞殺の刑！資本家階級の代辯者としての新聞紙によつてトム・ムーニイの名が大々的に報導されたのは實にこの時であつた。新聞紙の報導を信頼する多くの無邪氣なる善男善女は、ムーニイの罪を憎んだ。そしてムーニイの刑を喜んだ。何事も知りぬいてゐる資本家階級の巨頭連は、彼の刑に快心の微笑を浮べた。しかしムーニイの背後には多くの勞働者が立つてゐた。多くの貧しい勞働者たちはもとよりムーニイの人格を信じてゐた。そして最初から深い疑の眼をもつてこの裁判の原因と、進行とに注意を拂つてゐた。どうしてあの人格者ムーニイが人殺しなぞゑするものか！といふ勞働者たちの信念を覆へすに足るものとしてはただの一つさへもなかつた。彼の起訴されたのも、また彼れの有罪が決したのも、そのたゞ二、三の傍觀者の證言によつてゞあつた。その傍觀者の名は一人はオックスマンといつた。他の重要な一人はマクドウナルドといつた。オックスマン

とは如何なる人か？そは正義の前に信頼するに足る人の名であらうか？マクドウナルドとは裁判の權威と信用とのうへに信頼するに足るほどの人の名であらうか？多くの勞働者が深い疑惑を抱いて事件の進行に注意を拂つてゐる間に、彼れはたつた五日間の短い審理の後に疑ひなき殺人犯といふ罪名のもとに正に絞殺の刑を宣告された。輕きは、裁判の前の人間の生命であつた。絞殺の日は五月十七日と決められた、その間に、オックスマン——これが第一の證人であつた。それがムーニイの殺人を目撃したといふ貴重な證人の第一人者であつた——の書簡なるものが發見された。その書簡によれば彼れの證言は僞りの證言であることが明らかであつた。然り、ムーニイの殺人事件を目撃した人としてテン・フランシスコの檢事局にとつて第一に貴重であつたオックスマンその人の書簡は、彼れの證言が僞りであるといふことを明らかにした。奇怪なる大陰謀！勞働者側は今やこの事件の背後に奇怪なる大陰謀の伏在してゐることを確信せざるをえないことゝなつた。彼等は先づ法律の手段によつて戰つた法律の手段に訴へてムーニイの無罪を主張した。しかしこの仕組まれた陰謀の前には法律上の一切の手段は凡て水泡に歸した。支配階級の心は桑港の檢事局も、裁判官も、若しくは實業界の巨頭連も、みな一つであることを明らかにした以外には、そしてムーニイの絞殺の日が、一九一七年五月十七日から一九一八年十一月廿八日まで、次に十二月十三日まで、延期されたといふ以外には、一切の法律上の努力は水泡に歸した。十二月十三日は近づいてきた。危險は死刑囚のために流るゝがごとくに至つた。法律上の手段に盡きた勞働者たちは、こゝに止むなく彼等の組織的勢力に訴へるのほかなきことを悟らざるを得なかつた。急進的勞働者の一團は一九一八年五月一日を期して總同盟罷業を決行すべきことを宣言するまでとなつた。形勢はいよ〳〵穩やかさを欠いできた。ワシントンに日和見をしてゐた政治家も流石にだまつてはゐられないようになつてきた。大統領ウヰルソンは取りあへず戰時勞働局の委員をカリフオルニアに送つてこの事件の調査を命じた。この委員會の調査の結果はどうであつたか。ムーニイ殺人の證據は、果して檢事局の聲明のとほり、また裁判所の宣告のとほり、證據のうへに根據を示してゐたであらうか。委員會の報告書にいふ「ムーニイに對する最も不利益な證言はオックスマンなる人のそれであつた。…………ムーニイの有罪と決定した後に、オックスマンによつて彼れの證言の前に書かれた一通の書簡が暴露された。この書簡の明白な内容は、彼れがムーニイに對して與へる答であつた——そして與へた——致命的の證言において、僞證を行はうとする彼れの企てを示してゐた。即ち彼れは彼れの與へるあらゆる證言が完全に不信用のものであることを示してゐる書簡を書いたのである。そしてこの書簡の示してゐるところに從へば、オックスマンからの凡て證言は有罪を決定するに必要な信用をうけるものではない。…………オックスマンが信用を失つた時にムーニイに對する判決は信用を失つたのである」と。の報告書によつて、政府の任命した委員會の報告書によつて、ムーニイの殺人事件なるものが、何ものかの大陰謀の結果であつたといふことが、いよ〳〵確められた。そは何ものの陰謀であつたか。そは如何にして仕組まれた陰謀であつたか。この奇怪なる陰謀を最も雄辯に物語つてゐるものは、ムーニイ事件の第二の有力な證人、フランク・マクドウナルドなる人の告白であつた。彼れは、ムーニイが桑港の第一審で絞殺の刑を宣告されてから四年にして、また彼れ自身がム

ーニイ殺人罪の有力なる證言者として立つてから四年にして、一九二一年二月七日、丁度私の紐育滯在中に驚くべき告白書に彼れの名を署したのであつた。その告白書によれば、ムーニイの犯罪を見たといふ筈のマクドウナルドは、この事件の前に嘗つてムーニイを見たことはなかつた。彼れが始めてムーニイを見たのは巡査に導かれて檻房のうちに入つた時であつた。彼れはこの事件の一週間前までは病院に入つてゐた。彼れはその事件の起つた日、『準備の日』、米國の支配階級が世界大戰に參加するための『準備の日』、そしてまたやがて米國の支配階級が勞働者運動を壞滅するための『準備の日』には、彼れはこの日の一日を仕事がなくて、練兵場の方へとぶら〳〵歩きをしてゐた。一時半頃に、彼れは丁度マアケット街とスチウアト街の交叉點に立つてゐた。その時に、彼れは彼れの反對の側の通りに一人の男が旅行鞄を道傍に置いて大廣間の戸のところへ歩るいて行くのを見た。次いでまた他の一人がこの大廣間の中から出てくるのを見た。二人は話合つてから通りの方へと歩いて行つた。私は、少し可笑しいとは思つたが別に大した注意をこの二人のうへに拂つてはゐなかつた。私はそれからマアケット街を停車場の方へと歩るいて行つた。私がアルメダ珈琲店の前にとゞまつてから二、三分して、私は爆發の音を聞いた。私はマアケットとスチユアートの方へもどりかゝつたがまた氣を換えた。私はフエリイの埠頭に一時間ばかり立つてゐた後に、一料理店に入つた。次の夜に私はパイン街とマアケット街の間を通ほつてゐた時に、私の知り合ひの一巡査ヘッタトロンなる人に行き會つた。私たちは爆發のことについて話した。巡査はそれはムーニイの仕事だといつた。私は旅行鞄のことを話した。そして私の見た二人の男を證明することができないと話した。ヘックストロンは、私に警察へ行つて話した方がいゝといふことを告げた。私は不安に思つたが警察本部へ行つた。……私は爆彈局へつれて行かれて、そこで局長代理のゴッフに話した。そこには檢事のフキッケルトも、巡査部長のダンカン・マシソンも立會つてゐた。フキッケルトがムーニイのことを述べた。彼れはダイナマイトの使用者で、娼婦の兒であり、そしてそれはみなムーニイがやつたのだと。フキッケルトがいつた。『私は次の朝にゴッド・フキールドホテルの一室にゐた。平服の一人の男が私の室に入つてきて、『親方(ボッス)』が私に會ひたいといふことを傳へた。『親方とは巡査部長マシソンのことであつた。彼れは私を爆彈局につれていつた。次の日には局長代理のゴッフがゴッドフキールド・ホテルにやつてきた。ゴッフは私に非常に親切であつた。彼れは私をムーニイの檻房につれて行つた。私はこの檻房の人を曾つて見たことはなかつた。勿論ゴッフが私の方へ見向いて低聲で『これがムーニイだ』といつて聞かせなかつたら、私はそれが誰れであるかを知ることはできなかつた。……

私が階下に下りた時に、フキッケルトが私にいつた『お前はムーニイを見た。疑もなくこの男だ。ではないか？これがわれ〳〵の必要な男だ』と。私は彼れに對して何んとも答へなかつた。何故かといふのに私は前日既に私がムーニイを知らなかつたこと、そして彼れと同人であることを確めることができなかつたこと、そしてゴッフが私に知らせてくれなかつたら、それがムーニイであることを知ることができなかつたことを話した。』『フキッケルトはそこで私をパアク警察署へつれて行つた。……それから私たちが裁判所へ歸つた時に、檢事フキッケルトが私にいつた

『私がやつつけようと思ふのはこの二人(ムーニイとビリングス)、娼婦の兒だ。……偖

てマクドウナルドよ、お前のことは充分面倒を見てやる、私たちがお前のホテルの費用を持つてやる。私は長官に會つてお前に少しばかり金をとつてやる。お前は今のホテルにゐたいと思ふか？』と。私が居たくはないと答へると、「お前の好きなホテルを探り出すことができる」とフヰツケルトがいつた。そして私がアルパイン・ホテルに行きたいと話したら、フヰツケルトは傍らのゴツフに命じた「この男をアルパイン・ホテルにつれて行つて室をとつてやつてくれ、そして支配人に巡廻の勘定書きを拵しらへて探偵局へ差出すように話して置いてくれ」と。私はそれからは毎日警察へ行くこととなつた。毎日々々私はフヰツケルト同じ問題について話したが私は、決して私がムーニイを證明することができたとはいはなかつた。……審問の二週間ばかり前のことであつた。私はフヰツケルトの事務所にゐた。「偖て、これ等の男（ムーニイとビリングス）を有罪にすると一萬七千五百弗の報酬がある。そして私が彼等をやつつけた時には、お前の手にこの報酬の最大の部分が入るであらふ」と、こうフヰツケルトが話した。二、三日してから警察官のヂョーヂ・ペイレイなるものが檢事フヰツケルトの命令だといつて私のホテルにやつてきて、ビリングスの審問の終るまで私の室を去らなかつた……ペイレイは始終私についてゐた。そして私に他に何人とも話しをすることを許るしはしなかつた。」

「私は大陪審官の前へ出る迄は大抵毎日檢事フヰツケルトの事務室にゐた。私は大陪審官の前に出る前に、フヰツケルトから私の證言について豫習をうけてゐた。彼れは私にムーニイとビリングスとを積極的に證明せよといつた。私が大陪審官の前にゐたのはごく短い間であつた。私はフヰツケルトが教えてくれたとほりに證言した。それからフヰツケルトは裁判の審問についても私に豫習を與へてくれた。審問に先だつ土曜と日曜とに、私は彼れの前で私の話を幾度か〱繰返へさせられた。そして彼れは、私が若し報酬について聞かれた場合には、そんな約束はないと答へろと話した。私はフッケルトの話したとほり答へた。……ビリングスの審問に至るまでは私は一度も檢事補のエドワード・キユウナとは話したことはなかつた。ムーニイの審問の一週間に、キユウナが私を迎えによこした。彼れはビリングスの審問における私の證言を讀み終つてから、「お前は、お前がこの男の旅行鞄を置くのを見た時間は、午後一時五十分とするよりも一時三十分としたほうがよかつた。……お前の知つてゐるとほり、それを一時三十分としたら、彼等に、爆發の場所から一哩ばかり離れてゐるミツシヨン街のエイラアスビルデイングへ戻つてゆく時間を與へることとなるから」と語つた。その日の審問が終つてからキユウナが私に「お前は立派にやつてのけたと話した。」ムーニイの審問の前にフヰツケルトは私に、キユウナの数へたとほりに答へること、私の證言を少し變へること、彼れが十萬弗以上に値ひする男をつかまへたといふこと、そして彼れは私のいふ何ごとでも聞き入れるであらう、といふことを告げた……それがウムーニイ夫人の審問の前に、キユウナは、私のそれまでの二度の證言を讀んで聴かせておいて、私に告げていふた「お前らは法廷で頭を上げて歩いて出ること、そしてこの前と同一の答辯をすること、旅行鞄の置かれた時間は前と同様に答へること、それから若しその同時刻にスチユワート街とマアケツト街の間で自働車を見たかと聞かれたら然り、私は見たと思ひます、と答へること、それからまたその自働車の種類について問はれた場合には、私はフオドだと思ひます、と答へなさい。」……私が桑港を立ち去らうとす

る時に、私はマシソンに報酬のことを尋ねた彼れはまだ何んにもそれは受取つてゐないといつた。…私はロス・アンゼルスで一人の婦人からこの報酬の一部分は既に支拂はれて陪審官の間に分配されたといふことを聽いた。マシソンはこれを否認した。そしてエドウ夫・人（證人の一人も報酬を請求してきたが、報酬は第一に私に分けるといふことを話した。それから一年たつて私は報酬のことについてバルチモーアから手紙を書いたがマシソンはまだ受取つてゐないといつた。一ケ月ばかり前にも請求したが、マシソンからの返事はなかつた」

……………………

オックスマンなる人も、マクドウナルドなる人も、みな彼等の證言が買收された證言であることを明らかにした。マクドウナルドの詳細な告白によれば、彼れは明らかに檢事から買收の申込みを受けた。彼れは探偵局からホテルの一切の費用の支拂をうけた。彼れの證言は悉く檢事によつて製造され訓練され、豫習をうけた證言であつた。そして檢事の背後に何ものかの控えてゐることも明らかとなつた。この二人だけではない、他の證人としての、エドウ夫人とその娘も、スミス夫人も、ドレーパア・ハンドなる人も、みな買收された證人であるといふことが明らかになつた。ムーニイの有罪を宣告した當の判事も、流石にかうした事實の暴露に如何にもすることができないで、檢事總長に宛てて彼れがムーニイに對する宣告は僞證に基いてゐるものであるといふことを書き送つた。しかし不幸なるムーニイは、殺人犯の囚人として、過去四ケ年の久しきに亘つて、サン・クエンチンの牢獄の闇い運命に鎖ざされてきた。そして今ま尚ほ牢獄のうちに繋がれてゐる「殺人犯人」である。

三

私は米國へきてから、アプトン・シンクレイアの二、三書を面白く讀みました。「一愛國者物語」といふのが彼れの最近の著書でした。この書物の讀者は、こゝ、ピルグリム・ファザアスの國において、「獨立宣言」のもとに建てられた國において、「民主主義のために世界を安全にする」といふ有名な一句によつて世界に知られてゐる大統領の國において、資本家階級と警察または檢事局との間に如何に微妙なる關係のあるかといふこと、そして米國の資本家階級が勞働運動を壓迫するために如何に陰險な手段を用ゐつゝあるかといふことまたそして米國の勞働運動者が如何に違法なる迫害のもとに置かれてゐるかといふことを一つの興味ある物語りとして讀み終ることができるであらう。否な、彼れに從へば、米國における急進分子の刑罰權は、最早や官憲の手にあるのではなくして、それは「大資本家（ビッグ、ビヂネス）」の掌中に握られてゐるのである。コロラドの炭坑ストライキの時には、炭坑會社は軍隊に給料を拂つたし、また彼等自身の私設探偵で新らしい義勇隊を組織した。勞働者はこれは「兵士の政府」と呼んでゐた。このストライキの間に軍隊を指揮してゐたものはバルドウキン探偵のフエルツといふ男であつた。その同じことがワシントンやオレゴンの木材產地において見ることができる。オクラホマやカンサスの石油產地においても、ミシガン、モンタナ、アリゾナの銅產地においても見出すことができるであらう。また西ペンシルベニア州では凡ての地方官憲が鋼鐵會社の社員であるといふことを見出すであらう。そしてまた旅行者がブリストルへ行けば、そこでは「ナショナル・インデイア・ラバア會社」がこの町の警　官の三分の二に給料を支拂つてゐることを見出だすであらう。凡ての米國の大都市では雇員協會が組織されてゐて、勞働組合と、

「赤」とを撲滅するために基金を積み立てゝゐることは何人も知つてゐる事實である。ロス・アンゼルスではこの雇主協會は百萬弗の基金を積立ててゐたが、その結果は有名なフラワース事件として現はれた。フラワーアス、詳しくいへばシドニイ・アール・フラワースとはロス・アンゼルスにおける兵士新聞「塹壕」の主筆であつた。彼れば世界大戰の始まつた時には南アフリカにゐたが、妻と兒とをこゝに殘して、進んで兵籍に身を入れたほどにカイゼルと戰ふことに熱心な、米國の一市民であつた。彼れは最初英國軍隊に參加することができなかつたが、後に加奈陀軍に加はつて、フランス及び白耳義の戰線に三年間戰をつゞけた。彼れは二回までも傷き、一度は毒瓦斯に襲はれ、その結果一つの肺臓を失つたのである。彼れはその戰ひを終つてから、彼れの妻子とともにロス・アンゼルスの彼れの家に歸つてきたが、彼れが家に歸つた時には、彼れの友僚、歸還兵の團體が、この町の「商人及製造業者協會」のためのストライキ破りの機關となつてゐることを知つた。カイゼルの專制と戰つた彼れは再び資本主義の專制と戰はなくてはならないことを信じないではゐられなかつた。そこで彼れは先づこれに對抗する世界戰爭歸還兵同盟とい一團を組織した。「塹壕」といふのはこの團體の機關紙であつたのである。彼れは商人及製造業者協會から屢々買收の交渉をうけた。また彼れの事務所には常に探偵が出入することに氣がついた。ある時彼れは「ポオル・ライトマン」といふ未知の人から一通の手紙を受取つた。封筒のうへには明らかに「シカゴにて」と書かれてゐたが、消印は「ロス・アンゼルス」とされてゐた。「ポオル」はこの手紙のうちで、フラワースの雜誌を稱讃してから、この雜誌を海外の社會主義者や勞働團體に送つてやつたら甚だ有益に思ふといふ、意味のことを書いてゐた。フラワースは成程それはいゝ考へだと思つた。彼れが手紙を讀み了つてから二、三分とたゝないうちに一人のオウストリア人と名乘る不思議な男が彼れの事務所に尋ねてきた。そして彼れに、彼れの「塹壕」を送るために、多くの外國の社會主義者の名を知らせてくれた。その知らされた人の多くは、アメリカの軍隊が正に進まうとしてゐたシレシアの人々であつた。フラワースは不思議な「オウストリア人」の教へたとほりの宛名に手紙を書いて、郵便函に投げ入れた。それから一、二時間して、「商人及製造業者協會」の事務所で目覺えのある二人の男がフラワース夫人を訪ふて、お前の良人は大罪惡を犯した、それは終身懲役に價ひするものだ、この懲役を免れる方法はたゞ一つ、「塹壕」の發行を中止することがあるだけだ、一時間内に何とも決心せよ、といつて脅迫して立ち還つた。フラワースもまた間もなく檢事局に出頭せよといふ電話をうけた。彼れは檢事局に行つた。そしてこゝにも二人の見なれた男——「商人及製造業者協會」で見なれた二人の男が立つてゐるのを見た。またそしてこの二人の男が、お前は「塹壕」の發行を中止するか、それでなければ終身懲役だ、三分間のうちに何れとも決定せよ、といふのを聽いた。フラワースは「塹壕」の發行を中止することを拒絶した。それから一時間とたゝないうちに、彼れは檢事局から、「外國にある敵國の出版物と連絡を有する。」といふ理由のもとに逮捕の命令をうけてゐた。またそれから數日の後に例の「ポオル」からの第二の手紙がとどいた。この手紙も前のと同じような拙たないタイプライタアで書かれてゐたが、今度は手紙の中に「アプトン・シンクレイ」と署名してあつた。シンクレアは彼れの友であつた。彼れはこの手紙を受取つてから直ぐにシンクレイアに電話をかけて手紙を出したかどうか

を問ひ合せて見た。この手紙は、凡て革命的な文字で滿たされてゐた。無論それはシンクレイアからのものではなかつたので、彼れはシンクレイアの意見通りにこれをある辯護士のもとにもつて行つた。彼れが辯護士のもとから事務所に立ち歸ると、そこにはもう四人の不思議な男が入つて居た。そのうちの一人は、曾つてロス・アンゼルの市長をしたことがあり、猥褻罪を犯したことがあり、今まは檢事局の一探偵を務めてゐるセバスチヤンといふ男であつた。この猥褻犯人がフラワースに第一に要求したところは、彼れの凡ての手紙を出して見せろといふことであつた。猥褻犯人は、百數十通もある手紙を一々嚴重に調べあげた。幾度となく封筒のうへに書かれてゐる文字に注意した。そして最後に彼れの努力が無効であつたことを知つた時に、フラワースにいふた、「お前は狡猾な男だ」と。フラワースは大陪審官の前で一應の取調べをうけてから直ぐに起訴されてそのまゝ牢獄へと投ぜられてしまつた。そして彼れの「原稿」はその印刷機械とともに破壊されてしまつたのであつた。この事件が「フラワースの事件」として米國の諸新聞紙を賑やかした「大反逆事件」であつた。そして裁判所が二回の審理を行つた結果は、二十五人の證人のうちで、買收されたゐたものが二人、十七人は刑事探偵であることが明らかになつた。そのうへに、この證人のうちには三人のI・W・W・の會員と稱するものが加はつてゐたが、この三人どもが、I・W・W・の間にあつて、犯罪を敎唆しつゝある刑事探偵であること、そのうちの一人は既に四十ケ所の倉庫に放火したことがあり、またそのために毎月三百弗の給料を受取つてゐるといふ事實が明らかになつた。そしてこれ等の犯罪がみなI・W・W・の犯罪である！シカゴの共産黨員ウヰリアム・ブロス・ロイドの事件においても同じような事實が發見されたといふのはこのロイドが國事犯人として訴へられたのは共産黨の綱領中に、何ものかによつて書かれた、ある一項のためであつたが、この「綱領」の作者がフレイナアといふ男であるといふこと、この男が「革命時代」といふ過激主義宣傳の猛烈な雜誌の主筆であつたことそしてまたこの男が政府の刑事探偵であつたといふことが暴露されたからである。例　アンダアリンのいつたことは眞實であつた「政府が共産黨の一部を所有してゐることと共にこれを働かせてゐることは疑ひのないところである」と。

米國の資本家によつて、如何に驚くべきほどの「産業探偵」（インダストリアル、エスピオナーヂ）が使用されてゐるかといふことは、米國において、「勞資協調」を標榜しつゝある有力なる一雜誌「ニユウ・レパブリツク」によつて詳細を發表された。今年の二月十六日號から連載されたハワードの「勞働探偵」（レエヴオア、スパイ）といふ興味ある長篇論文がこれであつた。彼に從へば合衆國における凡ての鐵道會社と、「合衆國鋼鐵コオポレーシヨン」と「西部聯合電信會社」と、その他の同様なコオポレシヨンとはみな、彼等の常設秘密探偵を使つてゐる。國民選擧人協會と、國民製造業者協會と「ナシヨナル・フアウンダアス・アツソハレエーシヨン」とは、雇主協會の秘密探偵を使つてゐる。多くのストライキ保險會社も秘密探偵を使つてゐる。そしてこれ等のほかに合衆國には夥しき數の探偵會社が組織されてゐるのである。それ等探偵會社は「協調者」、「サアヴイス・コオポレーシヨン」、若しくは「技師――商業的、財政的、產業的」といふような名前で知らてゐるが、そのうちでピンケルトン探偵局は三十五ケ所の支部をもつた大組織であり、ウヰリアム・デエ・バアンスも同じく三十五ケ所の支部をもつており、秘密

探偵アール・チエ・コオチはクリーヴランドの勞働組合を「所有」するといふほどの勢力をもつてをり、シカゴにはムーニイ及びローランドを初めとして一打ばかりの探偵會社ができてゐる「シール探偵會社」は古るくから知られてをり、また立派な組織をもつてゐる。紐育の「シャーマン」は就中最も大規模のものであつて、「有田ドラッグ」が東京大阪の大新聞の紙面を買つて「忠君愛國」を鼓吹する一愛國志士」として知られてゐるごとくに、常に紐育タイムス」の紙面を買つて「産業調和」を鼓吹する資本家の「犬」として知られてゐるのである。彼が一年に支拂つた所得税が二十五萬八千弗であつたといふの事實によつて見てもこの「犬」が如何に大きな「犬」であるかを想像することができるであらう。ハワード曰く、過去數年間に於ける勞働新聞は、勞働組合内に於ける探偵の發見といふ記事によつて滿たされてゐた。一年ほど前にはニユーヂャーシイの米國羊毛會社」それが發見された。去年の夏に起つたブルックリン及びデンバアの鐵道暴動においても、去年の春に起つたウオータアベリイの眞鍮鑄工においても、セント・ルイスにおいても、シカゴにおいても、北西部地方においても、カリフオルニアにおいても、探偵と「鑄工破り」とは實に同義であつた。十二月にはアクロンにおける勞働組合の重要な役員の十名が秘密探偵であつたことが暴露された。……クリーブランドの秘密探偵コオチはこの町のストライキの時に「コランバス勞働新報」を買收して自分の手でその新聞を書いてゐた。紐育ではある秘密探偵が五百冊の「共産黨宣言」を勞働者の間に散布したことがあつた。シカゴではシャーマン會社の秘密探偵がセルビヤ人とイタリヤ人との間に人種的惡感を挑發するために働いたといふ理由のもとに告發されたことがあつた。……實に産業探偵は全國に瀰漫してゐるのである。産業關係委員會がアメリカにおける工業上雇主と勞働者とについて審問した時には、産業探偵制度の活動についての話を知つてゐない一人をも發見することはできなかつた。名判事アンダアソンは曰く、正しき心の人はかくのごとき仕事(探偵の)を拒絶する。産業上における探偵制度のためになされた害惡は、過去數十年の間に計へるに遑がない。この制度が除き去られるに至るまでは、雇主と被傭者間、または被傭者の間だけにおいてさへ、穩やかな人間關係の存在することはできない。それは人間の信用を破壞する。それは人間の愛情を殺戮する。それは憎惡を増大する、と。

四

穩やかな人間關係の驅逐、信用の破壞、愛情の殺戮、そして憎惡の増大!私は一判事の口から、こうした言葉を聞かせられるためにこのアメリカまできたのではなかつた。私は常に美しいものを求めてゐるからである。何年か前のことであつた。私はウヰルソン大統領の著述のうちから一學生のアメリカについての感想を見出すことができた。その一學生は、アメリカへきて十年間學窓に生活した後ある時アメリカの人々が、一學校に集まつて盛んに討論を交はしてゐるのを見た。彼れはこゝにアメリカの政治が、人々の自由なる討論によつて指導されつゝあるのを見た『私は米國にきて十年になつた。そしてこの夜、私は初めて私が心に思つてゐたアメリカを見たあらゆる種類の人々が一堂に集まつて、完全に平等の立場に立つて、彼等の全體に關係ある事件について、腹藏なく討議すること――これが私の夢みてゐたアメリカであつた』と私はこの一節を讀むで、何年か前に、まだ見ぬアメリカを、心のうちに美しく描いてゐたことを、今にして思ひ出さないではゐられな

のである。私は心からこうしたアメリカが見たかつた。私の滯米中にリンコーンの誕生日がきた。私はその日の午後をブロウドウヰイの一劇場に送つた。そして一人の辯士の口からリンコーンの名の吐き出された時に、數千の男女が盛んなる喝采を送るのを見た。またその日の朝の新聞において〻あつた。新大統領ハーチングの次のような言葉を見出した、『われ〳〵はリンコーンの精神に歸らなくてはならない』と。リンコーンの精神！『貧困の前に自由、黄金の前に人間』と叫んだのはこのリンコーンの精神ではなかつたであらうかウヰルソンが初めて大統領の候補者として立つた時に、アメリカの人たちは彼れの美麗なる演説のうちから次のような一言を見出だすことができた『前代において、半世紀の前に私たちがその愛國心を否定し、または疑問とすることを許されない、また人民に淨化することを欲する、しかしそはアメリカの人民自身がアメリカを見るようにそれを見ることができない支配階級の精神の浸透した多くの人々が政治に結びついてゐた。この時に、これ等の政治家は、人民の立場から見てゐない、』と叫びながら、大リンコーンの不朽の人格が立ちあがつた。私はこのイリノイスから起つた高い、痩せた人格のことを思ふ時に、私はこの國の支配的勢力とは無關係な、そして事物を開放の眼をもつて見、それをしつかりと見、それを限なく見、而かもそれを肩を擦り合はせて相會つたものが見るように見ようとかゝつた一個の自由人を描くのである』と。この一個の自由人、支配階級の立場からでなくして、人民の立場から、事物を開放的な眼をもつて互にその肩を擦り合はせてゐる人が見るように見る、痩せた高い、イリノイスの「自由人」の面影を、私たちは今のアメリカのどこに見出すことができるのであらうか？私たちはリンコーンまで立ち歸らなくても、ウヰルソン大統領の美辭麗句のうちから、多くの美しいアメリカを見出すことができるであらう。『われ〳〵の求むるものは慈善ではない。自由である。然り、嘗つて人民の精神を淸涼にし、且つ新らしくしたところの葡萄酒の一杯である』とまた曰く『私は主人が私に如何に仁惡であらうとも、私は主人のものには生きないであらう。そはアメリカのできた所以のものではなかつた。アメリカは、他の各人が彼れ自身の運命を支配するのと同じ機會を人がもつために造られたのである』とまた曰く『われ〳〵は政府を人民に歸さなくてはならぬ。……私は合衆國の人民の大統領となることを求める』と。この『人民の大統領』然り、彼れ自らがいつてゐるとほり、タフトやルウズベルトのように『トラストの大統領』ではなくして『人民の大統領』であるウヰルソンの治世において、『人民の精神を淸涼にし且新らしくしたところの葡萄酒の一杯』は果たして今ま一億五百萬の米國の人民、就中三千萬の勞働者とその家族との口に盛られつゝあるであらうか？

私は既にこのウヰソンの治世において「ムーニイ事件」の存在してゐることを話した。またそして米國の勞働運動の間に如何に『信用の破壞、愛情の殺戮、憎惡の增大』が行はれつゝあるかの一例を話した。私はもつと進んでこうした物語をつゞけてゆきたいと思ふ。

支那舶來

最近上海で出版した「藝術奇談」中の所載事項は、流石に新教育を受けた新進操觚者の編纂丈あつて、今日の專門家をし肯首せしむるのみならず、寧ろ之によつて大に學ぶ所あらしむるものがある。

假へば「僥倖成名」と題するもの、則ち名醫の誤の功名に關する一篇を摘譯せば、該著者は、劈頭第一

　世に醫を業とする者極て多く、而てその技は實に神に近き人固より乏しからず。乍然偶ま僥倖名を成すものも亦少しとせず、云々

と說き、左記の如き逸話を連載して居る。

　昔、紹興に某公と稱する大官があつた。偶ま江南の地に轉任を命ぜられ、印綬を帶び、一家眷族を携へ水路任地に趣く途次、丁度常州を通過する頃、同行中の妾なにがしなる者、忽ち臥蓐の人となり、將に四苦八苦の大騷となつて而かもその容體は危險刻々迫り來る樣子である。時は恰も夜半ではあるが寛に舟を奔牛に泊め、不取敢一僕を上陸せしめ、何れにか醫を覓めて直に同行すべく嚴命した。僕奴は上陸はせしものゝ、素より不案內の地であり、而かも暗黑の眞夜半のことであり、頗る當惑したが、進むに從つて幸ひにも宿場らしい一村落に出ると、丁度一軒の旅人宿が啓いて居つて、あるじが門を閉めやうとして居る所である。匆々に走せ付けて急病人が出來たことゝ此邊に醫者の有無を尋ねると、あるじの話に依れば、呂城に往げば甑某と言ふ名醫があるが、約十余里の遠方のことであれば、とても直ぐには間には合さぬとのことである。僕奴は病人は殆ど九死一生であるから、誰か外に醫者は居ないかと切りに歎願した。その時あるじの言ふには、それならば、自分の家から東へ十二軒目に一人の醫者が住むで居る、然し錢であるから豫め注意して置くとのことであつた。

　使の者は有頂天に醫者の家に馳せて、無暗に表門を敲いた。街路に面した二階の部屋に寢て居つた錢先生が聞いて障子を啓けて何用であるかと怒鳴ると、僕奴は不取敢使の趣を告げて、是非とも賁臨を拜して往診して呉れと賴む。此時錢先生は、階下の妻君に向て「直ぐ往くのだから、顏を洗ふ水だ」と大聲叱呼した。すると表に待つて居つた僕奴はこれを水で患者の顏を冷すことゝ感じ違へて遂に奔逸し飛ぶが如くに舟まで戾つて來て、一刻も早く患者の顏に冷水を注ぐ樣に醫者が命令したと告げた。僕奴の報告に從つて產婦の顏面に冷水をブッかけると、今まで伸肢し全く夢中であつた患者が、ウーンと一聲を揚げて、不覺深く呼吸する拍子に赤坊が飛出した。

適ま其所へ先の錢先生が駈けつけて來て、母兒共に相當の手當をする。主人公始め船中一同は漸く愁眉を啓いて、俄に景氣付き、皆の者が低頭平身して厚く醫者を稱ふ。錢先生は得意滿々、產後の手當を懇ろに言ひ渡して引き上げた時は、既に東天の白む頃であつた。此事あつて以來、此人常州附近は素より遠く南北に亙つて產科の名人として、久しく盛名を恣にした。

〇或頃仁和の銅山村に、童葉と呼ぶ凡醫があつた。一日近隣の寒村の農家から使者を以て迎ひに來た。醫者は隣家の舟大工に命じ、舟を操らしめて病家に來て見ると、患者は所謂「心胸痞悶」で、胸がつかへ何物も胃の腑に落ち付かぬ病氣である。腹は飢つてひもじくてたまらないが、何か飲食すれば瞬間に吐いてしまふ。食事をせぬこと既に十有余日。全く餓鬼道に墮ち入つた有樣である。先づ開胸調胃劑を與へて、些飯の御馳走になつて居ると、流石は醫家丈あつて珍らしく美酒である。不知〳〵の中にツイ飲み過ぎて、醫者先生その家を辭して舟に戾る頃には、もはや蹌踉て一步は高く一步は低く、舟に上らんとして全くヒヨロ〳〵である。船頭は

「ソラ其所には先刻買つて來た桐油が一瓶ある、ヒックリ翻して貰つては困る」

と大聲あげながら、飛むで往つて、身を曲げ油壺を取りあげて安全な所に仕舞ひ込むだ。

　醉バラヒ先生は、口の內で

「桐油、桐油、アー桐油か」と呟きながら將に船舷にモグリ込まんとする時、醫者を河岸まで見送つて來た者が、大きな聲で

『先生さきのお藥は何で飲めば宜しい乎』

と叫むだ。醉パラヒ先生、不相變「桐油〱」と呟きながら、ゴロリと船內に仆れて、直に鼾聲雷の如くである。

丁度獨山村に歸つた頃に、醉も醒めて居つたから、船頭は

『先生あなた先刻病家の人に桐油で飲めとオッシャッたが、一體ドンナ藥を調劑なさつたのか、桐油を飲めば大變でスッカリ吐して仕舞ふじやありません乎』

と問ねると、先生始て泥醉中の囈語に容易ならぬことを言ふたことに氣が附いたが、其場は巧に強辯して、心中頗る平かならず歸宅した。倩ら考ふるに、アノ容體の患者に吐瀉が始まれば忽ち元氣逸散してもはや救濟の方法が無いと、大に心配し始めたが、元來道は甚だ遠く而かももはや桐油は飲むで仕舞ふた後であれば、正直者でも根がツボらし男であるから

『ナニ仕方が無い、自然の成り行きに委すさ』

と獨語しながら、其晩は寢て仕舞ふた。

すると翌朝未明に切に門を敲く者がある。醫者先生テッキリ患者が病死したものと心得て青くなつてしもふた。試に妻君を遣はして先生は留守である旨を告げて、使者に應接せしむると、病家の使者の話によれば、桐油を吞むで間も無く、患者は多量の汚物を吐き出し、それと同時にスッカリ胸が開けて氣分が良くなつたから、粥を喰べたいが喰はしても良いか惡いかを伺ひに來たとの事てある。乍然醫者先生は全くこの言葉を信ぜなかつた。多分故意に虛僞の口上によつて醫者を誘引して地方官衙に訟へ出づるものと邪猜したから、俄に裏口から飛び出して陝路謝村に往つて密かに病家の樣子を窺へば如何にも患者は果して漸瘥して頗る家內は元氣附て居る有樣であるから、漸く安堵し、知らぬ顏で急いで奔せ附けたかの如くに、病家に這入ると、全家擧つて大歡待である。彌よ安心して患者には稀薄粥（シーハン）を授與へ、尙別に胃腸清理劑を授けて大得意で歸つて來た。

實は患者は感冒の後、始は痰が胸膈に閊へて居つたのが次第に飲食が通過せない樣に成り、幾人も醫者を更へて見たが何等の效驗が無かつた。それが前記童某の指圖の桐油が猛烈なる去痰劑となつて、勢ひ能く大きな塊の痰汁を吐出したのである。兎に角爾來童某の名聲は天下に轟いて當時內科の大名醫に數へられた。

◎沈懷清とは「藝術奇談」の著者の友人である。或頃、沈氏は何處かで天然痘に感染して來て、身體遍く紅班があるにも不拘、所謂「痘瘡不透」であつて、則ち「內攻」の容態である。家人は非常に心配して一名醫を邀へて診斷して貰ふた處、大に悲觀的の宣告をした。兎に角、投藥を乞ひ方箋を齎らして市中に藥を買ひに遣つた。

時恰も梅雨の候であつて「驅穢辟濕」潮風を除くの妙效ありと言ひ傳へ、地方の慣習として、室內で大黃、蒼朮、白芷の類を燻（いぶ）すが故に、醫者の投劑と一所此等の藥草をも買はしめたのである。使の者が此等の煙藥と痘瘡の藥とを同所に置いたのを、家人が誤つて煙劑の方を煎じて病人に飲して仕舞ふた。所が夜中になつてから患者は非常に躁熱し、七轉八倒見るに堪へぬ程に煩悶する。全家擧つて驚惶茫然たる有樣であり、人々咸な必然死すべき者と覺悟した。然るに夜が曉くと共に紅斑が裂れて、紫色がふき出し、同時に全く解熱して病人はスヤ〱睡り始めた。醒めると共に彌よ痘瘡となり紅斑は一杯に上漿して來る、續て加膿し終に結痂して、約半月の間に全く平癒したことがあつた。

この事に就て、著者は、一私人の家人の家庭內に起つた出來であるから、別段人にも識られないで濟むだのであるが、これが若し醫者の家內にでも發生したならば、嘸ぞ人口に膾炙されるであらふと言ふ意味で左の如く記して擱筆して居る。

此事出之本家。故聞絕少。若醫者爲之。則咸稱國手名家。轟傳通邑矣。嗚呼世之負不虞之譽者。比比此類也。（上田恭輔）

洛陽閑話

□萬有引力のニュートン先生は時計と卵とを間違つて煮てしまつたさうだが京都の哲人西田幾太郎博士は之れに敗けない大縮尻振りを發揮した、最近ある席上で博士自身の口から某氏に告白した事實談がある。時と場所を逸したのは殘念だが、或夜博士は知人の外國人A氏の晩餐に招かれて出かけて行く途中、何う間違つたものか之れも心易い外人B氏の家を訪れてしまつた 而も應接室でB夫人と對談しながら尚且つA家の客室で之れも陣中同樣招待されて來たB夫人と主人の現はれるのを待つて居るのだと思ひ込んで居たのだから一寸と間違ひの二乘と云ふ複雜さだ。幾らまつてもA家の人々が顏を出さないので「奥樣、御主人は何うなすつたのでせう。」と訊ねると、「主人は數日前から旅行中です」と話の合はない返答に、始めて其れと氣付いた時は約束の時間を十分超過して居たさうだ。何だか心理小說にでもなりさうだ。

□或る席上に京大哲學の大家連が集まつて活動寫眞を見た回數を調査したら、西田幾太郎博士は昨年の夏動物園で屋外映寫を一回見たきりで、「活動寫眞と云ふものは面白いものかね」と奇問を發したので、波多野精一博士が傍から「幻燈よりは面白いよ。」

□朝永博士は獨逸で二回、而もその一回は日本の景色の實寫だとさ。田邊博士は絶對に知らず。波多野博士は日本でクオヴアディスのを一度見て居ると云ふから一番通人だ。

□昨年十二月の本誌に戯曲「孔雀城」の雄篇を發表した高倉輝氏は更に其の姉妹篇「切支丹轉び」を執筆すべく過般九州天草に旅して實地調査をなし遂げて以來不眠不休で筆を執つた爲め可成り烈しい神經衰弱に罹つた。處が過日成瀬無極氏等と宇治に遊び山間で一羽の病鳥を捕獲して旅館花屋敷に飼養を依頼して歸たが二三日して或夜、机に凭れた假寐の夢に、件の鳥が現はれて「折角勞つて戴きましたのに私は今死にます」と人間の言葉で云つた相だ。ところが翌日花屋敷から手紙で前夜のその時刻に鳥が死んだ事を知らせて來た。友人達は神經衰弱者の夢だと笑つたが、成瀬無極氏だけは「私は神祕な出來事を否定しない」と眞顔になつて居る。

□土田杏村氏が一昨年の秋流感後肺尖加太兒に冒されて生命危篤を傳へられた時、友人の醫家石崎光瑤氏に勸められて大阪醫大の堀見克禮教授に診察して貰つた。所が堀見教授は牛肉食療法身體改造論者で最初卵二個牛肉二十匁に始まり五日毎に五匁宛增加さす、一箇年後には朝食に卵十五個、晝食に牛肉二百五匁と云ふ分量になつてしまつたが土田氏は京大で哲學をやる以前は東京高師で博物を專攻して居ただけに博物史觀に立脚した信念から意外の困難と闘つて二百五匁の肉を一時間半でペロと平げたさうだ。お蔭樣で今日では「學界の活動家」を以て許されて居るが、堀見教授から食物日記の檢査を受けて居る。

□京大講師の恒藤恭氏は今でこそ少壯經濟學者として關西學界に鳴らして居るが一高時代は文科に籍を置て常に首席を占め芥川龍之介が第二位だつたさうだ。當時懸次郎の變名で學生小說を作つて居た事は著名の事實だが帝大法科在學中は時に學課をエスケイプしては畫架と三脚を携へて郊外の野に日を暮したものだ。

□京大の文科の酒豪は第一が濱田博士、それから朝永博士、波多野博士の第三位は一寸と意外だ。濱田博士は過般、歐洲より歸朝の途中上海で講演を依頼されビールに醉つて「ホロ醉い講演」をなし禁酒會員から抗議を申込まれたさうだ。（浩生）



マーガレット・サンガー女史

情慾産兒制限の哲學

マーガレット・サンガー女史

新マルサス主義の鼻祖として、全世界の耳目を聳動せしめつつある、サンガー女史が特に本誌の爲めに起稿したる雄篇にして、この世界的大問題を知らんと欲するものの必讀すべき大文字である。女史は今後も本誌を通じて自分の新研究を發表さるることとなつた。

一

バーナアド・ショウは、十九世紀に於ける最も革命的な發見は、家族の子孫を任意に制限するの發見であると云つた。この發見は漸く百年來のことであるが、現代の西洋文明の全體と極めて密接に結合せられてゐる。基督教會の指導者等に非難し排斥せられながらも、産兒調節の觀念は、歐羅巴と亞米利加とにその根を確かりと下ろし、益々其力を加へてゐる。最も初代のそして最も偉大なる經濟學者の一人たるジョン・スチュアード・ミルは、『大家族を造るといふことが、飲酒又は其の他の生理的不節制同様に思はれるやうになるまでは、道徳上の進歩は大して期待することは出來ぬ』と書いてゐる。現在及び近き未來に於ける、世界的の問題としての、産兒制限の分派や、背景や、並びに中樞的の意義を理解せんが爲には、吾々はこの簡單な、しかも人類生存の中心問題の起原と進化とを、徹底的に理解しなければならぬ。一度び吾々がその歴史を理解したならば吾々は一層容易に産兒制限の生理學的衛生學的、及び優生學的方面を理解し、又た一層容易に、平和な、安全な、そして一般的に豊かな世界を建造するに要する國際的武器として、産兒制限が演じなければならぬ役割とを理解するやうになる。故に本論文に於て私は第一に、マルサス主義、新マルサス主義及び産兒制限の歴史的、哲學的方面を考察し、第二に、その衛生學的、生理學的方面と、現在及び近き未來の世界的問題に對する

關係とを考察しよう。

二

一七九八年に、英吉利の教會の牧師トーマス・ロバート・マルサスは、その有名な『人口論』の第一版を出版し、一八〇七年にはこれが改訂され、一層徹底的の形態となつて世に現はれた。歴史上最も思想界を刺戟した書物の一であり、爾後今日に至るまで、有ゆる大思想家の注意を惹いた劃時代的な論文に於て、この英吉利の牧師は、この挑戰的な『人口學說』を陳述した。この學說は今なほ滿足に、又は安全に論破せられたことがない。『人口論』に於ける彼の目的は、『(一)今日まで、人類が幸福に向つて進むことを妨げてゐる原因を探求し、(二)將來に於て一切是等の原因を除き得べき可能性を考査する』ことにあつた。彼は、一つの大なる原因は、『すべての生物が、其爲に準備せられた食物以上に增加するといふ、不斷の傾向』とあると主張する。この學說は、印度、支那及び日本をまで含む世界の有ゆる國國から、彼が蒐集した、研究と統計とに基づいて居るものであつて、マルサスをして『之を抑制しなかつたならば、人口は二十五年每に倍加して行く、卽ち幾何級數的に增加する。....然るにこの不斷の增加を支持する食物は、決して同じ容易さでは得られない。...現今の土地の平均の狀態を考へると、吾々の產業に最も好都合な事情の下に於ても、生活資料は恐らく算術級數的の速度以上で之を增加させることは出來まい』といふ結論に到達させた。

この餘りに迅速な人口の增加に對しては、マルサスは二つの抑制方法があることを示した。なるべく產兒數を少くする傾向は、すべて之を豫防的抑制と呼び、死者を多くする原因はすべて之を積極的抑制と呼ぶ。積極的抑制の中には戰爭、飢饉、傳染病、洪水、殺兒、流產等があり、豫防的抑制の中には、禁慾獨身、晩婚、結婚後の節制等の習慣がある。そしてマルサスは晩婚と『道德的節制』とを主張した。卽ち三十八歲位にならなければ、人間は結婚してはならぬといふのであつた。けれども之は間もなく、實行不可能なことが分つた。

一八七七年に英吉利に於いて組織せられたマルサス主義同盟は、マルサスに依つて論定せられた人口の中心的大原則を基礎としたものではあつたが、人間の天性を一層よく理解した結果として、早婚と、思慮ある科學的な避姙とによる產兒制限とを主張した。すべての歐羅巴諸國及び北米合衆國に國際的の加盟者を有するこの團體の綱領は、マルサス主義並びに新マルサス主義の教義を巧みに要約したものと見ることが出來る。卽ち次の通りである。

一、人口は（意織的に且つ有効に制限せられない限り）生活資料以上に增加する不斷の傾向を有すること。

二、この傾向を妨げる抑制は、積極的の抑制、卽ち生命破壞による抑制と任意的抑制、卽ち出產兒の制限との二つに歸着すること。

三、積極的卽ち生命の破壞による抑制は、疾病に依る幼兒及び成人の夭死、餓死、戰爭、殺兒等を意味すること。

四、任意的の抑制卽ち產兒の制限による抑制は、（一）結婚の忌避又は結婚の延期により、或は（二）結婚後の思慮に依つて子供を制限することとであること。

五、結婚の延期は、單に多くの不幸を生むのみならず、又た性的罪惡と疾病との有力な原因である。之に反して早婚は性的純潔と、家庭の悅樂と、社會の幸福と個人の健康とを確保するものである。けれども男女が適當なる衣食住と教育とを與へて能力以上に子供を生むことは。大なる社會的犯罪であること。

六、人口過剩は貧窮、無智、罪惡、疾病の最も有力な源泉であること。

七、遺傳的疾病に罹り、又はその他の原因で、明かに生理上知識上、道德上、滿足な子供を生み或は育てることの出來ない者が、親とならぬことは、甚だ重要なことである。

八、人口問題を、その有ゆる必要な方面に就いて、十分に且つ公然と議論することは、社會に取つて必須缺くべからざる事柄であること。

マルサスの人口の法則が、歐羅巴の思想界に如何に深甚な影響を與へたかは、それが十九世紀に於ける歐羅巴の科學思潮を全く一變した學說たる、ダアキンの自然淘汰說の基礎となつたといふ事實に依つても知ることが出來る。

新マルサス主義が現はれて、歐羅巴各國の人々に、種々の科學的避姙法を敎へるまでは、マルサスの敎義はまだ主として哲學問題として議論せられてゐた。そして此敎義の反對者は、人口の增加と產業に於ける機械組織の結果として生產が增加せられ、一層廣く且つ公平に分配が行はれ社會のすべての階級に必要な多量な食物が得られると論じてゐた。しかし事實と統計とは、この議論を打破つた、機械的生產の增加に伴ふて絕えず安價な勞働と幼年勞働との要求が增加して來た。機械組織は、生產と分配とを增加することに依つて、人口增加の根本原因となつた。十九世紀の歐羅巴と亞米利加合衆國とに於ける機械的過程の出現と共に、過度に人口の密集した大都會の發達が始まり兒童は一種の經濟的資產となつた。出產率は甚だしく增加

無情な産業制度の哀れな、幼い犠牲は、極く少いさな頃から工場勞働に送られた。

亞米利加の醫師チャーレス・ノールトン博士の『哲學の成果』と題する著書を出版した廉に依つて、一八七七年に英國の有名な一議員チャーレス・ブラッドラーフとアンニー・ベザント夫人とが逮捕せられた爲に、避姙説は廣く世に知れ渡ることになつた。勞働者や貧乏人の間に彼等を活動させまいとした、企圖は全く徒勞となつた。廣く知れ渡つた結果は、その教へが廣く採用せられることになつた。比較的良く暮してゐる勞働者階級は直ちに産兒制限を實行し始めた。そして之は工場に於ける幼年勞働を禁止する新法律と共に英蘭と蘇格蘭に於ける、比較的熟練あり知識ある勞働者の間に、大いに出産率を減少させることになつた。この時分から、單に英國ばかりでなく、歐羅巴の進歩した諸國に於いて、激しい出産率の減退が始まつた。

間もなく、低い出産率には低い死亡率、特に低い嬰兒死亡率を伴ふことが發見せられた。そして子供の生れるのは少くなつたが、生存するものが多くなつた。總體の影響は、子供と子供の生命とに、一層大なる價値を置くといふ傾向に向はせた。これが眞實疑ふべからざることは、殊に和蘭に於て、人口の豫防的抑制は、マルサス説の説く所と反對な結果を表はした位ゐである。家族制限の採用は、實際に於て人口を增加し健康にした。

マルサスの批評は一八七七年に於けるチャーレス・ブラッドラーフとベザント夫人との有名な事件に依つて、歐羅巴の思想界の前面に持ち出されたが、是等の批評は、何時も人口過剩説の神髓に觸れてゐなかつた。此學説に關する誤解の根元は、靜的の人口過剩と、動的の人口過剩とも云ふ可きものとを、區別し得なかつたところにある。そこで私は、この二つの意味を簡單に定義する。

靜的人口過剩とは、一國の人口が、必要な食料の供給と生活必需品とを獲得する力一杯の限度まで增加した狀態である。

動的人口過剩とは、一國に於ける人口增加の率が、(出産又は移民による)、是等の新來者の爲に追加の生活必需品を供給し得る率以上に上ぼる場合に起るものである。

こゝに忘れてはならぬことは、マルサスにせよ、今日の新マルサス主義者にせよ、食物の供給に、絶對的の限度のあることを主張しては居らぬと云ふことである。尤も少數の國、例へば支那の如きは、殆んど食物供給の限度に近づいてゐるものと見做すことが出來、從つて事實上靜的に人口過剩となつて居ると云ふことが出來る。けれども吾々の重きを置くのは動的人口過剩であつて、この動的人口過剩こそ、貧困、疾病、人口の過度

な密集、嬰兒死亡、失業、發狂及び低能などと一層直接な關係を有するものである。

一八七七年に、直接に英國勞働者の間に行はれた宣傳と運動とは、出生率を減じ、從つて嬰兒死亡率を低める上に、眞面に且つ深刻な影響を齎らしたことは、私の指摘した通りである。然し之よりも一層雄辯に、家族制限の實例を語るものは、和蘭の場合である。和蘭ではこの學說は、政府の同意によつて、人民の間に扶植せられた。卽ち一八八一年以來、人民は避孕に關する知識と學問とは學ぶことが出來るやうになり、一八八五年からは、產兒制限をも含む衞生上の知識の普及を目的とする臨床講義が、全ての婦人に對して開かれてゐる。これは一八七八年の、アムステルダムに於ける國際醫學大會において、此問題が熱心に且つ徹底的に討議せられた結果として、實現せられたものであるが、其成績は極めて良好であつて、今やアムステルダムとヘーグとは、全西洋の如何なる都市よりも、嬰兒死亡率が低いまた今日までの成績に於いて、旣に人民の繁榮に於ても、人民の體力と身長と壽命に於ても、著るしい增加を見たほどである。そこで此の喜ぶ可き結果を、英國の下層階級一の戰慄すべき體力の衰退と其の密數と勞働過度と比較するならば、產兒制限が國民の力を發達せしめる効力は、毫も疑ひを挿むの餘地もないのである。

過去三十五年間、和蘭に於いて事實上一般的に實行せられて來た產兒制限の結果は、大戰中に實際上の試驗に付せられたが結果は著しく良好であつた。繰返しておくが、和蘭では一八八五年以降、新マルサス主義同盟は、醫師や產婆や看護婦を用ひて、貧民の間に、產兒制限の最善の科學的方法を敎へてゐた。そして之に對しては、政府は同意と援助とを與へてゐたが、一八九五年以降は、公益上の一協會として登錄せられてゐるのである。

產兒制限實行の成功を證明する、最も著るしい證據は、彼の優生學大會に於いて、和蘭の人民の身長は世界中の何れの人種よりも、一層急速に增加してゐるといふ事實が認められたことがある。和蘭人は五十年間に、身長四吋以上を增したのである。

身長五尺七寸以上の、兵隊に選拔せられる青年の步合は、一八六五年以來二四・五パーセントから四七・五パーセントに增加したが、一方、五尺二寸五分以下の步合は二五パーセントから八パーセント以下に低下した。和蘭の軍隊が動員せられた時、その最高軍事標準を以てしても兵役の適格者が九五パーセントまで役に立つことを示した。之を亞米利加合衆國の實例に比較せよ。合衆國では驚くべきことには、男子は僅かに六五・八

ントだけ役に立つ。而かもそれは、一段低い軍事標準に照してのことである。

この大問題の研究の爲に、私は戰前戰後、數度和蘭を訪ねたが、自分の觀察は是等の統計を裏付ける。彼の國で見受けるすべての子供は、相應な身なりをしてゐる。勞働者階級には、個人的にも一般的にも、一層よく衞生が保たれ、より美しき道德上知識上の進歩がある。道德も亦より高い水準線上にある。賣淫は。これに伴ふ破壞的疾病の附き物と共に、衰微に赴いてゐる。身長の增加の外にも、一つの大なる證明は、絕えず壽命が增進しつゝあることである。これは確かに生理學と財政との進歩の證據である。一八九〇年から一八九九年まで、和蘭人の平均年齡は四六・二才であつたが、一九〇〇年から一九〇九年に至る間に於ては、五一・〇才となつた。これ等の數字は、產兒制限が未だネザーラルドに達しない以前既に之が主張せられ、實行せられてゐた、スカンディナビヤ諸國の數字に比べ得るのみである。更に其結果はかの宗教家や道德家や軍國主義者等の如く反對者が怖がつてゐたやうな、恐るべき結果の少しも起らなかつたことを指摘するのも、亦意義あることである。出產率が低いにも拘らず、和蘭の人口は增加しつゝある。疑ふまでもなく、これは醫學の進歩が之を助けて、和蘭人をして最も科學的衞生的な產兒制限法を實行せしめるからである。即ち和蘭の人種は、營養不良者や帶患者から徵募せられてゐないのである。和蘭では、貧乏人は徹底的に產兒制限を教へられてゐるが、富裕者の家庭は、他の歐羅巴諸國のそれと比較して、それ程まで減じては居らぬ。

之に反して獨逸は大陸にあつて家族制限の實行を阻止したり禁止してゐる小數國の一つである。獨逸では政府も社會民主主義者も、產兒調節に反對してゐる。生れたほどの子供は國家の訓令でよく世話され、よく教育せられ、然る後に彼等が能率の高い、役に立つ市民として、社會に送り出されることゝが獨逸帝國の誇りであつた。しかし何よりの難事は、この哲學の大立物自身も承認して居る通り、斯やうにして子供達の健康と能率とのために盡力した國家が、その領土の狹い限界の爲に、その子供等の折角の働きを利用しきれぬことが餘りに多かつたことであつた。彼等は人口過剩のため、他國に壓し出されていつたので、國家は彼等の勞働から得る收穫を失ひ外國の競爭國が獨逸の教育的文化的長所の收穫を刈取つたのである。これが即ち獨逸の帝國主義者の領土擴張論の根據であると私は信じてゐる。今日その帝國は一敗地に塗れた。幾百萬といふ子供が餓死しかけて居る、そして此の激しい生存競爭に耐えて存續する人

やも、永久に苦められることは免れない、けれども記憶すべき大事實は、獨逸は封鎖の結果敗北したことであるそれは軍隊に對する鞏固な基礎ともならず、死傷者に代る新しい能率の高い補充兵をも供給し得ない飢餓に瀕して衰弱してゐる人民の、惡い影響の著しい一つの例である。されば最もよき意味に於て、新マルサス主義は、一つの徹底した國民的哲學として支持せらるべきこと明かである。

戰爭の勃發より數年前、獨逸の産兒調節論者は、大家族の結果としての營養不良と群居とは、壯丁の體格の低下となつて現れつゝあることを指摘した。社會民主々義者もまた産兒調節に熱心に反對したが、民衆はこの論者と同じやうに自覺し始めてゐた。一九一三年八月二十九日伯林に於ける大きな集會で、ローザ・ルクセンブルグとクララ・ツエトキンとが、勞働者を「出産罷業」に反對させようと試みた。然るに五千の聽衆はその集會を産兒調節の叫びに轉じ、辯士は代る〲立つて、社會主義者を降壇させた後に、産兒制限を主張し、民衆を貧困、營養不良及び群居の如き最惡の弊害と、ひどい傳染病の禍害とから救ふ唯一の有效な手段であると述べた。今日獨逸は無制限の繁殖の罰金を拂つて居るのである。

序に、興味ある一事實を指摘して置かう。最近の戰爭に於て爭闘に打勝つたのは、歐洲のうち出産率の低い國々であつた。佛蘭西は特にこの一例である。佛蘭西に於ては産兒調節は單なる量よりも、質の價値を重んずる佛蘭西人の習慣から起つて、既に數十年來一般に實行せられ、承認されて來たことである。この結果は戰爭を俟つまでもないことであつた。即ち佛蘭西に於ける生存競爭はさほど激烈でなく、人民はこの世のよい物を享樂することが出來た。その結果、家族生活が鞏固になり、その一致が保たれた。子供は、世話と、教育と、生存を續けるための資本との最大限度を保障されて居つた。佛蘭西が世界中で最も繁榮してゐる國の一つであること、同國に於ける一人當の金貨の量は、他の歐洲諸國の既に知られてゐる平均額を超過してゐることは、多く出産率の低いお蔭である。大戰前の佛蘭西には洗ふが如き赤貧と云ふものは知られて居なかつた。佛蘭西人の節制や儉約といふことも考へなければならないが、小家族制度が確かに、程よい賃銀と、程よい家賃との代りを務めたのである。佛蘭西の母親の著しい特色は、子供に對するその愛情である。それは子供の數が少いだけ、濃厚の度を増してゐる。彼女にとつては子供が一切である、母親は、その幸福、その幼時からの教育及び訓練に間斷なく氣を遣つてゐる。佛國婦人に再び大家族を持たせようとする現在の運動にも拘らず、單なる數

を愛させるようにすることは到底不可能なほど、集約的教養の精神が佛國人の性質に深く喰ひ込んで居るのである。

北亞米利加は、初期の移住者には、自然的富源の點に於ても產業的可能性の點に於ても、無盡藏の寶庫と見えて居つた大なる未開墾地で、新マルサス主義は最初は何等の興味をも起させなかつたほど、人口過剩の危險はありさうもなく思はれて居つた。けれどもこの『大きな溶爐』の中に、移民の大群が流れ込んだ。十八及び第十九世紀には、『新世界』は、舊世界のすべての過剩人口が流れ込む容器となつた。機械組織と大鐵道組織との迅速な發達に伴れて、殆んど魔術に依つてのように、忽然として大都會が出現した。人口は非常に、殆どマルサスの想像より以上に迅速に增加した。そしてこの無制限の人間の繁殖力に伴れて、貧困、有毒な傳染病、流行病、失業、勞働爭議、人種的僻見、他國よりの移民に對する制限と排斥といふような手におへぬ大問題が起つて來た、貧困を防止し、人口問題を解決するどころか、私自身の國、合衆國は、今日、西洋諸國のいづれにもまさつて重大な、甚しい狀態にある貧困と人口過剩の問題に當面してゐるのである。

私が始めてこの問題に注意するようになつたのは、貧民窟の貧しい女の間に、十四年間看護婦として、勞働者として働いてゐた時であつた。當時私は、牛や羊や豚を保護するために、政府が何百萬弗を支出してゐる一方、女や子供がどしどし死んで行く驚くべき人間浪費の量を發見して戰慄したのであつた。私は每十人の子供について一人は一年以內に死ぬことを發見した。合衆國で出產のために死ぬ母親は、世界中のどの國よりも多い。合衆國政府兒童局の報告によれば、是等の大仕掛な母親と子供の死の大多數は、防止し得るものである。是等の貧しい婦人は、常に私に、看護婦として彼等を扶けることを求めた。彼等は、生存して、健康な男女となる機會をもつ、より少き子供を欲してゐたのである。

亞米利加の有ゆる階級の婦人の間に、墮胎を行ふことが廣く流行してゐる原因を、私が始めて研究して見た時に、私は合衆國政府の法律も、合衆國を成してゐる諸州の大部分の法律も共に、等しく醫師や看護によつて敎へられる場合にさへも、產兒調節の知識の普及を禁止してゐることを發見した。歐羅巴諸國を訪うて母親と子供との狀態を研究した後、私は亞米利加の婦人に人種衛生學と健康法とを敎へる運動を始めるために、我が國へ歸つたのである。

私の『產兒調節』運動は、マルサスの人口學說の基礎に立つものでなく、人口の增加を抑止せんが爲めのものではなくて、母

親と子供との恐るべき浪費を豫防せんがためのものである。これは、多くの無力な望まれざる嬰兒――豫め夭死に運命づけられた嬰兒――を既に子供のあり餘つてゐる家庭に生み落しつゝ、救ひを求める幾千の貧しい、疲る婦人からの悲痛な叫びに對する解答である。亞米利加の都會のゴタ〳〵した貧民窟に、忙しい產婆と、その店に種々の型の嬰兒の棺を陳列してゐる繁昌する葬儀屋とをよく見受けるがそれは最も悲慘な光景の一つである。是等の貧しい婦人は、恐らくマルサスとその說の新しい信奉者の哲學を理解するには餘りに無智であらう。彼等は、それが彼等の差し迫つた必要に對するに直接の解答であるが故に、產兒調節を理解するのである。『產兒調節』といふ言葉が、宏大な亞米利加大陸を涯から涯まで風靡しすべての大都會に產兒調節同盟が組織せられた理由である。

產兒調節の知識の普及を禁止する法律は尙ほ存在しては居るが、それは既に久しい以前から亞米利加の富裕な聰明な、上流及び職工階級によつて無視せられて來た。無制限の出產は、無智な、どん底の貧民階級のみの習慣である。統計學者と著名な科學者とは、無制限の繁殖は、密集、疾病、失業、不潔、無智と互に關係し合つて居ること、どの國でもかやうな繁殖が抑制せられぬ限り、その人民全體が漸次に退化し墮落することを、我々に示してゐる。これは產兒調節の哲學が、今日世界のすべての國民に對して與へる大なる警告である。

また一面に於ては、合衆國に於ける私の運動は、母親の保護と子供の訓練とに對する世間の注意を大に喚起した。歐羅巴人は殺す目的で要らない嬰兒を棄てる古代の東洋の習慣を久しく忌み恐れる振をして來たものである。今や飢餓に惱まされてゐる國の餓死しかけてゐる親達がそれを行ふのは尤も至極であるといふことが、明白に認められて來た。けれども『世界中で最も富める國』が、二十五萬人の子供を、死なせずに濟む場合に見す〳〵殺すといふことには、何等の道德的の口實もない。我々の罪の方が大きくはあるまいか。產兒調節論者の銳い批評に依つて遲蒔の活動を促がされ、且つ亞米利加に於て子供の生活に對する條件が改善せられぬ限り、婦人が全然子供を生むことを拒むかも知れぬといふ豫想に驚駭して、立法家は今や母親と子供との保護のために、一定の金額を割宛てなければならぬと主張してゐる。產兒調節論者は、母親と子供に對する生活條件が亞米利加に於ては改善せられるどころか、却つて惡くなつて行つて居ることを示した。この點に於ては亞米利加合衆國よりも進步した國が十四ケ國ある。故に、產兒調節の哲學と宣傳とは世界にとつての中心的な第一の重大事でありながら、なほ最も

不幸と危險とに曝されてゐる、人間の生活に注意を向けることに大なる貢献をしたのである。

衛生的方面を取扱かふ前に、それの近代產業に對する關係に觸れることを怠るならば、產兒制限の哲學の、最も重要な方面を看過することになる。近代の資本主義は、人口の動的過剩が持續して、依然として雇主階級の爲に豐富な勞働を提供し、斯くして多數の失業者の重みに依つて、賃銀を引き下げて置かうとする。そして玆に、疑ひもなく危險がある。ガルトン國民優生學實驗室の統計の示す所に依れば、失業者は一代二代すると、勞働不能者となり、國家と資本家とに對する死の重荷となるといふことである。それにも拘はらず、嬰兒の製造とその供給の範圍とは、尙ほ依然として偶然と情慾に委せられてゐることは野生狀態に於ける動物と大差がない。情慾產兒制限の哲學は、組織せられた勞働者と勞働階級とに、次の如き事實を力說するものである。

勞働の歷史は、人間がその生產的能力を、その生殖力と同一の水準に引上げようとして、徒らに努力した歷史である。それは始終一貫失敗の戰鬪であつた。我々は平和をも繁榮をも、得ることが出來なかつた。我々は決して近代の機械組識と資本主義の進擊と壓迫とを制御することが出來なかつた。勞働者は自分自身の貧困の爲めばかりでなく、有ゆる世界中の不幸の爲に餘りに一途に、資本家を非難しようとする。けれども之には他の原因がある。即ち生殖の本能であり、生物有機體の放縱な繁殖力である、それが即ち最初の貧困を齎らしたものであり、それが即ち、最初の飢饉を創造したものであり、それが即ち、すべての人類を驅つて現今の產業的狂亂に走らせ海を越えて新しい陸地へと、戰爭と放浪と缺乏と飢餓とに追ひやつたのである。即ち嬰兒の大軍が、人間生活を、無限の苦しい勞働の重荷と化したのである。勞働者と組合とは養ふ可き口數を制限するといふ主義を、その戰ひの標準としなければならぬ。そして彼等は常に、之に似寄つた主義を承認して、之を其團體組織に適用し來つたのである。即ち組合は一定數以上の新入者をその職業に入れることを拒み、斯くて彼等は賃銀標準の維持を計つてゐる正に之と同一の理由で、產兒の制限は、何處の國に於ても、生活の標準を維持する爲に必要である——これはその國に行はれてゐる特殊な經濟組織の如何に拘らす、眞實である。それは東洋人にも西洋人にも、等しく眞實である。賃銀奴隷は、無制限な勞働者の生殖の避くべからざる結果であつて、彼等が同一の悲慘な狀態を永續させる新しい單位を、どし／＼創造する限り、それは繼續するであらう。

以上は一個の敎養としての產兒制限の歷史的、哲學的背景を畧說したものであつて、產兒制限の敎義は、斯ような背景の裡から驚く可き力と、益々有力な力とを得て居るのである。それは今や科學的の段階に到達した。そして其起原となつた學說又は哲學の裡からよりも、今や寧ろ事實と數字との裡から、科學的經驗と正確な統計との裡から、その力と議論とを引出すに至つたのである。

三

人口論の發見者たり、ダーウインの進化論の先驅者たるマルサスが、人口過剩に對する豫防法として『道德的節制』及び晚婚を主張したことは上に述べた。マルサスは人間の本能に關する十分の知識をもたなかつた、彼は『道德的節制』即ち出來得る限り長く性的結合を控ふること、又は結婚年齡を、婦人にとつての危險時代(月經閉止の時期)との間に、非常に多くの子供を生むことが不可能であるほどの晚婚を主張した。これが狹き意味に於けるマルサス主義である。ところが新マルサス主義者は、これは實行し難く、且つ多くの不幸と悲慘との原因となることを逸早く看取した。玆に至つて社會學的信條が、心理學的信條となつた。節制は、個人にとつても、社會にとつても、心理的にも生理的にも、最も暗黑な、最も不幸な結果を伴ふものである。克己と獨身とは、敎會の神父が獎勵しても、決して西洋の大衆に依て實行されたことがなかつた。そして却つて、かように性の表現を隱微な、秘密の通路に追ひやつた結果、賣淫とそれに伴ふ害惡、即ち疾病や發狂が、西洋の社會に確乎として根を張つたのであつた。

マルサスは結婚をしたいといふ欲望と、實際の結婚との間に障碍をおいた點に於ては、隨分思ひ切つて居つた、けれども一旦男女が結婚した以上、彼は性的節制をすゝめようとはしなかつた。けれどもその學說は、他の人たちによつてその當然の、有效なる結論にまで運ばれた。ジエームス・ミルは其著『政治經濟の要素』(一八二一年)の中に、『大なる實際問題は‥‥產兒數を制限する方法を發見することである。』と云つて居る。

此問に對する答へは、殆ば即時に現れた。一八二三年には、『既婚の男女へ』宛てられた所謂『惡魔的ビラ』が出版せられ、過度の大家族の經濟的不利益を明かにしたこの時以來今日に至るまで、產兒調節論者は、歐羅巴と亞米利加とに亘り、種々の書物やパンフレツトを出版し、家族制限に關する生理上、實際上の問題についての明白な敎示を男女に與へたのであつた。さういふ敎示は、科學的探究と、特に佛蘭西に於て、便利で有效であることを證せられた民衆の慣用手段とを共に基礎として出來

たものである。

けれども、十九世紀の後半に於て、パスターが原種說を發見して以來、非常な進步が爲された。生命の原種說は、產兒調節に應用されて、男性細胞（精子）を無能ならしむる作用につけられた名である殺精の實行を招いた。けれども姙娠を防止する完全な、又は安全な方法があるであらうか、といふ質問は屢々發せられた。さういふ方法は、（一）全然婦人のみに依らねばならぬこと、（二）男子にも女子にも何等の不便を與へぬこと、（三）絕對に確實で信賴し得ること、（四）極めて廉價なること、を條件とする。

最初にまづこの質問に答へるとしよう。姙娠を豫防するのに周到な注意を必要とせぬ魔術的な方法、完全な方法は絕無である。然し歐米におけるこの運動の經驗は、この點に關する不注意は、その中の多くが墮胎を行うて非常な利益を得、又は性的豫防法に關するさういふ極めて必要な敎育を婦人に與へることを欲しなかつたりする醫者の無智と無能とに多少基いてゐることを吾々に示した。かようにして婦人は、其等の問題に關する知識を、友達や隣人に仰ぐの外ないのである。そこで彼等は、孰れも非科學的な、非衛生的な形を帶びてゐる數々の矛盾した說を敎へられる。性的衛生に關する思想の極めて幼稚な、そして絕えず姙娠の恐怖を抱いてゐる貧困な婦人にとつては、これはすべて何だか分らぬほど混雜して居るのである。

歐米の一流の大家が、すべての性的衛生の問題についての安全な、個人的な敎訓を婦人に與へ、それによつて不本意な姙娠を避けさせるような產兒調節の臨床講義を、吾々の都市のすべての貧民街に普及させることを緊急と認めたのは、この混亂の故である。『一オンスの豫防は、一ポンドの治療に價する』といふことを、歐米の社會は悟るようになつた。傳染病に對する最大の武器は、衛生及び養生法である。傳染病は、不潔と密集との中にその恐るべき死をはぐゝみ、且つ傳播させるのである。息の窒るような思ひをさせられ、衰弱させられ、營養不良に陷し入れられてゐる不潔な人間の集團は實に、結核、窒扶斯、花柳病、トラホーム、その他あらゆる社會的害毒の醱酵所であるかゝる病氣及びその素質は多く遺傳する。そして是等の大なる刑罰が、その禍を傳播し、繼續するのは、世界の至る所における密集した、非衛生的な、不潔極まる貧民窟の子供等の中である。

これを防止し根絕する唯一の方法は、衛生、殊に個人的清潔と、かゝる惡疾及び遺傳病者の間の出生率のみである。有名なる和蘭の賢者ルードガース氏は、個人並びに社會の幸福の爲に

缺くべからざるこの個人的衛生法は、事實上產兒調節の豫防法と一致して居ることを指摘した。機械的方法及び防腐液は徒に粘膜を刺戟するに過ぎないといふ反駁もあるが、しからばそれと同様の障害は歯の衛生法に對しても言ひ得る事である、しかし今日歯を清潔に保つことが、健康に絶對に必要であることを否定する人はあるまいと思ふ。今日機械的方法を用ゐてゐる文明社會の男女の數は益々増加し、そしてそれより一層多く、毎日甚しきは一日に數回、その口歯を清潔にする爲に、產兒調節の爲に、使用せらるゝと同じ、もしくはより强烈な防腐液を使用しつゝあるのである。しかしかような豫防法を以て『不道德』もしくは『不自然』だと考へる人はない。

爭はれぬ數字と、最も明白は、最も精確な統計とは、不潔にして不衛生な狀態と傳染病とは、大家族と子澤山との避け難き伴侶であるといふ結論に我々を導く。清潔、個人的衛生、及び衛生的な環境が、產兒調節及び子供の數の少いことと相伴ふのも、それに劣らぬ眞理である。又吾々は、是等のより少く、より清潔な子供らは、より不幸な子供らの死亡率を高めるような疾病の犧牲となることも少いことを知つてゐる。

婦人が個人的衛生及び清潔の必要を教へらるべきことは、今日殊に緊急を要するのである。花柳病の傳播を防止し、不本意な出產を避ける唯一の安全なる方法としては、この外にない。

產兒調節の臨床講義を通じて衛生法の大問題を教へることとなれば、この貧困にして不幸な婦人達に即時の救助を與へ、而して性的、個人的衛生法並びに豫防法に關する教育を、彼等自身の個人的必要と利益といふ、大きな根本的な基礎に基いて努めることが出來るといふ非常な利益があるのである。かように吾々の運動は、外部から、又は上から强制されたものでもなければ、慈善や博愛でもなく、單に切なる要求に對する避け難き回答であるに過ぎない。それは婦人の自助を助けるのみである。そしてそれは、社會及び世界改善のいかなる計畫、いかなる綱領、いかなる政策にも増して、眞に世界の害毒を防止するものである。それは一つの害惡が既に發生してゐるところへ、更に二つの害惡を發生させることなく、實に社會的害惡を根絶するところの、唯一の安全な、確實な方法である。

上に述べたやうに、既に和蘭に於ては著しい効果を收めてゐる臨床講義は、吾々の泰西文明にとつて、殊に人口の増加によつて戰爭の損失を回復しようと努力してゐる佛蘭西の如き國にとつてさへも、最大必要の事である。これは墮胎といふ有害な行爲や、不本意なる出產の必然的結果——高き幼兒死亡率——に代ふるに、科學的な產兒調節を以てする任務を帶びてゐる。

或知名の大家が、合衆國に於ては毎年、少くとも百萬の墮胎が行はれてゐると告げ、他の人々は、もつと多いと主張し、合衆國の政府でさへも、小兒死亡率の過度に高いことを指摘してゐるのを見る時、我々は墮胎に伴ふ危險と死とを豫防する爲め科學的産兒調節が、その目的に於て眞に衛生的であり、且つ優種學的であることを否み得ない、有産階級の婦人等は、醫者の手を藉りて産兒調節を實行してゐる間に、貧困な婦人は、自己の意思に反して母たることを避けるために、餘儀なく墮胎を行はせられてゐるのである。墮胎は、合衆國の法律によりて禁ぜられてゐるにも拘はらず、施術者たる産婆や醫師の告訴されることは甚だ稀である。道徳家や大家達はこの事實を見て見ぬ風を裝ふてゐる、これはそれ程一般的に、生命及び健康の大なる危險を賭してまで、實行されてゐるのである。

かようにして、米國に於ては、家族制限は實行さるべきや否やは最早や問題ではない。それは有害無害の種々の方法によつて、既に實行されてゐるのである。そしてこれが多くの母親の死を説明してゐるのである。故に米國の社會が解決せねばならぬのは、家族制限は墮胎によつて行はるべきか、産兒調節によるべきか、即ち健全な、安全な科學的方法をとるか、又は婦人は依然として屢々最も大切な場合に遂行される、外科的手術に走ることを餘儀なくせらるべきか、の問題である。屢々墮胎に伴ふところの不治の損傷——出血、血毒、子宮穿通と共に種々なる不姙症、盆血、惡性疾患、轉位、神經病——を考へて見ると、これらの質問に對する論理的な、健全な回答は唯一つしかあり得ない。醫學界の泰斗ドクトル、マクスヒルシュが、この問題についていつてゐるように、『墮胎と産兒調節とを同時に攻撃する人は、傳染病を退治しようとしながら、消毒を嚴禁する人に似てゐるとも云へよう。何故ならば避姙法は、墮胎と戰ふ場合の重要な武器だからである。米國は一八七三年以來、刑法によつて避姙用具の配布と調整とを禁ずる法律を有してゐる。故に亞米利加は、墮胎の數に於て、世界各國に冠絶してゐるのである。』

嬰兒殺しや棄兒も同じく今日の強制的制限の結果である。孤兒院、慈善院、捨兒收容所は、米國の公衆の富を現に盛んに吸收し、今後益々盛んに吸收しようとしてゐるのである。しかも一方精神薄弱者や發狂者の多産を防止するためには、實際上、何等の手段も講じられてゐない。個人的及び家族的衛生の立場からばかりでなく、社會の幸福といふ點から見ても、産兒調節は、焦眉の急務である。

來るべき世代、即ち未來の國民と種族との見地から見ても、

產兒調節の實行は、又となく正しいものである。既に調査を行ふた歐米のどの國でも、大家族の中に生まれた子供は、小家族の間に生まれた者に比較して、殘存するもの未來の男女となるもの〻少いことが證明された。又、子供は間を置いて生まるべきであることが發見された。もしも婦人が、彼等の精力を回復する爲に必要な時日を置かずに、矢繼ぎ早やに、つゞけ樣に姙娠するならば、その弱つた體質と肉體の衰弱とは、その子供の上に不利益な影響を與へるであらう。經濟的見地から見ても、大家族は食物及び營養の不足に陷り易い傾向がある。偉大なる新種族を創るに必要なる第一の條件は、强壯にして健全な母親の發達にあるのである。

それは單に理論ではなくて、無制限の多產と悲慘との間の密接な關係を吾々に示して居る、愼重な吟味を經たものである。勞働者の賃銀は、彼が養はねばならない人間の口數に應じて配分せられるのではない。子供が一人殖えることは、家族の全員にとつての負擔を增すこととなる。家庭を維持する爲には、父と母とがもつとはげしく働かねばならぬ。年長の子供も亦早くから働きに出なければならない。かくして家庭は段々に顧みられなくなり、小さい子供等は、其等が無智に對する刑罰として生れて來る時には殊に、益々打捨り放しにして置かれる。種々の救濟所を滿たし、又は慈善事業の際限のない對象であるところの乞食や犯罪者を出すのはかような家庭であつて、人間生活の向上と發展とに資せらるべき富は、かくして消費せられるのである。

產兒調節の反對論者は多く、それが婦人の健康を害し、又は婦人を不姙症に陷れるといふ理由で、その實行に反對するのである。しかしこの非難は誤つて居る。それは產兒調節と墮胎を混同して居るのであつた。度々の墮胎は、婦人に有害な影響を與へ、彼等を不姙症に陷れ得ることは證明された。墮胎は、母親にとつても子供にとつても等しく危險である。これに對しては、吾々の全力を擧げて戰はねばならない。墮胎は屢々妖術及び危險なる傳染病の誘因となる。且それは不幸な婦人が自らそれを行ふ場合には殊に、不成功に終りがちである。そしてその結果、子供に不治の毀害を與へることが少くない。

幾千といふ米國婦人は、殘酷な愚劣な米國の法律のお蔭で墮胎といふ恥づべき習慣に訴へることを餘儀なくされてゐるが、この習慣と戰ふには、その代りに產兒調節を與へるほど、有效で衞生的なことはない。英國の性慾學者ハヴエロツクエリスが云つてゐるように、『墮胎の必要を無くするためには、吾々は主として、姙娠の決心をする上に一層先見の明をもつこと、

且つ妊娠を防止する方法を一層よく知ることに頼らねばならない。加ふるに、母親と子供とを社會的に大に尊重する氣風が起らなければならない。多くの墮胎罪に際して、眞の罪は、産兒調節の自然な、衞生的な方法を知らせることによつて自らの社會的及び職業的義務を果すべきであるにそれを怠り、過去の習慣に對する盲目的な隷從によつて種族の未來に對して取返しのつかぬ犯罪を犯した人々に在るのである』。墮胎は、母性を奴隷狀態におかうとする文明に對する、大なる罪の宣告である。高度の幼兒は死亡率は、餘りに多くの子をこの世に生むことの必然の結果である。是等の薄幸な者に、更に大なる種族的疾患、卽ち花柳病、及びそれに類する一切の傳染病を加へて見れば、社會の負擔とを益々重からしめて居る厄介者の範圍を知ることが出來るのである。

世界中のあらゆる國にてすべての種族とを通じて、現在の狀態は、極度に重大なものである。すべての國を通じて、優良な人たちは未來の人類の質を改善するためにその數を制限して居るに引換へ、營養不良者、病人、及び精神薄弱者は、政治的指導者及び全體としての社會の無智な感情によつて、生殖し蕃殖することを奬勵せられてゐる。單なる數を盲目的に崇拜することによつて、吾々は、それ無くしては個人も、國家も、種族も久しく世界の鬪爭裡に生存することを得ぬ無上に尊い素質、卽ち自恃、獨立、及び健康を失ひつゝあるのである。ある大科學者が最近に指摘したように、この問題を解決するには、適者の増加するのでなく、不適者を減少することが必要なのである。黴毒、肺結核、癲癇、及び半白痴が、合法的にも、非合法的にも、彼等自身の禍ひを子に傳へることを許されてゐることは、それが米國文明の殘酷な事實でない限り、到底信じ得られぬことである。今日はもはや吾々自身を、吾々の子供を、吾々の子供の子供を、保護すべき時ではあるまいか。劣弱者、病人、精神薄弱者の蕃殖は防止せられなければならぬ。吾々は黴毒や淋病の患者が、その毒素を婦人に傳へ、その子を劣弱ならしめ、人類に對して宥すべからざる罪を犯すことを、どう制しようもない。ある大科學者が云つたやうに、『吾々の半分が、斷じて生るべからざりし他の半分を看視し、看護し、扶養して行かねばならぬやうなことに、吾々の社會は立ち到つたのである。

文明社會の將來を包む暗黑の中に、たゞ一の男氣と希望とを與へる要素がある、そしてそれは出生率の減退である、と同じ大家、卽ちウイリアムベーテイソンは述べて居る。吾々にとつて必要なのは、最大量ではなくて、最も完全なるものである。

産兒調節の問題は、將來の大問題、人間社會の改造と再建と

の順序書のうちのいかなる地位を占むるであらうか。私の東洋の讀者は、必ずこの問を發せらるゝことであらう。これに對する吾々の答へは決定的である。私は、人間社會の問題は、科學的に解決せられぬ限り、一つとして解決せられるものでないといふことを、あらん限りの力を以て斷言するものである。吾々は餘りに久しく、政治、感情及び宗教を基礎として、憐れな、もがいてゐる人類の進步向上を企てゝ來た。所がそれは孰れも慘澹たる失敗に終つた。諸氏は最も慈仁な人道的な動機によつて行爲さらるゝこともあらう、そして五つの場合のうち、四つまでは滿足な結果を得られることもあらう。けれども五つ目の場合に至つて、諸氏は他の四つの場合に遂行せられた一切の努力を破壞してしまふのである。諸氏が本能的に親切であるらしく感じたことが、長い間には殘酷なことゝなることは、容易に信ぜられない。けれども吾々は、吾々の感傷的、宗敎的な蕃殖及び多產の推奬によつて、社會の最も危險な、最も不適當な要素に對して、殖え擴ることを奬勵してゐるのである。吾々は、過度の慈善や博愛事業は、單に其等が減少しようとしてゐる害惡を防止する上に何等の効力も無きのみならず、却て實際其等を增大させる根本の原因であることを語り始めたいのである、

大戰は、世界が唯だ一つの社會にすぎぬことを吾々に敎へた何處の都市に於ても見られるやうに、赤貧寄生的階級は、獨立したよく榮えてゐる階級によつて支持せられなければならない。そこで吾々は、人口過剩の國々は、さほど、人口の稠密でない國々の平和と安全とに對する脅威であることを徐々に知るやうになつた。人口過剩の國々が力や結合力は、單なる數量に在るのではなくて、强い、健康な、自己を支え得る人口の發展にあることを覺つたならば、國民的目的に新しい方向が與へられ浪費と戰爭とが少からず減少されるであらう。一國の力と富とは、單なる數でなく、團體的、智的、及び生產的價値ある獨立自恃の男女の數によつて得られるのである。これほど眞に愛國的な信條があらうか。これを世界中に實施したならば、產兒調節は幸福な國民の成長と高度の發達とを可能ならしめる。これ無くしては、いかなる國際聯盟も、爭議と戰爭とを少くすることは出來ないのである。產兒調節は、國民の力と安全との、唯一の眞の基礎である。

產兒調節の批評家は、この信條を以て、消極的、破壞的、退化的なもので『人種的自殺』を伴ふものであるとして非難することを已めない。所が統計はその反對を證據立てゝゐる。和蘭の人口は增加してゐる。身長も增加してゐる。壽命も增加してゐ

る。また産兒調節が實行せられて居る所では、それは必ず個人の衛生及び清潔法と關係して居ることも、同じく明白である。それはより少き、然しながらより良き子供に對する新しき興味を喚起し、その社會的種族的意義を高めるのである。故にそれは、世界の將來にとつて、最も樞要な問題である。

それは吾々に、人類の幸福の問題は、よき出生、よき教育、及びよき社會的國際的組織といふ順序によつて――たゞこの順序によつてのみ――解決せらるゝ三つの部分から成立して居ることを示してゐる。吾々が基礎的な、根本的な第一のものから始めぬ限り、この世界的問題の第二、第三のものを解決しようとする努力は徒勞である。國民と國民、社會と社會、個人と個人との間の鬪爭、隷從、及び戰爭は、この一般的な無智の避け難い結果である。革命は全體としての人類の苦しみを寸毫も減ぜずに、單に階級の變化を來し、新しき特權者の利益のために古き特權者を掠奪するにすぎないのである。生活勞働、相互扶助、自己表現の權利はすべて、不適當者の無制限な多産によつて、無効にし、無意味にせられて居る。産兒調節は、太陽の下における總ての人民に、あらゆる國民を、有福、獨立、威嚴、平和、正義、及び幸福に導き得る唯一の道を指示してゐるのである。

新刊紹介

■**小さな灯**（有島武郎著）著作集十三輯にして『自己の要求』『自分に云ひ聞かせる言葉』以下氏が折にふれ嚴肅なる態度をもつて書かれたる尊き小品を蒐めたるものである（四六版三百餘頁定價金一圓五十錢叢文閣發行）

■**死の家の記録**（永島繁夫譯）ドストイエフスキーの著作中西比利亞の牢獄生活を彼一流の嚴肅さをもつて、極めて深刻に描けるものとして有名なるものである（定價金一圓五十錢新潮社發行）

■**夜來の花**（芥川龍之助著）影燈籠以後に於ける著者の短篇集にして『秋』『鼠小僧次郎吉』『南京の基督』以下珠玉の如き十數篇を蒐めたるもの技巧の美と俟て最近の好著と云ふべきである（定價貳圓五十錢新潮社發行）

■**クロポトキンの片影**（森戸辰男著）（定價三圓日進堂發行）

クロポトキン研究の權威者として大杉氏と好稱せらるゝ著者が、主として人道主義者としての彼れの反面を研究せるものにして意義ある著として江湖に薦む（定價金一圓六十錢、同人社發行）

■**ゴーリキイ傑作集**（昇曙夢譯）露西亞現代文豪傑作集の第四編にして『どん底』『零落れた人々』『惡魔』『退屈まぎれ』の數編を收めたるもの譯文の流暢は云ふ迄もなし（定價金二圓廿錢大倉書店發行）

■**結婚生活へ**（石丸梧平著）『船場のぼんち』『初戀』の著者が最近の長編勞作にして氏獨特の情調の漂へる好著である　定價金二圓内外出版株式會社發行）

■**先驅者**（ロマンロラン著）ジヤン・クリストフの著者として有名なる彼の熱烈なる叫びである（四六版四百頁定價二圓日本評論社發行）

■**思想問題十五講**（伊藤恐編）井上哲次郎氏以下十五氏の論文集である

League of Nations can ever eliminate contentions and war. Birth Control is the only true foundation of national strength and security.

The critics of Birth Control never tire of condemning this doctrine as negative, destructive, dysgenic, and conducive to "race suicide." Statistics prove the contrary. The population of Holland is increasing. The stature is increasing. Longevity is increasing. It is likewise evident that Birth Control is, wherever practiced, correlated with personal hygiene and cleanliness, with individual responsibility and intelligence. It awakens a new interest in, and heightens the social and racial value of, fewer but better children. It decreases the infant mortality rate, it increases the survival rate. It is therefore of pivotal importance to the future of the world.

It shows us that the problem of human happiness is composed of three parts to be solved in this order and this order alone: good birth, good education, and good social and international organization. The efforts to solve one of the latter parts of this world problem are futile unless we begin with the basic and fundamental one. The struggle, the servitute, the wars between nations, between societies, between individuals, are the inevitable consequences of this wide spread ignorance. Revolutions bring only changes of classes, spoliations of privileged persons for the benefit of newly privileged persons, without any lessening of the sum total of human suffering. The right to live, to work, to mutual aid, to self-expression, are all through this uncontrolled fertility of the unfit, made void and senseless. Birth Control points, to all peoples under the sun, the one and only way which can lead all nations to well-being, independence, and dignity,—to peace, justice and happiness.

of Birth Control? My readers of the Orient may well ask this question. Our answer is definite: None of the problems of the future of humanity can be solved at all, I must assert with all the emphasis at my command, unless they are solved scientifically. Too long have we attempted to advance and better poor struggling humanity upon the basis of politics, of sentiment, or of religions. Mach of these has dismally failed. You may act according to the most benign and humanitarian motives; you may even find these satisfactory in four cases out of five; but in the fifth case, you may destroy all the efforts you have accomplished in the other four. It is hard to believe that what you instinctively feel to be kind, is in the long run, cruel. Yet in our sentimental and religious praise of fecundity and fertility, we are encouraging the most dangerous and unfit elements in the community to spawn and reproduce themselves. We are learning that too many charities and philanthropies are not merely accomplishing nothing toward the prevent of the evils they attempt to palliate, but are actually the deep-seated causes of aggravation.

The Great War has taught us that the world is but one community. Just as in any city, the indigent and dependent classes must be supported by the self-reliant and prosperous, so we are gradually learning that the over-populated countries are a menace to the peace and security of the less densely settled ones. When overpopulated countries learn that there is neither strength nor cohesive force in mere numbers, but in the development of a strong and healthy self-sustaining population, a new direction will be given to national aims; and much will be done toward the elimination of waste and war. The strength and wealth of a country are to be sought, not in mere numbers, but in the number of self-reliant and independent men and women, who have physical, intellectual and productive value. Is there any more truly patriotic doctrine? Put into effect the world over. Birth Control would make possible the growth and intensive development of happy nations. Without it, no

and one gains a comprehension of the extent of dependents who are becoming an ever increasing burden upon society.

The present situation, in all countries of the world, and for all races is of the utmost seriousness. While the better types in all countries are restricting their numbers in order to improve the quality of the humanity of the future, the undernourished, the diseased and the feebleminded are encouraged to reproduce and multiply their numbers by the political leaders and the untrained sentiments of society at large. In our blind worship of mere numbers, we are losing sight of the invaluable qualities of self-reliance, independence, and health, without which neither an individual, a nation nor a race can long survive in the world struggle. To meet this problem as a great scientist has recently pointed out, we *need not more of the fit, but fewer of the unfit.* It would be unbelievable, unless it were not a cruel fact of our American civilization, that syphilitics, consumptives, epileptics and semi-idiots are permitted to propagate their own curse, both what is called legitimately and illegitimately. Is it not time to protect ourselves and our children and our children's children? The propagation of the degenerate, the imbecile, the feebleminded, should be prevented. We have no way of controlling the syphilitic and gonorrheic who pass their blights on to women, deteriorate her offspring, and commit and unpardonable crime against the human race. As a great scientist has said: "We have come to this; that half of us are obliged to watch, and nurse, and support the other half, most *of whom should never have been born.*"

In the gloom which shrouds the future of civilized communities, the same great authority, William Bateson, points out, there is one factor which gives encouragement and hope, the decline in the birth rate. It is not the *maximum* number that we need but the *optimum.*

In the great problems of the future, in the programs of reconstruction and re-creation of human society, of what importance is the problem

the ground that it was injurious to the health of the woman who practices it, and that it often renders the woman sterile. This accusation is untrue. It grows out of the confusion between birth control and abortion. Repeatedly performed abortions, it has been proven, may have the most injurious effect on women and may reder them sterile. Abortion is dangerous alike to the mother and the child. It is a practice that must be combatted with all the weapons at our command. Abortions often produce inflammations and dangerous infections. Often they are unsuccessful, especially when an unfortunate woman attempts to induce it herself. The result is frequently a permanent injury to the child.

In order to combat this disgraceful custom of abortion, into which thousands of American women are forced by the cruelty and stupidity of our laws, nothing is more effective and hygienic than the alternative of birth control. As a great English authority on sex, Havelock Ellis, has pointed out, "in order to do away with the need for abortion our main reliance must be placed on increased foresight in the determination of conception and increased knowledge of the means of preventing conception. In addition there must be awakened a great social valuation of mothers and children. There can be no doubt that in many charges of criminal abortion the real offence lies at the door of those who fall to exercise their social and professional duty in making known the more natural and hygienic methods of birth control, and who in their blind servility to the customs of the past are committing irreparable crimes against the future of the race.

Abortion is the great indictment against a civilization that tries to enslave motherhood. High infant mortality rates are the inevitable result and consequence of bringing too many children into the world. Add to these unfortunates the victims of the great racial diseases, tuberculosis, venereal disease, and all transmissible maladies of this type,

of the nation. Birth Control is an imperative necessity at the present moment.

From the point of view of the coming generation, that is of the future of the nation and the race, the practice of Birth Control more than justifies itself. In every country of Europe and America in which investigations have been made, it has been shown that children born into large families have less chance of survival, of becoming the men and women of tomorrow, than the children born into small families. It has been discovered that children should be spaced out. If a woman submits to a rapid and successive series of pregnancies without a sufficient interval between them to recuperate and recover her strength, her weakened constitution and physical debility react unfavorably upon her children. Even from the economic point of view, the large family is more apt to be underfed and undernourished. In the creation of a great new race, the first essential is the development of strong healthy mothers.

It is not merely theory, but carefully tested facts, which indicate for us the close interrelationship between uncontrolled fecundity and misery. The salary of the worker is not apportioned according to the number of mouths he has to feed. One more child in the family is an added burden to the shoulders of all. To keep up the home, the father and mother are forced to work harder. The elder children are forced out to work also at a much earlier age. The home becomes more and more neglected, and the younger children are more and more neglected, particularly as they come into the world as the penalty of ignorance. It is from such families as these that we recruit our dependent classes, our paupers and our criminals, who fill the various institutions or are the endless subjects of charities—thus consuming wealth that should go to the enhancement and advancement of human life.

Opponents of Birth Control have often objected to this practice on

United States, there are very few prosecutions of midwives and physicians who practice it. Moralists and authorities close their eyes to it, so universally practiced is it, though with great risks to life and health.

Thus the question is reduced in America not to whether family limitation should be practiced. It is practiced, by fair means or foul. It explains to a large extent the large number of maternal deaths. The problem that American society must solve is this: Shall family limitation be attained through abortion or through Birth Control? Shall normal, safe scientific methods be employed, or shall women be forced to continue to resort to dangerous, surgical operations, often performed in the most serious circumstances? In view of the permanent injuries that often result from abortion-hemorrhage, sepsis, perforation of the uterus, as well in many cases of sterility, anemia, malignant diseases, displacement, neurosis, there can be but one logical and sane answer to these questions. As a great medical authority, Dr. Max Hirsch, puts the question: "He who would combat abortion and at the same time combat birth control may be likened to the person who would fight contagious diseases and at the same time forbid disinfection. For contraceptive measures are important weapons in the fight against abortion. America has had since 1873 a law which prohibits by criminal statute the distribution and regulation of contraceptive measures. It follows, therefore, that America stands at the head of all nations in the huge number of abortions."

Infanticide and abandonment are likewise the result of the present enforced restrictions. Orphan asylums, organized charities, foundling homes, are becoming a great and greater drain upon the resources of the American public; while practically nothing is done to check the fertility of the feeble-minded and the insane, not merely from the standpoint of personal and family hygiene, but from that of the well-being

to avoid unwanted children.

In approaching the great problem of hygiene and sanitation through the agency of Birth Control clinics, the great advantage is that we are thus enabled to offer poor and unfortunate women immediate relief and to begin their education in sex and personal hygiene and prophylaxis upon the great fundamental basis of their own personal needs and interests. Thus ours is a campaign not imposed from without or above, not a charity nor a philanthropy, but the one inevitable answer to a crying demand. It helps the woman to help herself. And more than any other scheme or program or policy for social and world betterment, it is truly *preventive* of the evils of the world. It does not make two evils grow where one grew before; but it is the only safe and certain way to eradicate social evils at their very root.

Such clinics as these, which have, as I have tried to show, so brilliantly proved their value in Holland, are of the greatest necessity to our Western civilization, even in countries like France where an effort is being made to remedy the losses of the war by repopulation. Their function would be to substitute scientific birth control in place of the devastating practice of abortion and the inevitable result of bringing unwanted children into the world—the high rate of infant mortality.

When one eminent authority informs us that there are at least one million abortions performed every year in the United States of America, and others place the figure even higher, when even the Government of the United States points to an inordinately high death rate among children, we are able to understand that scientific birth control, aiming to prevent the dangers and the deaths from this cause, is truly hygienic and eugenic in its aim. While the women of the wealthy classes are permitted by their physicians to use Birth Control, the poorer women, in order to escape a forced maternity, are compelled to seek relief in abortion. Despite the fact that abortion is forbidden by law in the

Most of these evils, or the predisposition to them, are heritable; and it is precisely among the children of the crowded unsanitary filthy slums, in all parts of the world, that these great scourges are enabled to propagate and perpetuate their curse.

The only means of preventing, of uprooting, is by sanitation and personal hygiene, *and by reducing the birth rate among the carriers of transmissible and heritable diseases.* A great Dutch authority, Dr. Rutgers, has pointed out that personal hygiene, so essential to the wellbeing of the individual and the community, is practically equivalent with preventive methods of birth control. In answer to the contention that mechanical devices and antiseptic fluids are provocative of irritation to the mucus membranes, the same objection might be made of the hygienic care of the teeth, yet we realize today that the proper care of the teeth is an absolute essential to health. Ever increasing numbers of civilized men and women today are wearing "mechanical devices"[1] in their mouths and are daily, and even more frequently, washing out their mouths with fluids that are sometime identical with, and often even stronger than, those employed for birth control. Yet such precautions are not considered "immoral" or "unnatural".

Incontrovertible figures and statistics, of the most definite and exact precision, drive us to the conclusion that filth, unsanitary conditions, and infectious diseases, are the inevitable companions of large families and numerous children. It is no less true that cleanliness, personal hygiene, and sanitary surroundings go hand in hand with birth control and fewer children. We also learn that these fewer and cleaner children are not so often victims of diseases that increase the infant mortality rate among the less fortunate.

It is more imperative than ever that women should now be taught the great necessity of personal hygiene and cleanliness. This is the only safe way to prevent the transmission of the venereal diseases and

method should combine the following conditions: 1) It should depend exclusively upon the woman. 2) It should cause neither the man nor the woman any inconvenience. 3) It should be absolutely certain and dependable. 4) It should cost very little.

Let us answer this question at the outset. There is on magic method, on perfect method of preventing conception, that does not require care and attention. But the experience of the movement in Europe and America has shown us that this is partially due to the Egnorance and inertia of the medical profession, many of whom profit largely by the practice of abortion, and many of whom do not wish to give to women a much needed education in sexual prophylaxis. Women are thuse thrown back, for the source of their knowledge in these matters, upon neighbors and friends. Here they receive numbers of conflicting suggestions, each presented in an unscientific and unhygienic fashion. Altogether this is very disturbing and confusing to the poor woman whose ideas on sexual hygiene are of the most primitive, and who is living in constant fear of pregnancy.

It is on account of this confusion that the best authorities in Europe and America have decided that the greatest present need is for birth control clinics in all of the poorer sections of our cities, where women may receive safe and personal instruction in all matters of sex hygiene so that they may protect themselves from unwanted pregnancy.

Our Occidental world has come to see that "an ounce of 'prevention is worth a pound of cure." The great weapons of prevention, in the battle against infections and contagious diseases, are hygiene and sanitation. Contagious and infectious diseases breed and propagate their disastrous deaths in the soul of filth and overcrowding. A stifled, weakened, undernourished, dirty group of humans is the very breeding ground of the great racial scourge, such as tuberculosis, typhus, typhoid, venereal maladies, trachoma, as well as the lesser contagious

psychological one. Restraint with the direst and most unfortunate of consequences, both psychological and physiological, to the individual and to the race. Although advocated by the Church fathers, continence and celibacy had never been practiced by the masses of the Occidental world. But in thus driving sex expression into underground and secret channels, prostitution and its train of evils, diseases and insanity became firmly entrenched institutions of the western world.

Malthus was radical enough in interposing difficulties between the desire to marry and actual marriage; but when a man and woman were once married, he did not presume to counsel, sexual restraint. But from other quarters the theory was soon carried to its logical and serviceable conclusion James Mill wrote in his "Flements of Political Economy" (1821) "The grand practical problem is....to find means of limiting the number of births."

Answers to this question were almost immediately forthcoming. In 1823 was published the so-called "diabolical handbill" addressed "To the Married of Both Sexes," and setting forth the economic disadvantages of excessively large families. From this time to the present, advocates of birth control have published, throughout Europe and America, various handbooks and pamphlets giving explicit directions to men and women of the physiological and practical aspects of family limitation. These directions have been made up, partially upon the basis of scientific investigation and partially upon the traditional practices of people which have, notably in France, proved to be expedient and serviceable.

But the great advance has been made since the discovery by pasteur of the germ theory, in the latter half of the nineteenth century. Applied to Birth Control, the germ theory of life gave rise to the practice of Spermatacide, the name given to those preparations destined to sterilize the male cells (*spermatozoa*). But the question has often been asked: Is there a perfect or safe method of prevention of conception? Such a

accepted as the battle cry of labor and labor unions, who have always recognized and alied a like principle in the conduct of their own organizations. In refusing to admit more than a fixed number of new members into their trades, they thus manage to uphold the standard of wages. For precisely the same reason the control of births is necessary to hold up the standards of subsistence in any country-this is true whatever may be the particular economic system prevailing. It is as true for the Orient as for the Occident. Wage slavery is the inevitable consequence of the uncontrolled reproduction of the workers and it will continue as long as they are ready and willing to create new units to perpetuate the same miserable conditions.

Such, in brief, is the historical and philosophic background from which Birth Control as a doctrine derives its astonishing and ever growing vitality. It has now reached the scientific stage, drawing its strength and its arguments from facts and figures, from scientific experience and precise statistics, rather than from the theory or philosophy which gave it birth.

II.

We have pointed out that Malthus, discoverer of the theory of pepulation and the precursor of the Darwinian theory of evolution. advocated, as preventive checks upon overpopulation, "moral restraint" and late marriage. His knowledge of human instincts was limited. Malthus proposed "moral resfraint," abstention as long as possible from sexual union, or so late a marriago that between the marriageable age and that of the critical period of the woman (the time of the cessation of menstruation) that it would be impossible for her to bear very many children. This is in the narrow sense Malthusianisum and the Neo-Malthusians wery quickly saw that this was impractical and productive of much unhappiness and misery. The sociological doctrine became a

portance to the world, and yet is now most exposed to disaster and risk.

It would be to neglect the most important phase of the philosophy of Birth Control, if, before taking up its hygienic aspect, I neglected to touch upon its relation to modern industry. Modern capitalism is desirous that kinetic overpopulation continue to provide abundant labor for the employing classes and thus to keep down wages, by the weight of a large margin of unemployed. But there is an unsuspected danger here. The statistics of the Galton Laboratory for National Eugenics shows us that the unemployed in a generation or two are converted into the unemployable, and a dead weight on the community and the capitalist. Nevertheless the manufacture of babies and the extent of the supply of them, still remains a matter of chance and passion very much as it is among animals in the wild state. To organized labor and to the working classes the philosophy of Birth Control emphasizes these facts:

The history of labor is the history of an unsuccessful attempt on the part of man to bring his *productive* ability up to the same level as his *reproductive power*. It has been a losing battle all the way. We have never been able to secure peace or prosperity. We have never been able to control the aggression and forward push of modern machinery and capitalism. The worker is only too willing to blame the capitalist, not only for his own poverty, but for all the misery of the world. But there is another cause; that is the reproductive instinct, the uncontrolled fertility of living organisms. That created the first poverty. That created the first famine. That goaded all of mankind into the present industrial frenzy, into warfare and wandering and want and starvation, across seas into new lands. The big battalions of babies have made of human life an endless burden of heavy work. The principle of restricting the number of mouths to be fed should be

were organized in all the great cities.

Although the laws forbidding the circulation of Birth Control information are still in existence, they have for many years been ignored by the wealthy and intelligent upper and artisan classes of the American population. Uncontrolled breeding is the habit only of the ignorant poverty-stricken and submerged classes. Statisticians and eminent scientists show us that uncontrolled fertility is correlated with overcrowding, disease, unemployment, filth and ignorance; and that unless such fertility is checked in any community, the whole population will gradually deteriorate and degenerate. This is the great warning of Birth Control philosophy to all nations of the world today.

In other directions, my campaign in the United States has stimulated a great interest in the care of mothers and training of children. The western world had long professed horror at the ancient Oriental practice of exposing unwanted infants for the purpose of their destruction. It has now been brought to a sharp realization that there was a justification of that action on the part of starving parents in a famine ridden country, whereas there is no moral excuse for "the richest country in the world" to commit a quarter of a million children to preventable death. Is not our crime greater? Spurred into belated activity by the sharp criticism of the advocates of Birth Control, and alarmed at the prospect, that unless the conditions for child life are improved in America, women might refuse to bring them into the world, at all legislators are now advocating appropriations for the protection of motherhood and childhood. Birth control advocates showed that condition for motherhood and childhood are growing worse in the United States instead of better. Fourteen other nations are more advanced in this respect than the United States of America. The philosophy and propaganda of Birth Control has therefore done a great service in directing attention to a phase of human life that is of central and primary im-

in any other country in the world. The great majority of these wholesale deaths of mothers and babies, according to a recent report of the Children's Bureau of the U. S. Government, are preventable. These poor woman always asked me, as a nurse, to help them. They wanted fewer children who might have a chance to survive and to grow into healthy men and women.

When I began to search for the cause of the wide prevalence of the practice of abortion among all classes of American women, I discovered that the laws of the United States Government, as well as the laws of most of the separate states making up the Union, forbade the circulation of birth control knowledge, even by physicians and nurses. After a visit to the various countries of Europe, investigating the conditions of mothers and children, I returned to my own country to begin a campaign to educate the women of America in racial hygiene and health.

My "Birth Control" agitation was inaugurated not upon the basis of the Malthusian theory of population, not to check the increase of population, but to prevent *the shocking waste of women and children.* It was an answer to the cries of anguish that came to me from thousands of poor and disceased women who called out for relief, bringing numbers of helpless, unwanted babies into their overcrowded world—infants foredoomed to an early death. It is one of the saddest sights in the poverty stricken and congested districts of any American city to notice the prevalence of busy midwives and prosperous undertakers, the latter exhibiting in their shops the various types of coffins for babies. These poor women are too ignorant perhaps to understand the philosophy of Malthus and his modern followers. But they can and do understand "Birth Control" because it is the direct answer to their immediate needs. This is the reason why the words "Birth Control" swept over the vast American continent from coast to coast, and Birth Control Leagues

extent. The child is everything to her. Its well being, its early education, its training, are the perpetual care of the mother. Despite the present compaign to induce French woman to have large families again, there is every indication that the spirit of intensive cultivation is too thoroughly ingrained in the French nature ever to be replaced by a love of mere numbers.

In North America, a great virgin territory, which to its early settlers seemed limitless and inexhaustible in natural resources and industrial possibilities, the dangers of overpopulation seemed so remote that the Neo-Malthusian doctrines at first aroused no interest at all. But into this "great melting-pot" flowed vast masses of immigrants. In the eighteenth and nineteenth centuries the "New World" became the receptacle into which flowed all the surplus populations of the Old World. With the rapid development of machinery and vast railroad systems, great cities almost by magic sprang into existence. Population increased enormously, even more rapidly that Malthus had imagined. And with this uncontrolled human fecundity came the great unconquered problems of poverty, contagious and infectious diseases, epidemics, unemployment, labor troubles, race prejudice, and the limitation and exclusion of immigrants from other countries. Instead of preventing poverty or solving the population question, my own country, the United States, faces them today in a more serious and aggravated state than any of the nations of the Occidental world.

My own interest in this question was arcused when as a nurse and worker for fourteen years among the poor women of the slums, I was horrified to discover the amazing amount of human waste—women and children dying in vast numbers, while millions of dollars was being appropriated by the Government for the protection of cattle, sheep and swine. I discovered that one out of every ten children born died in its first year. More women die in childbirth in the United States than

Birth Control had pointed out that the underfeeding and overcrowding caused by large families was acting as a deterioration upon the physique of the conscripts for the Army. The masses were likewise beginning to see the light, although Birth Control was strenuously opposed by the Social Democrats. At a great meeting in Berlin, August 29, 1913, Rosa Luxemburg and Clara Zetkin tried to arouse the workers against the "birth strike." The audience of 5000 turned the meeting into a cry for Birth Control, and after howling down the Socialists, speaker after speaker arose and championed family limitation as the only effective means by which the masses could escape the worst evils of poverty, underfeeding and overcrowding, and the scourge of the great contagious disease. Today Germany is paying the penalty of uncontrolled breeding.

In passing, it is an interesting fact to point out, that in the late war, it has been those European countries with a lower birth rate that have survived the conflict. France is an example especially of this. Birth Control had for decades been an ordinary and accepted practice in that country, growing out of the French habit of emphasizing the value of *quality* in contrast to mere *quantity*. The result of this had been prior to the war, that the struggle for life in France had not been too intense, and the people were permitted to enjoy the good things of the world. The result was a solidarity and stability of family life. The child was sureof the maximum of care, education and capital in continuing existence. In great part it is owing to the low birth-rate that France had been one of the most prosperous countries in the world, and that her gold reserves per head exceeded the known averages of other European nations. Grinding poverty had been unknown in France, previous to the Great War, Temperance and thrift also are to be considered, but the small family unquestionably made for fair wages and fair rents. The outstanding feature of the French mother is her love for her children. It gains in intensity all that it loses in

a low birth rate, the population of Holland is increasing. Undoubtedly this is because medical cooperation enables the Dutch people to practice the most scientific and hygienic methods of Birth Control. The race is not recruited from the underfed and the diseased. In Holland, where the poor are thoroughly educated in Birth Control, the families of the well-to-do are not so much reduced, in comparison with those of other European countries.

Germany, on the other hand, is one of the few continental countries that discouraged and prohibited the practice of family limitation. It was opposed both by the government and the Social Democrats. It was the boast of Imperial Germany that the children who were brought into the world at the behest of the State will cared for and well educated; that they were then sent out into the world as highly efficient and valuable citizens. But the great difficulty was, the protagonists of this philosophy admitted, that the State which had thus invested in the health and efficiency of her children, was too often deprived of their services by the narrow limits of her territory. She lost the fruits of their labors because they were forced out by overcrowding; so that alien and rival countries reaped the harvest of the German state's educational and cultural advantages. This, I believe, was the German Imperialist's argument for expansion. To day that empire is prostrate; millions of children are starving to death; and even those who survive this bitter struggle for existence may be permanently afflicted. But the great fact to remember is that Germany fell as a result of the Blockade. It is a striking case of the evil influence of a starving and prostrate Civilian population unable to serve as the solid foundation for an army or to furnish new and efficient recruits to replace the dead and wounded. It can thus be seen that in the most intelligent sense Neo-Malthusianism may be supported as a thoroughly national philosophy.

Several years before the outbreak of the war, German advocates of

been registered since 1895 as a Society of Public Utility.

The most striking evidence of the success of this practice was brought out at the Eugenics Congress, when the fact was advanced that the stature of the Dutch people was increasing more rapidly than that of any other race in the world. *The Dutch have gained no less than four inches in fifty years.*

The proportion of young men drawn for the army taller than 5 feet 7 inches in height has increased from 24.50 percent. to 47.50 since 1865, while the proportion of men less than 5 feet 2-1/1 inches in height has fallen from 25 percent. to less than 8 percent. When the Dutch Army was mobilized, the highest army standards showed that the men of the proper age for service were 95 percent. efficient. Contrast this with the example of the United States of America, where we were shocked to discover that our men were only 65 percent. efficient, and that with a lowered military standard.

In my studies and investigations of this great problem I have paid several visits to Holland, both before and after the war, and my observations support these statistics. All the children you see there are suitably dressed. In the working classes there is a better personal and general hygiene, a finer moral and intellectual development. Morality is also on a much higher level. Prostitution, with its train of devastating diseases, is on the decline. Another great evidence, besides increased stature, is that of the constant increase in longevity. This is surely a test of physiological and financial progress. From 1890 to 1899 the average length of the Dutchman's life was 46.20 years. From 1900 to 1909 it was 51. These figures are equaled only by those from the Scandanavian countries, where birth control was advocated and practiced even before it reached the Netherlands. It is also significant to point out that none of the dread consequences feared by its opponents, the clericalists, the moralists and the militarists have occurred. In spite of

ned with *kinetic* overpopulation, with its more direct relation with poverty, disease, overcrowding, infant mortality, unemployment, insanity and feeblemindedness.

I have pointed out that the compaign and propaganda brought directly to the workers of England in 1877 had a direct and profound effect in decreasing the birth rate and subsequently the infant mortality rate. But an even more eloquent example of practical family limitation is to be found in the case of Holland, where this doctrine has been implanted in the population with the approval of the Government. Since 1881, information and science concerning the prevention of conception have been available to the people, and since 1885 there have been clinics for the spreading of hygienic information, including "birth control" to all women. This followed in the wake of a thorough and enthusiastic discussion of the subject at the international medical congress in Amsterdam in 1878. The results have been so gratifying that to-day Amsterdam and The Hague have the lowest infant mortality rates of any cities in the Occidental world. So great are the results obtained that there has been a remark able increase in the physical strength, the stature and the longevity of the people, as well as in prosperity. When we contrast this gratifying result with the shocking deterioration in the lower classes in Great Britain with its overcrowding and overwork, there can be little doubt of the efficacy of birth control in developing national strength.

The practically universal practice of Birth Control in Holland for the last thirty-five years was put to the test during the Great War and was strikingly vindicated. Let us remember and reiterate that in Holland the Neo-Malthusian League has since 1885 been engaged in teaching the poorer people, through the agency of physicians, midwives and nurses, in the best scientific means of birth control; that it has had the countenance and support of the ministers of State; and that it has

and Scotland, among the more skilled and intelligent laborers. From this date began the sharp decline in the birth rate, not merely in England, but in the more advanced countries of the European continent as well.

It was soon discovered that a lower birth rate brought with it a lower death rate, especially a lower infant mortality rate. Fewer children were born, but more of them survived. The whole influence was toward placing a greater and greater value upon children and child-life. So true has this been that the preventive checks upon population, notably in Holland, have had the opposite effect to that intended in the doctrine of Malthus; the adoption of family limitation had actually led to an *increased* and more healthy population.

In the criticism of the Malthusian doctrine, which was brought to the foreground of European thought by the famous case of Charles Bradlaugh and Mrs. & Besant in 1877, there has been a persistent failure to touch the care of the doctrine of overpopulation. The root of the misunderstandings concerning this doctrine is to be found in the failure to distinguish between what we may call *static* and *kinetic* overpopulation. Let me briefly define these :

Static overpopulation is the condition when the population of a country has increased up to its ultimate power of obtaining the necessary food supplies and subsistence.

Kinetic overpopulation exists when the *rate* at which new arrivals in a country (by birth or immigration) exceeds the *rate* at which additional subsistence can be provided for them.

It should be borne in mind that neither Malthus nor the Neo-Malthusians of today have been concerned about any absolute limit to the food supply. There may be a few countries, e. g. China, in which a limit may be considered as having been nearly reached, and which might be called actually or statically overpopulated; but we are concer-

How profound an influence upon European thought this Malthusian Law of Population had, is indicated by the fact that it served as a basis for Darwin's theory of natural selection, a theory that changed the complete current of European science in the nineteenth century.

Until the advent of Meo-Malthusianism, when the attempt was first made to educate the population of the various European countries in various scientific methods of preventing conception, the Malthusian doctrine was still mostly in the philosophical stage of discussion. Its opponents, argued that with increased production, the result of machinery in industry, and with wider and more equitable distribution, there would be plenty of food for all classes of the population. But facts and statistics disproved this contention. With the increase of machine production, there arose an ever increasing demand for cheap labor, as well as for child labor. Machinery, by increasing production and distribution, became a fundamental cause in increasing the population. With the advent of the machine process in the nineteenth century in Europe and the United States there began the growth of the great, overcrowded cities and children became an economic asset. The birth rate increased enormously; and the helpless little victims of an inhuman industrial system were sent very early to work in the factories.

In 1877 widespread publibity was given to the doctrine of the prevention of conception by the arrest of Charles Bradlaugh, a distinguished member of the British Parliament, and Mrs. Annie Besant, for publishing the work of an American physician, entitled "The Fruits of Philosophy" by Dr. Charles Knowlton. The attempt to curb their activities among the workers and the poor defeated its own purpose. The wide-publicity resulted in the widespread adoption of their teaching. The better class of workers immediately began the exercise of birth control and this, combined with the new laws forbidding child labor in the factories, had the effect of greatly decreasing the birth rate in England

but in view of a wiser understanding of human nature, advocated early marriage and birth Control by the means of the deliberate and scientific prevention of conception. The principles of this society, which has international affiliations in all of the countries of Europe and the United States of America, are an admirable summary of the Malthusian and Neo-Malthusian doctrines. They are:

1. That population (unless consciously and sufficiently cotrolled) has a constant tendency to increase beyond the means of subsistence.

2. That the checks which counteract this tendency are resolvable into positive or life-destroying, and prudential or birth-restricting.

3. That the positive or life-destroying checks comprehend the premature death of children and adults by disease, starvation, war, and infanticide.

4. That the prudential or birth-restricting check consists in the limitation of offspring (1) by abstention from or postponement of marriage, or (2) by prudence after marriage.

5. That prolonged postponement of marriage is not only productive of much unhappiness, but is also a potent cause of sexual vice and disease. Early marriage, on the contrary, tends to ensure sexual purity, domestic comfort, social happiness and individual health; but it is a grave social offence for men and women to bring into the world more children than they can adequately house, feed, clothe, and educate.

6. That over-population is the most fruitful source of pauperism, ignorance, crime, and disease.

7, That it is of great importance that those afflicted with hereditary disease, or who are otherwise plainly incapable of producing or rearing physically, intellectually and morally satisfactory children, should not become parents.

8. That the full and open discussion of the Population Question in all its necessary aspects is a matter of vital moment to Society.

most thought stimulating books ever given to the world and which attracted the attention of all great thinkers from that day to this, the English clergyman enunciated his challenging "theory of population", which has never been satisfactorily or completely refuted. His aim, in the "Principle of Populotion" was: 1. "to investigate the causes which have hitherto impeded the progress of mankind toward happiness; and 2. to examine the probability of the total removal of those causes in future." The one great cause, he claimed, was "the constant tendency in all animated life to increase beyond the nourishment prepared for it." This theory was based upon studies and statistics he gathered from all countries of the world, including India, China and Japan, and led Malthus to the conclusion that "population, when unchecked, goes on doubling itself every 25 years, or increases in a *geometrical* proportion. But the food to support the increase from the greater number will by no means be obtained with the same facility....It may fairly be pronounced, that considering the present average state of the earth, the means of subsistence, under circumstances the most favorable to human industry, cannot possibly be made to increase faster than in an *arithmetical* ratio."

Malthus showed that there were two checks to this too rapid increase in population. Whatever tends to produce a smaller number of births is called a *preventive* check; whatever leads to a greater number of deaths is termed a *positive* check. Among the positive checks are wars, famines, epidemics, floods, infanticide and abortion Among the preventive checks are the customs of continence, celibacy, late marriages, and prudence after marriage. Malthus advocated late marriages and "Moral restraint." People should not marry until they had reached the age of shut 38. But this was very soon seen to be impractical.

The Malthusian League, organized in England in 1877, was founded upon the great central principles of population laid down by Malthus;

but in view of a wiser understanding of human nature, advocated early marriage and birth Control by the means of the deliberate and scientific prevention of conception. The principles of this society, which has international affiliations in all of the countries of Europe and the United States of America, are an admirable summary of the Malthusian and Neo-Malthusian doctrines. They are:

1. That population (unless consciously and sufficiently cotrolled) has a constant tendency to increase beyond the means of subsistence.

2. That the checks which counteract this tendency are resolvable into positive or life-destroying, and prudential or birth-restricting.

3. That the positive or life-destroying checks comprehend the premature death of children and adults by disease, starvation, war, and infanticide.

4. That the prudential or birth-restricting check consists in the limitation of offspring (1) by abstention from or postponement of marriage, or (2) by prudence after marriage.

5. That prolonged postponement of marriage is not only productive of much unhappiness, but is also a potent cause of sexual vice and disease. Early marriage, on the contrary, tends to ensure sexual purity, domestic comfort, social happiness and individual health; but it is a grave social offence for men and women to bring into the world more children than they can adequately house, feed, clothe, and educate.

6. That over-population is the most fruitful source of pauperism, ignorance, crime, and disease.

7, That it is of great importance that those afflicted with hereditary disease, or who are otherwise plainly incapable of producing or rearing physically, intellectually and morally satisfactory children, should not become parents.

8. That the full and open discussion of the Population Question in all its necessary aspects is a matter of vital moment to Society.

most thought stimulating books ever given to the world and which attracted the attention of all great thinkers from that day to this, the English clergyman enunciated his challenging "theory of population", which has never been satisfactorily or completely refuted. His aim, in the "Principle of Populotion" was: 1. "to investigate the causes which have hitherto impeded the progress of mankind toward happiness; and 2. to examine the probability of the total removal of those causes in future." The one great cause, he claimed, was "the constant tendency in all animated life to increase beyond the nourishment prepared for it." This theory was based upon studies and statistics he gathered from all countries of the world, including India, China and Japan, and led Malthus to the conclusion that "population, when unchecked, goes on doubling itself every 25 years, or increases in a *geometrical* proportion. But the food to support the increase from the greater number will by no means be obtained with the same facility....It may fairly be pronounced, that considering the present average state of the earth, the means of subsistence, under circumstances the most favorable to human industry, cannot possibly be made to increase faster than in an *arithmetical* ratio."

Malthus showed that there were two checks to this too rapid increase in population. Whatever tends to produce a smaller number of births is called a *preventive* check; whatever leads to a greater number of deaths is termed a *positive* check. Among the positive checks are wars, famines, epidemics, floods, infanticide and abortion Among the preventive checks are the customs of continence, celibacy, late marriages, and prudence after marriage. Malthus advocated late marriages and "Moral restraint." People should not marry until they had reached the age of shut 38. But this was very soon seen to be impractical.

The Malthusian League, organized in England in 1877, was founded upon the great central principles of population laid down by Malthus;

Birth Control-past, present and future

BY

MARGARET SANGER

INTRODUCTION

The most revolutionary discovery of the nineteenth century, declares Bernard Shaw, is the of the deliberate limitation of families. Although this discovery is now scarcely one hundred years old, it is most intimately bound up with the whole of contemporary Western civilization. Denounced and repudiated by the leaders of the Christian Church the idea of "Birth Control" has nevertheless firmly planted its roots in Europe and America, and has shown an ever increasing vitality. John Stuart Mill, one of the earliest and greatest economists, wrote: "Little improvement car be expected in morality until the producing of large families is regarded with the same feeling as drunkenness or any other physical excess." To understand the ramifications, the background and the pivotal importance of Birth Control as a world problem of the present and immediate future, we must have a thorough grasp of the birth and evolution of this simple yet central problem of human existence. Once we have grasped its history, we are in a much better position to understand its physiological, hygienic and eugenic aspects and the part Birth Control must play, as an international weapon in the reconstruction of a world of peace, security, and universal prosperity. In the present paper, therefore, I shall consider: First, the historical and philosophic aspects of Malthusianism, neo-Malthusianism and Birth Control; and secondly, its hygienic and physiological side, and its relation to the world problem of the present and immediate future.

I.

In 1798, Rev. Thomas Robert Malthus, a clergyman of the Church of England, published the first edition of his world famous "Principle of population" which in 1806 was given to the world in a revised and more thorough form. In this epoch-making essay, which was one of the



人形の病院

賀川豊彦

□王よ、汝は一個の巨像の汝の前に立つを見給へり、其像の□
□首は金、胸と兩腕は銀、腹と腿とは銅脛は鐵、脚の一部分□
□は鐵、一部分は泥土なり——ダニエル書二・三一——三三□

『ピー、ピー』と泣いてゐた市松人間の首がとれた。ころりと、土の重みで頭の方が下になつて頸のつけねの方が上になつた。おゝ醜いこと！　首の內は、からつぽで內には新聞紙を二重三重に貼つてあるよ！
『ピーピー』と泣いてゐた市松人形の首が落ちた！上藥を塗つて、肉色に艶つけた美しい眉毛を引いて、硝子の目玉を入れた、市松人形の首がとれた。
手足もちぎれた。笛の這入つてゐた布で貼りつけてあつたおなかも、もぎちぎられた。
胴體と四肢を繫いであつた布片が手の方について行つてぺろ／＼して居る。
人形は完全に死んだ。玩具箱の中で完全に死んだ。

胴體がばら／＼になつた市松人形はそれでも捨てるには未練があつて、同じように潰れた汽車の玩具や、毀れたゴム人形の中に捨てられてある。毀れた玩具は大きな箱に一杯になつて押込の中に置かれてある。
見るのはいやなのだが、折々取り出したくなつて昔好きであつた市松が、今も昔のまゝの顔をして出てくるかと思つて取り出してみる。
箱をひつくり返して毀れたお玩具をすつくり座敷の眞中にぶちあけると、市松の首が、ころ／＼ところげ出る。おゝ山憲が殺した鈴辨の首よりも六反池の死首よりも醜いよ！
胴も出て來た、手足も出て來た。笛もある、も一度

執念深く、胴と首と、首とむしれた猛形の髪と、首と胴と、胴と足と、また首と、足と、手と足を奇麗に揃へてみる。

直（なほ）る見込は無いよ！　どんなに工夫したつて首と胴と、胴と手足はひつつか無い。奇跡でもなければ元の儘にはならない。奇跡よ起れ！　昔の美しい人形に返つてくれ！　戀人のように抱き〆めて撫で廻して背負つてやつた昔に歸つてくれ人形よ！　ものを云へ！人形の死がどれだけ苦痛であるか告げてくれ！顔の上薬が鱗のように禿げた人形よ！癩病やみのようになつた新聞紙を内側に貼つた古人形よ、生き上つて來い！おまへは死體のまゝ押込の中に入れておいても少しも腐りはし無いが、少しも生命を取り返す望みが無いのだね。胴體の切り放たれた人形よ、生命は無くても形だけが殘つて行くその神秘を語つてくれ！　いつまで經つてもおまへの首は腐らず、おまへの胴はそのまゝで居る。人間の手足は氷漬にするかアルコール漬にしなければ腐るのに、おまへの手足はその儘空氣の中で腐らずに居る。幾年かそのまゝにして居てもおまへの首は生々して居る。時によるとその眼玉があまりに光つて居るので怖ろしいことがある。ギラツとおまへは私を睨むよ！顔を壁につけて、眼玉だけを斜に私にむけておまへは睨むぢやないか！　こわいよ！　よしてくれ！　そんなに生々した眼玉で私を睨むものぢや無いよ、私に罪が有つて、おまへの首をちぎつたのぢやあるまいし、おまへの首はひとりで落ちたのぢやないか！　土で作つて布　貼りつけてあつたから自然自分の重みで落ちたのぢや無いか！　そんなにわしを怨まないでおくれ！　そんなに押込から出てくる度毎に私を睨まないでおくれ！　おまへは押込から出てくる度毎に押込で光を吸收して貯蓄したものを一度に私に放射するのかい！　おまへは不思議な人形だね！

おゝ人形の幽靈が出る！　人形の幽靈が出る。私は人形の首の眼玉に睨み殺されやしないかと心配するよ。

私は怖いから、市松人形を丁寧に首と胴と足と手とを揃へて箱につめる。そしてまた再び私が見無いため

に押込に入れる。

私のうちの子供は人形ごッこをする。そして、人形の病院を開いた。お醫者さんが來た。看護婦さんが來た。藥劑師さんが藥をくれる。私の怖れて居た人形は子供の手にかけられて愛せられ、いたわられ、藥をもらつて、人形の病院のベッドの上に安臥して居る。私のうちの子供は、人形の病氣が近い中に平癒することを信じて居る。

小さい紙製の菓子箱の中で、首と胴と胴と四肢のちぎれた市松人形をうちの小娘は赤い薄い小蒲團の上に寢かせて、入院させて居る。

入院中の土人形の生の母である隣娘が見舞に來た。

『先生、子供はちつとよろしゆう御座りますか?』

『はい、お熱は下りました。』

熱の無い冷血の人形に九つになる女醫が體溫器を挿んで居る。そして時計を取り出してちぎれた手の脈を取つて居る。――もう少し持ち上げると手ばかり床から離れそうだ。――そんなことには少しもおかまいなく子供等は至極滿足して人形の看護をして居る。

もう近い中に退院だと云ふて居る。退院の日になると、奇麗な着物をきせて胴體と手足と首とが離れないように糸でくゝりつけて、その上を丁寧に赤い蒲團で卷いて、今にもちぎれそうになつて居る首だけをきちんと蒲團の中からのぞかせて、隣娘のお母さんが心配そうに、それをいたわつて背中に負ふて退院する。

その顏が少し禿げてゐようが、髮がとれて丸坊主になつてゐようが、子供心には何ともそれを思つては居ない。

子供は完全にそれを復活させた。背負つて行く娘兒の背の人形をみると、如何にも人形は元氣よくニコ〲して居るよ。蒲團に包まれて居れば手足のある必要も無い。着物をきせられて居れば胴體のある必要も無い。人形の變りに子供が泣く眞似をするから笛の必要も無い。人形の病氣は全快した。人形は私を見て笑つて居た――子供に負はれて蒲團から首だけつき出して――

私も、人形の方に向いて淋しい苦笑を洩らした。



北郊雜記

10

阿部次郎

今日の社會に生きてゐるあらゆる人は、掠奪者か被掠奪者かの孰れかに屬してゐなければならないであらうか。自分は自分の生活の基礎に關する道德的反省の一つとして、時々この問題を考へる。例へば自分のやうな者は掠奪者と被掠奪者との孰れであるか。

今自分の生活の經濟的基礎は、二つの私立大學の俸給と二三の著書の印税とによつて形造られてゐる。其他時々の雜誌の原稿料や講演の報酬などゝいふやうなものもないことはないが、それは小遣の問題で生活の基礎には關係しない。敎師及び著述者として、自分は何人によつて自分の勞力の結果を掠奪され、若くは何人の勞力の結果を掠奪してゐるか。

學校敎師としての自分の報酬は僅かである。併し自分は自分の敎へに行つてゐる學校が自分達に廉い俸給を拂ふことによつて決して不當の利益を得てゐないばかりではなく、寧ろこれだけの報酬を拂ふだけでも、單に經濟的に云へば多く拂ひ過ぎてゐることを知つてゐる。從つて自分は學校が自分の勞力の掠奪者であるとは固より思はない。經濟組織として見れば、學校の吾々に與へる俸給は當然以上である。自分は敎師として自分の勞力が不當に掠奪されてゐるとは考

へることが出來ない。尤も學校の授業料でも非常に增せば、學校も吾々も同時に息をつぐだらうから、理窟を云へば今の安い月謝でその子弟を學校に送つてゐる社會が、吾々の勞力を掠奪してゐると云へるかも知れない。併し自分は都合に多くの家庭がその子女を專門學校に送り得るためには、喜んでこれだけの勞力を犧牲にすることを厭はない。それだから自分は學校教師として俸給增加の勞働運動を自分自身のために起すことなどは思ひも寄らない。

著述者としての自分の收入は近來恐く印税によつてゐる。自分が著述者といふ職業に馴れない時分には、自分の勞力も本屋によつて掠奪されたことがあるかも知れないし、今も强慾な本屋によつてその勞力を不當に廉く買はれてゐる著述者が多いことは、自分も固よりこれを認める。併し現在自分が自分の出版することにきめてゐる一二の書店は、個人として自分の友人であつて、自分は彼がどれだけ自分で儲け、どれだけ著者に拂つてゐるかを、知りたければ何時でも知ることが出來る。さうして自分の知つてゐる限りでは、彼は決して儲け過ぎてはゐない。あの繁雜な面倒臭い事務を見、損失の危險を冒して吾々の書物を市場に送つてゐる彼は、あれ位の利益を自分のものにしても決して不當ではないと思ふ。固より彼は多くの書物を取扱ふことによつて吾々よりも遙かに多くの收入を得るに違ひないし、從つて吾々よりも多少贅澤な生活をしてゐることも事實である。併し金に關する仕事をしてゐる者が多くの收入を得、多少の贅澤をするのは、自分との關係について云へば少しも不當なことゝは思はない。自分の志すところは精神的の事業である。肉體を養ふためにこの精神的事業を商品として賣り出すことは、掠奪被掠奪の問題を離れて悲むべきことであるが、この商品の製造に於て協同作業をしてゐる本屋と自分との關係は、決して彼が掠奪者で自分が被掠奪者であるといふやうな關係ではない。時々印税の率について兩者の主張が衝突することはあつても、それは計數を明かにすることによつてお互ひに得心する程度の解決を得ることは何でもない。故に自分はこの點に於ても、自分が被掠奪者であるといふやうな

自覺は持つことが出來ない。

然らば自分は被掠奪者でなくて掠奪者であるか。自分が出てゐる學校は二つとも私立である。此等の學校に資金を寄附する人の中には或いは甚しい掠奪によつてその金を拵へた者があるかも知れない。從つてその金若くはその金によつて生ずる利子の幾分を俸給として受取つてゐる自分達は、間接に掠奪者であるといふことになるかも知れない。併し自分は、その金を寄附する者は假令掠奪者であるにしても、これを受ける公共事業は掠奪の繼續ではなくて寧ろ非公式な徴税の一種であると解釋する。寄附とは掠奪者がその掠奪分の一部を社會に奉還することである。從つて自分は、私立學校の俸給を受けることによつて、掠奪者の孫になるのだとは考へることが出來ない。

尤も一つの學校に奉職してゐる多數の人の中で、自分だけが不釣合に多額の俸給を受けて、他の人達は妻子を養ふにも足らぬ程度のものしか受けてゐないのだつたら、自分は他人の得分を侵害する者に相違ないであらう。併し自分は固よりそんな地位に望んで立つ者でもなく、そんな地位に現在ゐる者でもない。自分は學校の會計や幹事ではないから、定められた俸給總額の分配がどんなになつてゐるかそれは知る由もないが、併し自分はただその學校並に取扱はれてゐるだけだらうと思ふし、又それで滿足である。さうして萬一自分の俸給が他人と權衡がとれぬ位に大きかつたら、自分はいつでも最も合理的な分配に喜んで同意する。從つて自分はこの方面に於いても、少くとも意識した掠奪者ではない。

著述者としての吾々の商品は、印刷職工なしには成立つことが出來ない又其商品の流通は多くの店員小僧の類を豫想してゐる。この方面の交渉は出版者の分擔であつて、彼が吾々の商品から生ずる利益の分配にあづかる權利は、一部分はこの分擔によつて生ずるから、吾々は直接には彼等と道德的交渉がないとも云へるであらう。併し出版者と印刷職工

若くは店員との關係が、若し吾々が出版者に適當に分配することを掴むために苛酷になるのだつたら、印刷職工や店員の不幸は吾々の責任である。自分はこの點については明瞭な知識を持つてゐない。併し自分が本屋から、店員の待遇をよくするための金が必要だから印税を廉くして吳れと云ふ交渉を受けたことは未だ曾て一度もないところを見れば、多分出版者の收入は自分の得分でこの問題を解決することが出來る程度に多いのであらうと思ふ。さうして若し今日の分配の仕方が印刷職工や店員に對して餘りに薄きに失するから、此等の人達と著者及び出版者との分配率をもつと公平に決めようと云ふのだつたら、自分はいつでも現在の得分を減らして構はない。自分はたゞその新らしい分配率が本當に公平であることを要求し、印刷職工や店員が充分にその義務に忠實であることを要求するのみである。

自分のこの考へ方は間違つてゐるかも知れない。併し自分が、自ら胡魔化さうとする意志なしに、教師及び著述家として自分は掠奪者でも被掠奪者でもないと眞面目に考へてゐることだけは本當である。尤も、縱令一つの企業に携る者として自分が現在受けてゐる報酬は正當であると信ずる者でも、かくて生ずる吾等の所得が一家の生計をさへ支へるに足りないならば、その事業の全體が社會から不當に冷遇されてゐる者として、所得の增加を社會に——その事業の內部に於ける分配の爭奪ではなくて、事業に携る者全體の組合として社會に——要求するのは至當である。この意味に於いて自分は小學教員若くは中等教師の增俸を當然であると考へる。併し自分の現在の所得は兎に角一家の生計を支へて多少の書籍を買ふには充分である。從つて自分は今、自分の所得の增加を求めることを眞面目な必要と感じてゐない。それがよくても惡くても、兎に角此事は事實である。

尤も教師若くは著述家としてではなくて一般に消費者としては、自分も亦不知不識掠奪者の中に入つてゐるかも知れない。奴隷的勞働者の廉價な勞力なしには、或種の物價は恐らく今日のやうに低廉であることが出來ないであらう。こ

の低廉な物を平氣で買つてゐるのは、間接に奴隷的勞働者の勞力を掠奪してゐるのだと云はれても仕方がないやうにも思はれる。併しこれは今日の社會が惡いのであつて、個人は一人ではこれをどうすることも出來ないのである。不便を忍んでそんなものを買はないことにすれば、勞働者の賃銀は今よりも更に廉くなるであらう。氣の毒だからと云つて高く拂ふとすれば、それは勞働者の手に入らずに商人といふ中間階級が利得するのみである。從つてこの意味の掠奪は、今日の社會に生活するあらゆる階級のあらゆる人が――賃銀勞働者其人と雖も、苟くも彼が消費者である限りは脫れ得ぬところである。この良心の痛みをなくするためには、吾々は今日の經濟生活をその原則から改めて來なくてはならない。

卒直に云つてしまへば前述のやうなのが自分の經濟生活の實情である。從つて自分が現在のやうな位置に立つてゐる限り、勞働者の所得を增加する運動に自己直接の利害問題として參加することが出來ないのは當然である。されぱと云つて自分は、掠奪の結果の不淨財として投げ出すことを當然とするやうな財産は無論持つてゐない。從つてこの場合自分のやうな者のとるべき道はたゞ二つあるのみである。一つは現在のやうな敎師及び著述家といふやうな職業を投げ出して、最も不幸な賃銀奴隷の位置に下ることである、さうして賃銀勞働者の一人として自己の問題として狹義の勞働運動に參加する資格をつくることである。もう一つは、これを直接に自分自身のことではなくて社會全體の問題と見て、その社會の一員としてこの問題の解決に參加する義務を感ずることである。自己の利害ではなくて良心の問題とすることである。自分は敢て第一の道を擇ぶ人の愛と熱情とを深く尊敬するが、凡ての人がその個性とその天分との如何を顧みずに悉く此道をとらなければならぬと信ずることは出來ない。さうして敢て第一の道を選擇する人にあらぬ限り、どんな悲痛な勞働運動者らしい顔をしても、吾々は結局第二の立場に立つより仕方がないことを思ふ。さうして此第二の

立場も決して無用な立場ではないであらう。切迫せる實際運動にとつては猶更大局から大觀する立場が必要であるからである。又自分のやうに勞働運動以外に天職を感ずる者は、せめて第二の立場に立つて社會の自省を刺戟する義務があるからである。併しこの立場に立つものは、「勞働者は自分で自分の事を始末する」といふ言葉によつて引導を渡される。自分の考に從へば、今日の場合このやうにして知識階級との協同を拒むことは、決して狹義の勞働者の得策ではないが、併し彼等が明瞭に此の如き態度をとるやうになれば、今日の勞働運動者の多數はその立場を失はなければならなくなるであらう。とは云へ狹義の勞働者が知識階級の參加を拒むと拒まぬとに關らず、社會のその缺陷に對する自省は一日も弛むべきではない。自分のやうな被掠奪者以外の者が猶勞働問題を考察するハンブルな權利は此處に成立する。さうして所謂知識階級に屬する勞働運動者も亦進んで第一の立場に立つか、退いて吾々のやうな立場に歸るか、早晩孰れかに決着しなければならないであらう。最も醜いのは自分が第二の立場に立つてゐながら、第一の立場に立つてゐるやうな顔をする者の自欺である。

11

善と惡との戰ひに於いて明瞭に敵か味方かの立場に立つことが出來ないものは、例外なく、云ひ解くすべもなき怯者である。併し利害の戰ひ恩怨の爭ひに於いて兩者の孰れにも與せぬ者は必ずしも怯者ではない。寧ろ彼が明瞭に善の味方であるが故に、兩者の孰れにも與し得ぬやうな場合も決して少しとはしないのである。アテナイの民主貴族兩黨の爭ひに際してソクラテスのとつた態度も恐らくこれであつた。貴族と農民との爭ひに於いてルーテルのとつた態度も亦多分これである。――自分は「階級鬭爭に於ける赤十字的態度」を難ずる人にこれを以て答へる。此點に於ける自分の立場は明瞭に宗教的である。自分は社會問題に宗教的態度を交うべからずといふやうな科學迷信の徒ではない。（五月十一日）



耕畝小景

土田杏村

蒔いた西瓜は芽吹いた。ちら、ほら、ちら、ほら。二枚の葉つぱは威勢よくぱつと開いて居る。大空に向つてのびのびと開いて居る。まるで子供が背のびをしたやうだ。そつちの畝の胡瓜、白菜。籬にはふらふらとからみつく白豌豆の花。すべては潤澤なる空氣と、野にあまる日光を浴びて健全である。雲雀よ、雲雀よ。ぴいよろ、ぴいよろ、ぴい、ぴいよろ。今自分は禁制件天連の異書を讀み了へ、此の短かい褐をはき、廣い笠を戴いて耕畝の中に立ち働かう。輝く日輪、麥の穂のさやぎ。さや、さや、すそ、さや。小さき鍬は土深く喰ひ入る。

小徑の彼方に人見えず。見渡せば人の子の家に開きたる窓ぞ無き。初夏の憂欝、我れに降り注ぐ、雨のごとくしげ

し。

此方の小丘、彼方の凹地。畝また畝につゞく、麥の穗のさやぎ。さや、さや、すそ、さや。あゝ、されどその畝に夥しき黑穗黑穗よ。その實らさる穗のまじれるをいかにかすべき。農夫はひたすら手をこまぬく。輝く日輪、麥の穗のさやぎ。麥の穗のさきさき七彩のまばゆさぞ住む。あゝ、人の世は制せず、略せず。願求の淨土、寂光パアソナル、アナアキイ。移り行く世界のものみなに何のさいはいがあるか。眞裸かをもて生れ、眞裸かをもてかへり行く自然のふところ。あゝ、されど此の畝に夥しき黑穗黑穗よ。その次第に殖え行く力をいかにかすべき。農夫はひたすらためいきす。

蒔いた西瓜は芽吹いた。ちら、ちら、ちら、ほら。威勢のよい葉つぱは、まるで大空を兩手で持ち上げて居るやうだ。輝く日輪、麥の穗のさやぎ。來れ、我が友。いま何處に住むか。小徑の彼方に人見えず。見渡せば人の子の家に開きたる窓ぞ無き。初夏の憂鬱、雨のごとく降りそゝぐ。あゝ、我れ今耕畝に降り立ちて、禁制伴天連の異書を讀むに、小さき鍬のみ魔物の如く大地に喰ひ入るのだ。　（一〇、五、一一。）

自傳



片山潜

序

私の机の上に四卷の原稿が置かれてある、それは言ふまでも無く片山氏の自傳の一部である。最初の分は二十字詰二十行型の原稿用紙百二十枚で、それは氏が明治四十五年東京電車就業者のストライキに關連して收監された折に、獄中で、起稿したもので、明治四十五年三月一日から毎日二枚宛を許されて書いたものである。色々な原稿用紙が混つてゐる。そのうちには只の半紙も入つてゐる。その一枚々々には篠田といふ人の印形が捺されてゐる。これが獄吏の檢閲濟みの證であるらしい。これ等の一枚々々が氏にとつて過去の懐かしい又苦々しい記念品であるに違ひはない。で室伏君に頼んで「改造」に揭載して貰ふことになつてから、途中で紛失することを恐れた爲めに、

著作のうちにアニーブリケートをとつて綴ることにした。最初の分は片山氏の所謂肖像のに於ける背景の部分ではあるが、氏の淳朴な性質と眞摯な個性がよく現されてゐる。二番目は自ら一個の俗人と稱する氏が子供の時分の記憶を呼び起し、その樂しかつた日を懐しみ、純眞な自然の姿を讃美した一つの詩篇とも見るべきものである。後半生の極端な逆境に苦しんだ氏には、少年時代の追憶は決して忘れられないものであるに違ひない。あと四十枚で在獄中の原稿は終つてゐる。それには寺子屋時代の生活が詳細に書れてゐる。昔の事を知らない自分達には頗る興味を以つて讀ませるものである。その次のは明治十二年郷里を出てから明治十七年の冬米國サンフランシスコに上陸するまでのことで、それは大正三年八月廿一日第四回の渡米に旅立つ前に締切つてゐる。その次は昨年米國官憲が在米の共産黨員を壓迫した當時、氏も又米國政府の注意人物として、恐ろしいアルマー検事總長の眼が氏のうへにも光つてゐた。で友人の勸告でアトランチック市のある邦人の家に匿（かくま）つてもらう事になつて、そこに於る時分に書いたものである。その次のは出京時代のことを詳しく書いてはゐるが重複する點があるので最も詳い方の分を掲げて貰ふことにした。で、この様に書いた時が、餘り異ふので文章なども同じ様な調子に行つてゐない。最初の分は「予」が主人公だが、その次から「僕」になつてゐる。でその次の原稿を寫す時には「僕」を「予」に變更して書くから讀者は、その氣分で讀んで載き度い。最後の分は「大[illegible]植民事業を始む」時代即ち（明治廿年頃だと思ふ）で終つてゐるが、その次の原稿は氏が旅立から私の所まで送つて來て下することになつてゐるから改造社へは直ぐに私の方から送ることになつてゐる。氏には今日の日本社會主義者の様な綺麗な筆は持つてゐないが、それだけ又氏の書いた者か、達筆に書かれて事實を誇張したり粉飾したりする様なことなく、眞面目に眞實を眞實として書いてゐる所に價値と面白味が見出されると思ふ。それは讀者の判斷にまかすより仕方のい事だ。これだけ氏の自傳を發表するに際して言はして載ゐ度い。

千九百二十二年三月十二日

紐育にて　石垣榮太郎

生立ちの記

極めて平凡な、而も格別興味のない、卑俗なる予の生涯を玆に少しも修飾を加へず赤裸々に語る？其の目的も亦極單純であり、平凡である。此は固より他日世に公にして人の批評を求め、また賞賛を博せんとするのではない。之が唯一の目的は余の最も愛する子供等に其の父が如何なる場所で、而も如何なる父母に依つて生育したか、又如何なる青年時代を如何なる境遇で過したか、其の壯年時代は何處で暮したか如何なる事を為したかを詳細に語るのである。

抑も何故に斯る平凡なる事柄と余の如き平凡なる拙筆で書か子供等に傳へんと欲するのであるかと云へば、余が始めて家庭を形成したのは比較的晩年であつた。従つて余が子供等は[illegible]

皆幼少である故に今直接余の過去五十年間の實歴談をした所で・彼等は之を理解し得ない。唯他日彼等が生長して事理を解する様になつた時、そして其父の事を知りたいと欲した時、之を知るの便宜を與へんとするのである。即ち斯時彼等をして何んな父と祖先とを持つてるかと云ふことを知らしめんとするのである。

アリストートルは其子ニコマカスに一の倫理書を著して與へた。之は實に千古の名著で世界の重寶となつてゐる。然るに余は斯る資格も能技も持たない。併し唯予が今日迄爲して來た五十年間の實歴史は予に取つて貴重なる者である。一面より云へば予の生命であると云ふことが出來る。而して予の生涯は子供等に取つて大した有益な事柄があると云ふでないが、又幸に彼等に知らせることの出來ない様な惡るい事はない。と云ふて固より彼等に對して耻づかしい事、又眞似られてはならない様な事はないとは斷言が出來ない。かかる事は實に予の痴鈍の致す所の止を得ない結果である。故に予は總べての予が有する弱點、過失、失敗、及び馬鹿な事を一つも隱さず大膽に而かも明白に語るであらう。世には斯くては子供が親を輕蔑せん寧ろ隱すに如かずとなし、特に善を裝ふ者がある。去れど予は飽迄正直に誠心誠意實際を語つて彼等をして予の足らざる所、痴鈍なると將た馬鹿げた事を僞たことを遺憾なく理解せしめんとするのである。予は斯くする事が即ち彼等の將來を警戒する所の唯一の好手段であると信ずる。シルレル曰く、世界の歴史は人が作る、而して此歴史は人類の裁判である、と實に至言である。予は斯の意味に於いて予の眞實の總べてを彼等に語る事が至當であり、又斯くして始めて予の一生は彼等の爲めに有力なる處世の鍼鍵を與ふる者であると確信する。

若し幸にして此自傳が彼等を敎ふる事がありとすればそは予が今迄味ひ來た所の幾多の經驗と之に伴ふ辛苦艱難！然り辛苦艱難に出逢ふてよく耐忍し、而かも終に之に打ち勝つて來たと云ふ一事であらう。而して此間には云ふに云はれぬ深刻なる苦痛もあるが亦同時に無限の興味がある一面より見れば慥かに此に偉大なる人生の慰安と幸福とが潜在して居るのである固より身を逆境に處し、而も貧困の間に苦節を守ると云ふ事は容易ではない、然り困難であるが又斯る經驗を嘗め盡してこそ始めて如何に天は人を惠むかといふ極めて靈妙なる意味を解することが出來るのである、斯る感想は終に予をして自傳を草せしむることゝなつたのである。

×　×　×　×

本家は藁葺の古びた大きな建物で前に廣い庭があつて少し

高く石垣で築き出され、右側の前に一段高く突き出て立派な離れ座敷があり右横にも亦本家の西側を掛けて庭先き迄西面を囲ふて一棟の二階建がある。併し内は色々になつて居る。一番端が便所で其並びが綿打場（昔は自用の綿々打つた者である）次が馬屋、納屋、米藏、及物置と云ふ順序に別れて居る、而して納屋から裏の二階は藁など其他馬糧などを貯へる所となつて居る、此建物の西側に引込んで薪部屋が一軒あつて都合四棟である。

離れと納屋の屋根は所謂棟瓦で其軒は總て瓦葺、是は昔は普通農家の風習として總瓦ではチト贅澤過ぎるとしたものである。

本家と離れとは理想的巽向きで殊に離れからは村中六分通り而して東南の方は天を突く迄限りなく眼界に取り入れることが出來、而して北は家の裏になつて居て一面に生茂つた竹林で圍はれて一種の防壁を成して居る、其背後は多少畑があつて數軒の農家が散在して居つて上の方は山林で段々と高き山に續いて居る。又屋敷の直ぐ前は一面の平地で田畑計り、而して此田圃が自然に低くなつた其裾を恰も弓なりに縫ふた様に西の奥の方から一條の小川が流れ、丁度家の眞正面を二三丁下つた所へ來て今一の小川が向ふの遠方の谷間よりウネクネと水田の間を横つて此處で一所になつて東へ東へと家の下の方を流れて居る、此向ふから流れる川の右側に少し離れて松林の小山がある、此上に愛宕神社を祀つてある、而して川の左は一面に水田で今度は一枚々々と遠くなるに從つて、高くなつて、おしまひには丘岡となり、山林となり、到頭高い深山となつて備前作との堺を成す高山となつて居る。唯川同ふ小山の横の[illegible]だ所に一二軒の家が建てられてある斗りで外は田畑と山[illegible]る。冬になると時偶鶴だの烏だのが來々した。而して鴨は[illegible]降りた。所が夜になると、よく狐が火を燈す、何うかすると[illegible]の狐の嫁入りを仕て見せることもあつた。又冬寒い晩など夜更けて狼の叫くすさましい嫌な聲が聞えることがあつて[illegible]かつた。今は其様な事はないそうだ。予の家かと見ると殆んど何方を向いても山又山を以つて取り圍まれて居て、丁度擂り鉢の底に居る様である。併し唯南の方山頂迄は非常な距離があつて殊に東天太陽の出る方角は眼力の及ばぬ程遠山を見渡すことが出來るので斯く高い山斗りに包圍されてゐても少しも窮屈な感じはしない。春夏秋冬の季節は間違なく來て氣候は中分がなく、東京見たような嫌な風は吹かず、冬雪が降つても風がないから暖かく夏は比較的涼しく誠に住み心地のよい所である、而して作物は殆んど何でも出來る、果物も澤山にあり、春は[illegible]、

秋は菌狩の樂しみがあつて實に安樂な生活の出來る云はば一の仙境である。而して予の生れた所は極小村で戶數僅か三十、此內掛け茶屋が一軒ある、外は農家ばかり、炭燒き樵夫を業とする者が數人ある。

予の所からは何の方面に出るにも山か何かを越えねば村も町もない、其通路の一番樂なのは西南の一方、壺の內と云ふ村を經て弓削と云ふ町に行くのである。併し此道にも村外れに山續きの生茂つた森があつて其下に大きな深い死んだ樣な水の池がある。弓削に行くには此池端を通らねばならぬ。此邊から度々色々な人が飛び込んで死んだから幾つもの寂寞たる石地藏が池に向つて建てられてゐる、故に晝でも何んだか薄氣味の惡るい所である。

又北東に出るには二つの峠を越さねばならぬ、而して五十丁程行くと美作第一の大川が北から南へ流れて居る。「東川」といふて舟の通ふ川である、此處を大戶と云ふて薪炭及總べて農產物を扱ふ問屋が數個と酒屋其他の店がある。予の村へは皆此處へ來て取り引きをする、而して此川は因幡堺の高山から發して津山の城下を通つて來るのである。其川口は備前の西大寺と云ふ所である。此處には年貢米を納れる御藏があり代官所があつて、予の村あたりからは年貢米を川舟に積んで此處に納め、三年目か五年目には此年貢米が江戶廻しになる、スルト帆前船に積んで庄屋が監督で江戶へ持て來て納めたものだ、予の曾祖父も父も此役を勤めて江戶へ來たことがある。

南の方は總べて山坂で、十六丁の所に有名な天台宗の寺がある、本山寺と云ふ、三代將軍樣を祀つてあるので津山の城主松平侯の監督の下に在り頗る威張つたものであつた。此處から南は山に上るばかし。

又西の方に出るには明見山と云ふを越へて一里程行くと淨土宗の祖師法然上人の誕生寺がある。非常に立派なお寺で此處に一寸した町がある、今は岡山を起点とせる中國鐵道が通じ此處が停車場になつて居る。今少し委しく地理上の關係を云へば予の村から津山へ四里、岡山へ十里餘、江戶へ三百里、（實は二百八十里）又弓削の西南三里の所に福渡と云ふ渡船場がある、川向は備前、此川は岡山市を東西に縱斷して終に兒島灣に流れ込む、福渡から岡山へは舟で一日に行かれた。汽車は今一時間ソコ〳〵で走る。更に昔の交通の便を云へば、大戶から西大寺迄東川を下り此處にて四國、九州、神戶、大阪及江戶方面への船便を待つたものだ、今では津山佐伯間に毎日飛脚船が通ふから、予の村からも此舟便で一日足らずに山陽線に連絡が附く。所が五十年の昔と來たら夫は仲々不便極つたものであつた。此

語から云へば實に山間に閉ぢ籠められた一寒村に過ぎなかつた。村の名は羽尚木、郡名は氣高郡、今は氣高郡弓削村の一字となつて居る、又更に山陰因伯諸國に行くには昔も今も高い々々山又山を越へねばならぬ、固よりコンナ事は別に面白くはないが、去れど畫家は肖像を描くに當つて最も其背景に苦心する、そは人其境遇とは須臾も離るゝことは出來ない、恰も影の形に從ふ如く、若しくは身體（からだ）と心とが別々に實在しないやうに兩者共に必要である。抑も人と其境遇との關係は古今識者間の大問題であつて而も人が境遇を作るか、境遇が人を作るかと云ふ事は今尚ほ未定の問題である、予は今之を解決しやうと云ふのではない、去れど幼少の時に於ける境遇が其性質を形成する上に於いて、如何に重大なる關係があるかは又古今通じて認めらるゝ所である、シテ見れば片々たる予の生涯を語るに當つて亦多少の背景を示すは強ち不必要な事ではなからうと思ふ、故にザツト玆に書いて見た。尚ほ進んで斯を背景として生長した予の來歷を語るに從つて今一層詳細に之が着色を施す機會があるであらう。

× × × ×

予の少年時代の背景として今一つ語らねばならぬ事は「時代」である是は固より予の幼少年時代に反映して居るから特に並に語らなくともよいやうであるが、又考へて見ると今日の社會とは餘りに相違して居るから子供等の理解の便宜を計る爲めに予の生れた時代の概略を語るであらう。

予の生れたのは安政六年十二月七日、明治元年を去ること約十年前であつた。而して未だ徳川幕府の政治、所謂將軍政治の行はれて居た頃であつた。然れども時將に維新の革命が起らんとする夕べであつたから天下は極めて騷々敷、諸所方々に浪人共が徘徊して予の村の樣な邊僻な山の中へでも時々浪人が舞ひ込んで來て淳朴な百姓を威嚇した、爲めに百姓等は安心して稼業に從ふことが出來なかつた、又同時に浪人のなれの果で、所謂「雲助」となつて予の家などには金品をネダりに來たことを予は薄々覺えて居る。丁度此時は彼の有名な安政の疑獄が起つて居たので滿天下の志士にして苟も徳川の政治・反對の運動を爲た重も立つた者は皆捕縛されて江戸へ送られた。幕府は彼等に向つて極めて峻酷なる裁判の判決を下して、アタラ天下の人才、有爲の人物をドシ〳〵斷罪に處して仕まつた。吉田松陰など云ふ有名な人傑が殺されたのも此疑獄の結果であつた、而して予の生れた日は丁度此同じ疑獄で橋本左内と云ふ大人物が千住小塚原で斷罪に處せられた一ケ月程後であつた。

然り而して間もなく、此安政疑獄の大發頭人であつた幕府の

秋は菌狩の樂しみがあつて實に安樂な生活の出來る云はば一の仙境である。而して予の生れた所は極小村で戸數僅か三十、此内掛け茶屋が一軒ある、外は農家ばかり、炭燒き樵夫を業とする者が數人ある。

予の所からは何の方面に出るにも山か何かを越えねば村も町もない、其通路の一番楽なのは西南の一方、壘の内と云ふ村を經て弓削と云ふ町に行くのである。併し此道にも村外れに山續きの生茂つた森があつて其下に大きな深い死んだ様な水の池がある。弓削に行くには此池端を通らねばならぬ。此邊から度々色々な人が飛び込んで死んだから幾つもの寂寞たる石地藏が池に向つて建てられてゐる、故に晝でも何んだか薄氣味の惡るい所である。

又北東に出るには二つの峠を越さねばならぬ、而して五十丁程行くと美作第一の大川が北から南へ流れて居る。「東川」といふて舟の通ふ川である、此處を大戸と云ふて薪炭及總べて農産物を扱ふ問屋が數個と酒屋其他の店がある。予の村へは皆此處へ來て取り引きをする、而して此川は因幡堺の高山から發して津山の城下を通つて來るのである。其川口は備前の西大寺と云ふ所である。此處には年貢米を納れる御藏があり代官所があつて、予の村あたりからは年貢米を川舟に積んで此處に納め、三年目か五年目には此年貢米が江戸廻しになる、スルト帆前船に積んで庄屋が監督で江戸へ持て來て納めたものだ、予の曾祖父も父も此役を勤めて江戸へ來たことがある。

南の方は總べて山坂で、十六丁の所に有名な天台宗の寺がある、本山寺と云ふ、三代將軍樣を祀つてあるので津山の城主松平侯の監督の下に在り頗る威張つたものであつた。此處から南は山に上るばかし。

又西の方に出るには明見山と云ふを越へて一里程行くと淨土宗の祖師法然上人の誕生寺がある。非常に立派なお寺で此處に一寸した町がある、今は岡山を起點とせる中國鐵道が通じ此處が停車場になつて居る。今少し委しく地理上の關係を云へば予の村から津山へ四里、岡山へ十里餘、江戸へ三百里、(實は二百八十里)又弓削の西南三里の所に福渡と云ふ渡船場がある、川向は備前、此川は岡山市を東西に縱斷して終に兒島灣に流れ込む、福渡から岡山へは舟で一日に行かれた。汽車は今一時間ソコ／＼で走る。更に昔の交通の便を云へば、大戸から西大寺迄の船便を待つたものだ、今では津山佐伯間に毎日飛脚船が通ふから、予の村からも此舟便で一日足らずに山陽線に連絡が附く、所が五十年の昔と來たら夫は仲々不便極つたものであつた。此

點から云へば實に山間に閉ち籠められた一寒村に過ぎなかつた。村の名は羽出木、郡名は東南條、今は東郡弓削村の一字となつて居る、又更に出雲因伯諸國に行くには昔も今も高い〻〻山又山を越へねばならぬ、固よりコンナ事は別に面白くはないが、去れど畫家は肖像を描くに當つて最も其背景に苦心する、そは人其境遇とは須臾も離るゝことは出來ない、恰も影の形に從ふ如く、若しくは身體(からだ)と心とが別々に實在しないやうに兩者共に必要である。抑も人と其境遇との關係は古今識者間の大問題であつて而も人が境遇を作るか、境遇が人を作るかと云ふ事は今尚ほ未定の問題である、予は今之を解決しやうと云ふのではない、去れど幼少の時に於ける境遇が其性質を形成する上に於いて、如何に重大なる關係があるかは又古今通じて認められるゝ所である、シテ見れば片々たる予の生涯を語るに當つて亦多少の背景を示すは强ち不必要な事ではなからうと思ふ、故にザツト玆に書いて見た。尚ほ進んで斯を背景として生長した予の來歷を語るに從つて今一層詳細に之が着色を施す機會があるであらう。

× × × ×

予の少年時代の背景として今一つ語らねばならぬ事は「時代」である是は固より予の幼少年時代に反照して居るから特に玆に語らなくともよいやうであるが、又考へて見ると今日の社會とは餘りに相違して居るから子供等の理解の便宜を計る爲めに予の生れた時代の概畧を語るであらう。

予の生れたのは安政六年十二月七日、明治元年を去ること約十年前であつた。而して未だ德川幕府の政治、所謂將軍政治の行はれて居た頃であつた、然れども時將に維新の革命が起らんとする夕べであつたから天下は極めて騷々敷、諸所方々に浪人共が徘徊して予の村の様な邊僻な山の中へでも時々浪人が舞ひ込んで來て淳朴な百性を威嚇した、爲めに百性等は安心して稼業に從ふことが出來なかつた、又同時に浪人のなれの果で、所謂「雲助」となつて予の家などには金品をネダリに來たことを予は薄々覺えて居る。丁度此時は彼の有名な安政の疑獄が起つて居たので滿天下の志士にして苟も德川の政治・反對の運動を爲た重も立つた者は皆捕縛されて江戸へ送られた。幕府は彼等に向つて極めて峻酷なる裁判の判決を下して、アタラ天下の人才、有爲の人物をドシ〳〵斷罪に處して仕まつた。吉田松陰など云ふ有名な人傑が殺されたのも此疑獄の結果であつた、而して予の生れた日は丁度此同じ疑獄で橋本左内と云ふ大人物が千住小塚原で斷罪に處せられた一ケ月程後であつた。

然り而して間もなく、此安政疑獄の大發頭人であつた

井伊大老は、脆くも三月三日、花の節句の朝・櫻田門外の雪の中で水戸の浪士等に暗殺せられ、茲に天下の形勢は一變した。諸外國は頻りに開港を迫り、而して尊王攘夷の運動は滿天下を震動し鼎の沸くが如き有様であつた。或は馬關の砲撃となり、或は長州征伐となり、又變して徳川將軍の大政返上となり再轉して討幕の大擧となり、終に維新の革命は奏功して王政維新、明治政府の建設となつたのである、斯の如く予の生れた時節は隨分騷がしい世の中であつた。

然れども記憶すべき一事は抑も維新の革命は士族以上の革命であつて、一般の百姓は殆んど之に携はらなかつたと云ふことである、從つて維新の新政事が實際一般人民に普及し予の村などが此影響を直接受けたのは早くも明治四五年の時であつた、即ち予の十四五の時であつた、故に予の少年時代は徳川幕府の封建制度の下で過したのである、換言せば予は舊幕府時代の子供である、今の社會に比ぶれば當時の人情風俗其他の事物は非常に相違して居ると云ふことを記憶せねばならぬ。

因に記す、予の村は美作七郡六百十三ケ村中の一つであつて、所謂天領と稱する徳川將軍直轄の領土であつた、而して播州龍野藩の「御預り所」となつて支配されて居た。然るに弓削は下總國古河藩の屬領となつて居て、代官所があり、ツイ隣りの本山寺は津山藩の領地、共に所謂私領であつた、抑も私領の政治は天領に比較して往往ヒドかつた。無論城下があつて人民は直接間接に利益を受けたらうが、萬事に付けて取締りが嚴重であるし、年貢米も餘計に取られた。故に同じ美作内でも私領の人民はよく百性一揆なるものを起した。予の生れた天領では一揆など起す様なことはなかつた、又元來天領の人民は私領民に對して非常に威張つて居た、天領の者と云へば、隨分巾がきいた、無理の通つた。喧嘩をしても理否に拘はらず勝つと云ふ風であつたとのことである。併し實際こんな事が始終あつた譯ではない、兎に角天領民の氣風が私領民に比して荒かつたことは事實である。

然り而して直接の支配者たる龍野藩の政治は何うであつたかと云ふに「猫の留守に鼠の正月」的に政治は極めて寛大であつた、唯年に一度位い龍野から代官が領内を巡廻して來る、而かも是は重に百性から賄ふて來て貰ふので、其目的は全く年貢米を減らして頂戴うためであつた。天で農業の事など、ご存じないお役人たちに來て稲作の出來生へを見て貰つた所で固より埒の明く譯のものではないが、是は云はば當時百性共の有つた「慣習的權利」とでも云ふ這り口で、兎に角斯うして上を拜み倒して、嘆願して殆んど毎年のやうに年貢米を減じて貰ふたの

である。時には單に通り一遍の視察でなく檢見といふ作柄の試驗法を行つて貰ふこともあつた。之も直接任に當つて仕事を爲る百性等がお役人の眼の前で宜しく遣つての時に目的を達したものである、代官の出張と云ふても斯樣な性質のものであるから、村々の百性等は其庄屋を通じて精一杯の御馳走を整へて饗應して役人の御機嫌を取つたものである。此外天領の百性は龍野藩の役人に接することは滅多になかつた。

　而して總べての村内の事は庄屋が、年寄、組頭、及百性總代と稱する村民共が其内より選擧して定めた一種の議員なる村役員と相談して決定した。固より百性の遵守すべき掟は大概村村の中心と見る可き場所に公札場があつて此處に公札が掛けてあつた、斯公札には公儀（德川幕府）の御達し、又禁制の事項などが書いてあつた。彼の「キリスタン宗門禁止」の公札の如きは予の子供の時迄チヤンと掛つて居た。

　斯う云ふ風に村は治められてあつた、而して龍野藩に對する村の用事は年々の貢米を上納する事であつた、所が百姓の方では今年は大嵐が吹いたとか、雨が降り過ぎたとか、水害に逢ふたとか、日が照り過ぎたの、虫害に苦しんだとか、氣候が餘り寒くて稻の實入が惡るかつたとか種々の難癖を附けて米が思ふ程に收れなかつたからドウゾ貢米を減じて與れろと、サモ巧妙に認めた嘆願書を差出したものである。此事などが庄屋の重大なる職務の一であつて、之が爲めには村々の庄屋が寄合つて相談をして皆なるべく一致の行動に出たものである、而し斯る嘆願を爲ることは殆んど每年であつて又大概は聞き屆けられて年貢米を減らして貰つたことは過去の記錄に見えて居つた。

　然り而して偶に村民間に苦事訴訟が起つても皆庄屋及村役人等の周旋で事が圓滿に落着して大庄屋迄持出すやうなことも殆んどなかつた。又此時代には巡査も探偵も居なかつた、別に專任の官吏は無い、當時の天領の村はコンナ風であつた。唯今一つ治村上記憶すべき者がある、それは「番太」と云ふ者である。此「番太」はまた「目明し」とも云ふた。予の村の「番太」は近村に住む穢多の一人であつて彼は時々見廻つて來た。而も春秋二回は必ず村内の戶每を丁寧に庭の口の地邊に兩手をつき叩頭して御機嫌を伺つて步るく、スルト此方では春は麥、秋は米を一升位與れる、正月、盆などの祝儀に來ると又餅か米かを與へる、即ち之が彼の報酬であつた。

　で此番太は何を爲るか、彼は今時の巡査の仕事の一部分を爲たものだ、先づ風來の非人乞食を追つ拂ふ。盜賊の番を爲る、若し村内の或家へ盜賊が入つたならば、彼は早速四方八方へ手を廻はして探索する、而して捕へると、此盜人の腰に繩を附け

て牛馬を追ふやうに「此者は何日何處々々で盗みをしたから人相をお見知り置かれ御用心を願ひます」と云ふやうな文句で村内の重も立つた戸毎を連れて廻つて其揚句に此の盗人は他領又は國境外へ放逐した。又村内の縁日、祭禮及興業物などが掛つて群衆の集る所に彼は必ず來て、巾着切りなどの取締りを爲る。而して又村に葬式があつた後で彼は墓掃除に來た。此時は其家で多少の心附をしたものである。以上が番太の職務であつた。村民は皆彼を可愛いがつた。牛馬など死ぬと彼に與れる。彼は之を處理して持ち歸つた。穢多は皆な舊幕時代から肉食をしたものである、今一つ記憶すべきことは、彼の武器である。彼は固より、ピストルもサーベルも持たない。彼は唯一本の實挺と一條の縄とを持つて居たばかりである、去れど彼は之に如何な強盗でも兇者でもたやすく取つて押へた。實に彼は達者な腕を持つて居た奴であつた。

マア天領の村はコンナ風であつた。今から見ると事實一種の完全なる自治制が行はれて居たと云ふことが出來る。然り而して若しも村内で庄屋の手に應ぜぬ者が出來ると、龍野から役人が遣つて來て捕縛して連れて行く、又苦事、訴訟にしても村で纏りの附かぬ者は龍野又は江戸へ持ち出すことが出來たものである。併しコンナ事は殆んどない、又持ち出さんとした所で非常に入費が掛つて普通の身代の者では堪へられる者ではなかつた、而して又ソンナ大事件の起る機會も單純なる百姓の間にはなかつたと云ふてよい。

以上は予の生れた所、及び時代の大體であつて別に珍奇な事はないが今と比べると大違ひである。

× × × ×

家は昔より百姓である。何時頃よりか知らぬが代々庄屋であつたことは家に澤山の帳面があつたことによつて分る。父の名は國造、母は吉よと云ふ。父は二里ばかり東北の越尾と云ふ村から年十五の時、予の家へ養子に來て、母の吉よと結婚した。兩人の間に二人の子が出來て其次男である、兄は三つ年上である。結婚の時、母も亦年は十五であつた。昔は皆若い時に結婚したものである。予が生れた時は家に祖父母、曾祖父母が皆健在して居つた。而して何ほ年若き叔父と叔母とが居つた。斯く三代重ねて三夫婦が一所に住んで居る家庭で、實に幸福なる者として周圍の人達から。賞賛せられたものである。

然るに予が四つの時、父は故あつて去つた。何うした譯でまるやうになつたのか知らないが、何でも父の實父は非常に頑固なんであつて何か氣に入らぬ事があつて無理に仲よき夫婦を引き割いて連れて歸つたらしい。何故か予は此の實際を知らな

い。斯る悲劇的別れは父をして悲觀に起かしめたのである。彼は斷然出家して天台宗の僧侶となつた。父は去つてからも非常に兄を愛して屢々呼び寄せた。時には一二年も膝下に置いて學問を爲せたことがあつた。所が予は生來お寺は固より坊主が嫌いであつた。多分坊主は死人の世話をして生活して居るからであつたらう。故に予は決して父の所へ行かなかつた。父に逢ふたのは十五六の頃であつた。始め父は予を引き取つて小僧に爲る考へであつたらしい。屢々予は坊主になれと勸められた。去れど予は斷然此の勸めを容れなかつた。斯く予は終に家に居て母の手で育てられた、母が未だ年若いのに拘らず、終生獨身で予等二人の爲めに一身を犠牲にして養育して呉れた。其恩愛の情は多大のもので予の常に感謝に堪へない所である。

予の家は村で一番の舊家であつたものと見へて、村内の小字が「向ヒ、上リヨウ、中屋、西ノ奥」など予の家を中心として名稱が附けられてある。併し我が祖先が何時の時代に此處へ來て住んだ者が正確なことは分らない。只口傳に依ると予の祖先は近郷の舊城主原田三河守の家臣であつた。彼の戰國時代に備前の村上と云ふ大名が美作へ侵入し國内の豪族及小大名を片端から討ち滅ぼした。此時原田三河守も落城して全く滅亡して仕舞つた。予の祖先は主君の沒落後此處に落ち來つて幽かなる田園生活を始めたと云ふことである。固より原田三河守の位牌も系圖も其菩提寺なる誕生寺にチヤンと安置されてある。而して又原田の家臣を祖先とする者が予の近郷には澤山にある。曾つて一度誕生寺で原田城主の追善を營むだことがある。此時予の曾祖父も亦其家臣の末裔と云ふので此催しの席に列らなつたとのことである。去れど予の家には系圖も何もソンナ物はない。それは昔予の家が火災に罹つて全燒したことがあるから其時に失なつたものかも知れらない。今日のやうに新聞雜誌もなし、地方の記錄もないから古い事柄は分らない。併し予の生れた屋敷は既に示す如く地形から見ても眺望と云ひ便利と云ひ得た家の近傍の地味の肥沃の狀からして村內第一等の優等勝地を占め、又字迄が予の屋敷を始めとして附てある所から推測すると予の祖先が此村の最初の移住者であつたかと思はれる。加之予の家は昔から代々庄屋であつて村民の牛耳を執つて來たことは事實である。シテ見れば此の結論は慥かであると云ふことが出來る。

× × × ×

予が有する幼年時代の記憶は誠に少ない、キツと平凡な者であつたに違ひない。又別けて平凡に生長したであらうと思ふ。實を云へば予は家に餘計な者であつた。母がよく話して聞かし

た、家中では此度は女の兒が生るればよい女兒が欲いものだと渇望して居た。所が男兒であつて、皆が失望した。斯う云ふ關係から予は生れるとから一つの拖介者であつた。總べての愛と有り丈けの幸福とは夙に總領の兄が占領して仕舞つた。予は家族の者の心に何物をも與へなかつた。從つて彼等の愛情を起さなかつたものと見える、一例を云へば、叔父も兄も澤山立派な而も大きな五月「のぼり」だの「ハンキユー」だのを貰つて持つて居たが予は只小さな「金時」の畫いてある「のぼり」を一本貰つて居たばかりであつた。年々五月が來て叔父や兄の澤山立派な「のぼり」が立てられて勇しく見へると予は小兒心に何だか羨しいやうであつた。然れども次男であるからと教へられた爲めに、予は敢て不平は云はなかつた。加之予は唯一本の「金時」の「のぼり」が非常な氣に入て居た。每年に五月立てゝ貰ふのが實に樂みであつた。

今から考へて見ると、實際予は生れ落ちるとから冷遇されてあつたのだ。父が去る時、家の財產（山林田畑等）を子供等に分配した。叔父と兄とが相續者であるので大部分を與へられた。叔母も田地を貰ふた。然るに予に一枚の畑も與れなかつた。固よりこんな事は後年母が語つて聞かせたから知つたのである。他の者は何うあつたにしても母だけは兄と同じやうに予を愛して與れたことは事實である。予は末子であつたから兄よりも永く母に抱かれたり、おぶさつたりした。實に予は母の愛子であつた。而して叔母も亦性柔和なたちでよく予の守をして常に可愛いがつて與れた。斯くの如く予は女計りの手で養育された故かして性來の臆病であつた。殊に子供の時は俗に云ふ「オメツ子」であつた。恥づか敷いと云う「ヘニカム」習癖は今に拔けない。子供の時に人中に出るのが何だか嫌であつた。十二三になつても餘所の家に使に行つたり、町に買ひ物に行くことが出來なかつた。母と偶々親類の家に行つても、直きに歸りたくなつて堪らなかつた。と云ふて母に分れて一人で家に居るのは尙ほ嫌であつた。併し予は猫のやうに家に離れることは嫌いであつた、實に予は子供の時は意氣地がなかつた。今に覺へて居るが或る時三十丁程ある弓削近くの酒を賣る所へ遣れて行かれて酒を買ふことを教へられた。其後予は一人で一升德利を擔いで酒を買ひに行つた。すると生憎其時其處に酒が切れて無かつた。店では弓削に行つて買つて歸つたらよからうと云ふたが、予は之を爲す勇氣なく空德利をブラ下げてヲメ〱家へ歸つて來た。家では酒の來るのを待つて居た。別にシカラレもしなかつたが此時は自らも意氣地なく感じたことを今もよく覺えて居る。

×　×　×　×

予が直接父を記憶して居るのは只一つである。或時父が離れの椽側で兄を裸にして折檻する、兄は大な聲で泣き叫んで居るのは予が母家から見たことである。蓋し三つか四つの予が斯く明かに此事丈けをよく覺へて居るのは、非常に怖つて感じたから斯く深く心に印象を刻み込だのであらう。幼年時代に近所の人々はよく予の父の事を語つて聞せたが、今別に是と云ふ事を覺へない、併し母は過去を思ひ出すと悲しくなる者と見えて父の事丈けは格別語つて聞せなかつた、只若い時に後家となり、而も繼母の下で二人の幼兒を育てたので時には人知れず云ふに云はれぬ苦勞をした。とよく予に語つて聞かせた。之は母の考へは無論予を奬勵する積りであつた。以上が父に關する直接間接の事である。

母は誠に人のよい女であつた。氣前は非常にシツカりして居つた。父は去る。曾祖父母は既に老人なり、祖父は病氣で、叔父は未だ若し、祖母はお人よしで家にあつて食事の世話をするのみ、百姓の事は母が一人で一二の奉公人を置いて萬事切り廻はしたので、彼は日々田野に出て百姓仕事をした者である、是は少も珍しい事はない。予の邊では女でも柴刈りもすれば、田の草も取る、田畑に出て働くのは常である。母は嘗に農事の監督をするのみではない家事の監督もしたのである。故に母は随分忙しく働いた。從つて世事には餘程機敏であつた。

今から云へば母は無教育でヤツト「いろは」が讀めた位いで別に遊藝なども知らない、只當時の農家の女として恥かしくない丈けに縫針も出來て、義理人情を解して交際上ヒケを取るやうなことはなかつた加之曾祖父及祖父の感化や耳學問で色々な事を知つて居て、懇に予を養育して與れた。斯く予が母の膝下で受けた所の教訓は實に有益な事計りで、而かも餘程深刻なる印象を予の腦裡に與へて居る者と見へて、後年學校や書物や又種々の師友から澤山有益なる事柄を學んで居るけれども、日常事柄に接して何時でも一番に予の心頭に浮んで用に立つのは母の與へた所の訓戒若しくは金言である。蓋し予が今日迄一私人として辛くもよく節制を守つて來たと云ふことは全く母の親切なる而も痛切に實際的なる教訓の賜であると信ずる、母が何かに附けてチヨイ〳〵與へた俚諺又は地方的に使用され來た所の金言は今でも無限の意味がある、而して此等の言が知らず識らずの間に於いて予の言行を律して居るのであつて、實に予に取つて處世上、不文の憲法となつて居るのである。予は少年時代に母の希望に背いたことが一つある、之が爲めには母をして非常に心配もせしめ、又時に怒らせもした。予は子供の時には學

問が嫌いであつた。何故か知らないが全く嫌であつた。多分予は手習をしても生來の悪筆て下手で幾ら勉強しても一寸もよく書けない、又書物を讀むことを敎はつても覺へて居れない。更に進歩しない。從つて少も面白くもない。此樣な譯で予は學問が嫌であつたらうと思ふ。此事は曾ほ進んで語る必要があるから今は此位いで置く。兎に角母は熱心に予に學問を爲せやうと努めたことは事實である。予は遊ぶのが大好きで結局七八否十位い迄は全るで腕白な小僧で而も我儘者であつた。予の友達は隣りの同年輩位の女兒であつた。斯くて養育された爲めかして予は全く豪膽の氣象に乏しいのであるかも知れない。

斯く母は予の幼時養育者の總べてゞあるが、尙ほ玆に予の幼年時代に最も深き印象を與へて後年に至りて予の公的生涯殊に奮闘的活動の上に多大の感化を與へたる一人は曾祖父其人である。曾祖父は予の公生涯に對する思想の根源を成して居るのである。固より曾祖父の敎へと云ふても是れと云ふ明確なる事項を今玆に列擧することは出來ないが何かなしに曾祖父の一擧一動一言一句は深き印象を予の一身に與へて居る、蓋し彼の感化印象は彼の持てる者でなくして彼自身であつた、卽ち曾祖父の人格其者であつたであらうと思ふ。故に今彼の人となり及び其經歷を語るであらう。

曾祖父は今に至るも尙ほ予の師表的人物である。過去數十年間、幾多の立派な人物、敬すべき又追慕すべき人々に接し又其敎を受け若しくは知遇を忝ふしたが未だ曾祖父に代はるべき者は一人もない、今や彼は予の理想的人物となり年と共に尊敬の念が增して來る。予が直接薫陶を受けた曾祖父は既に八十歲前後の老翁であつたから、固より彼の若い時の事は知らないが、彼は寧ろ丈の高い方で五尺四五寸もあつたらう。キチンとした體格で肉附は何方かと云ふと瘦せぎすの方、顏は長目で鼻條はよく通り、目は細いが鈴成りに近く、脣は薄く齒は揃ふて、口元は引き締り、頭は大く髮は半白にして常にチョン髷に結ふて居り、顏全體の釣合は申分なく、何處となく重々しい處があつて而かも眼光の鋭利なると口元のシツカりした所とは如何にも威嚴が備つて居て犯し難く、其目尻の折れ目の少しツキストした所には賢しい快活な一種の愛嬌を含んで居る顏であつた。

彼は八十三歲の長壽で逝つたが曾つて眼鏡を用ゐたとはない。又イリ豆でもカキ餠の燒いたのでも辭さなかつた。以つて如何に健康な體格であつたかゞ分る。彼は沈痛にして極めて淸爽なる音聲を持つて居た。其咳拂には常に山孫子が答へた。然れども彼は容易に大聲を發し又は放笑したことはない。平生家に在つての起居動作は實に嚴肅で無駄話に耽つたことはない。

又如何なる事があつても怒つたことはない、ソウかと云ふて始終沈默を守つて居たと云ふのでもない。機會がある毎に自己が有する經驗又は世人の逸話などを話して一種の教訓を垂れると同時に座興を添ゆることに努めた。之には頗る妙を得て居つた。彼は斯様に眞面目でも一種の滑稽趣味を持つて居つた。

彼は十五の時近隣の遠き親類の稻谷家より養子に來て直に庄屋となり六十餘年間に亘る長期此役を勤めた。而して若い時には仲々郡中の庄屋仲間にヘペをキカシた者だとのことであつた。青年時代には當時の若い衆の遣る事は何でも爲した併し決して度を失したことはないとの事である。彼は別に學問と云ふ程の學問はやつて居なかつた。併し當時の社會に處し又庄屋として郡中の總代を勤め若しくは龍野藩に出張して其用務を辨ずるに充分なる技術を備へて居つた。又遊藝と云ふて何もやらなかつた。唯少し謠曲を知つて居た位のことである。

然らば何が彼の人格を作つたか、又其思想と意志とを鍛錬したかと云へば、柔術であつた。彼は一佐流の免許取りであつた聞く彼が柔術を習ふや六ケ年の間如何なることがあつても一日も欠さず毎夜師匠の所に通つて熱心に教へを受け終に其奥義に達したのであると。蓋し彼の體格の若く立派に發達して、常に其姿勢の嚴正なるも終生壯健にして腰のカヾムが如きことなきも其香氣の清朗にして銳利なるも、又偉大なる膽力を有して意志の鞏固なるも、思想の明確なるも、將た平生喜怒哀樂の情の容易に色に現れざるも皆彼が柔術の訓練より獲得せる資質であつたに違ひない。

彼は決して自己の功名を誇つたり又自慢話をしたことはない、若しくは他人の批難攻擊に渡る言を吐いたことは斷じてない。蓋し之が彼をして郷閭の人々、否な郡中の有識者に尊敬せられたる一原因であつたらう。抑も前者は少し注意のある者には困難ではないが後者は實に容易のことでは守れる者でない。

予は村民がよく彼の事を評するのを聞いた。彼は若い時、此地方の相撲取りが六人して彼と力試めしを爲た。六人は彼を上向に寢かして各手足頭胴を精一杯の力で押へて居るのを彼は苦もなく起き上つた。而して彼が其手の平(ひら)を疊の上にペタツと附けて居るのは誰も之を動かし得なかつたと、彼は決して奇を好み技能を衒ふやうなことはなかつた。然れども時に石を投げて小鳥を取つたことがある。又村民が筋骨を違へた時には直ぐに揉み直してやつたことは屢々であつた。然り而して彼は免許取りであるから道場を開き弟子を取つて指南することも出來たのであるが、更に爲したことはない。他人と試合を爲た事もない。彼は之に就いて說を持つて居た。抑も柔術の唯一の目的は

自己防衛である。劍術の其が攻撃的であるとは反對である、故にヨシ他より試合を申込まれても柔術家は之が應否は自分の隨意である。應じないからと云ふて先方に對して無禮でもなければ自らの卑怯を曝すことにもならない。然るに道場を開いて居る劍術家にして他より試合を求めらるゝと之に應ぜねば自分の法懦であるが先方を侮辱したと云ふことになる。斯る立場を固持して曾祖父は柔術家としての交際はなさず、終生專ら庄屋として村治に努めたものである。近頃世間では腹式呼吸とか靜座とか云ふ事が大分流行して居るやうであるが。一佐流にも亦腹の練習がある。卽ち此流儀では隨分盛んに下腹を蹴る稽古を爲る。然り此腹蹴りの稽古をやる時には必ず二寸厚味の胴板の上に割り竹を編み附けた胴卷を宛てゝ互に蹴り合ふのである。一朝熟練を得ると何も宛てなくて、他流の斯る稽古を爲ぬ者に蹴られたのでは何ともない。同派の者でも目下の者に蹴られるのは屁でない。而して少し練習が積めば三寸板位を蹴破る位いは容易である。又五尺や六尺の高さを蹴るのも譯はない。上達せば八疊室の天井を蹴るやうになる。故に一佐流で鍛ふた腹は丈夫なものである。之に比ぶると蓋し腹式呼吸で作つた腹は如何に大きくても又立派に見へても謹讀風船玉見たやうなものであらう。

××××

予の地方に於ける一般農家は秋作の收獲を終へると此れから春先に掛けて年中一番閑散の時期である、尤も暮の中は收獲の殘務、年貢米の上納、冬ごもりの仕度や正月の祝の準備で多少忙がしい、之とても最早や他の時期の仕事に比ぶれば慰み半分の仕事である。而して此外男は天氣が好ければ山に薪獲りに行き惡るければ家に居て米搗きを爲る。雪が降ると叔父はよく猪狩に遠くの山へ犬を連れて行つたものである。（家では曾祖父の代から公義の許しを得た獵師であつた）。而して女子は機を織つて正月着を拵へる。然り而して秋末より冬に掛けて各農家は毎晩夜業を爲る。俗に之を「ヨナベ」といふ。予の家でも家族奉公人皆一所にヨナベを爲た。ヨナベの模様は一寸珍らしいから語らう。昔は石油もなければランプもなかつた。此時分の明りは提灯、燭臺、是は多く蠟燭を用ひた。で前者は專ら旅行用後者は來客の節座敷に用ひたもので平生の明しは行燈とカンテであつた。而して其燃料は菜種子の油であつた。行燈の明りは少さな瓦皿に例の油を入れ之に燈心（備後表にする藺の心）を浸して燈したものである。然るに多勢ヨナベを爲るには行燈では暗く且つ狹いから玆に燈臺と云ふて大きな火鉢を仕事場の中央に置いて、此中で、丁度東京で用ふ燒附の如く細かく割つ

た[illegible]を燈して張りと配りとを取つて此座敷のグルリに集まりしてヨナベを爲る、男は藁仕事（縄をなう、蓆を織る、筵を編む、履物、手の靴を作り、ツマゴも造る、此外俵、コモ等）を作る。殆んど一年中使ふ丈けの物を拵へて蓄へて置くのである。而して女は何を爲るか、裁縫もする、が重に糸を紡績ぐ。

今は世が進歩して萬事が便利になつて居る。紡績會社だの機業會社だの出來て糸を拵へるのも織物を製するにも專門の機械で其斗りを製造する。一人の十六七の女でも六十乃至百二十本の錐の世話をして其錐數丈けの糸が立派に引けるから昔に比べると二三百人前の仕事が一人で出事るから糸も織物も安い價で買へる。大抵の百姓は今自分で糸を引く者はない。所が昔は其樣でなかつた。予の家でも綿を作つた。（今は米國、支那及印度から綿を輸入する）綿を作つても糸を引く迄には仲々手數が掛る。サテ綿を糸にするには一番に「ネチワク」と云ふ道具が必要である。ネチワクは小さな器械である。丁度今時西洋洗濯を絞る器械に似て、あれよりズツト小さい。總べて木製である。之を前に据えて右の手でワクをネヂル。即ち軸棒を廻はす時、左の手で一房か二房の綿を此軸棒に並べて反對に廻る今一本の丸棒との間に食はせると綿の肉はネチワクが食ひ込んで向へ出るし綿實はボロリ／＼と前に落ちる。此綿を今度は弓で打つのである、弓と云ふても普通矢を射るのとは違ふて、特に拵へたものだ、本弓を上から二尺程の高さの所にブラ下げて弓の七分三分の所を右の手で持ち弦の一方（向ふ）を錘に附け、弦の前即ち握つて居る下の所を左の手に持つて居る小さな木槌で二三度打つて一度弾ちく斯く幾度爲ると綿は此弦の弾力で解けて柔くなる。斯く綿がスツカリ解ると之を展き一匁位宛に煙管の竹位の鉄で六寸程のものに卷いて而して抜くと所謂シノと云ふものが出來る。此のシノを「糸車」で紡績いで糸にするのである。「糸車」予の地方では木綿車と云ふ。一寸巧に出來て居る器械である。今日の紡績機械も木綿車の原則を應用し且つ擴大したものに外ならぬのである。木綿車は一方に二本の柱が立つて其間に直徑二尺程の車が附いて居る。而して車と對照した三尺の所に土臺（八寸の長）の上に五寸斗りの細い柱が二本並立してあつて之に錐を横斜にくゝり附ける、所で此錐を車と糸のベルト（帯革）を掛けてある斯くて車を廻はすと錐が廻轉する。而かも車の廻はし次第で左右何方にも廻はるのである。扨此車を右側に据えて座し、右の手で車の心棒から肘になつて附いて居る手を持つて廻はす時、左の手で例のシノを持つて兼て錐に粟のスボを嵌めてあるのに糸口を結び付け錐の左の端から左りへ上へと引くと糸がヨレて延びる。手一杯に延ばすと一寸として

—(自　隊)—

自己防衛である。劍術の其が攻撃的であるとは反對である、故にヨシ他より試合を申込まれても柔術家は之が應否は自分の隨意である。應じないからと云ふて先方に對して無禮でもなければ自らの卑怯を曝すことにもならない。然るに道場を開いて居る劍術家にして他より試合を求めらるゝと之に應ぜねば自分の怯懦であるが先方を侮辱したと云ふことになる。斯る立場を固持して曾祖父は柔術家としての交際はなさず、終生專ら庄屋として村治に努めたものである。近頃世間では腹式呼吸とか靜座とか云ふ事が大分流行して居るやうであるが。一佐流にも亦腹の練習がある。即ち此流儀では隨分盛んに下腹を蹴る稽古を爲る。然り此腹蹴りの稽古をやる時には必ず二寸厚味の胴板の上に割り竹を編み附けた胴卷を宛てゝ互に蹴り合ふのである。一朝熟練を得ると何も宛てなくて、他流の斯る稽古を爲ぬ者に蹴られたのでは何ともない。同派の者でも目下の者に蹴られるのは屁でない。而して少し練習が積めば三寸板位を蹴破る位いは容易である。又五尺や六尺の高さを蹴るのも譯はない。上達せば八疊室の天井を蹴るやうになる。故に一佐流で鍛ふた腹は丈夫なものである。之に比ぶると蓋し腹式呼吸で作つた腹は如何に大きくても又立派に見へても護謨風船玉見たやうなものであらう。

×　×　×　×

予の地方に於ける一般農家は秋作の收獲を終へると此れから春先に掛けて年中一番閑散の時期である、尤も暮の中は收獲の殘務、年貢米の上納、冬ごもりの仕度や正月の祝の準備で多少忙がしい、之とても最早や他の時期の仕事に比ぶれば慰み半分の仕事である。而して此外男は天氣が善ければ山に薪獲りに行き惡るければ家に居て米搗きを爲る。雪が降ると叔父はよく猪狩に遠くの山へ犬を連れて行つたものである。(家では曾祖父の代から公義の許しを得た獵師であつた)。而して女子は機を織つて正月着を拵へる。然り而して秋末より冬に掛けて各農家は毎晩夜業を爲る。俗に之を「ヨナベ」といふ。予の家でも家族并公人皆一所にヨナベを爲た。ヨナベの模樣は一寸珍らしいから語らう。昔は石油もなければランプもなかつた。此時分の明りは提灯、燭臺、是は多く蠟燭を用ひた。で前者は專ら旅行用、後者は來客の節座敷に用ひたもので平生の明しは行燈とカンテラであつた。而して其燃料は菜種子の油であつた。行燈の明りは少さな瓦皿に例の油を入れ之に燈心(備後表にする藺の心)を浸して燈したものである。然るに多勢ヨナベを爲るには行燈では暗く且つ寒いから玆に燈臺と云ふて大きな火鉢を仕事場の中央に置いて、此中で、丁度東京で用ふ焼附の如く細かく割つ

た肥え松を燒して明りと暖味とを取つて此燈臺のグルりに皆が座してヨナベを爲る、男は藁仕事（繩をなう、席を織る、簑を編む、履物、手の沓を作り、ツマゴも造る、此外俵、コモ等）を作る。殆んど一年中使ふ丈けの物を拵へて蓄へて置くのである。而して女は何を爲るか、裁縫もする、が重に糸を紡績ぐ。

今は世が進歩して萬事が便利になつて居る。紡績會社だの機業會社だの出來て糸を拵へるのも織物を製するにも專門の機械で其斗りを製造する。一人の十六七の女でも六十乃至百二十本の錐の世話をして其錐數丈けの糸が立派に引けるから昔に比べると二三百人前の仕事が一人で出事るから糸も織物も安い價で買へる。大抵の百姓は今自分で糸を引く者はない。所が昔は其樣でなかつた。予の家でも綿を作つた。（今は米國、支那及印度から綿を輸入する）綿を作つても糸を引く迄には仲々手數が掛る。サテ綿を糸にするには一番に「ネヂワク」と云ふ道具が必要である。ネヂワクは小さな器械である。丁度今時西洋洗濯を絞る器械に似て、あれよりズツト小さい。總べて木製である。之を前に据えて右の手でワクをネヂル。即ち軸棒を廻はす時、左の手で一房か二房の綿を此軸棒に並べて反對に廻る今一本の丸棒との間に食はせると綿の肉はネヂワクが食ひ込んで向へ出るし綿實はポロリ〳〵と前に落ちる。此綿を今度は弓で打つのである。弓と云ふても普通矢を射るものとは違ふて、特に拵へたものだ。本弓を上から二尺程の高さの所にブラ下げて弓の七分三分の所を右の手で持ち弦の一方（向ふ）を綿に附け、弦の前即ち握つて居る下の所を左の手に持つて居る小さな木槌で二三度打つて一度彈ぢく斯く幾度爲ると綿は此弦の彈力で解けて柔くなる。斯く綿がスツカリ解ると之を置き一匁位宛に煙管の首位の條で六寸程のものに卷いて而して拔くと所謂シノと云ふものが出來る。此のシノを「糸車」で紡績いで糸にするのである。「糸車」予の地方では木綿車と云ふ。一寸巧に出來て居る器械である。今日の紡績機械も木綿車の原則を應用し且つ擴大したものに外ならぬのである。木綿車は一方に二本の柱が立つて其間に直徑二尺程の車が附いて居る。而して車と對照した三尺の所に土臺（八寸の長）の上に五寸斗りの細い柱が二本並立してあつて之に錐を横斜にくゝり附ける、所で此錐を車と糸のベルト（帯革）を掛けてある斯くて車を廻はすと錐が廻轉する、而かも車の廻はし次第で左右何方にも廻はるのである。扨此車を右側に据えて座し、右の手で車の心棒から肘になつて附いて居る手を持つて廻はす時、左の手で例のシノを持つて兼て錐に藁のスボを嵌めてあるのに糸口を結び付け錐の左の端から左りへ上へと引くと糸がヨレて延びる。手一杯に延ばすと一寸と

車を逆轉して而して錘の中程に此糸を巻き附ける。斯く車の廻はる速力とシノの持ち塩梅と、其手の動かし方の遅速に依つて糸の大小及びヨレの強弱を定めるので其細くしてムラのなき糸を引くと否とに巧拙の分かる所がある、アア斯様な風で昔の木綿糸は造られたものである。予の母だの叔母及祖母だのは毎晩ヨナベにブン〳〵と糸を紡績いだ而して斯くツムいだ糸をカセと云ふ者に掛けて水で煮て洒らして紺屋（染物師）に遣つて望みの色に染めさして、先づ縞柄を定めて糸の配布をなし筬と云ふものに通して機に掛けて織つたのが布で玆に始めて着物にでも何にでも出來るのである。斯の如く綿から着物にして着る迄には多くの手數の掛つたものである。

斯く家内中が一所に集つてヨナベをする。從つて種々の話が出る。仲々賑かであつたから、予はよく燈臺の火にあたりながら、皆の爲る仕事を見、其話を聞いて意味は分らなくとも頗る樂しみであつた。子供の時は大勢集つて話をしたり仕事を爲る所に居るのは何となく愉快なものである。而して又時には自分で藁仕事をやつて見たことがある。斯くして農家の子供は皆百姓の仕事を見習ふのである。併し予の記憶に最もよく印象されて居る一事。而かも愉快なる者はヨナベのある時分は既に老人でヨナベなどしない曾祖父より昔話を聞くことであつた。中の間の炬燵にあたつて而して彼が麗な頬に微笑を含んでサモ親切な態度で諄々として話す有様は今尚ほ予の記憶に存じて居る。」最もよく話したものは、「猿ケ島の敵討」で、次には大江山酒顛童子の退治」であつた。後者は予の「のぼり」にある金時が出るから特に所望して聞いた話である。其れから「桃太郎」「舌切り雀」「枯木に花咲せ爺」及び「秀鄕の百足退治」なども話して聞かして貰つた。同じ話を幾度繰り返して話して貰つたか分からない。而し何遍でも聞くのが樂しみであつた。予は大抵一つか二つの話を聞くと一人で先に寐たものであるが、冬の寒い夜などは祖母がお芋を蒸かしたり、甘酒を沸かしたり又時には芋粥を煮て夜食に出した。スルト予は仕事はせぬとも此夜食の御馳走にはよく預つてから寐たことを覺えて居る。英國人も上下を論ぜずよく夜食をするが予の地方の農家でもよく夜食をする殊に秋のコナシは夜であるから此時は近所人を頼んで手傳つて貰ふから必ず夜食を出す併し之は籾を挽いて白米にする時の事である。予は幼い時よく恐い夢を見々した。今でも覺えて居るが其夢は何時も雷樣と越後獅子で、よく此恐い怪物に追つ駈けられて時には雲の上を逃げたことがある。而して同じ夢を殆んど毎晩のやうに見た時代があつた。併し此恐しい夢を見ても朝になつて起ると他の事にアキレて忘れて了つて曾つて誰にも話

たことはない。又此時分には話も出來なかつた。予は今に至りて幼い子供には決して色々な恐ろしい話を聞かしたり、又怖しい畫だの、見世物だの特に近頃流行する活動寫眞の或物をば見せてはならぬと思ふ。若し子供が恐い物を見て急に恐怖心に捕へらるるならば其柔らかき腦を刺戟して彼をして人知れず苦しましむることゝなり其結果は精神狀態を攪亂して成育上非常なる有害となる。親たる者は大に注意せねばならぬことである。

予は稍生長してから曾祖父に昔話の外、本を讀むことを教はつた。何んな本であるかと云へば、當時民間に用ゐられた唯一の教科書は讀書習字兩用のもので而も僅々數種に限られてあつた。予の讀んだ本は「名頭」「國盡」「庭訓往來」「商賣往來」であつた。而して「名頭」は普通平民の名前の頭字を集めたもの「國盡」には五畿八道の國々を順序を立てて書いてある。庭訓及商賣往來は其名の示す如く家庭に關する教へ、及び商賣上に必要なる心得を書いたもので、何れも皆極めて平易にして而かも實際的のものである。固より是等の本を教はつても予は只口眞似で素讀を暗誦した丈にて、如何に平易でも子供には字句の意味が分らないから一寸覺えても直ぐ忘れてしまつた。故に何遍も一つ本を教はつたのを覺えて居る。而も其文字は御家流と云ふて餘程畧したる草書で寫本になつて居たから尙ほ分らなかつた。

×　×　×　×

幼時の遊びは極めて單純である。ペストルチー又はフローベルの幼兒教育法は近頃の輸入物である。幼稚園もなければ、育兒所もない。從つて玩具の如きも平凡で子供の知能を開發する扶けとなるものは一つもなかつた。只一つ發達して今と差程の違ひのないものは人形である。昔の雛人形は今の其れに比べて却つて立派であるを見ても分る。併し普通子供の玩具は粗末のものであつた。弓削にも大戸にも玩具店は一軒もなかつた。只四月と九月に村の氏神樣の祭りがあつて此時一二の玩具商人が來る。此時に玩具を買ふて貰ふのみであつた。而して玩具は此樣な譯であるから重に祭りに因んだもので土で拵えた御輿、ハリコの獅子、同じく首の動く虎、おだふく（おかめ）及ハンエヤの面だの、笛、太鼓の如きものであつた。此外子供の玩具は讃岐の金比羅參りや伊勢參宮の土産の土で出來た鈴だの笛、及繪草紙などであつた。

扨田舍の子供は何をして遊ぶかと云へば大抵は色々な眞似事を爲るのである。祭り芝居、祝言などで「隱れんぼ」は古今を通じて子供を喜ばす遊びである。又木に昇り、驅け比べをするなどは今も昔も變つたことはない。併し予は餘り多くの

供等と遊んだことはない。予の所の氣候は前にも云ふた如く、實に天然を樂しむには申分がない。殊に春秋は共に天氣がよくて暑くなく寒くなく、野原に出て遊ぶと此上もない善い氣持である。春は色々な花が咲く、俗にズヽ花は澤山奇麗に咲くし、土筆が出るし、實に愉快である、故に予は常に母と一所に田圃に行つた。母たちが仕事を爲る間、予は野良を驅け廻つて花を取り土筆を探しなどして獨りで樂んだ。又夏になつてもよく笠を着て母と一所に田に出て小さな「メバエ」などを取り水遊びをして樂しんだ。而して歸りには誰かにおぶさつて來たものである。

夏口になると百姓は田植の仕度の爲めに段段と多忙になる。併し予は野良に出て仕事を爲る傍に在つて遊んだ。予の唯一の友達は自然であつた。自然を相手に色々なことを爲て遊ぶのは實に愉快であつた。丁度舊暦の四月頃に稻田の肥料にする柴刈があつた予の村には廣い面積の共有山林原野が澤山ある。南方一帶の深山は皆村有の山野である。東北一面は官林で「お林」と云ふた。共有山林は村民が自由に何でも取ることが出來、官林でも當時は松の外は何でも取れた。而して官林と村有山林とに對して四月に各一定の日を以つて柴の刈り始を爲す。之を柴の口が「開く」又は「山が開く」といふて此の前には何人も柴を刈りに山に入ることはならぬのである。サテ此口開け後三四日間は村中の百姓等は家内中辨當を持て未明から山に行き、夜の明けるのを待つて一生懸命に柴刈りをする。

予も亦一二度母に連れられて此柴刈りに行つたことを記憶して居る。別に之と云ふ面白いことはないが他の子供等も行つて居るし殊に大勢の人々と一所に集つて辨當を食ふて彼等が大話を爲る樣を見るのが何となく愉快であつた。而して又柴刈りの時には雉子や山鳥の巣が見付つて卵を取るのも樂みであつた。一體柴刈りは忙しい仕事であるが青年男女に取つては之が一種の慰みで宛然たるお祭り騒ぎである。

柴刈りの後に來るのは田植である。田植は必らず梅雨の時期になるから總べて子供に取つては不愉快の時分である。然るに田植は百姓に取つて一刻千金と云ふ年中で一番多忙の時期なので猫も杓子も皆働かねばならぬとしてある時、予は全く獨りで遊ばねばならなかつた。而して少し大きくなつてからは皆と一所に出て田植の手傳をした。

サテ五月（舊）の田植は前記の如く非常に多忙であるが不思議に誰もが皆ニコ〳〵と働く、而して田植に限り青年男女も老人も皆小奇麗な風俗をするのが一般の習慣である。而して特に若い女は赤い手紐を掛け、流行の手拭を頭に被つて居る。そし

て大抵は「植え合ひ」と云ふて二三軒共同して田植をするから尙ほ賑やかである。而して男等は牛を使ふて田植の準備をする。苗を取るのは重に女斗りである。皆愉快そうに面白い話をし又唄を歌ふ。又田を植える時は田植唄と云ふて田植に適當した節がある。男が音頭を取る女がついて唱ふ。夫は仲々面白い。斯く皆が熱心に働くから四五日の間に何處も何處も全面水田と化して稻が植つてしまふ。最も喜ぶ者は幾十萬の蛙である！彼等は皆永い眠りより醒めて新に出來た稻田を横行濶歩してさも愉快そうに相競ふて聲を張り揚げて歌ふた。呼んだり叫んだりしてゐる。昔し歐洲の一大名は非常な壓制なる暴君であつて民の苦痛を何とも思はない晉に苛税誅求を行つて百姓を苦しむる斗りでなく夏は毎夜お城の廻りにあるお堀りの土手に百姓共を立たせ棒を以つて蛙の頭を叩き鳴かせないやうにして暴君は安眠を貪つたと云ふことであるが、百姓は蛙の鳴く聲位いは何とも思はない。彼等は毎日神聖なる勞働に從事して疲れて居るから蛙の聲は音樂の如くに聞えて善く睡眠を遂げる。然りよく耳を靜にして聞くと蛙の鳴き聲は滑稽な音調があると同時に一種の風韻趣味を與へる所がある。是れ蓋し歌客が蛙を賞歌する所以であらう。兎に角田植は子供に取つても樂しい仕事である。殊に田植の間は、毎日やる煙草休みである。東京の職人は「お茶うけ」と云ふが田植の時は此休みには必ず「おハギ」を出すのである。皆が田を植えさして畔に腰を掛けて「おハギ」を食べる。非常に甘いから子供には大なる樂しみである。予は之を樂しみに雨が降つても田植の手傳をした。

× × × ×

田植が濟むと百姓は大に閑散になる。多少、麥、菜種、豆及燕麥などの形付が殘つて居るが是れから秋口迄は只田の草を取る位の事で極めて單純な仕事である。固より燒くが如き炎天に田の草を取るのは決して樂ではないが日は永いし朝夕は清涼で氣持はよし、朝早く起きて仕事に掛り晝中の一番熱い時分は家に歸るか又は涼しい木蔭で所謂「晝寢」をするから別に困難は感じない。百姓は他の職業とは違ふて爲る丈けの仕事は極つて居るから、勤勉は自然休暇を得ることになるのである。而して若い男子は朝早く牛を追ふて深山に柴刈に行き九時か十時頃には刈つた柴を牛に負はして歸つて來るのが例になつて居る。女は家に居て縫ひ針りをし又畑に出て草を取る、何れも遊び半分である。

斯る職業を有する百姓家に生長したのであるから、予の幼時は極めて平凡であつた。故に今の子供のやうに知識の發達はしない。當時は幼稚園がないのみではない。小學校もなかつた。

百姓の子供が學問を爲る所は「寺小屋」と云ふて、醫者か坊主か神主かの家で子供を集めて「いろは」名頭などの讀方と習字とを敎ゆるに止まつたもので、之とても總べての子供が此處で習ふと云ふのではない。多數の子供は遊ぶのが唯一の敎育である。而して父母を見習い聞き覺ゆるのが直接間接の敎育であつた。少しでも仕事が出來るやうになると皆百姓仕事をしたものである。

かくの如く昔の百姓は實に呑氣なものであつた。殆んど知識を要しない。習慣是れ總てを支配したものである。之が實に法律であり憲法であつた。而して當時の百姓は人文上より見れば極めて狹隘なる天地に蟄息して居たものであるが。只此狹い社會でも彼等は其思想は單純であり、慾望は僅少であつたから更に狹隘を感ぜず又窮屈をも感ぜなかつた。日日彼等の思想を煩はす者は、即ち彼等の談話は政事でもなく、經濟でも將た社會問題でもない。作物の出來、不出來、仕事の進行、日々の氣候寒暑、天氣の豫想若しくは近所隣りの風評位いのもので、他郷の事に至りても非常の出來事の起るに非ざれば知れない。況んや廣き社會の事變に於てをやである。偶々他國の新聞をもたらす者は行商人殊に藥賣りであつたが、此も徒歩で諸國を廻るのであるから何れも舊聞に過ぎない。彼の金比羅參り伊勢參宮は他郷の事情を知る直接の便りであつた。去れど元來無智の百姓が無我無中で而かも面白半分で通過しての觀察であるから確實な事の知れる筈はない。ヨシ京都や大阪の文明繁華を見て來ても單に皮想の觀に過ぎない又之を理解して有益に物語る所の巧妙なる言語をも有たない。只僅かに宿屋の待遇如何、宿引きの狡猾又は丁寧、名物の團子が甘いの不味いの位で其得た印象は片々たる愚にも附かぬものである。予が地理説を始めて聞いたのは後年小學校が開かれてからである。夫れ迄は世界は全く平面であり、天笠と云へば高くして太陽に近い所、而して太陽は毎日東より西へ天空を走る者で一日に金の草履（わらぢ）を三足も要すると云ふことを信じて居たものである、而して地震は大なる鯨が地下に居て燈明が消えかゝると動くから地がユレルのである、地震の時に雉が鳴くのは此燈明がキエン〳〵と鯨に向つて云ふのであると信じたものである。何ぞ知らん地球説の如きは三四百年前から歐洲の定論となつて居た。以つて舊幕時代の百姓の智識の如何に淺薄であつたかを推定し得らる。尤も當時の一部蘭學者以外には鎖國の結果として西洋科學の知識は上下を通じて極めて幼稚のものであつた。舊幕時代に在りては斯る蒙昧なる百姓でも安樂な生活を營むことが出來た。彼等は只其の親讓りの家業を精出して稼げば何不自由なく世渡りが出來た。固よ

り全く心配と苦勞の種子がないのではない。少く雨が降らないと大旱魃になりはせぬか、一寸雨天が續くと大洪水が出はせぬか、其他暴風とか虫害の爲めに米が取れなくなりはすまいかと百姓も常に心配がある。併し天候其他自然の結果として不作凶年の來るのは止を得ないことゝして兼ねて準備もしてあり、又予の所は前にも語つた如く色々な作物が年中收穫せらるゝから彼の奥羽又は北國地方の如く米と麥とが特産物である所に比較すると安心なもので一作位い取らないからと云ふて食ふに困るやうなことはない。

× × × ×

エピキュラスと云へる希臘の哲學者が人生の幸福は過去の記憶と將來の希望とにあると云ふた。彼は最も深く人間の幸福と云ふことに關して研究を積み以つて最大多數の最大幸福が人類の最終目的であるといふ一流の哲學を建設した。而して彼は此幸福を娛樂に在りとなし努めて苦痛を避けんとするのが人情であるとした。彼の哲學は僅かに一面の眞理がある。而して人多くは現在に滿足し得ないから過去の記憶を呼び起して慰めを求め又將來の希望に生きるのである。殊に希望は人生の一大要素である。多くの希望を以つて之が爲め働く人は幸福の人である。將來に向つて希望を持たぬ人は必ず自暴自棄の人となり悲觀に陷るか然らざれば墮落失敗の人となり終るのである。エピキュラスは僅かに人生一面の眞理を吾人の爲めに發見して呉れて居る。而して予の幼時々代の百姓は夫れ相應の幸福即ち記憶と希望とを持つて居た。予は其子供時代に經驗した二三を語るであらう。

× × × ×

正月は百姓に取つて最も神聖な緣起を祝ふ佳節である。而して子供に取つて實に一番樂しい時である。子供は年を取つて大きくなるのが何より嬉しい。而して正月は此年を取つた時で最も樂しい愉快な時である。而して暮の内に總べて正月の祝の仕度を整へるのである。予は叔父と一所に山に行つて「シダ」、榊、松等を切つて來たことがある。斯く百姓は門松〆飾りなどは皆自分で用意するのである。而して大晦の近くになると一日家内中が未明から起きて餅搗を爲る。此餅搗は大抵一日掛るが仲々面白い。餅で色々な形を造り殊に花餅と云ふて堅くなつて薄く切ると梅花形となるやうに拵へて置くのである。サテ愈々正月が來ると年越の晩即ち大晦の夕から御馳走を爲して祝ふのである。元日から三日間は丸る休みで村民共は皆立派な風をして遊ぶ。由來正月には出來る丈け新しい物を用ゐるのが百姓の習慣となつて居る。斯くして皆新しき春を迎へて玆に新しき生[illegible]

始めんと思想感情の盡くを一新せんと努力する。此三日間は村内誰一人仕事を爲す者はない。誰も皆愉快そうに遊んで居るから子供等も本當に遊んだ氣持がして非常に愉快である。東京の如き大都會に住んで居ると如何に大切な祭日、休日でも市中には乾度店も張つて商ひを爲し又種々の仕事をして居る者がある。若し國旗でも樹てなかつたならば市中は祭日であるか否かは分らない。英國民は日曜日大祭日を極めて神聖なる者として嚴格に守る習慣を持つて居る。日本の如く啻に官省役所學校又銀行が休むのみではない。諸工場、各商店は無論國民一般皆門戸を閉ぢて休業する。勞働者は土曜日も半日は休業することゝなつて居る。蘇國のエヂンバラ市に行つて見ると日曜日には電車も馬車も走らない酒屋料理店も閉店する。無論大抵の市では酒屋は商賣を禁じてある。オックスフォード大學の町などは日曜日には外で晝飯を爲る所はない。總べての事業は英國全體停止され、遊技するものもない。國民は靜かに歩行して公園など散歩するだけである。斯くあつてこそ始めて眞に國民の元氣が養はれ精神修養が出來、從つて世界に冠たる活動の潜勢力が顯はるゝのである。予の子供時代の百姓家の正月は恰も英國の日曜日の如く神聖なる休日であつた。

正月元日には種々の儀式がある。予は一種神聖にして壯嚴なる而かも清き感情に支配されて此等儀式を行ふたことの印象を今尚ほ持つて居る。元日には家内中が未明に起きる、予は祖父と共に「若水」を汲んで來る。此若水は元日の朝手水、茶の湯等總べてに使ふ水である。先づ洗面して予等は「切り初め」に行く毎年の暦に「明き方」又は「惠方」が書いてある。此明き方に行つて若水を汲み、又切り初めをする。切り初めは畑の山又は森でもかまはない。二三種（樫、槇、松、又は栗の木）を切つて持つて歸るのである。歸る時分には家の中は賑かになつて居る。而して臺所即ち食堂の眞中には大きな三寶にシダを二枚置いて其上に紙を敷いて干柿、栗、蜜柑、橙、昆布、黑豆のゆでたのなど澤山に盛り上げてある。家内中の者は圓座してお茶を飲み、果物を貰らひ、玆に新年の賀辭を述べてから雜煮を食ふのである。かくして朝飯が濟むと皆なが「稻グロ」を積む」と稱して炬燵にあたつて假寐をして夜の明けるのを待つ、夜が明けると予は曾祖父等と「書初め」をして若年樣へ備へる。此は新年の神樣である。百性は此神樣を祭るに、米二俵を床の間に並べて其上新しい席を敷き前には俵の口に松と榊とを立一斗程入る桶にヤット入るお備へを入れて、之に小さな餅、柿、及一文錢十二宛、閏の年は十三宛入れて蓋をなし繩を掛け、廻りに〆飾りをして右の俵の眞中に据える。其前に本膳を

備へて祭るのである。サテ書き初めが濟むと皆思ひ〳〵に遊ぶ、天氣かよければ凧を揚げ、雪が降れば雪達摩を造る。又家でヌク〳〵と炬燵にあたつてカルタを取つて遊ぶ壯年は宮詣で卽ち恵方參りを爲る、正月に習慣として百性は大晦の晩から三ケ日は火を消さぬやうにする。羅馬人は曾つて希臘又はトロイより移住する時、火を持つて來り之を決して消さぬやうにしたと云ふが、火と云ふ者は一種の神聖なる感情を代表する者である。四日には仕事始めである百性は鍬を持つて田に行き二鍬三鍬土を堀つて儀式を濟し後ちは、休む。昔の正月は三ケ日、七日、十一日、十五六日、廿一日、廿八日と云ふ風に澤山の休日があつて平日でもヨナベなどせず。殆んど正月の月は丸で遊んだものである。

× × × ×

正月から二月にかけて兎は深山には雪が降つて食べる物がないから里近の小山に出て來る。殊に二月頃になると麥の青い葉を食ひに出る。而して氣候も段々ホヤ〳〵して暖かくなり、色々草木は芽ぶく、草花は何方此方に其の美を競ふて咲く、蕗の頭、土筆なども出始める。野外に遊ぶのが愈々面白くなつて來る。此時分一番の樂しみは兎追ひである、叔父は非常に獵が好で予はよく彼と一所に兎追ひに行つた。兎は後足が非常に長く前足が又非常に短いから下ることは鈍いが上ることは速い。故に兎は逃る時はキツト上へ上へと走るから、兎網は何時でも山の上手に掛けて置く、網の高さは三尺長さは五十間又は百間位のものである。此網の張つてある所を目がけて他の方面から追つて來る。スルト兎と云ふ奴は至極臆病であるから人の聲を聞くと直きに逃げて網に掛つて獲れる。予は叔父と他の三四人と行つて一寸の間に大きな兎を二疋も取つたことを覺へて居る。

× × × ×

冬は釣りは駄目であるがドゼウ堀りは冬に限る一の面白い漁りである。予は屢々此のドゼウ堀りをした。田の岸根に在る溝の沼の中にドゼウ先生寒いからモグツてチツト寢込んでござる。之を沼と一所に鍬で堀り上げて取るドゼウは一寸も動かないから容易く取れる。

× × × ×

春さき子供に取つて極適當で而も愉快な遊びは芝摘みである。三月の節句には必ずヨモギ餅を搗くことに極つてゐる。一週間も前から予は籠を持て田畑の畔に行つて此草を摘んだ此時分になると氣候がポンヤリとしてい丶氣持であるから何とも云へない愉快である。何の家の子供も皆ヨモギ摘みを爲る一つの流行である。三月の節句は雛人形を飾る女子の祝日がある

モギ餅、煎豆、唐黍の煎つたのだのと御馳走は男の兒もお相伴が出來るからヨモギ摘みも樂しみである。

× × × ×

三月の末から四月の始めにかけて蕨狩りの季節である。蕨は殆んど何處にでも生えて居る。併し太い柔かなよい蕨は遠方の深山の奥の谷合ひに行かねば取られない。故に蕨狩りは子供はホンの慰みに近き小山に行くだけで、實際の蕨狩りは靑年男女の爲ることとである。蕨狩りの時節は一年中でも一番好時節である。躑躅が咲いて居る未だ鶯の聲は床かしく聞える、遠山は一帶に霞に覆はれて天然の靈趣を呈し凡筆を以つて其美を現はすことは出來ない、實に誰人も心神に無限の妙味を感ずる時である。村内の若い男女は誘ひ合つて朝暗い内から辨當持つて此愉快なる蕨狩りに出掛ける。蓋し蕨狩りは百姓に取つて最も多くの慰みを與へる。蕨は喰ふては差程風味のある者ではない。又如何によい蕨でも折つて見れば其の美は大半失はれて仕舞ふ。然るに山に行つて愉快な氣持で其の生々として奇麗に生えて居るのをポキッと折るのは何よりの樂しみである。之は實際に蕨狩りをしたんでなくては此好趣味を知ることは出來ない。予も友人と二三度蕨狩りに行つた。或時は先へ先へと山を登つて行くのが面白いから知らず識らず深山の絶頂に達し尙ほ進むで備前領の山に入つたこともある。高い山の頂きで四方を見晴らして休息し、持つて來た辨當を喰ふのは非常に愉快である。何が甘いと云ふて蕨狩りの時斯くして食ふ「握り飯」ほどおいしいものはないと思ふ。

× × × ×

之は四月の始にある氏神樣の祭禮である。多分百姓が無事に田を植ることとの出來るやうと祈る爲めの祭であらう。村民等は精一杯勉強して甘い辨當酒肴を拵へ家族諸共に、氏神樣に參る。無論御輿も出る。諸方から大勢參るから賑かである。各家では來て居る他村の友人知己を招待して酒肴を進め辨當を出す。一種友人間の交誼を温むる時で又恰かも花見を兼ての祭である。

× × × ×

夏の樂しみ亦澤山にあるが、田植が濟むと直ぐ一二週間は鰻切りに行くのが面白い。此の鰻切りは日の照つた晩方、未だ晝の暖りが去らない内に、磨ぎ拔いた薄ばの草刈鎌を携へ、兼て用意せる枯竹の長いのと之が心に肥え松を入れたるタイマツを以つて稻田の中を波を立てぬやう拔き足で歩いて田面を見ると、鰻は晝の熱さを忘れる爲めに醉へるが如く、よい氣持でグラ〱して涼んで居る。之をうまく鎌で引き掛けて切るのである。餘程機敏に立廻つて切らないと鰻は直ちに泥の中に潜つて

仕舞ふ。斯く五六本の鰻を切つて歸り、鰻飯を拵へて食ふ。鰻切りは實に愉快な漁りである。

× × ×

土用前後には色々に漁りを爲す方法がある。其最も巧妙なる熟練がいつて而かも上品なのは釣りである。殊に鰻釣りは一段經驗がなくてはならぬ。予はよく曾祖父に連れられて鰻釣りに行つた。曾祖父は鰻釣りが非常に好きで又仲々上手であつた。鰻釣りは餘程巧者なんでなくてはならぬ。先づ何んな穴に鰻が居りそうであるかを、大抵見當を附けて、此穴に向つて釣竿を入れる。而して辛棒強く鰻の出て餌を食ふのを待たねばならぬ。一朝鰻が喰つ附いたからと云ふて之をうまく引き出して籠に入れる迄には容易のことではない。若し其鰻が尻尾を何處かへ引つ掛けたら、口が千切れても出はしない。而してヨシ引き出しても持ち所を誤つたならば、直ぐ逃げて仕舞ふ。所が曾祖父は決して取り損つたことはない。予は梅干を握り込んだムスビを腰に結り附け鰻籠を携へて彼と一所に深山の谷川などに鰻釣りに行々した。釣つて歸ると之を生けて置いて、土用の丑の日に食ふた。釣りの外に網で漁りするのも面白いが打網になると寧ろ贅澤の漁りとして予の邊りでは餘り持つ者がない。今一の漁り方は「ノブ責め」である。之は隨分愉快の漁りで仲々大仕掛である。其方法はノブの木の葉（チナイの木の實でもよい）を唐臼で木灰と一所に搗き交ぜて、魚の澤山に居る所に持つて行き一度に流し大勢して流水に此をよく混化し河中をマゼカやす。すると河の中に居る魚は穴の中でも砂礫の中でも苟も水を飲む者は直ちに醉つて苦しくなるからフラ〱と出て來る。其の浮いた所を一寸いと捕へるのであるが、鰻でも鯉でも容易に取れる。予の直ぐ下の川で此の「ノブ責め」を遣ると一丁位いの間に居る魚は悉く取れる。此ノブ責めは無論熱い炎天の日でなくてはノブの効力が少ない。此時一番に醉ふてヨロ〱浮いて來るのは年魚である。故に之を取るのは面白い。

× × ×

七夕は主として子供の祭りである。一つのミソロヂーは天の河と其兩岸に在る二つの星に關して傳へられてある。即ち相愛する二星は年に唯一度七夕に此河を渡つて相逢ふこ とが出來る。然るに若しも此の日三滴でも雨が降ると、直ちに天の河の水が一杯になつて渡ることが出來ないから、逢はれない又次の年の七夕迄待たねばならぬ。と云ふのである。實に之が百姓の一つのラヴストーリーとなつて居る。故に之を樂しむ者は、强ち子供ばかりではない。併し、供は五色の短冊に七夕の歌（澤山ある）を書いて、青竹の枝に附けて軒端に、机で棚を吊つて

其の兩側に樹て、而して野菜、穀物、果物などの初物を捧げて祭る。頗るローマンチックの祭りを百性化したものである。而して無論七夕團すは拵えて備へ家中の者が風味するのである。

盆は一切の佛様の棚下ろしをして平等に迎へて祭る時である。祖先の追善とか法事とか云ふと、個々の佛を祭るのであるから自然其人の過去を追想し又必ず、僧侶が來て一種不可解なる經文を讀み、一家親類が集るなど、何となくシンミリと眞面目になるが、盆は全く之と異る極めて平民的で、又陽氣で一般の空氣が一種滑稽趣味に化せられて居る。而して之を助くる者は例の盆踊りである。青年男女は此の踊りの爲めに、一時無中になる。昔は取締りなど云ふことがなかつたから、村々、の若い者は此の踊を期して盛んに自由戀愛を實現したものである。併し習慣の然らしむる所であるから。弊害に陷たことを聞かない。盆踊りは神佛の緣日又は個人の催しで、行はるゝのであるが、之は特別な音頭取りがあつて、千兩登、妹背山、太閤記十段目、朝顔日記、などの草本の文句を踊りに合して面白く歌ふたものである。此の外種々の踊りがあつて青年男女は皆熱心に踊つて樂しんだものである。殊に予の記憶に存じ居る者は、夏の末から、秋に掛けての夜景である。秋の空は特別である。予は過去三十餘年間に。諸々方々を流浪し到る所に秋を經驗した。歐米の天地にも其の秋色を旅窓より眺めて、色々な感想を催し、內地でも各地の旅舍に於て秋の景色を送迎した。然れども未だ曾つて故鄕の秋景色の如きに出逢はない。美作の秋は、眞に清淨無垢といふほか、新鮮にして滴るやうである。秋の空は生々して、何とも云へない氣持を與へる。紅葉とか鹿の鳴聲とかが、悲しく聞へ、又悲哀を催さしむるのは旅人に取つてであらう。然るに故鄕の秋は、萬の穀菓の成熟期で百姓の歡喜する時代である。殊更盆の頃よりの夜の風光は、何とも云ふことの出來ない程愉快である。多分氣候と地形との工合であらう。予が故鄕の秋は閑靜であつて空氣の透明玲瓏なることは、たとへやうがない。歐洲第一と稱する蘇國トロサツクス（有名なるスコツトの「湖上の美人」の詩に因める所）の空氣よりも、尙ほ一層鮮かである。彼の中央亞細亞のチグリス、ユーフレタス河沿岸のカラデヤ、バビロンの氣候及び天空の清透も斯くやらんと思ふ程である。秋の月は綺麗であるが、月よりも尙ほ日のい夜、星の空を眺める程、心持のよいことはない。天の河、其丸様、三つ星、北斗星等サモ馴々しく、其の光りを放つて居る。人をして如何にも天に近く感ぜしめ、自然に親しましむる感想を催さしむる。天文學の何物たるを知らぬ者をしても、尙ほ秋の夜、星を眺めると夜の更け行くを覺へない程である。今

尙ほ秋を迎へる毎に此の愉快なる深き故郷の秋を偲ばしむる。東京などの如き大都會に在つて、秋の眞味を解することは殆んど不可能である。

× × × ×

予が子供の時に樂しんだ事柄は澤山にあるが柿と栗とに就いて樂しみは今尙ほ忘られない。此等の菓物を見る毎に、子供の時を思ひ出す。何故なれば、母家の東横の籔の端に大きな二叉の柿があつて、殆んど毎年のやうに、大きな柿が澤山に實つた。此柿は俗に「最上」「蜂谷」とかいふ柿位の大きさで到底東京邊の柿の味と比べると、段が違ふ。實に水々した眞に甘い味柿である。幼い時は誰かに取つて貰つたが、大きくなつてからは登つて、自分で好きなのを取つて食べた。大きな木で澤山に成つて居るから取り始めてから二三ケ月以上も皆が食ふて、樂しんだ。元來予の村には澤山の柿がある。俗に「霜降り」と云ふ柿が最も多く畑の岸などにあつて、澤山に成る。此の柿は霜が降る迄、置くと眞赤に熟して來る。之を取つて「ツルシ柿」又は「串柿」にして干して賣るのである。自用の柿「最上」でツルシ柿として正月に食べる。予の屋敷の前に二本の柿があつた。小さな木であつたけれども何時も澤山になつて、木が折れんとする程であつた。此の柿は常に餘り澤山に實り、木が折れることもあるから「身知らず」と名けてある。よく熟した時分に取つて箱に籾殼を入れて其の中に入れ蓋をして置くと柔かにウンで甘くなる、之を正月時分に出して食べるのである。

偖て柿がなくなると今度は栗を拾ふ樂しみがある。栗の成熟する時分には里方の人々も栗拾ひに予の村に大勢連れ立つて來る。併し彼等は奥深く。森林に分け入つて栗の木を探し、其の下で栗を拾ふのである。然るに予の家の直ぐ東下の所に大きな栗木が二本あつて毎年澤山の栗が實つた。此栗は所謂丹波栗の實生えで、隨分大きな栗であつた。而して非常に甘い栗であつた。栗は決して一度に熟する者でない。ポツリ／＼と長い間に次へ次へと熟して降る。予は栗の落ちる頃は毎朝早く起きて、拾ひに行つた。而して雨だの風だの、後にはきつと澤山に落ちるから、風雨は栗に向つて特に、樂しみを與へる。斯く拾ふた栗を半分は軒下の水氣ない所の土に生けて置いて春中に少し宛出して食ひ、又殘る半分は煎つて糸に通して乾して置いて冬になつて退屈の時に炬燵にあたつて繪本でも見ながらコク／＼と食ふて樂しむのである。栗に對して雨風は歡迎されるが、柿と雨とは非常に仲が惡い。雨後柿木に攀ることは堅く禁ぜられて居た。濡れた柿木に攀るときつと滑つて落ちる。予は隱れて此の禁を犯して強つい恐い目に逢ふた、ことを覺えてゐる。山來

後の木登りは一般に禁物である。取り分け柿木には强ち雨後と云はず何時でも木が濡れて居る折りに登つてはならぬ。斯る時登れば必らず滑つて落ちる。予は此時始めて深く感じた、予は母の教に背くと急度其罰を受けて苦しむと云ふことを。

× × × ×

予が故郷の冬は誠に閑靜である。雪が降つても一尺内外で、而かも南を受けて居るから暖かい。而して雪降りの翌日は間違ひなく好天氣で屋根及び庭内の雪は解けてしまふ。只高い山と北向の日蔭とは春まで雪が解けずに殘つて居る。併し冬と云ふても東京見たやうに寒い風が吹かないから、日向は仲々に暖く子供の遊ぶには差支はない。而して冬の樂しみとして忘られぬ一事は「コボツ」である。コボツはワナのことで藪の中又は森など小鳥の居る所にコボツを張つて、之に稻穂、荊(ぐみ)の實、南天の實などを挿して置くと、小鳥が之を食はんとして來て掛るのである。固より澤山に取れる譯ではないが、恰かも釣れなくとも釣りに行くのが面白い如く、コボツを張つて置いて鳥が掛つて居ないかと時々行つて見るのは非常に樂しみなものである。而して偶にはツグミだの小頭だのが掛つて居る。殊に雪でも降ると小鳥は食ふ者がないから、よくコボツに掛つて取れる。

以上語る所が百姓の重なる娯樂で、予の記憶に殘つて居る者である。未だ澤山にある秋の菌狩り殊に松茸狩りの如きは非常に樂しみである。菌(きのこ)狩りは蕨狩り又は栗拾ひよりも面白い、予は屢々松たけを取りに行つた。誰も知らない所に松たけを見附け大きなのだけを取つて小さなのは柴葉をかけて人の目に附かぬやうにして又取りに行くと、大きくなつて居るの樂しみと云ふたら、比べることが出來ない。

尚ほ秋はヤナ、サガリ及モゲなど云ふ物を川に仕掛けて鰻、蟹などを取る樂しみがある、而して時々來る庚申、甲子の日には「おはぎ」と牡丹餅の御馳走をする。百姓の樂しみは何か面白い事をするか、甘(うま)い物をこさへて食ふか、休むかである。

× × × ×

予の家から五六丁下つて川向ふ、一寸上つた所に廣草場がある「端のコーゲ」(コーゲは草原の俗名)と云ふ、此處から半丁程登つた小丘に大きな自然(じねん)石の石碑が建てられて居る。是が即ち「孫之丞の墓」である。抑も孫之丞は、予の村の一古老であつて曾祖父の若い時分には存命で居た。而して彼に關する逸話は澤山に村民の口碑に傳つて居て、予は屢々之を聞いた。

さて孫之丞は餘程老年で去つた。何でも百歳以上生きて居つたらしい。兎に角、孫之丞と云へば予の時でさへも、近所近郷誰知らぬ者はなかつた。何故に斯る名聲を博して居たかと云ふ

に一、孫之丞は天狗附である」と一般に信ぜられて居たからである。然り彼は天狗に惠まれて居る。天狗から偉大な勢力を得て居る尊崇されてあつた。そして孫之丞の祖先、親族は固より彼の青年又は壯年時代の事歴に關して誰一人知つて居る者なく、只單に天狗附きの孫之丞として、村民の記憶に殘つて居るのみである然り村民は獨身にして老人の孫之丞を知られるのみである。彼は宇賓殿(ほうでん)と云ふ屋敷に小舍を樹て住居し常に淸貧洗ふが如く、僅かに村民の用達を爲し且つ多少の田畑を耕やして、幽かなる生計を送れりと、而て其老末に至るや暇さへあれば無細工なる足中(あしなか)(舊時水夫の用ひたる足裏に半分位の草履)を造るを事としてゐた。而して彼は日常の事に關して、更に頓着せず一見薄馬鹿視されて居た。曾つて村民と馴々敷く交際談話などしたことはなかつたらしい、蓋し之は一は當時の彼と村民とは年から云ふと。優に三代か、の時世を異にして居る。而も現に至く世事に無關係である十世紀の孫之丞と十九世紀中葉の始めに於ける幕末時代の村民とは其の思想は固より、人情風俗に於て非常なる相違があつて兩者間は丸で沒交渉であつたであらう。

然れども孫之丞は村民等に尊敬されて居た。村民は彼を親切に待遇した。何故かと云へば前記の如く、天狗附であると云ふことが原因して居るのである。而して彼は何に依つて其の能力を現せしか。聞く彼は天にも晴れにも唯つた一本の棒を使ふことを知るのみ、即ち柔術で「八方」と云ふ棒である。而して彼は此一本で如何なる名流達人をも容易に組み伏せた。ヨシ眞劍の勝負を仕掛けられても一寸とも臆せず、彼は之で苦もなく打ち伏せた。斯る手腕を持つて居た所から、彼は天狗附きと呼ばれたのかも知らぬ。兎に角、孫之丞は一つの隱然たる村民の守護神であつた。然り村民が彼を信賴せしことは非常なものであつた。抑も舊幕時代には既に記した如く暴れ浪人共が長い刀を横たへて、村民の家へ亂入して無暗に金品を强請し、時には酒氣に乘じて亂暴を仕掛けて純朴なる良民を苦しめんとしたことが屢々であつた。而して斯る危急の場合には、何時でも孫之丞は何うしてかチヤンと聞き附けて例の棒を携へて來り、有無を云はさず、此の浪人を自由自在にあしらひ、直ちに村外に追ひ出した。時にシゴにならぬ浪藉者は蹴殺して仕舞つたこともあると云ふ。

尙ほ孫之丞が村民の信用を得て居つたのは之斗りではない。即ち彼が一朝使用した器物は他に持ち行きて、一の魔除けとなると云ふにあつた。故に彼がはいた足中を山間の田畑にブラ下げて置くと、兎も猪も出て作物の害を爲さない、是れ彼が常に足中を造る所以にして幾何造つても村民等は是れ位であらう。

ら孫之丞が一睨すると狐附などは直ちに落ちたそうな斯様な譯で彼は村に可愛がられ獨身で貧なるに拘はらず、何不自由なく非常なる長壽を全ふして、此の世を逝つて、今尚ほ彼の墓は常に新しき香花を手向けられて居る。而かも斯る奇異の人が村に居つたと云ふことは、村民の非常に誇りとする所で、予は子供の時々屢孫之丞のエライ天狗附であつたことの話を聞かされた。

× × × ×

兵衛も亦村民に祭られて居る古老の一偉人である。サテ兵衛は氏神様の神主の祖先であると傳へられて居る。而して彼は田舎に珍らしい弓の名人であつた。是れ彼が有名にして、而かも祭られてゐる所以である。而して其彼が名人なる名聲を博したる話は仲々面白い。予は幾度も此話を聞いたからよく覺えてゐる。それはかうである。或る時兵衛が伊勢參宮をした。彼は弓を嚢に包んで背負ひ込み、一見乞食の如き風をして、各名所を廻り、終に京都に來た。而して一日三十三間堂に到ると、侍共が盛んに弓の稽古を爲てゐた。兵衛は弓が好きであるから、熱心に見物し、獨語して侍の射弓を評して矢が指を離るや否や、此度は右!、此度は左!、上!、下!、と豫言した、矢は一本も的に中らないが、奇妙にも兵衛の見當は常に的中した。スルト侍衆は之を聞いて、何だ乞食風情で武士の行爲に容喙するとは無禮者め!、と怒つて見たが如何せん此者の言は事實を語るのであるから、一侍戯れて云く、汝他人を評する位いであるから、自らこれを能くするならん、來つて試みよ、若し射ること能はずんば手打ちにするぞ!、と兵衛は固より腕に覺えがあるから、喜色滿面直ちに承諾した、一武士弓を彼に與へんと指し出せば、兵衛は斯る弓は児戯の具のみと之を謝し、嚢に包める弓矢を取り出した。彼は非常に強き弓を張り、先づ笄矢を射た。一厘の誤りなく正鵠を得た。兵衛は侍衆に向つて曰く、一本では外れ當りとお思召さん、今一矢試むべし、と今度は鏑矢を射た。一點の誤りなく、笄を割つたる如く、亦的中した。餘りの成功なるが爲め侍衆始め總べての見物人は、呆然自失只賞嘆するのみであつた。忽ち此事は大評判となり、平民に味方する或る特志家は二矢的中の狀を畫かしめ之に「笄割の兵衛」と命名して三十三間堂に奉納した、此事は長く予が村民間に評判され、伊勢參宮を爲す者は必ず三十三間堂に詣で、此額を見るを以つて唯一の樂しみとなし又誇りとした。予の時代に於ても此の額を見たと云へる村民が居つた。

サテ兵衛は斯程弓の名手なるに拘はらず、天は彼に武運を與へず、終に世に用ひられず、兵衛の功名は三十三間堂一片の額に止めて、空しく郷間に埋沒せしは、遺憾なりと謂ふべけれ北海の天地に猪熊を射て露命を支ふるアイヌに兵衛が生れたらば、彼は酋長として其榮名を土人間に振ひたらん。然るに農村に生れたる兵衛は弓を以つて、身を立つるに緣由なく、憐れ貧困の内に一生を卒えた。而して其の傳ふる所の彼の最後は、實に人生の悲劇である。彼は家貧にして秋末麥の時附に際して麥種子がなかつた、一日本山寺村に行き麥種子を借り、之を背負ふて歸るさ、其の重荷は彼が餓えの苦しみと共に疲勞せる彼の軀を壓迫し、村堺に至るや終に歩を進むる能はず、茲にはかなくも餓死したとのことである。其の死場所に石を集めて墓を築きて、弓の名人兵衛は村人に祭られてある。(つゞく)

思想家の見た十年後の日本

□十年後の事を云ふと鬼が怒る　山川均

□この俺が待てるものか　大杉榮

□十年後の日本　高畠素之

□一とかた付いたら　堺利彦

□新文化生活の創造　阿部秀助

□地平線上の社會姿態　新井格

□迷信打破と輕信豫防　杉森孝次郎

□過去から見た將來の十年　千葉龜雄

十年後のことを言へば鬼が怒る

山川均

一

百年後の日本は斯うなる、と云つたなら、多くの人は、空想として一笑に附するかも知れぬ。ところが實際に於いては、百年後の日本を豫想することよりも、遙かに容易なことである。

何故かと云へば、百年後の日本の豫想が如何に困難で、如何に不確であるにもせよ、唯だ一つ確乎として疑ひの餘地のないことがある。即ち百年後の日本には、○○○○○○○○○○○○○を占め新しい○○○○○○○確立せられて居ると云ふ事である。この疑ひの無い事實——既成の事實と見做してもよい程に確實な事實から出發して、吾々は大體、其社會生活の狀況をも推測し得るのである。

ところが十年後の日本となると、そう行かぬ。恐らく十年の後には、吾々は既に○○○○○○終つてゐるだらうと思ふ。しかし又た何等かの、今から豫見し得られぬ形勢の爲めに、多少はこの○○○○○○せられてゐるかも知れぬ。そして十年後○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○。

こうなつて來ると、十年後の豫想は、百年後の豫想よりも、遙かに困難なことになる。

しかしながらそれと同時に、十年後の豫想は、一年又は二年後の豫想よりも却つて確實な點もある。現に來年の事といふと鬼が笑ふが、十年後のことを云ふても、鬼が笑ふといふ掟はない。しかし笑はれぬ代りに、怒るかも知れぬ。そして雜誌『改造』を一と攫みにするかも知らぬ。先づ之は言はれぬに限るようである。

二

吾々の歴史觀に從へば、十年後には『どうなるか』と云ふことは、十年間に吾々はどう『するか』と云ふことゝ、離すこと

の出來ない問題である。『どうなるか』といふ社會進化の必然は『どうするか』といふ、吾々の心理狀態となつて必ず現はれるからである。

吾々が食ひ、吾々が飲むのは、必ず食ひたいと『思ひ』飲みたいと『思ふ』から食ひ且つ飲むのである。吾々の飢渇といふ生理上の現象は、必ず食ひ且つ飲まうとする吾々の精神現象といふ、路を通ほつて作用する。

それと同じやうに、社會進化の『必然』も、必ず人間の行動といふ要素によつて作用するものである以上は、必ず何等かの人間の心理現象となつて現はれるに相違ない。唯だこの心理現象は、歴史の必然を正しく反映して居ることもあれば、歪がめて反射することもある。

人間の社會意義が發達して來るに從つて、吾々の心理現象は段々に正確に、社會的進化の必然を反射するやうになる。歴史の必然と吾々の意志とは、段々に一致して來る。言葉を換へて云へば、十年後にはどう『なる』かといふことゝ、吾々は十年間にどう『する』かといふことゝが、益々接近して來るのである。

これは一面から見れば、歴史——社會の進化——が益々人間の意志によつて支配せられるといふことにもなるが、客觀的に見れば、吾々の意志の内容が、歴史の必然に近づいて來るのである。人間は何等かの意志によつて行動する。そして如何なる場合にも、歴史的必然は人間の行動によつて現はれるものであるから、歴史は人間の意志によつて動いて居るとも云ふことが出來る。ただ歴史は、人間の意志の求める方向に動くこともあれば、却つて反對の方向に動くこともある。そこで吾々の意志が歴史を決定すると云つたのでは、吾々の良心の嘉納する行動が、即ち善であると云ふのと同じく、唯だ形式論であつて、如何なる行動を良心が嘉納するかと云ふ、實質内容に觸れない如く、吾々は如何なることをするかと云ふ、實質内容には少しも觸れて居らぬ。

吾々が十年間にどう『する』かと云ふことは、十年後の日本がどう『なる』かといふ問題に重大な關係がある。否な『なる』ことの唯だ要件は、吾々が『する』ことである。しなければ成る氣遣ひはない。けれどもそれと同時に、吾々の『する』といふ意志は、歴史的必然たる『なる』を内容としてゐなければならぬ。

三

日本の勞働者と無産階級との意志は、最早や定まつてゐると云つてよい。唯だ吾々の『する』意志が、どの程度まで精確

十年後のことを言へば鬼が怒る

山川均

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

一

百年後の日本は斯うなる、と云つたなら、多くの人は、空想として一笑に附するかも知れぬ。ところが實際に於いては、百年後の日本を豫想することよりも、遙かに容易なことである。

何故かと云へば、百年後の日本の豫想が如何に困難で、如何に不確であるにもせよ、唯だ一つ確乎として疑ひの餘地のないことがある。卽ち百年後の日本には、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を占め新しい〇〇〇〇〇〇確立せられて居ると云ふ事である。この疑ひの無い事實――既成の事實と見做してもよい程に確實な事實から出發して、吾々は大體、其社會生活の狀況をも推測し得るのである。

ところが十年後の日本となると、そう行かぬ。恐らく十年の後には、吾々は既に〇〇〇〇〇〇終つてゐるだらうと思ふ。しかし又た何等かの、今から豫見し得られぬ形勢の爲めに、多少はこの〇〇〇〇〇〇せられてゐるかも知れぬ。そして十年後〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

こうなつて來ると、十年後の豫想は、百年後の豫想よりも、遙かに困難なことになる。

しかしながらそれと同時に、十年後の豫想は、一年又は二年後の豫想よりも却つて確實な點もある。現に來年の事といふと鬼が笑ふが、十年後のことを云ふても、鬼が笑ふといふ掟はない。しかし笑はれぬ代りに、怒るかも知れぬ。そして雜誌『改造』を一と掴みにするかも知らぬ。先づ之は言はれぬに限るようである。

二

吾々の歴史觀に從へば、十年後には『どうなるか』と云ふことは、十年間に吾々はどう『するか』と云ふことゝ、離すこと

の出來ない問題である。『どうなるか』といふ社會進化の必然は『どうするか』といふ、吾々の心理狀態となつて必ず現はれるからである。

吾々が食ひ、吾々が飲むのは、必ず食ひたいと『思ひ』飲みたいと『思ふ』から食ひ且つ飲むのである、吾々の飢渇といふ生理上の現象は、必ず食ひ且つ飲まうとする吾々の精神現象といふ、路を通ほつて作用する。

それと同じやうに、社會進化の『必然』も、必ず人間の行動といふ要素によつて作用するものである以上は、必ず何等かの人間の心理現象となつて現はれるに相違ない。唯だこの心理現象は、歷史の必然を正しく反映して居ることもあれば、歪がめて反射することもある。

人間の社會意識が發達して來るに從つて、吾々の心理現象は段々に正確に、社會的進化の必然を反射するやうになる。歷史の必然と吾々の意志とは、段々に一致して來る。言葉を換へて云へば、十年後にはどう『なる』かといふことゝ、吾々は十年間にどう『する』かといふこととが、益々接近して來るのである。

これは一面から見れば、歷史——社會の進化——が益々人間の意志によつて支配せられるといふことにもなるが、客觀的に見れば、吾々の意志の內容が、歷史の必然に近づいて來るのである。人間は何等かの意志によつて行動する、そして如何なる場合にも、歷史的必然は人間の行動によつて現實するものであるから、歷史は人間の意志によつて動いて居るとも云ふことが出來る。ただ歷史は、人間の意志の求める方向に動くこともあれば、却つて反對の方向に動くこともある。そこで吾々の意志が歷史を決定すると云つたのでは、吾々の良心の嘉納する行動が、卽ち善であると云ふのと同じく、唯だ形式論であつて、如何なる行動を良心が嘉納するかと云ふ、實質內容に觸れない如く、吾々は如何なることをするかと云ふ、實質內容には少しも觸れて居らぬ。

吾々が十年間にどう『する』かと云ふことは、十年後の日本がどう『なる』かといふ問題に重大な關係がある。否な『なる』ことの唯だの要件は、吾々が『する』ことである。しなければ成る氣遣ひはない。けれどもそれと同時に、吾々の『する』といふ意志は、歷史的必然たる『なる』を內容としてゐなければならぬ。

三

日本の勞働者と無產階級との意志は、最早や定まつてゐると云つてよい。唯だ吾々の『する』意志が、どの程度まで時

に、今後の十年間に實現せらるゝかは、この意志の内容が、日本の歴史的必然——社會進化の必然と、どれほど能く一致して居るかによつて定る可きものである。

明治維新の革命によつて、土地の資本主義は覆滅した。けれども此革命の有力な原動力となつたものは商業資本であつて、近代的資本の代表的の形態たる工業資本は尚ほ發達してゐなかつた。新興のブルジョアは、尚ほ自己固有の政治形態を樹立するだけの、實力が出來てゐなかつた。そこで明治維新の革命——このブルジョアの革命——によつて直接政權を掌握したものは、ブルジョアではなくて、却つて封建社會の下層であつた。そして日本にはブルジョアのデモクラシーの共和政治が生れないで、官僚政治が生まれたのである。

そこで日本の工業資本主義は、ブルジョア・デモクラシーの政治形態を樹立しないで、官僚政治といふ借り着のうちに生長した。それは露國の新興資本階級が、ツアリズムの借り着を着て生長して居つたのと同樣である。明治五十年の政變は、要するに官僚とブルジョアとの努力の、離合と消長との歴史に外ならぬ。

斯ような形勢は、日本の階級的分野を曖昧にして居つた。日本の無産階級は、この事實の爲に、明白に自己の階級的の立場を觀取することが出來なかつた。然るに最近の政界に於ける著るしい現象は、官僚とブルジョアとの分化である。そして此政界の新現象は、要するにブルジョアの階級的成熟を反映したものに外ならぬ。

今や日本の勞働者と無産階級は、明白に其反對階級を見ブルジョアの階級的成熟とは、無産階級の階級的成熟といふ楯の反對面に外ならぬ、日本の勞働者と無産階級とは、今や明確な意志をもつて居る。彼は無意識的な『どうなる』の要素ではなくて、『どうする』の要素となつたのである。

そこで問題は元に戻つて來る。十年後の日本はどうなるか。日本の無産階級は今や歴史的必然を意識した能動的の要素となつた。『どうなる』かと云ふ問題は、直ちに『どうする』かと云ふ問題と同一に意味を有するものとなつた。吾々はこの十年間に『どうする』か。吾々は唯だ笑つて答へない。十年後のことを言へば鬼が怒るから——

十年後の日本

高畠素之

十年後の日本とは、思ひ切り間の拔けた問題である。たゞ若し、『今から社會主義運動が絶對に自由であるとして』との條件付きで十年先の事業を考へるとすれば、それは思ひ切り面白いものにもなれば、思ひ切り危險なものにもなる。而し政府は此の外題の間を拔けさゝない爲めに、社會主義運動を自由にする筈もなかろうから仕方がない。

素人並みに行くだけなら、十二年を一廻りとか云うから、今から十年後は大體今から二年前の調子をやり直す位の所ではないか。

二年前と言へば、先づ戰爭と云う大事件があつた事。隨つて戰爭の原因と結果との大部分を受け持つ、資本主義生産の發達が目覺ましく進んだ事、すると、工場の數が多くなつて、勞働の需用が激增したので、勞働者が『自覺』し、勞働ブローカーが活躍した事、資本家が『反省』して、日曜を休みにしたり。錢湯の札を只やつたりした事。知識社會が『覺醒』して社會問題の本が盛んに賣れた事。此の好景氣が文壇に反映して所謂問題小說が賣れ、政治に反映して普通選擧が政爭のダシに使はれ三越に反映して木綿デーの開催が許られた事などであつた。そこで今から十年後の日本も、大體此の邊では無かろうか。現に今度の好景氣の根底ともなつた戰爭が、十年內外に又始るとは軍人や政治家や船會社や株屋どもも頻りに言ひ觸して居るとの事である。

所で、其の後二年位經てば、大體今の日本そつくりになるであらう。好景氣後の恐慌が來ると、物價、新設會社、成金、『自覺』『反省』『覺醒』一切が吹き飛ばされて了う。勞働者の賃銀とか時間とかは、済し崩しにジリ〳〵昔通りに還る。勞働ブローカーは辯護士とか、保險の勸誘員とか、院外團有志とかに復歸する。社會問題書の切り拔飜譯の大家は、講談性慾等の雜文に逆戻りするなどの邊で、萬事折合が附くではなからうか。

尤も社會事象の循環は、螺線狀を描いて進行するとか言ふか

ら、十年後の好景氣は、一二年前の好景氣に較べて、十二年後の不景氣は今からの不景氣に較べて、すべて線が太いかも知れない。鮮くとも人口増加に比例する位には、すべての規模が擴大するかも知れない。例へば今度二十錢上つて二十錢下つた賃銀は十年後には二十三錢上つて二十三錢下るだろうし、今度五千圓鑛山會社から取つたブローカーは十年後には五千七百圓儲けると云ふような具合になるであろう。

殊に日本に於ては、資本主義生産が、政治的の關係に依つて本來發達すべき階段に達し兼ねて居ると觀察される。政治的關係とは、武力的支配階級たる、所謂軍閥と其の羽翼の下に孵化された官僚との、資本主義的政治權力に對する對峙である。尤も此の對峙は、舊勢力の一歩〳〵の後退りに依つて、最終の勝敗はもう見え透いて居るが、現在に於ては兎も角對峙である。此の事は、種々の經路に依つて資本主義の進行を阻害して居る。明瞭な一例として、軍需品製造工場の多くが、民間の經營に移され、營利のタネにする事が拒まれて居るが如きを擧げる事が出來る。このように舊勢力が不可思議なる生命を持續して居るのは、資本主義の發生に先ちて地盤を築いた大頭共が、生き殘つて、生理的に惰勢を續けて居るからで、山縣有朋は其の筆頭である。然るに彼等の天命はもう殘額幾何もない。今後の十年間に大體片付くであらう。そうなると資本主義は鬱屈せる力を一度に延ばす事となり、幾段の新しい發達を遂げるであろう。

十年後の循環には、此の事も測算の中へ入れなければなるまい。そこで此の螺線は普通の場合よりも、ずつと大きくなると解しなければならぬ。

資本主義の發達は、例の『自覺』『反省』『覺醒』と表裏して並行するので、是等の諸現象も、資本主義の發達と同一の割合を以て發達するであろう。そこで十年後の騷ぎは、二年前の騷ぎよりは、餘つ程大きな規模となると思はれる。其の代り、十二年後の不景氣も亦それに應じて大規模に來る事が思ひやられる。

このように、規模の上には變化があるとは云へ、それは所詮量の差である。質の上では結局『一廻り』の反覆に過ぎぬであろう。尤も、『今から社會主義運動が絕對に自由に行はれ得るとすれば』との條件が付けば、話は無論別になる。

若し夫れ、そんな呑氣な循環は世界の大勢が許さないと言ふもの丶說が眞であるとすれば、吾々はたゞ『それなら一切西洋人に任せろ』と言ふだけだ。

地平線上の社會姿態

新居格

吾等はユートピアに達せんとする大なる願望を持たぬかも知れないが逃避者は選ばれたる者ではあり得ない。しかし、帝國主義、資本主義、貪婪なる組織の古き世界より奔亡せんとする逃避者でなくて何である

ロバアト・リンド

與えられた題目——十年後の日本の社會がどんな姿態を呈するであらうか——は我が身一つの運命さえが測かり知られぬ人の世に餘りに離かしい問題である。ウイリアム・モオリスが「理想郷」を描いたやうに又はベラミーが百年後の新社會を架空したやうに好むまゝに、欲するまゝに日本を舞臺にしてユートピアを虛構してみよと云ふのであればわたくしは縱まゝに色彩を豐麗にし、自由の輝きある、平等の氣持よきそして個性の轉開を最もよくしうるであらうと信ずる美しい夢想——それは近時わたくしの共鳴を感ずるサンデカリズム哲學から云へば取らない所であるにしても——を敢て詩人の心を以つて描寫するでもあらう。しかし、十年後と云ふことであつてみればそうした答は餘りに現實味が稀薄になり過ぎる。そこで只、現代の思想的傾向から推理して大雜把な大體論をするより外はないのではあるまいか。

將來の十年以後を考えるために對應的に先づ過去の十年以內乃至十年前を遡及して考えてみるとどうであらうか。過去の十年目は大正元年であり千九百十二年であつた。其十年間に支那露西亞獨逸墺匈國の諸國は帝政から共和政乃至勞働專制に變化して行つた。英國では五年の間に次のやうに貧困線が移動した。

一週間分	千九百十四年	千九百廿年二月
地代	七志六片	七志六片
食料費	一磅	二磅七志二片
衣類（靴を含む）	五志	十七志六片
燃料	三志	四志十一片
點燈家具 金物陶器	三志六片	十志六片

石鹸曹達等		
娯樂費	一志六片	四志六片
交通費	一志	一志六片
酒、莨、新聞紙		
書籍費其他	二志	四志
小遣錢等		
勞働組合費其他	一志六片	三志
計	二磅五志	五磅七片

以上はレオ、チオザ・マニー氏が五人の家族を基準として作成した表であるが商務院の統計では二磅五志に對して五磅一志三片でパアセンテージは一二五になつて居るがスマイリー氏は千九百廿年七月頃には生活費は一五二パアセントを遙かに突破してゐると云つた。

こうした統計表が本文起草の際、卓上にあつたまゝ一寸引用してみたが。日本の社會が十年以前五年以前と今日と如何に經濟事情或は貧困線が異つてゐるかは生憎手許に材料がないから引けないが、政治にも經濟にも又其他の局面にも事物はあるがまゝに居ないのである。

社會は不斷に變化し推移する。動、反動の原則は本當としても歴史は必ずしも同じやうな繰返しをするものではない。一歩進み半歩退くにしても或は一歩進み一歩退くが如く見えても人類は常に前へ〳〵と廻轉しつゝあるのである。絶えざる破壞と創成とを糾ひながら。

十年後の社會はどんな姿態を呈しやう。現代に於ける人類の志向は現存社會組織の欠缺乃至不合理を何とか改訂しやうとして踠きつゝある。人類の喜びとする社會の新樣式を熱烈に追求しつゝある。それが十年以後に見られるか百年の後でも見られないかそれは豫言の限りではないがさうした志向の尖端は見出すに難くはない。

ノルマン・エンゼルは世界戰爭は私有財産制に關する長い間の概念に新しい光を放げた一例としてこう説明をして居る。英國青年の全體は戰爭の際彼等は彼等自身に屬してない事實に面接し共の有するすべてのもの否、生命共物さへ危險に投げ出さねばならなくなつて各の生命が團體に屬するならばその財産も明かに團體の歸屬であると考ふるに至つたからであると。

ロバアト・リンドの近著には世界戰爭の時國防の上から一般市民に「飢餓の平等」を要求し牛肉、人工乳酪、砂糖は金を持つと云ふ理由からではなく市民であると云ふ理由で分配された。

從つて富裕の理由で一日二回の肉を食ふ事は許されなかつた。

こうした切符制度は正さに社會主義への一轉歩である。

かくの如き不平等的原則を平時にも行ひ新しい社會秩序の基礎とは出來ないものか。各市民はその息子を大學に送り、子供達を

月餘の休暇には海岸に送り、何れも花園のある家に住み、外國に旅行し、オペラも觀に行けば、好きなら酒も飮み、氣持のいゝ靴を穿き換言せば、教養されてあり更に、隣人が贅澤であるなら同樣に贅澤であつてもいゝと云つた風の平等の權利を一般には考へやうとしつゝあるのではないか。パデレウスキーは「ボルセビキーの革命は齒磨楊子に對する戰爭だ」と云つたが貧乏人だと何も齒磨楊子の價値を知りたいと云ふのぢやないのだ。揚子を使ふやうな暇のある世界を望むのだ。エンゼルの云ふ所リンドの考える所、それ〲に來るべき新社會形相の尖端を云ひ當てゝ居る事は諸かである。十年後の日本の社會もそうした摘示は差向けられていゝ事であらう。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

十年以後の社會姿態がどうなるか。社會主義の世界が出現するかしないか、勞働國が建設されるかどうか、此等の豫想を敢てすることは差控えやう。しかし、最近相續いて起生して來た所の疑獄事件を活動寫眞のフイルムのやうに見せつけられては資本主義の膿が潰える感を惹き起さると共に十年後もそうした貪婪の組織を許して置けないやうに思ふ。資本主義漸く解體の兆ありとは無論云へないであらうけれどもそれが善良にして正直なる市民の排斥に値しやうとしてゐるのは事實である、而して正直なものの中樞となる社會が生れなければならないのが本當である。今の社會に於いて正直にして不合理に鋭感なるものの多くは反資本主義の足場に事實上、立つて居るのである。それで運命が狂ひなく進んで行くならば虛僞、權謀の今の政治と政治家とは驅逐され思潮が民衆的に浸潤して行くと共に價値の顚倒が益々正當化されるのである。十年以後にそれが實現されることは望ましい事ではあるが果してどうか、それは地平線上遙かに眺めんとする社會姿態となりはしまいか、かくあるべきの當爲と事實の到來とは必ずしも合致しない否、時としてひどく裏切られ勝になる。事實の到來如何を問はず、新しい社會の昫嵐を感覺するものは一路をのみしか迹れない。以上の解答は餘りに抽象的摸稜に過ぎるの感がある。若し更に日本現在の諸傾向諸現象並にそれを代表する人間の具體的引用をしそれに十年を加へて想像するならば、幾分面白く書けないでもなからう。例へば山縣大隈の十年後所謂馬齢六十二となる堺利彥翁、それから諸運動の將來、經濟、政治、宗教農民問題文藝美術教育者等に具體的考査を加へて行くなら突發的事變の起らさる限り稍精密なる社會概觀を架像されやうが時間なければ筆を擱く。

（五月十三日夕）

過去から見た將來の十年

千葉龜雄

劇の歴史がたとへどんな眞理を教へやうとも、悲劇と喜劇は、決して判然と封蹠的にちがつた本質のものではなくて、同じ物體の表と裏のちがひではなからうか。たとへば舊時代であることの悲劇は、それが多くの場合、その國民が舊い傳統に執着を持つて居ることよりも、より多く其舊い傳統を打壞つて、新らしい確信に生れ出やうとする、誕生の惱みの上に見られるのである。そして其生みの陣痛に惱むものの苦痛が、偉大であり、悲壯であればあるほど、舊傳統に執着する者どもの喜劇はますます緊張の度を加へる。たゞ此の喜劇が、定義された喜劇とちがふ處は、前者が何等のこだわりなしに、人間界の光明面を享樂することを意味するのであるのに。後者からはそれを味はつた後に、決してのびのびした怡樂の感覺を與へられない、寧ろそれとは反對に、さらさらした苦い滓を、思索の底に感觸することである。或ひは激しい憎惡と不快の壓迫を強くそこに意識する場合さへもが多いのである。モリエルが暴露して見せた、人間心理の或る場合の自然な矛盾——そんなものよりも未だ未だずつと深酷な、ゴオゴリが描いた喜劇の意味に於いてこの喜劇、そして悲劇——そうしたものを、私どもは始終眼前に展開されて居るのではある。それは何所に？ 日本の現代の社會に、現代の人間に、そしてそうした現象によつて反射される自分の心境は、いつも暗く淋しいものである。

そこで衝き當るのは、一體日本國民の心理は何であるかと云ふ事である。日本は印度であるか、彼等の信ずるものは涅槃の教理であるか。涅槃は絶對の死滅境である。それは何等の欲求も憧憬をも持たない。あらゆる自己の内の愛着心を撥無し、あらゆる外境の誘惑をはねのけることによつて、樂しい釋放を求めやうとする刹那の心境である。一時の佛教國であつた日本には、かうした心理が現代でも中々多く強い勢力を占めて居る、そして日本だけを地球の自轉からとりのけ得られるものと考へて、強いて自己の良心を陶醉させようと努力するところの、古

い意味の愛國者たちが完全に其の思想を代表する。それを階級別で云ふならば、官僚に軍人に資本家に政事者に、それからある種の教育家などが其の種類としてそれに數へ上げられる。

それは彼等の主觀にとつて、絕對の幸福境であるかも知れない。けれどもそうした主觀が、その肉體と思索を、どんな破滅にまで運んで行くかはあまりに明らかな事實であらう。すべての有機體は、それが消費されることによつて自己を消耗する場合と同時に、自己を消費することによつて、自己を自淨し得る矛盾した反應性を持つて居る。始めから自己を運動して、外界からの刺激と反應を求めまいとする執意には、絕對の死があつて生がない。

かくして彼等はもう早い頃に死んで居なければならない。それに係らず、彼等がまだぬくぬくと生存して居られるのは何故であらうか、それは日本が風土的に濕潤した國で、或る種の黴菌の生育に適して居るやうに、日本近代五十年間の思想的雰圍氣が、割合に因循な舊套的なものであつて、彼等の死滅を早くするやうな、そうして苛烈な外光を持つて居なかつた爲めである。

彼等が涅槃の教理を懷いて、絕對の祝福だと考へることはそれで好いとする。けれどももう一つ其の外に、絕對の祝福を文明人が享受し得られる他の教理がある。夫は前者が絕對の無知を力說するものであるに對して、之は絕對の知識を主張するものである。前者は一切の反拒であるに對して、後者に一切の攝取である。自己の中にあらゆる外境內境を肯定し統合して、宇宙の唯一神として立たうとする努力である。彼れは自己の否定であり、之れは自己の發展と延長と擴大とである。そして此の二つは人が考へるやうに、並行線のやうに流れたどこまでも沒交渉なものでは決してない。それはお互に一つの意識の中に矛盾して、相いれることの出來ない死敵なのである。どちらか結局はどちらかを仆さねば止まない、杆格した運命を持つた存在なのである。そして此の絕對知識に對する國民の熱情が激しくなればなるほど、絕對の無知を供奉する信者達の存在をより急に死滅さすることが出來る譯であるから、從つて今日のやうによぼよぼな舊思想の團體が、みすぼらしい姿を日なたぼつこさせ乍ら、指餌を食つて猶ほ相應な生存の權力を主張して居られるのは、存外現代日本の絕對知識に向ふ憧憬が薄弱であることを語るものでなくて何であらう。

すべての國民が、絕對の知識に生きやうとする希求の象徴は、先づ國民の誰れでもが、確信と合理性の中に生きることとでなくては、生甲斐のある生活ではないと云ふことを感ずるこ

とによつて現はれる。それはすべての古いつまらない傳統と形式から離れて、唯だ全能の自己を投影し得る認識の中に生きやうとする努力である。或る傳統が、單に過去にあつたと云ふ事實だけでは、そしてそれが現在以後の人類を、何等幸福にするものでない限りは、考古的の價値を示す外には、何等の引力をも持たぬものである、又た持つてはならないものである。日本の歴史を考へて來ると、日本國民の生きて居た傳統的思想を支配したものは、多くの場合現在であつて將來ではなかつた。單に現在だけを目あてとするならば、多くの政事者が便る方便は大抵きまつて居る。それは過去そのもの丶法條を萬代不易の理法として、その國民に○○○○押し賣りをするのである。それは大抵の國民心理は臆病なもので、將來の理想には危懼を懐くのであるが、兎に角經驗された知識の方には、より多くの安心を持つてからだ。此點から云へば人間は可なり冒險心の乏しいものである。

尤も日本國民が、かうした實際的な、原敬氏に代表さしたやうな今日主義の使徒となつて果てたのは、日本現代までの生活が、投機よりも實在に依頼せねばならなかつたところの、農業立國の心理がそれを養つて居る。他の一つは實際道德を吸ひ込んだ儒教である。尤も雄大な空想哲學である佛教さへもが、日本へ來ては單に現世の人生を胡摩化す爲めの宗教以外には應用されなかつた。

だから絕對の知識觀を擁くものの第二の資格は、强く現在を見つめると同時に、更につよく將來を凝視することでなければならない。凡ての知識も、凡ての傳統も、當來の人類を幸福にすることによつてこそ始めて生存の意義がある。そして將來を凝視し、又た將來を的確に自己に服從させることは、最も眞實な合理性の堆積によつて、始めて間違ひのない價値を求むることが出來るのである。

絕對の知識に對する第三の現はれは、大きな合理的理想を持つて、意それに突き進むことによつて證認されるのであるが、それは言ふまでもなく第二の問題に結び付くものである。一體現實を强く見つめるレアリズムの精神を、ロマンチックなものと全く相容れないものと考へる思想の傾向は間違である。ネオロマンチックなものの眞髓は、嚴肅な、レアリズムの精神を土台とし、それを通じて、そして其の洗禮を受けることによつてのみ始めて到達される。眞實な合理性を當面の事實に當嵌めた時に、その實在が指して行くべき理路、又た行かなければならない運命は、歴然として思索の中にはつきりと浮んで來るのである。これまでの日本の國民に將來と理想を看出せなかつた事

實、そして彼等が其日其日の風次第に、浮萍のやうな生活を續けて來た事實は、又た明らかに此の合理性を持たない事を裏切つて居る。

同化の文化と云ふ名は、まことに都合のよい措辭であるが、ありやうは自我のない自己を漂流さして、其の日暮しに他人の軒下に雨やどりをした形跡は無かつたか。強い自我の意識のあるものは、そう大安賣りに同化し得るものではない。朝鮮でさへもが、愛蘭でさへもが。――同化は征服することによつて始めて意義があるのであるが、日本の文化は、果して佛教や儒教や西洋思想を征伏したと云ひ得るであらうか。

最後に絶對知識を求めるものの目的を、自我の確立にあると云ひたい。自我の權利を確立したものは、又た當然の自我同志の權利を認め、自我同志の義務を認めることになるのであらう。此處に相互理解の精神が生れ、他愛と宗教と同胞愛の感情が玆處に生れる。よく個人主義の時代が立つて社會精神の時代が來たと云ふ。學徒がその清新な創造力によつて、いろんな主義を拵らへたり、置き換へたりして見ることは差支へがないが、我等の理法に執した觀念は、決してそれ等の好奇心によつて容易に動かされない。我等は先づどんな意味からも、社會人でない個人生活の可能性を想像することが出來ても、個人を土臺としたい社會性の眞實を認めることは出來ない。――斷はるまでも無いが、個人或は自己の性質を、Egotism と解釋するやうなのは問題外である――今までピラミッドの基底を社會として、その尖頂を假りに個人とする。多くの人はあれを引つるかへせと云ふのだ。又た其人は、見よ、ピラミッドは基底から尖頂へ進んで行くではないか、現代の精神はそこまで行つて居ると云ふのだ。然し私はピラミットはあれで好いと見る。人界では人間が基底から尖頂へ上るのであるが、神樣が天から下りて來る時は、反對に尖頂を傳つて下界へ向つて來る。所詮個人がいつも社會の重大な出立點で指標になるのである。實際に社會などと云ふことには、我等にとつて考へるにしてもあまりに茫漠たる觀念の中の物體でなければならない。或るすぐれた思想家が頭腦に想像した當來の新らしい社會はどんなに美くしい、好いものであるにしても、それは一人の頭に宿つた一つの概念に過ぎないのだ。個人は個々悉くちがつた自由と思想と慾望を持て居るので、たとへどんな好い社會でも、その凡ての個人の自由を悉く完全に容れ得る社會と云ふものはあるものではない。その社會と云ふものの名の爲めに、人間が一列一體の自由しきや與へられなくて、それが人間の絶對的社會奉仕だと云ふなれば我等の與へられる社會と云ふものは、可なり窮屈な、个一

由な、東京市が建てた市設住宅と云つたやうなものかも知れない。それは我等の到底我慢し切れないものの一つである。

いや我等は、衆團と社會と多數制の○○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○をふんだんに受けて居る。つまり我等には誰かも高調したやうな、世界を賣つても取換へられない自己がある。從つて我等が希求しつゝある社會改造は、個人の改造を唯一の目的とすることによつて始めて可能性を持つものである。

要するに、すべての社會と個人に起る罪惡は、凡てが個人の無知から起る。唯物觀から眺める人は、經濟生活の位置を轉換することによつて、始めて此の無知を改造し得べきものと考へる。たとへどんな方策でもよい、それが人間の無知を絶滅し得る途ならば何を措いてもそれに頼るが好い。自分も亦た熱心にそれを助成したいのである。が、然し人間に根深く根ざした無知の凡てが、そうした理想郷だけの建設で、悉とく取りのけ得ることが出來るものかどうか。少くとも人間心理の複雜さを、藝術の上から考へる人々に取つては、餘程の疑惑がそこに潜んで居らねばならぬ。尤もさうした理想郷に憧がれて、せめてもの安慰の境地をそこに見出さうとすることは、現代のやうな醜惡な生活に棲む者にとつて、幾重もの愉快極まる白日夢ではなければならない。けれどもそれはそれだけである。だから現代社會の罪惡を指摘する藝術家ほど、益す深く個人の改造に歸つて行つて、そこに世界改造の重大な解決の鍵を求めやうとするのである。何となれば、唯物的な社會改革が成功するにせよ、成功せぬにせよ、個人の文化的革命をさし置いて、より廣汎な有効な社會改造はないからである。かうして個人が社會とか、國家とか云ふ外殼によつて意識的に縛られずに、唯だ人類同志の理解と愛の名で握手し合ふ事によつて、燦爛たる文化の世界はそこに始めて出現するからである。何で又たそこに階級や權力や、その他あらゆる外的な規範を必要とする理由があらう。

かうした文化世界を打開することによつて、日本當來の運命は光華を示すべきものだと私には思はれる。その途を撰ぶ外に、他の方策はないものだと私は考へる。そこで日本の十年後の社會相はどんなものであらうか。たとへそれが豫想であつても、正直に斷言しやうとするならば、馬鹿々々しい勇氣が必要になつて來る、又たそれを曖昧にして見ても、もし大正十年までを含んだ過去十年の歴史の標準で行けば、此の後十年の社會相は、未だ未だそれほどの國民文化の急進はどうであらうか、けれども夫れは國内だけの事相を標準とするのである。いかに日本が外界と分離し、外境を反拒しやうと努力しても。世

果的思潮が、急潮のやうに浸潤して來る狀態をどうともする事は出來ない。又たそこがそれ存外感受性に富んだ分子を持つ日本の國民である。それは勿論一向把持性を持たない感受性だけのものであるが、それによつて表面的に響際するところの、世界的の混亂を起すことは或は大きいものがあらう。が、それは全く東京市の土壤のやうなものだ、降つた雨は地殼に浸潤せずに單に表皮だけをしたゝかに流れるので、途法もない泥濘の海が洶湧する。歐米の思想の底には、科學的な精神が貫流して居るのだが、日本國民の思想の層は、地表の底には何物もない。科學の精神の浸潤のない處にそれを考察する把持性を持たないのは自然の理である。或る思想家は、勞働問題の起つた理由などを、近代科學精神の分裂から、凡ての國民を物質慾に耽溺さしたものだと云ふやうに斷論したが、それは全たく反對で、物質的科學的、精神が充分に飽和されなければこそ、こんなみじめな混亂も起つて來る譯である。とり分け婦人問題や、一班婦人界の思潮などについて見れば、一番よくその因循な態度と、傳統と、非自己なるものに囚はれた睡眠の深さがわかる。

それなら十年後に於いて、何が一番日本での進んだものだらうか。やはり一般の新思想であらう、そしてそれは恐らくどうにか世界とのレエルを踏みはづさない程度には行けるだらう。が、唯だ知るだけで考へることのない國民は、知る事と行ふ事とは全たく別である。學者が實行者でないのは世界共通の事實だから、結局未だ未だ因循な頭腦に支配される當局者が續く以上、事實どれほど目につくやうな變革が見られるかは疑はしい。普通選擧が唱へられてから許りも、もう何年になるか。

新文化生活の創造

阿部秀助

十年後に於ける日本の思想界が果して如何なる傾向を有す可きやの問題は、同じく十年後に於ける世界の思想界が果して如何なる傾向を以て進む可きやの問題を離れて之れを理解することは困難である、何んとなれば我等の思想は過去及現在に於て

然るが如く、將來に於ても絶えず世界的思想の或者に吾人の精神的糧を求むるを以てゞある。

然らば十年後に於ける世界的思想の主なる傾向如何、之れ實に困難なる問題である、此困難なる問題を解決する爲めには、自から之れが解決に必要である統一的基礎とも稱す可きものを求めなくてはならぬ、而して斯くの如き統一的基礎として先づ第一に吾人の注意に上るものは、何れの時代にも吾人の胸に宿れる自我の解放である。然らば自我の解放は如何にして可能なる可きか、之れを理解する爲めには、先づ過去に於ける自我解放の努力が果して如何なる手段方法によつて齎らされんとせしやを考察する必要がある。論者の見る處を以てすれば過去に於ける自我解放の歴史は主として二個の傾向の中に描かれたのである。即ち宗教の中に之れが解放を求むるか然らずんば宗教を離れて之れが解脱を齎らすかである。而して我等の現時に於ける生活は後者の典型で、其處には個人主義を基礎とした These の文化生活たる資本主義や Anti-these の文化生活たる社會主義はあるも然かも以上の兩主義を超越して全人類の幸福な運命を支配せんとする Synthese の文化生活が實現せられないことは一面、現時の社會をして不安動搖の巷と化せしめし所以で、他面、斯くの如き綜合的の文化生活に導くことが此後に於ける世界的思想の中心的要求であると思ふ。而して此中心的要求、又は或意味に於ける個人の直觀的體驗である神秘主義的傾向が既に今日に於て多少の萠芽を有することは英國に於ける「ギルド」社會主義に就きて見るも、最近の獨逸に於ける青年學徒の思想的傾向が著しく神秘主義に傾いた點から見ても、又た「マックス、デッア」教授の「新神秘主義と新藝術」等に徵しても、我等は斯くの如き氣運斯くの如き時代の既に來りつゝあることを意識し得るのである。要するに近世の文化生活なるものは地上に於ける自我の獨立性を基礎とした不純な不統一な人生觀世界觀の結晶で其處には何等精神的完成の事業なく、只だ存するものは外的な數量的文化の象徵である無産者階級の鬪爭のみで、斯くて惱まされた世界は外的努力より更に内的に努力すれば我等の意識をしてより深く徹底せしめんとする處に、「生」のより大なる統一的基礎を見出さんとする處に、やがて將來に於ける思想的努力の中心點的生命が存するが如く信ぜらるゝのである。今、假りに以上の如き傾向が世界的思想の主なる中心點たる場合に於て日本は果して之れを體得し得る精神的基礎を有するやの問題は次で解決せらる可き重要な問題である、我等の見る處を以てすれば地上に絆された近世文化生活の深刻な體驗者でない我國民は來る可き新文化生活の純な創造者として今の世

界に於て最も屬目せらる可き國民であると思ふ、少くとも彼等の努力の如何によつては我等の有する勞働觀の改造や、物的な過去の社會主義に更に深い內容を與へ得ることゝ思ふ、十年後の日本の思想界、新人生觀と新世界觀とに運命付けられた日本

の思想家は單に自國の運命の指導者としてのみでなくて同時に世界的運命の指導者として努力、自制、精神優越性を以て進むことが必要である。

迷信打破と輕信豫防

杉森孝次郎

耶蘇も、マホメツトも、好んで豫言を敢てしたよりは、勉めて豫言を避けた。賢い人は、豫言せずに希望する。意思は、それが聰明な意思である場合には、概ね運命の豫言だ。十年後の日本が、果たしてどんなものであるかは、智識で判斷し、品性で希望するほかないのだが、それにしても、設問を、直接有意義たらしめるやうな試答はむづかしい。

コール氏は、英國の資本主義は、いかに長く見積もつても、今後十年の壽命はあるまいといふ。去年の書物に於いて爾後最長年限十年と言つたのだから、今年から言へば九年以內となる。原始基督者の場合にも、一九一四年の夏の獨逸にも、願望が期望となり、確信となり透視となつた要素が多少あつた。人もし切實に志欲して、主觀的必要が客觀的必然として幻現し、または實現されるに至るならば、その白熱は、尊貴なる人光を放つ。弱冠以來のレーニン氏は一九一七年の十一月を自己の意思內に發見しつゝあつた。プレストリトヴスクのかれは、その後の露を結論とする確信の大小前提を內覺した。昨今のかれは、資本主義の國際的崩落を主觀的必要と、客觀的必然とを結び合はせたかたちに於いて唱說する。

今後十年間に、日本の外的、國際的位置が、いかなる變化に遭逢するか否かは、未知數だ。獨露はいふまでもないが、英米でさへも、今から十年前に、かれらの今日の國際的位置を豫知しえたであらうか。勿論探知しえなかつたのだ。けれども、社

會が、本質的には國際大となつた現代にあつては、一國の國際的位置の上の大變は、必らずその國の國内的事情の上に大變を偏發し、結果する。露獨はその一二例だ。米露支英對日の關係が、大變なくして進むか、大變を前途數年間に必招するか、するとしたらいかなる性質の大變か、浮ぶ性質の大變か、沈む性質の大變か、豫知しうる限りではない。たゞ人としては、ありうべき最惡運命を假定して、始めて最善運命をも創作しうるのだから、意思の問題となれば、日本は近き將來にも、國際的に禍變を避け、福變を招き、浮揚するに一定して居る。

外變は、善性の場合でも、惡性の場合でも、內變の起緣ではありえても、起因とは稱しがたい。外變の有無善惡をあてに內變の有無善惡を豫期したり、待望したりする事は、人としての、隨つて國民としての最高可能に機會を與へる方法ではない。最善態度ではないのだ。ほめた話でない。十年後の日本に對するわれらの觀測は、希望のかたちを取るほかない。ただその希望に、成るたけ十分に可能の判斷を、制限、奬勵兩樣のかたちに於いて結び付ける事が肝要だ。

日本の變化を善性にするためには、一般文化運動、社會教育運動を聰明な、有爲なものに發達させるほかない。制度上の改善も、その基礎の上に立つて、時あつてか飛躍的に、概しては步行的に、斷行すべきだ。本質的に善良なる制度をば、政治組織の上に於いても、經濟制度の上に於いても、家庭、教育、また各種風俗習慣の上に於いてさへも、勇氣ある政治家が現はれて斷行すれば、常識と學說は、意外に安業容易に改宗して追隨するだらう。制度が信仰を造るのだ。問題は、相當の輿望を集めて、能く進步的制度を斷行する人物が、果たして最近に出現するかどうかにある。われらの一努力は、そのやうな救國愛民の意思と力量との兼ね備はつた人物を、一日も早く、一人でも多く、生産し、推薦する圖境を、人心と輿論のかたちに於いて準備するにある。

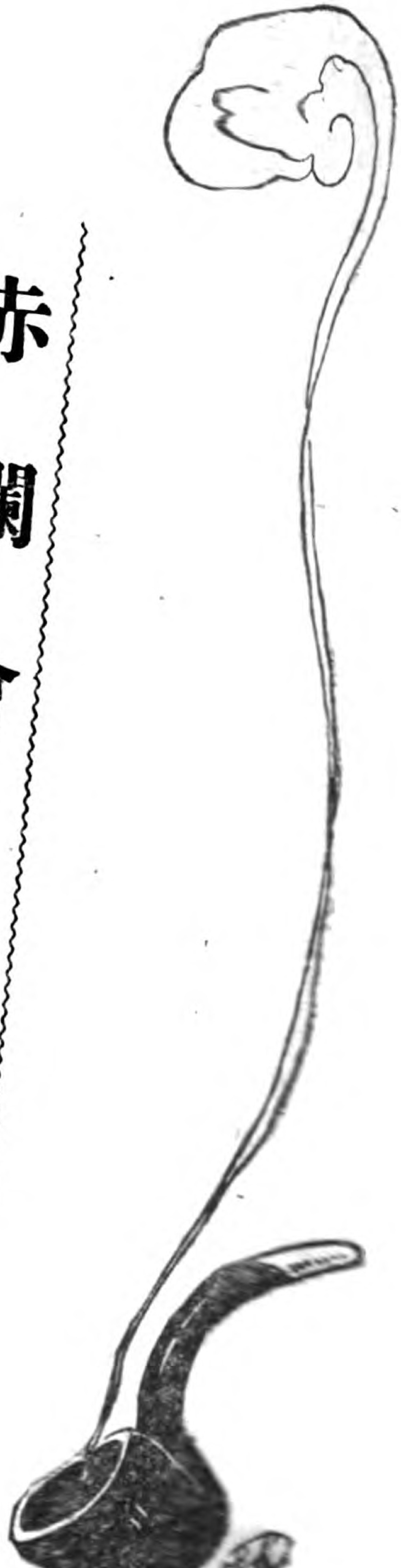
國際心の開發、自治心の養成、陳套平庸な言ひ草ではあるが、最近の將來に橫たはる未知運命の日本を好望なものにするためには、この比翼理想の國民的確認體達が、最樞要だ。

偏狹なる愛國心は民族的に自窮し、發育不全の自治心は、社會の進潮に遺却される。ふたつながら亡失道だ。わが國民は、かなり多くこの道を步んでをる。迷信打破と輕信豫防が、わが國民の急務だ。現存の制度、習慣、信仰、常識、道德のうちには、迷信的要素が實に多い。他面に於いて、新を求むる人々のなかには、非條理的信者が多い。輕信者が多いのだ。兩者ともに思想上に於ける無自治の致すところだ。自治が萬善の一根源だのに、その自治がわれら日本人には著しく發育不十分になつてをる。われらの頭腦心胸はいま尙ほ封建的だ。今後十年間に、どれほどの事が出來るか知らぬが、せめて頭腦心胸の領土に於ける封建制を國際なみの程度までには覺破したい。

赤瀾會の眞相

社會主義婦人運動と赤瀾會

山川菊榮



○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○眞に眞面目に所謂男女同權の問題を、研究し、批評し、紹介し、且つ主張して、婦人解放運動の先鞭をつけられたのは、恐らく堺利彦氏等、社會主義の先輩諸氏であつたと思はれます。

明治卅七八年の頃には、今の西川文子氏、堺爲子氏らが婦人團の中心で、毎日一回婦人のための講演會が開かれ、普通選擧、治警第五條徹廢の請願が婦人によつて行はれる等、多少婦人の運動が活氣を呈してゐた樣子であります。此頃堺氏はカーペンター、ベーベルの婦人論を紹介される、『革命婦人』といふ宣傳用のパンフレットは出る、『直言』で婦人號が發行されるといふ有樣でした。ところが明治四十年、○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○

私が大杉氏の平民講演に出席はじめたのは、大正四年の十二月頃でしたらうか—尤も社會主義者らしい心理狀態には、久しい以前からおかれてゐたのでしたが—その頃は女の同志とては皆無といつてよく、僅かに宮島麗子さんが近代思想社の人として、折々同誌上に健筆を振はれて居られたのが特に人目をひいた位のものでした。麗子さんが、大杉さんや御良人の資夫氏らと一緒に、臨月のお腹をかゝへて、誰がとめても聞かずに、○○多分その頃のことかと思ひます。

けれども、その頃は、全體として婦人は殆ど問題になりませんでした。「ナアニ女はどうせ駄目サ、嫁にいけばそれきりだから」といふ言葉を私はよく聞きました。實際この運動に參加した婦人は、同志以外の者と結婚すれば運動の方はそれきりフッツリと忘れてしまふ、同志と結婚すれば世間並の賢母良妻になつてしまふので、どの道アテにはならず、學生は學校を卒業するまで、女は嫁にいくまで、といふのが通り相場だつたさうです。さういふ面白からぬ印象を男子の中に殘したのは、何といつても○○○以前の婦人同志の自覺が、まだ不徹底であつた結果からと思はれます。

□

大戰社會的不安の増大、露獨の革命、是等が加速度の勢で、社會主義の勢力を無産階級の間に植えて行つた事實は、何人も否むことが出來ません。そして吾黨は、始めてその眞の苗床である勞働階級に、牢固として拔くべからざる根柢を張るに至つたのであります。

社會百般の事情は、社會主義運動に投ずる男子の數を、どし〳〵増加させました。運動が盛になるにつれて、緣につながる妻子や姉妹も、何となくじつとしては居られなくなりました。其等の婦人は、實際以心傳心的に社會主義的信念を抱いては居ります。父や愛人が刑事に尾行せられ、獄に投ぜられるのと見る時、○○人達は、もう○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇そこで自分らも、自分らの生活を支配する現代の社會を解剖し批判する力を養ひたいといふ研究心と、父や愛人を理解し同情すると同時に、自分ら自身の解放のために、新社會建設のために、一臂の力を注ぎたいといふ積極的〇〇と、この二つのものが結合し、支持し合つて、こゝに日本最初の社會主義婦人團體赤瀾會が生れたのであります。

最初、社會主義者の團體である巣鴨の北郊自主會で時々同志の家族たる婦人の座談的集會があり、それを何とか色彩の鮮明な、確りしたものにしたいといふ相談が、橋浦はる子、堺眞柄、久津見房子の諸氏の間に協議せられ三月半に至つてその議が熟して、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇それは實行されて居るのであります。

赤瀾會といふ名稱は、四月廿日頃、會の産婆役であつた右諸氏及び曉民會の秋月靜枝氏の間に決定を見、同月廿四日の例會で、左記の綱領と、簡單な規約とが來會者の合議によつて決定せられ、會は上記四氏を世話人とし、會員約四十名を得て、こゝに正式に成立したのであります。かう書いてしまふと誠に簡單ですが、かうなるまでに右諸氏の努力や苦心は非常なもので、廿四日の例會前後は、一つはメーデーの準備もあり、旁々諸氏は毎夜十二時一時まで外出がちであつたと聞きました。

〇　〇

〇〇〇

□

警察は最初からこの〇〇婦人團を恐れ且つ憎んで居りました。メーデー――日本に於て婦人の參加した最初のレコードを作つた――の前日には、赤瀾會内の活動分子に對しては、悉く檢束の命が下つたに拘らず、彼等は巧みに嚴重な警戒網を突破して當日まで身を潜め、赤色の紙に印刷した「婦人に激す」なるビラは、市の内外に普く撒布せられました。五月一日メーデーの大示威行列が日比谷邊にさしかゝるや、會旗を擁した眞柄氏を中心に、各自に小旗を打ふつた會員十數名が、突如行列の中央に參加した時には、同志の意氣が頓に加つたと聞きました。警察側は、特に赤瀾會員の奪取に意を注いだるに拘らず、同志の堅固なる結束と巧みなる戰術とは、遂に勝ち誇れる婦人團を上野まで無難に到着させ、當日の示威運動は、大々的成功を收め得たのであります。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇そして半數以

上の婦人は檢束せられ、秋月、中名生の二氏は、獄につながれた事實、共等は既に新聞に委しいことですから玆に記することは省きます。〇〇吾々は深く記憶すれば足ると思ふのです。

〇〇。赤瀾會はまだ生れたての赤兒であります。それは或は嚴冬にも似た周圍の形勢のため、或は自然の生長を阻まれ、或は不慮の夭死を遂げまいものでもありません。けれども、私は信じます、〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

たゞ將來赤瀾會の運動は、勞働婦人の間に固く根を張ることが必要です。〇〇〇〇前の社會主義婦人運動は、早く云へば知識階級婦人の遊戲といつた觀があり、單なる女書生の氣焔に留まつて、勞働婦人の中に深く喰ひ入つた、實質ある運動となることが出來ず、又さうしようと多く試みることもなかつた樣であります。が、今日は當時とはスツカリ形勢が違つてゐるのですから、いかにもして、吾々は吾々の運動を勞働階級の間に進めて行かなければなりません、でなければ赤瀾會の運動も、西川文子氏等の昔時の運動の如く、意義も力もない根無し草に終るほかないのです。赤瀾會に對する私の希望や期待は、曾て同會のために草した次の一文によつて知つて頂きたいと思ひます。

「世界は今や一大變動の時期に迫られて居ります。そして孰れの國を見ても、無產階級の男女は一致協携して、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇互に激勵し、鞭韃し合つて其々働いて居るのであります。

然るに日本の狀態はどうでありませうか。日本に於ても、腐敗と墮落の極致にあるブルジョアジーの支配が、もはや行き詰つて居ること、大〇〇〇

○○○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○ ○○○○○といふ點について、既に男子側には明白なる理解あり、その理解に基く運動も次第に力づよいものとなつて來て居ることは、茲に殊更申上げるまでもないのであります。

所が遺憾ながら、婦人の方は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○して居らず、隨つて有力な運動が起つて居りません。我田引水かは知らず、私はこれを一概に日本婦人の無氣力に歸したいとは思ひません。たとへ當面の原因は無氣力そのものであるにしろ、その無氣力を胚胎し、維持させて居る一層深い、根本の原因が他にあると思はれます。その原因とは、歐米諸國に於ては、疾の昔に資本主義によつて破壞された封建的家族制度であります。勿論日本に於ても、今日の家庭は封建時代のそれと比較にならず、婦人が年々部分的ながら多少の自由を得て來て居ることは事實でありますが、然し大體からいつて、同じ男性本位の社會とは云へ、日本の婦人と歐米の婦人との間には、現在のまゝでもかなり自由程度に相異のあることは否まれません。そして私はその相異と、國土や人種の相異に基く永久的、本質的なものとは考へず、一に彼我の社會發達如何の問題であると考へます。換言すれば、彼にあつては資本主義の發達が著しく、我にあつてはそれがなほ未成熟であるために、婦人の活動の程度にも相異があり、隨つてその享有なる自由や知識の程度にも相異があるのだと考へます。

が、から申せばとて、私は婦人の無氣力で不活潑を餘儀ない運命と觀じて諦らめの一生をお送りなさいと申すものではありません。たゞ日本の現狀として、歐米に比し、婦人の運動が一層困難なる情の下にあること、隨つてこの困難な事情を突破して、多少なりとも婦人の間に○○○○○○○○○○○○歐米の場合に幾倍する、勞多くして功少なき、地味な、苦しい、持久的な戰ひをお互に覺悟しなければなりますまいと申上げたいのです。

女も男も獨身である限り、苦しい境遇の相異は起りません、けれども一旦結婚するとなると、家族の煩累が出來て事情は一變します。殊に女子の方は、家庭にとつて必要な度が多いだけ、行動の自由を束縛されることは大きいのです。まして妻たり母たる以外に、賃銀勞働を兼ねてゐる婦人の大多數は、時間から云つても、精力からいつても、到底社會運動に參加することを許されないのです。各國を通じて婦人の勞働運動が、男子のそれに比して遙かに遜色のあるのは、實にこの故であります。

然らば女子にとつては○○○○は不可能かといふに、私は決して左樣は思ひません。否な、現在の社會が、それほど女子の活動を拘束すればするほど、そうした社會から解放されることは、女子にとつての緊要事であり、且つ大體から見て、女子の○○○○は、男子のそれより困難で

あり、恐らくより○○○を必要とするにせよ、個人々々についていへば、ある程度まで、自己の努力によつて、さうした女性に通有の障害を突破することは不可能でないと考へるのであります。換言すれば、今日の社會に於ては、婦人が全體として自覺し、活動することは不可能でありますが、特殊の事情によつて覺醒を促された少數者が、多數の同性に先んじて解放への道のさきがけをすることは、確かに可能であり、多大の意義を有するのであります。

いかなる思想、いかなる信念も一時に多數者の歡迎を受けることは出來ません。何と云つても最初は極く少數者にしか入れられないのが當然でありますが、たゞその少數をして、永久に少數に留まらせるか、又は最初の少數をして、後に多數を制せしめるかは、時勢の力を背景とする少數者の努力にあることゝ思はれます。

私共社會主義者は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○婦人の間にそれに對する準備の缺けて居ることを心もとなく、心細く思はずにはゐられません。○○

赤瀾會は、かような心持を抱いて、○○たゞ茲に、御同様、警戒せねばならぬ二つのことがあると思はれますその一つは日本では女の活動が餘りに稀な現象であるせいか、とり立てゝ云ふに足らぬことをさへ大げさに吹聽して、多くは思慮の固まらぬ若い娘である當事者と、人間の弱點につけ込んで、惡くおだてたり、持ち上げたりして、折角のよい芽生へを二葉のうちに枯らすことが多いと思はれる點であります。私共は、この點に出來るだけ注意して、單に社會主義運動の色どりや、景氣づけの意味でなく、○○○○○○○○○○眞に實質ある、有用な要素となることを期しなければなりません。

次に警戒の必要あるのは、無理解な人に、殊に親しい人の侮蔑嘲笑であります。若い婦人としては、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○平素尊敬し信賴してゐる父兄や先輩や友人達の、皮肉な冷笑や、婉曲な嘲罵のために鋭氣を挫かれることが、まゝあり得るものです。けれども私共は、最初、私共の無智無力に對し、いかなる批評が加へられようとも、それに屈してはなりません。要するに我赤瀾會が、お衣裳くらべや、他人の棚おろしにお座を持たせるブルジョアの婦人會と同じ性質のものであるか、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○會員自身の今後の態度において外にはな

いのであります。謂はゞ、私共は、この會の成長を通じて、○○○ブルジョア流の浮つ調子な遊戯氣分は禁物であります。○○○○○とても人間である以上、笑つて惡い譯もなければ、冗談をいつたとて爪彈される筈もありません。たゞ私が申すのは、ブルジョアのジョアナリズムの筆先のおもちやにされることに甘んじ、その輕薄なおだてに乘るやうなことがなく、又おなじ仲間内でも、女なるが故に珍重がられ、問題にされるやうなことが、萬一あらうとも、それにこだわることなく、どこまでも地味に、堅實に會を育て、行かねばならぬ、といふ點なのであります。

○○○

赤瀾會について

伊藤野枝

赤瀾會は現在五十人たらずの婦人達を擁する小さなグルウプです。此のグルウプが將來どんな發展をするかは、今から豫測することは出來ませんが、恐らく當分の間は現在のまゝで、數の上に於いての發展はしないであらうと考へます。何故なら、此の小さなグルウプは、現在の日本に於ける○○それは、到底現代の如何に急進的な日本婦人と雖も、そのコンヴエンショナ

ルな感情的なデリカシイを大事にする人々には堪え得られぬ、○○

本年のメエデーは、赤瀾會によつて最初の婦人參加者を得ました。しかし此の少數の婦人達は、日本の婦人團體としては前例のない壓迫を被りました。もとよりそれはすべて覺悟の前であつたとはいふものゝ、○○○そして警察の檻房に打ち込まれ、二人の同志の婦人は東京監獄に拘禁されまでしました。それをまぬかれた人々も、最も手ひどい扱ひを受けて『放還』されたのです。

當日上野の精養軒下で此の婦人達が侮辱される光景を見てゐた、アドヴアタイザアの婦人記者は體を震はして日本の警官の『野蠻』を憤慨したさうです。そして、自分の國やヨオロツパの文明國では、決してそんな『野蠻』な行爲は許されないと云つたさうです。しかしそれは眞實の事ではありません。○○○

赤瀾會員の大部分は、現在の日本の社會運動の實際運動にたづさはつてゐる人々の家族であり、緣故の深い人々です。從つて何よりも、みんなは、其の思想の上でよりも、先づ或る深い家庭的友情で結びつけられて居ります。又その周圍の雰圍氣が永い間に大きな訓練をみんなに與へて居ります。○○○

或る人は、赤瀾會には思想的背景がないと云ふ非難をしたさうです。それは或は事實かも知れません。一寸指を屈して見ても、机の前に座つて本をよむ事の好きな人、或はさういふ事を樂しむといふ人は非常に少いやうです。それが非難さるべき事

のだとすれば、赤瀾會員に多分よろこんで此の言葉に服するでせう。

しかし、本の上で覺えた理屈をこねる事を『思想的背景』があると云ふのなら、赤瀾會員は、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○彼女達は、いろ〳〵な立派な理屈を知つてゐ、云つてゐ、書いてゐながら、それを自分のものにして生活することを知らない卑怯者の尊大な誇りは持ちません。けれども實際に、○○大抵の『思想的背景』を誇るような卑怯ななまけ者達のように不幸のどん底に沈んでゐる人々よりも少しでも幸福である自分の現在を楽しみとして、○○○そして此の人々は、多くの知名の學者や或は研究家達の口先ばかりの、或は筆先きばかりの『思想』を一つ〳〵○○

赤瀾會員の半數は、○○○○○○○○○○○○○○○人後には落ちまいと云ふ人々です。此の人々にはみんな、愛しあつてゐる親兄弟があて良人や子供があり、愛人があります。○○○

みんなは、その良人と、其の兄弟と、其の友人達と、緊張した正しい生活の中に氣持のよい日を送つてゐるのです。

私は少しの躊躇もなく斷言することが出來ます。いま私達の知つてゐる限りの日本婦人の中で、○○あれも、これも、と仕事が澤山あります。そしてそれが、○○

終りに赤瀾會には、面倒な綱領も規則もありません。要は、○○○

赤瀾會は團體の人數は少いのです。○○

——一九二一・五・一二——

噂の噂　△論壇の一俊才たる阿部次郎君は東北大學文科創立の中心になるとの話△三木清君と京都大學の秀才であつた山内得立君は東京商科大學教授に內定した△それから社會學の權威高田保馬君も東京商科大學教授として近く赴任するはづ△東京帝大の河村又介君はこの十一月渡歐する△また東大文科の少壯教授木村泰賢君は英京にて佛教に關する長論を起稿しつつある△新人會の秀才新明正道君は關西學院の教授となる。

赤瀾會の人々

□勞働祭と云ヤア全世界の勞働者の熱狂する日だ、だが、幸に日本の勞働者は静粛なもんだ。その代り有難い事に□□と□□の熱狂し、逆上する面白い日だ。殊に今年の勞働祭は思ひも掛けぬ黒地赤ヌキの會旗を押し立てた娘子軍の出現で、一層の熱狂と逆上振りを發揮させたようだ。女なんて奴はとても駄目さ、殊に日本の女なんざ天でなつちよらん、なぞと鼻の先であしらつてゐる間に、存外先樣の方が、□□□□□かも知れないナ。

□世間で赤瀾會と云つたつテ、勞働祭の當日まで條り知つた人は無かつたろう。いや知らないのが道理だ、實はその一寸前に生れたばかりなのだ。會の性質は、マア社會主義同盟の婦人部と云つた形だと云ふことだ。が、其意氣だけは本家の社會主義同盟を凌ぐとか。會員の顔振れは山川菊榮、伊藤野枝の兩女史を初め久津見房子、堺眞柄、橋浦春子、秋月靜江、望月ふく、具原たい、曾根貞代の諸姉外既に六十名を算し、内部で山川菊榮、伊藤野枝の兩氏が熱心に指導してゐる相だ。殊に其宣言綱領は菊榮女史の筆になつたものだと云ふだけに、中々、堂々たるもんである。

□而かし、實際の運動は何んと云つても、久津見房子さんが采配を揮つて居るらしい。三十五だと云ふが、輪廓のハッキリした顔の持主だけに、年よりは餘程若く見へる。ハキハキした落付きのある、女には珍らしい强い感じのする人だ。或人がどこか、神近市子さんと似た感じの人だと云つたが或はそうかも知れぬ。獨り身で二人の子供を育てる傍らのアノ奮闘振りには可成り□してる人が多いと云ふことだ。生れは山川均氏と同じ岡山の産だ。其過去には淡いロマンスが絡つてゐるとも傳へられる、が眞疑の程は勿論知らぬ。兎も角、强く、そして美しく芽生ようとする、婦人團體の中心人物としては適任者だと云ふ評判。

□房子さんを除いて實際の仕事をしてゐるのは堺眞柄、橋浦春子の兩孃と秋月靜江さんださうだ、殊に眞柄孃は可成りに勇敢だと云ふことだ。勞働祭の當日新聞では眞柄さんが大分やられたように出て居たが、事實はアペコベに强かるべき□□の方が、眞柄孃の怪腕（？）に參つたと云ふことだ。あれで演壇に上つても中々立派な態度だし、流石に例大の秘藏娘だと云ふ評判である。堺氏以て意を安んずべしだ。

□勞働祭の當日は出なかつた樣だが、會員の中には全なにがしと云ふ若い朝鮮婦人があるそうだ。相當に頭もあり、落着きもある中々しつかりした婦人だと云ふ事だ。その他にも可成しかりした人物や變つた人物もゐるとのことだ。菊榮女史なども大いに實際的に活動したがつてゐるそうだが、何しろアノ健康なのでひどくモドカシがつてゐるとか。兎に角も、アノ陣容とアノ意氣で進むだら遠からず、相當な勢力になるだろうとの評判だ。それに赤瀾會と云ふ名が面白い云ふ人もある。

□實際會員諸君の意氣込みは、随分凄まじく、メーデーの検束など反つて幸先よしとして、今後、續々各地の大講演會を試みる計劃だそうな。が、一方では赤瀾會的の方面にも可成りな熱心家が多く、毎月二回社會主義同盟の本部で開催される研究會などでも、中々猛烈に闘ふと云ふことである。

□誰れかが、新婦人協會と比較して面白い對照だと云つたが、なる程双方の顔振れや宣言綱領とを較べて見ると、一寸アイロニカルな感じがしないでもない。何んだかだと云つてゐる中に陰欝の梅雨から、一足飛びに灼熱の炎天が眼の前に迫つて來た。赤瀾會の活動もこれからどうなることやら。

×　×　×　×　×　×　×　×

女の演説

堺利彦

▲諸君？私は……：（フヽヽ。ハヽヽヽガヤ〳〵。）

▲諸君ではいけないのですか。男の演説では、皆な諸君と云ふぢやありませんか。それが即ち諸君の偏見です。私は先づそういふ男子の偏見と戦はねばなりません。（ヒヤ〳〵。ノー〳〵。）

▲そこで諸君。我々婦人は既に目ざめて居る。労働者が目ざめたと同じように、婦人も目ざめて居る（聞えん、聞えん。モット大きな声を出せ。）

▲我々は此の目ざめた心を以て、二重三重に我々を圧迫して居る所の男の力と金の力とを同時に刎ね飛ばしてしまふ覚悟である。（聞えん、聞えん。何を云つてるチットモ分らん。そんな蚊の鳴く様な声で何が刎ね飛ばされるもんか。）

▲…………（オイ睨んだつて怖かないよ。早く跡をやれよ。野中一本杉、立往生の羽目と御座アい？。泣きだすなよ。黙れ、黙れ、謹聴々々。）

▲諸君、私は声が出ないのです。私は悔しいんです。私は本當に泣きたいんです。（泣け、泣け。涙が女の最上の武器だ。馬鹿ア云へ、そんな金切声で胡魔化されるもんかい。シッカリしろ、俺達モウ泣かれる事にや飽いてるぞ。やれやれ、大いにやれ。）

▲然し諸君、諸君は私達を冷かしたり罵つたりして、それで愉快ですか。（愉快ぢやない、気の毒だよ君が生意気なんだよ。何んしろ聞えないよ。）

▲そんなに諸君がおつしやるならモウやめます。女の叫びを聞かないと云ふなら、モウやめます。（聞かないぢやない、聞こえないんだよ。そんな叫びがあるかい、水の中で屁をひる様な叫びがあるかいオイ、やめるな、やめるな。構ふもんか、大いにやれ。）

▲諸君、私は諸君のおつしやる通り声が出ない。若し此の声が叫びでないと云ふなら、私は声を以て諸君と戦ふ事をやめる。其の代り手を以て、足を以て、○を以て、魂を以て諸君と戦ふ。（ヒヤ〳〵。エライぞ！。オーおつかない。やつぱり聞えん。サッパリ聞えん。折角ですが聞えません。）

▲これが諸君に聞えないのは實に残念です。私は悔しい。私は此の喉を引裂いても大きな声で叫んで見たい。けれども駄目です。これが現在の女性の弱點です。諸君に笑はれ、冷かされ、罵られるのが我々婦人の運命です。（弱い音を吐くな。俺がついてる。何にしろ矢張り聞こ、え、ま、せん。ハヽ。）

▲けれども諸君、我々婦人を斯ういふ弱い者にしてしまつたのは誰です。こんな小い声しか出ない様に、我々婦人を退化させたのは一體誰です。（そこだ、そこだ、シッカリやれ。）

▲それは諸君の先祖たる總ての男性ではありませんか。諸君の先祖たる總ての男性が、数千年來、我々婦人を圧迫した結果が、即ち今日、私の此の弱い體と、小い声となつてゐるのではありませんか。（ヒヤ〳〵。全くだ。満堂の男性顔色なし！。ハヽ。フヽ。）

▲それを諸君は只だ笑つたり冷かしたりして濟むのですか。諸君は寧ろ我々現代の婦人の前に、先祖に代つて其の大罪を謝すべきではありませんか。（ヒヤ〳〵。ヒヤ〳〵。演壇のまはりだけ柏手大喝采。其他の野次、沈黙。）

▲お見受けする所、諸君の多數は金持では無さそうです。若し諸君が我々婦人の弱さを嘲笑して喜ぶなら、それは即ち、富豪資本家が諸君の貧弱さを嘲笑するのと全く同一の心理である。（ヒヤ〳〵。ヒヤ〳〵。柏手大いに起る。）

▲諸君が五十圓か百圓か一百圓かの月給を取つたり、二圓か三圓か四圓かの日給を取つたりして、營養不良な顔色をしておる其ザマを富豪資本家に嘲笑された時、諸君はそれでも猶ほ我々婦人を嘲笑する勇氣がありますか。（ヒヤ〳〵。ヒヤ〳〵。降参々々。柏手大喝采。）

□暗夜行路　志賀直哉

□三つの死　佐藤春夫

□仇討三態　菊池寛



暗夜行路

志賀直哉

廿一

信行へ出した手紙の返事を受取らぬ内に謙作は到頭尾の道を引き上げて了つた。それは輕い中耳炎にかゝつたからで、土地には專門醫がなく、かゝつた醫者から若し最近歸る氣でもあるなら、なるべく早く歸つた方がいゝだらうといはれたからである。實際左ういふ事がなくても恐らく謙作は間もなく此地を引き上げたに違ひない。只彼には歸つてからの生活が想はれた。又前と同じやうな生活を繰返えす事かと考へると、それだけでも進んで歸る氣にはなれなかつた。仕かけた仕事も餘りに半端だつた。彼は落ちついて居られさうになく、又、引き上げて、後の生活が如何にも不滿に想ひ浮ぶのであつた。出發前の二三ケ月間のあの眼まぐろしい、其癖、何となくうぢ〳〵した不快な生活、——それも前は未だあれでいゝとして、あの頃とは又自分も變つてゐた。今のやうな自分にして猶且つあゝいふ生活を繰返えすとすれば、それは益々落ちつけない不安な氣持に追ひやられる事が如何にも見えてゐ

た。それなら、あんな生活を再び繰返えさないやうにすればいゝとも思ふ。歸るとすれば勿論、其決心を堅くして歸るのである。所が、事實、其決心はどれだけ堅いか？、どれだけ續くか？、それが彼では我ながら心元なかつた。左ういふ事では經驗的に自分で自分が信じられなかつた。

或る夜、それは宵に曇つてゐて、夜中から急に晴れ渡つた夜があつた。蒸暑かつた夜が明け方になつて急に冷え〴〵して來た。薄い掻卷一つで寢てゐた彼は寒さの爲めに眼を覺ました。然し睡むく、起きるのが面倒だつたので、彼は其儘又眠つたが、矢張りそれで風邪をひいて了つた。翌日は終日水洟をかんで暮らした。そしてそれを強くかんだのが少し耳の方へ入ると、其晩から耳は痛みだした。鈍い、重みのある痛みで、眠れぬ程ではなかつたが、それでも彼は時々その爲めに眼を覺ました。夜の明けるのが待たれた。

翌朝、醫者へ行くと、中耳炎のなりかけだと云はれた。醫者は早く專門醫に見て貰らう方がいゝだらうといつて、少量のオリーヴ油と罨法の藥とを呉れた。歸りたくもあり、歸りたくもなし、左ういふ曖昧な氣持でゐた彼はこんな事でども歸ると決定出來た事を却つて喜んだ。そして歸ると決まると、急に所謂歸心矢の如くといふ風な氣持になつて了つた。

支度は早かつた。隣りの老夫婦も手傳つて一時間足らずで總ては片付いて了つた。婆さんが荷造りを手傳ひ、爺さんが、電燈會社、瓦斯會社などの拂ひに廻はつた。

尾の道は市でありながら、急行が止まらなかつた。彼は普通の列車で、姫路まで行き、其所で急行を待つ事にした。午少し前の列車に乘る事にした。停車場へは老夫婦、それから松川が、可成りに重い旅鞄を下げて送つて來た。大袈裟に三角巾で頬被りをした謙作が窓から顔を出してゐると、爺さん、婆さんは重い口で切りに別れを惜んだ。彼

もこの人達と別れる事は惜しまれた。然し此尾の道を見捨てゝ行く事は何となく嬉しかつた。それはいゝ土地だつたが、來てからの總てが苦みだつた彼には其苦しい思ひ出は、どうしても此土地と一緒にならずには居なかつた。彼は今は一刻も早く此地を去りたかつた。

客車の中は割りに空いてゐた。それは季としては少し蒸暑い日だつたが、外を吹く強い風が氣持よく窓から吹込んで來た。彼は前夜の寢不足から、窓硝子に頭をつけると間もなく、うつら〳〵し始めた。やがて騷がしい物音に物憂く眼を開くと、いつか岡山の停車場へ來て居た。彼の前に坐つてゐた、三人連れの素人か玄人か見當のつかない女達が降りて行くと、其あとに二人の子供を連れた若い軍人夫婦が乘つて來た。軍人は背の高い若い砲兵の中尉だつた。荷の始末をすると、膝掛けを二つに折つて敷き、妻と、六つ位の男の兒、それから其下の髮の房々した女の兒とを其所へ坐らせた。そして自身は其所から少し離れて腰かけの端しへ行つて腰を下ろした。

謙作は疲れてゐた。彼は又いつか眠つてゐた。

姫路へ着く一時間程前から漸く彼は本統に眼を覺ました。其汽車は京都止まりの列車だつたから、彼は京都で急行を待ち合はせてもよかつたのだ。然し、姫路の白鷺城を見る事も興味あつたし、それに出掛けにお榮から明珍の火箸を買つて來て呉れと頼まれた、それを想ひ出してゐたからであつた。

前の席にゐた男の兒は二つ折の毛布の間に挾まつて、寢ころんだ。すると、女の兒も左うして寢たがつた。若い、然し何所か落ちついた感じのある、兒達の母親は窓硝子に當てゝゐた自身の空氣枕を娘の爲めに置いてやつた。男の兒は父親の方を、女の兒は母親の方を枕にして寢た。女の兒は喜んだ。母親自身は空氣枕の代りに小さいタウルを出し、幾重にもたゝんで又窓硝子へ額をつけた。

「お母様、もつと低く」と娘が下からいつた。母親は物臭さうに手を延ばし、枕の空氣を少し出してやつた。

「もつと低く」

母親は又少し出した。

「もつと」

「左う低くしたら枕にならんがな」

女の兒は默つた。そして眼をつぶつて、眠る眞似をした。

軍人は想ひ出したやうにポッケットから小さい手鏡を取り出した。それから又小さいチューブを出し、指先きに一寸油をつけて、さも自から樂しむやうに手鏡を見つめながら、短く刈つて、端（はし）だけ細く跳ね上げた赤い其口髭をひねり始めた。

細君は最初、タウルの枕に顋顎をつけた儘、ぼんやり見るともなく見てゐたが、軍人が餘りに何時までも髭を愛翫してゐるのに、細君の無表情だつた顔には自然に微笑が登つて來た。細君は肩を少し揺すりながら聲なく笑つた。が、軍人は無頓着に尚油をつけ、髭の先を丹念に縒り上げて居た。

眠むれない子供達は眼をつぶつた儘、毛布の中で蹴り合ひを始めた。もく／＼と其所が持上がつた。女の兒の方が一人忍び笑ひをした。

軍人は鏡から一寸眼を移し、二人を叱つた。細君は默つて微笑してゐた。

然し男の兒は尚亂暴に女の兒の足を蹴つた。毛布がずり落ちて、むき出しの小さい脛が何本も現はれた。二人はたうとう起きて了つた。

二人はそれから二つの窓を開け、其一つ〳〵を占領して外を眺め始めた。外には烈しい風が吹いて居た。男の兒は殊更窓の外に首を突き出し、大聲に唱歌を唄つた。女の兒は首を出さずにそれに和した。風が強く、聲はさらはれた。男の兒は風に逆からつて尚一生懸命に唄つた。それでもよく聽こえないと、わざ〳〵野蠻な銅鑼聲を張上げたりした。風に打克たう〳〵と段々熱中して行く、其所に子供ながらに男性を見る氣が謙作にはした。彼はそれが何となく愉快だつた。

「八釜しいな！」と不意に軍人が怒鳴つた。女の兒は吃驚して、直ぐやめたが、男の兒は平氣で、やめなかつた。細君は只笑つて居た。

五時頃姫路へ着いた。急行までは尚四時間程あつた。彼は停車場前の宿屋へ入り、耳の罨法を更え、夕食を濟ますと、俥で城を見に行つた。老松の上に聳え立つた白壁の城は靜かな夕靄の中に一層遠く、一層大きく眺められた。車夫は土地自慢に、色々說明して、もう少し側(そば)まで行つて見る事を勸めたが、彼は廣場の入口から引き返えさした。それから、彼はお菊神社といふのに連れて行かれた。もう夜だつた。彼は歩いて暗い境內を只一と廻はりして其所を出た。お菊蟲といふ、お菊の怨靈の蟲になつたものが每年秋の末になると境內の木の枝に下がるといふやうな話を車夫がした。

明珍の火箸は宿で賣ると聞いて、彼は其儘俥を宿の方へ引きかへさした。彼は宿で何本かの火箸と、お菊蟲とを買つた。その蟲に就いては口紅をつけたお菊が後手に縛ばられて、釣下げられた所だと番頭が說明した。

急行は九時だつた。寢臺をとる事が出來て彼は直ぐ横になつた。そして起きたのはもう靜岡近くで、日が昇つてゐた。靜岡で東京の新聞を買つたが、出てから全で見ない東京新聞が變に懷かしかつた。富士を見、襞積の多い函嶺の山々を見ても彼は何んとなく嬉しかつた。沼津から乗り込んだ、一ト家族の東京辯も氣持よかつた。

彼は早く東京へ入りたい氣持で一ぱいになつた。近かづく程に待ち遠しくなつた。國府津、それから、大磯、藤澤、大船、から、段々近かづくと、彼は寧ろ短氣な氣持になつて行つた。時間つぶしに困つた彼は、列線の柱の數を繰り返へしになつてゐる男の一本々々を根氣よく數へる無意味な事で、漸く氣紛らしをした。

お榮には前日姫路から電報を打つて置いた。多分新橋へ迎ひに出てゐるだらうと彼は思つた。彼にはお榮と顔を合はす瞬間の具合惡さが一寸想ひ浮んだ。が、案外何んでもないかも知れないと思つた。何れにしろ、もう二三十分で會ふる事は嬉しかつた。

間もなく、汽車は速力をゆるめ始めた。プラツトフオームへかゝる前から、彼は首を出し、それらしい姿を探した。そして、彼は直ぐそれを見出した。お榮も此方を見てゐるので、手を振つたが、見てゐると思つたお榮は間拔けな顔をして、直ぐ見當違ひの窓をしきりに眼で追つてゐた。彼は幾つかの小さい荷物を赤帽へ渡すと、急いでその方へ歩いて行つた。

五六歩の近さで漸く氣がつくと、お榮は今までの不安さうな樣子から急に變つて馳け寄つて來た。「よかつた。よかつた。」とこんな事を云つた。そして、

「まあ、如何して?」とお榮は彼の罨法の頰被りに驚いて訊いた。

「一寸耳が惡かつたが、もう今は痛くないんです」謙作は豫期通り嬉しかつた。曾つて具合惡いやうな事もなかつた。いつものお榮だつた。そしてさういふ事は少しも念頭にない風に見えた。殊更左うしてゐるとも見へなかつた。

一緒に人込みを歩きながらお榮は尚、二タ言三言、耳の事を訊いた。「でも、早く歸つて來て下すてつよかつたわ」潰めでもするやうにいつた。が、急に聲を落として、「謙さん、瘠せましたよ。もう、これからそんな所へ一人で行くのはお

二人はそれから二つの窓を開け、其一つゞゝを占領して外を眺め始めた。外には烈しい風が吹いて居た。男の兒は殊更窓の外に首を突き出し、大聲に唱歌を唄つた。女の兒は首を出さずにそれに和した。風が強く、聲はさらはれた。男の兒は風に逆からつて尚一生懸命に唄つた。それでもよく聽こえないと、わざ〳〵野蠻な銅羅聲を張上げたりした。風に打克たう〳〵と段々熱中して行く、其所に子供ながらに男性を見る氣が謙作にはした。彼はそれが何となく愉快だつた。

「八釜しいな！」と不意に軍人が怒鳴つた。女の兒は吃驚して、直ぐやめたが、男の兒は平氣で、やめなかつた。細君は只笑つて居た。

五時頃姫路へ着いた。急行までは尚四時間程あつた。彼は停車場前の宿屋へ入り、耳の罨法を更え、夕食を濟ますと、俥で城を見に行つた。老松の上に聳え立つた白壁の城は靜かな夕靄の中に一層遠く、一層大きく眺められた。車夫は土地自慢に、色々說明して、もう少し側まで行つて見る事を勸めたが、彼は廣場の入口から引き返えさした。それから、彼はお菊神社といふのに連れて行かれた。もう夜だつた。彼は步いて暗い境內を只一と廻はりして其所を出た。お菊蟲といふ、お菊の怨靈の蟲になつたものが每年秋の末になると境內の木の枝に下がるといふやうな話を車夫がした。

明珍の火箸は宿で賣ると聞いて、彼は其儘俥を宿の方へ引きかへさした。彼は宿で何本かの火箸と、お菊蟲とを買つた。その蟲に就いては口紅をつけたお菊が後手に縛ばられて、釣下げられた所だと番頭が說明した。

急行は九時だつた。寢臺をとる事が出來て彼は直ぐ橫になつた。そして起きたのはもう靜岡近くで、日が昇つてゐた。靜岡で東京の新聞を買つたが、出てから全で見ない東京新聞が變に懷かしかつた。富士を見、襞積の多い函嶺の山々を見ても彼は何んとなく嬉しかつた。沼津から乘り込んだ、一ト家族の東京辯も氣持よかつた。

彼は早く東京へ入りたい氣持で一つぱいになつた。近かづく程に待ち遠しくなつた。國府津、それから、大磯、藤澤、大船、から、段々近かづくと、彼は寧ろ短氣な氣持になつて行つた。時間つぶしに困つた彼は、羽織の紐の編り返えしになつてゐる房の一本々々を根氣よく數える無意味な事で、漸く氣紛らしをした。

お榮には前日姬路から電報を打つて置いた。多分新橋へ迎ひに出てゐるだらうと彼は思つた。彼にはお榮と顏を合はす瞬間の具合惡さが一寸想ひ浮んだ。が、案外何んでもないかも知れないと思つた。何れにしろ、もう二三十分で會へる事は嬉しかつた。

間もなく、汽車は速力をゆるめ始めた。プラットフォームへかゝる前から、彼は首を出し、それらしい姿を探した。そして、彼は直ぐそれを見出した。お榮も此方を見てゐるので、手を振つたが、見てゐると思つたお榮は間拔けな顏をして、直ぐ見當違ひの窓をしきりに眼で追つてゐた。彼は幾つかの小さい荷物を赤帽へ渡すと、急いでその方へ歩いて行つた。

五六歩の近さで漸く氣がつくと、お榮は今までの不安さうな樣子から急に變つて馳け寄つて來た。「よかつた。よかつた。」とこんな事を云つた。そして、

「まあ、如何して？」とお榮は彼の罨法の頰被りに驚いて訊いた。

「一寸耳が惡かつたが、もう今は痛くないんです」謙作は豫期通り嬉しかつた。會つて具合惡いやうな事もなかつた。いつものお榮だつた。そしてさういふ事は少しも念頭にない風に見えた。殊更左うしてゐるとも見へなかつた。

一緒に人込みを歩きながらお榮は何、二夕言三言、耳の事を訊いた。「でも、早く歸つて來て下すつてよかつたわ」一讃めでもするやうにいつた。が、急に聲を落として、「謙さん、瘦せましたよ。もう、これからそんな所へ一人で行くの[illegible]

やめですね。」ともいつた。謙作は只笑つてゐた。

「信さんへは先刻會社の方へ電話をかけさしたの。歸りに寄るといふ御返事でした。」

「左う」

改札口に膝掛けを抱えた、出入りの車夫が待つてゐた。彼はそれに赤帽の荷を渡し、チツキの荷も賴んで、お榮と一緒に電車で歸る事にした。

「お直は未だでせう？」

「えゝ」

「自家にも何か取つてあるけど、何所かへ行きますか？」

「僕は何うでもいゝが」

「尾の道は御馳走がありまして？」

「魚はいゝのがあるんだが、何しろ自分ぢやあ作れませんからネ」

二人は淸賓亭の前を通つて行つた。謙作はお加代でもお鈴でも左ういふ連中に見られたくない氣持から、なるべく俯向き勝ちに步いて行つた。

電車通りに出ると、お榮はもう一度

「どう？、何方がいゝの？」と云つた。

「そんなら、行きませう。久しぶりで、西洋料理が食ひたい」

二人はそれから左う遠くない、或る洋食屋へ行つた。

お榮はしきりに尾の道の生活に就いて訊きたがつた。謙作は共所から信行へ電話をかけた。
そして、間もなく二人は歸つて來た。
謙作は先づ二階の自分の書齋へ入つて行つた。額も机も本棚も總てが出かける前の通りだつた。寧ろきちんと整づいてゐた。床に椿などの生けてあるのが、自分の部屋らしく却つて見せなかつた。
「矢張り自家が一番いゝでせう？」こんな事を云ひながらお榮も昇つて來た。
「大變立派な家へ來たやうな氣がする」
「尾の道ではきたなくしてた事でせうネ。男鰥に蛆が湧くといふから、蛆が湧かなかつたこと？」
「隣りの婆さんがよく掃除をしてくれるので割に奇麗でした」
「あゝお風呂が丁度いゝの。直ぐお入りなさい」

廿二

謙作は風呂へ入ると、左う遠くない、耳鼻咽喉專門のT病院へ往つた。前に咲子が暫く入つてゐた事のある病院で、時間外でも若しゐれば見て貰らへるだらうと思つたのだ。
彼の耳は一と晩痛んだゞけで、今はもう痛みはなくなつてゐた。只、耳のわきで、指先を擦合はせると、いゝ方ではサリ〳〵とよく聞こえるが惡い方ではそれが少しも聞こえなかつた。そして何となく重たい、鬱陶しい氣持があつた。
醫者は和服のまゝ、反射鏡をくわへて直ぐ診てくれた。
「えゝ……大分充血してます。大した事はありますまい。中に少し水が溜つてるやうですから、切つて一寸出して置きませう」から手輕さうに云つた。

醫者は壁の帽子掛から白い仕事着をはづし、無雜作に和服の上から着た。太つた、若い看護婦が、小さい矛のやうなメスや、細いピンセットなどを、昇汞水を湛へたヴァットから、ガーゼの上へ竝べてゐた。

「電氣はまだ來ないかネ？」

看護婦は壁のスウイッチをひねつたが、未だ來てゐなかつた。

「よし／＼」と醫者は云つた。實際西向きの窓には未だ、陽があつた。看護婦は柄のついた短い針金の先に何本も綿を卷きつけた。

手術は直ぐ濟んだ。鼓膜にメスの觸れた時、ゴツッといやに大きな音がした。同時にチクリとした。そして、最初、其メスが觸れた時に彼はそれを大きなものに感じた。それだけだつた。いやに手輕さうにいひながら實際は痛い事をするのではないかといふ氣もしたが、醫者の言葉通り、それは手輕く濟んだ。

「思つたより澤山出る」醫者は綿を卷いた針金を差し込んで、中の水を何本もそれへ吸ひ取らせた。綿には血がついて來た。醫者は藥をつけ、罨法をすると、翌日午前中、又來るやうに云つた。彼は待合室で藥の出來るのを待つてゐた。

彼は去年の秋青年をおだてゝ咲子へ手紙を寄越させたあの女の事を憶ひ出してゐた。來るまで、彼はそれを全く忘れてゐたが、今の看護婦が其女でないので、初めて憶ひ出した。

「あの女はどうしたかしら？」かう思ひ、彼はそれと會ふ事を何といふ事なし、恐れた。幸に、其女は出て來なかつた。

彼は其女を嫌ひではなかつた。一寸美しい女だつたばかりでなく、何所か賢こさうな所があり、一方食へない感じもあつたが、彼に對しては割りに愼み深く、彼が話しかけるやうな場合にも、よく看護婦などにある型のいやにハキ〳〵切口上で返事をする、左ういふ方ではなかつた。笑ひながら寧ろ好んで曖昧な返事ばかりしてゐた。其頃彼は大學で同じ科にゐた人々の始めた或る同人雜誌に二三度、短かい小說を出した。それを咲子が話したと見え、或時、看護婦は咲子の口を貸して、その雜誌を貸して貰ひたいといつた。左ういつたのは其女が謙作の書いたものを見たいといつてゐる事——自身のついてゐる病人の兄の書いたものを見るといふ興味、——とはわかつてゐた。が、謙作は他から借りて見るのは差支えないが、自身で自身のものをわざ〳〵見せに持つて行く氣はしなかつた。彼は自身の物のある號だけを除き、七八冊の雜誌を置いて來た。其次ぎ行くと、默つて笑つてゐる看護婦の代りに咲子が、不平をいつた。そして間もなく咲子は退院し、それから一年程して、前に書いたやうに或る青年が咲子に手紙を寄越したのである。彼がそれに小言をいつてやると、其看護婦に勸められて出したものだと、其青年は平謝りに謝つて來た。其時、彼は其女が見かけによらず所謂不良性のある女だつたと思つて、一寸いやな氣がした。自分の書いたものなど見せずによかつたとも思つた。

彼は子供等の立騷いでゐる夕方の往來を歸りながら、そんな事を憶ひ出してゐた。あの女は今もあの病院に居るかしら？全體、あの青年は自分のやつた手紙をあの女に見せたらうか？あの女が何も知らなければいゝとして、左うでなければ、兩方で具合惡さうだと思つた。そして左う思ふ裏に、彼は知らず〳〵其女に對する漠然とした下等な興味を起こしてゐた。その女に不良性のある所に起る興味であつた。

自家では信行が彼の歸りを待つてゐた。

「耳が惡いつて？」玄關へ出て來た信行は挨拶の代りにこれをいつた。

「水が溜つて居たので、直ぐ出して呉れた」

「大した事はないね？」

「何でもなかつた」

二人は信行を先きにして、茶の間へ入つて行つた。其所には既に始めかけた信行の食事が出てゐた。信行は座ると改めて、

「やあ……」と云つて頭を下げた。謙作も默つて頭を下げた。

「先へあがりかけた所なのよ。謙さんも直ぐあがりますか？」

「左うね。――どうでもかまひません」

「どうでもつて、あなたのおなかの都合よ」

「そんなら、食ひませう」

お榮は甲斐々々しく謙作の食事の支度をした。

「お榮さん。十才位年を取つたつて、そんなでもないぢやありませんか」と信行が云つた。

「いゝえ。お爺さんになりましたわ」とお榮は謙作の顔を見返へしながら云つた。

「そんなにも思はないが、左うかな。瘠せたには瘠せたが……」

「今は少し見なれたんで、それ程に思ひませんが、新橋でひよいと、前へ出て來られた時には、思はず、お祖父さんが……と思ひましたのよ」

お爺さんが何時かお祖父さんになつてゐた。謙作は不意に脾腹を突かれたやうな氣がした。信行は直ぐ氣がついた

が、お榮は無頓着に續けた。

「布れで頭を卷いてゐて、顔だけしか見えないので、尚、似て見えたのかも知れないの」

あの安つぽい、下等な祖父に似てゐると云はれた事は謙作には致命傷の氣がした。彼は平氣でそんな事を饒舌つて居るお榮の無神經さに腹が立つた。が、同時に一方思ひがけない氣持の自分に起つて居る事に心附いた。實際それは自分ながら思ひがけない氣持だつた。彼は嘗つて、祖父に對し、肉身らしい愛情を感じた事はなかつた。六才の時初めて見た祖父の、いやな印象は、その儘變らず彼に殘つて行つた。その印象は變えようがなかつた。彼の祖父は生れながらに下根の質に出來上つてゐた。する事、なす事、妙に下品な調子がつきまとつてゐた。それ故、彼は自身が不義の兒である事を知つた場合にも、母と誰れか、――それが祖父でない誰れかであつたら、まだよかつたと云ふ氣がした。母と祖父と、此結びつきが、何よりも堪えられなかつた。彼はそれ程に祖父を嫌つてゐた。それ故、今もお榮の言葉に、堪らず、腹立たしい氣持にもなつたが、同時に全く思ひがけない、反對な氣持が不意に湧き起つて來た事を感じた。何と云つていいか、よく分からなかつた。が、兎も角、それは矢張り肉身の愛情だつた。それは嫌つてゐながら、父親としての或る懷かしさだつた。似てゐると云はれた事を致命的の打擊に感じながら、何所か心の奥に或る嬉しさを感じたのである。これは彼ではあり得べからざる事だつた。それが不意に心へ入つて來た。彼は心の混亂を感じた。

食事中、信行は尾の道での生活などを色々訊いた。謙作も出來るだけ氣樂な調子でそれに答へた。そして、食事が濟むと、彼は

「二階へ行かうか」と信行を誘つた。

「うん」信行は何氣ない顔をして一緒に立ち上つたが、これから二人だけで又、いやな問題を話さねばならぬかとい

ふ、何となく降参したやうな様子を見ると、謙作は自分の事ながら却つて兄が可哀想になつた。可笑しい氣もした。

二人は火のない火鉢を間にして、坐つたが、直ぐには話も出なかたつ。

「一昨日出した俺の手紙は見まいね」

「見ない」

「俺には今度の事は全く手に餘る。色々書いて置いたが、矢張り、此事はお前はお前の思ひ通り、お父さんは、お父さんの思ひ通りをされるより仕方がないと思つたよ。間に入つて調停しようとした所で、お父さんとお前では、結局は左ういふ結果になるに決つてゐる。俺が間へ入らうとしても、入る餘地がない。俺の輕はづみから、こんな事になつてお前には濟まないと思ふが、一ト先づ俺は此問題には沈默しようと思ふんだ。お父さんにも、一昨日それを云つたよ。無責任なやうだが、仕方がない。又俺が出ていゝ時もあると思ふから、それまでは暫く左ういふ事にしようと思ふ。どうだらう？」

「どう云ふ話になつてるのか、知らないが、それがいゝよ。君が間に入つてゐると、兩方が徹底出來ないから、何時まで經つても關係が、きちんとした所まで落ちつかないよ」

「うん」

「君には出來るだけ今までの關係を其儘殘して置きたい氣があるが、何も知らない間はいゝが、これからも續けようと云ふのはそれは少し無理だ。破はれる部分は破はして了ひ、破はしても破はれない部分だけ殘して、其所に不安のない關係を作れたら作るより仕方がない。若し根こそぎ、打破はれて了ふやうなら、それも止むを得ないし」

「お前の氣持が其所まで決つてゐれば、何にも云ふ事はないが……」信行は一寸不愉快さうな眼をして謙作を見た。

「然し俺はどうかして、調停したいと云ふ氣があつたのだ。調停が、いつも不徹底なら、仕方がないが、左うばかりも云へないからね……」

謙作は默つてゐた。謙作は自身の云つた事が通つてゐるとは思はなかつたが、父との關係に殆ど執着のない自分が、何所までもそれを離れられない信行に、そんな風にはきく云つて了つた事は濟まない氣も一寸した。第一、同じく父と呼んでゐるが、信行には父で、自分には左うでない、其所からも、兩方の氣持が離れくになつてゐるのだと思つた。

女中が茶と菓子とを持つて入つて來た。女中が茶をついで、二人の前へ置く間、二人は默つて居た。

「由！果物を此所へ置いとくからね。差し上げてお呉れ」かういふお榮の聲が段々の下から聞こえた。

女中は返事をしながら部屋を出た。

「暗い所で、ふんづけるな」

女中は笑ひながら降りて行つた。

「手紙に書いた事を繰返えせば、お父さんは前と少しも考へは變へられないよ。尙、困るのは、お前が小說を書く時、決して自家の事を書いてはならぬといひ出したのだ。俺は手紙にもあつた通り、不愉快な結果を生ずるやうな事は出來るだけお前も、避ける筈だと云つたが、お父さんはそんな事を云つても、それは謙作の標準で云ふ事で、謙作は不愉快でないつもりでも俺の方が迷惑する場合がないとはかぎらない。絕對に自家の事は書かぬといふ堅い約束をして貰はぬ事には俺としては安心出來ないと、かう云はれるのだ。心配しだせば其所まで用心しとく必要があるのかも知れないが、餘り勝手だからね。それにお前も、何かの形でそれが出ないとは云へないと云つてゐるし、俺はそれまで制

限する事は出來ないと云つたのだ。仕事の性質上、全然それに觸れるなと云ふのは無理な要求だと云つたのだ。お父さんは家庭小説だけが小説でもあるまい、とか云つてゐたが、兎も角お前の仕事に對する理解とか、同情とかいふものはまるでないからね。話が仕にくいんだ。其所で、俺も――今から思ふと、如何にも鼻元思案な話だが、そんならお父さんは謙作が創作の仕事をする事に就いてはどうお考へですかと訊いて見たんだ。それは自分の仕事として、謙作がそれをやるのに少しも不服はないと、かう云はれる。それなら、謙作も自分の生涯を打込んでやる仕事なのだから、多少の迷惑があるとしても出來るだけ寛大に、そんな制限はつけてやらない方がいゝでせう。何故ならお父さんでも、鐵道を高架線にするか地上線にするかの問題が起つた時、仕事の都合で地上線を主張された事もあるのだし、仕事の上では他人の多少の迷惑は構つてゐられない場合もあるものですから、とかういつたのだ。これは實際俺の云ひ方も惡かつたが、滅茶苦茶に怒鳴りつけられたよ」

鐵道の話は、嘗つて信行の父が或る鐵道會社を起した場合、或る町を貫通さすのに經費の都合から地上線を敷かうとして町民からの反對を受けた事があるからである。地上線に決めるか、高架線に決めるかは云ひかへれば、何十人――も永い間には何百人の生命を犠牲にするか、しないかを決める事だと町民はそれに反對した。結局餘り八釜しくなつたので會社側が讓歩して高架線を敷く事になつたが。信行はこれをいつたのである。

「そんな事を云へば怒るに決つてゐる」と謙作は笑つた。「然し僕にはそんな約束は出來ないよ。第一高架線の場合とは全で異う話だし、兎も角僕は此機會に本郷の家とははつきり關係を斷つのが一番いゝと思ふ。左うしなければこれからも色々と切りのない事だ。一時の世間態を考へて、曖昧にして置くのは兩方の爲めによくないよ」

「うん。それが本統かも知れない。然しどういふものか、お父さんは左うはつきり、かたづけて了ひたくない氣があ

るんだ。それから、これがある。俺も今度初めて知つたが、お前の貰つた金は、あれは總て、芝のお祖父さんから出たものださうだ。表面上、お父さんが出した事になつてるが、實際は一文も出してないのださうだ」

「……」謙作は眼を見はつた。そして一寸赤い顏をした。彼は父が自分の本統の父でない事を知つた時から、此事には拘泥してゐた。本郷の家と、はつきり關係を斷つと云ひながら、貰つた金だけを返えさずに置くのは如何にもそれだけに眼をつぶつてゐる、ずるい事のやうで、氣がとがめて居た。そして二度出した信行への手紙の中でも、それへ觸れようと一方、しながら、遂に觸れずに了つた。彼にとつて其金を返えして了ふのは差しづめ食ふに困る事だつた。それが彼はいやだつた。然し、彼は、もつと、其金を返えす事が必然になつた場合、尙それに眼をつぶつて平氣でゐられる自身でない事を知つてゐる點で、其所に或る安心を持つて、その事はほうつて置いたのであつた。

二人は暫く默つて居た。

「俺はね」信行はこんな風に今度は自身の事を話し出した。「矢張り、最近會社をよすつもりだ。お父さんにも一寸云つて見たが、案外、簡單に承知しさうなんだ」

「左う。それはいゝね。で、何をするつもりなの？」

「禪をやるつもりだ」

謙作は思ひがけない氣がして默つてゐた。

「近頃俺は、つくづくお前を羨しく思ふ。或る意味で、——運命的にといふのか、境遇的にといふのか知らないが、左う云ふ意味ではお前は俺より不幸な人間だ。然し性格的にいふと、遙かに幸福な人間だと思ふ。しかも、何方が、より幸福かといへば勿論性格的に幸福な方が本統の幸福だと思つたよ」

「僕が性格的に少しも幸福なものか。同時に境遇的にも君のいふやうに不幸な人間ぢやあないよ」謙作は柄にない信行の斷定的な言葉に一寸苛々しい言葉を挾んだ。

「俺の云ひ方が悪いのかも知れない。左ういふ言葉をよく知らないから言葉が間違つてゐるんだ。が、兎も角、俺はお前が俺より惠まれた人間だといふ氣がして羨しい。お前は強い。お前は何んでもお前の思ふ通りにやつて行かうといふ強い自我を持つてゐる。所が俺にはそれがない。ない事もないが、それが非常に弱いのだ。禪をやるといふのは最近にきめた事だが、今の生活に不滿を感じ出したのは、隨分久しい事だ。所が、どうしても、それを直ぐよす氣になれなかつた。いつかお前は直ぐよしたらいゝだらうと、簡單にいつたが、それが俺には中々出來なかつた」

「然し何故會社がそんなにいやになつたのかしら？」

「元々いやな所なのだ。只、入りたては無我夢中で、兎も角、自分が一つの仕事にたづさわつてゐるといふ意識でだまされてゐたのだ。今でも新しく入つて來る若い連中を見ると皆左うだ。親の脛を噛つて、小さくなつてゐた奴が、自分の手で金が、得られるやうになると、急に一人前になつた氣で、妙に嬉しいんだね。中にはそれで家族を養つて行かねばならぬ者もあるが、左ういふのはそれ程迷はないが、それだけの必然さもない俺達のやうな人間になると、直ぐ仕事の興味はなくなるし、云はゞいつまで經つても雇人の生活だからね。――重役になつた所で同じ事だ。こんな事をして居て、一體、一生どうなるのだ、といふ氣に段々なつて來る。四十にして惑はずといふが、四十位になると、大概、一寸左ういふ氣になるらしい。俺なんか、早い方だ」

「禪をやる事もお父さんに話したの？」

「話した。迚も承知しまいと思つたが、例の（考へて置かう）だから、大概いゝだらうと思ふ。お前の事もあるし、直

ねて、そんな話をするのは氣の毒だつたが、絶えず左ういふ氣持で責え切れない自分がいやで堪らなくなつたのだ。今度の場合でもお前にはいつも或る一つの焦點があつて、總ての針が直ぐそれを指すのが、俺は非常に羨しかつた。所で、俺にはその焦點がないのだ。ぐうだらな性格から來てゐるが、今の俺の生活が惡いのだ。どうしても其所から建て直して行かなければ駄目だと思つたのだ」

謙作は父の信行に對する案外寛大な態度が、自分に對するそれと全く違ふのを一寸不快に感じた。然しそれは當然な事とも思つた。不快に思ふのが間違つてゐるとも思つた。そして信行が自身の喜びから、謙作の氣持に顧慮する餘裕もなく寧ろ自分の左うなる事で謙作を喜ばさうといふ、子供らしい、一種のフラツタリーさへあるのを見ると、謙作は信行に好意を感じないではゐられなかつた。然し禪をやれば左ういふ點で本統に安心出來る氣でゐさうな所が危なつかしい氣もした。謙作は近頃（其頃）の禪流行には或る反感を持つてゐた。

「行く寺は決めたの？」

「圓覺寺へ行かうと思ふ。何んといつても、ＳＮは當代隨一の人だからね」

謙作は默つてゐた。

彼は何んとなく其ＳＮ和尚を好まなかつた。三井集會所あたりでよく話しをするＳＮを荒地に種蒔く人間のやうな氣がして好まなかつた。然し他にどう云ふいゝ和尚があるかも全で知らなかつたから、彼は默つてゐた。（續く）

―(三　つ　の　死)―



三つの死

佐藤春夫

父は田舎醫者である。來年は五十九になる。息子は、父が三十の時の子だから來年は二十九になるわけである。この親子が、餅搗きの晩に台所からかけへだてた離れ座敷で爐邊に向合つてゐる。息子は物憂さうに何か飜譯ものの小説を讀んでゐる。父は一生懸命に觀音の木像を彫刻してゐる。「どうもぢつとしてゐては寂しくてしかたがない。」さう父は口癖のやうに言つて、このごろそんな道樂を初めた。さうして夜となく晝となく閑さへあればかうして爐のそばへ來て木を削つてゐる。「かうやつて火のそばで白檀を削つてくすべてゐるのはいいものだ。いい匂がするだらう。」父はいづれ何かになるだらうと心掛けてよほど以前から蓄へてゐた碁盤にでもならうかといふ白檀の厚い板をこんな風に使つてゐる。

台所の方ではさぞ忙しいのであらうが、ここはひつそりとしたけはひで、時々木がらしの渡るたびに近所の竹藪から竹の幹がきしれ合ふ音が聞えて來る。父は道樂仕事に一段落がついたものゐと見えて、眼鏡を外しながら、高さ四寸ぐらゐの半出來の木像を、身の側の机の上へ立てて、それをためつすがめつ眺めて居た。子は二言三言それ

に就て批評のやうなことを言つて、讀みさしの本を閉ぢると、父はたぎつてゐる鐵瓶を爐からおろして、茶を入れて自分と自分の子とにすすめた。話好きな父はいろいろと話し出した。話題は初めから生と死とに就てであつたが。

父の話その一

もう二十年も、いや私が未だ三十三四位だから二十五年も前の話だ。患者に一人の坊主が來てな。もう六十二か三ぐらゐの坊主だ。何でも名古屋の方の男だといふことであつたが、隱居役に常念佛のお堂へ來た居た。それが食道癌なのだ。それで腹へ穴をあけて食事をとり度いから手術をしてくれと言つて來たのさ。で、私はそれを斷つたのだ。どうしてと言つて、その坊主といふのは見るから俗な面白くない人物でね、その年をして坊主のくせに二十六七ぐらゐの妾のやうなものを連れて住んで居たさうだ。それに言ふことがいかにも汚いのだ。――こんな病氣になつて食ふものも碌にたべられないの、流動物ばかりでは不味くつてたまらないの、せめては一日も生き延びたいのと、まるでもう普通の病人でも言はないやうな未練がましいことをうるさくくどくどと言ふのでね。そこで私は、「その病氣は到底見込みのない病氣だから、それにそんな手術を今さうして見たところが、ものの一月も永生きするものかどうかも解りはしないのだから、それよりもうそんなことなどはせずに成佛をしてはどうだ」とさう言つてやつたのだ。するとその坊主は大へん怒つてね。「そんなことを言つてお前その手術が出來ないのだらう」と言うのだ。私も腹が立つて、「出來ないものなら出來ないと言つて斷る。一たいお前さんは何だ。頭を圓めた人でありながら、お前さんはその頭を圓めた時からもう死んだつもりで世の中を捨ててゐる筈ではないか。うまいものを食べたいの永生きをしたいのとそんなつもりで入道したのではあるまい。それにもう人の一生を目出度く終つたところが一向惜しくなさうな年ぢやないか」とさう言つた。私も

つむじ曲りではあり先方があんまり氣にくわん男なのでつい餘計なことまで言つたものだ。ところが坊主が益々怒つてね、「いや坊主であらうが何であらうが人間は一日も餘計に生きてゐたいものなのぢや。お前のやうな青二才に說教を聞きに來たのぢやない。お前は醫者だから說教などしなくてもいい、病人を癒しさへすればいいのだ」と言ふ。私は亦私で、「醫者だからと言つて何も治してやりたくない人間まで治さなけりやならぬわけはない。坊主なら坊主らしく潔く念佛でも唱へて大往生を待てばいゝのだ。」「醫者のくせに病人を治さぬといふ法があるか。」「坊主のくせに死ぬのがおそろしいといふ法があるか。」「何をこの醫者が……」「この坊主が……」と、果ては二人とも子供のやうに言ひ募つてね、つかみ合ひもしかねまじいやうになつて來て、私はたたき出すやうにして玄關からかへしたおぼへがある。――勿論、間もなく死んだよ。それでもあきらめがつかなかつたものと見えて、京都まで出かけて行つて手術をしたさうだが、大へん苦しんで死んだと言ふことだつた。

父は何事ともなくいかにも可笑しさうにちよつと笑つた。

「お父さん」息子は言つた「その坊主は俗の人でも言はないやうな汚い事を言ふと言つても、反つて坊主だけに、普通の人なら思つても言はないやうな事を、それが本當なら平氣で言へたのかも知れない。」

「うん」と父は答へる「それや或はさうであつたかも知れない……。が、こんな坊主もゐたよ。」

父の話その二

永泉寺の和尚だ。いや、今のではない以前のだ。永い間住職をしてゐた。これや面白い人だつた。その代りよほど變

借だつたが——いつかずつと以前に、本山で住職の總會のやうなものがあつて京都へ行つたのだが、歸つて來ると早々にお寺の境内へ土俵をこしらへてね、土俵をだよ、それで自分が眞先きになつて近所の若い者を寄せては相撲の稽古を初めた。妙なことだと思つてわけをたづねると和尙が言ふのには、「いや京都へ行つたところが、管主が言はれるのにはこれから世の中もだんく〵進んでくる事だから、一山の住職ともあらうものはよほどしつかりした力がなければならぬ。と、さう言はれて來ましたものだから」。それで相撲の稽古を初めたのだと言ふのだ——まるで落し噺。まあそんな愚僧だつたが、それだけによほど脫俗してゐた。それが病氣になつてね。いやどこと言はうより、もう老病だ。年は六十七八だつたらう。永いことわづらつた。私は毎日見舞ひに行つた。——その枕もとにね、今も思ひ出すと惜しい氣がするが、その和尙の枕もとに古い九谷の實に見事な湯呑みがあつてね、和尙さんそれで藥を呑んでゐたが、私は見舞ひに行く度に、その湯呑みを見て、いかにも面白いので欲しいものだと思つてゐたところが、或る日、行つて見るともうそれが無いのだ。和尙さんは別の瀨戶物の何でもない湯呑みを置いてゐる。聞けば、たしか鐵砲鍛治の親父が見舞ひに來て——あの男もあんな物が解る男だよ——欲しいと言ふから昨日やつたと言ふのだ。「さうか。それは殘念な事をした。實は私は欲しい欲しいと思ひながら毎日見てゐたのぢやつた。それでも和尙さん折角大事にして居るのに惡いと思つて言ひ出せず居た。そんなにつひ誰にでもやるものなら私が貰ひたかつたのに」と言ふと、「さうか、そんなら早く言つてくれればよかつた。何、大事にも何もただあつたものだから使つてゐた。そんなに欲しければ、直ぐに使をやつて取りかへして來て上げやう」と言つてくれて、和尙さん使をやつてくれたが、先方でも氣に入つてゐるものだから今親父が留守でどこへ置いたか解らんと言つて返してくれずね、さう言ふのは返すのが惜しいのだらう仕方がないと思つて「もうそれなら私はいらない」と言ふと、和尙がいふのに「そんならあれと同じのがもう一つあるのだ。あれよりは立派なの

だが、あなたにはお世話になるからあれを上げやう」と言つた。出させて來たのを見ると、九谷は九谷ぢやが近ごろ出來たもので、さきのものとは似ても似つかぬ腹が立つやうなもので、「こんなのなら欲しくない」と言つたら、和尚もさうかのう」と言つたきり何も言はなかつたが——面白い人でね、私は氣に入つて居た。それがだんだん病氣が惡くなつて來るのだ。尤も老衰だから今直ぐといふこともなささうだが、何れさきの遠いことでは無かつた。

すると、或る日、和尚が改つた口調で私に尋ねるのだ——「時に先生、私ももう今度はいよいよ極樂へ行けるものでせうか」とかう言つてね。——これやあまり古い話ぢやない、つひ六七年以前のことだ。從つて、私も三十四五の時代とは死といふことに就ての考へも自づと違ふ。そこで私は和尚にさう尋ねられて、和尚、口でこそ呑氣にこんなことを言つてはゐるがやはり死ぬのが氣になると見える。とさう思つたものだから慰めるつもりで、「いや何、年をとつてゐられると言つても未だ未だ長生きの出來るお年でもあり、根が達者な體だから氣ながに養生さへすればいいのです」さう言つて答へた。私はうつかり診察違ひをしたのだね。いやその病氣についてではない。和尚のその問ひをね。といふのはその日から二三日經つた夜中に、雨のしよぼしよぼ降る晩だつたが、お寺の役僧が息せき切つてかけ込んで來た。樣子が變つたのかと言つて尋ねても、使はたゞ胸をさすつてゐるきりで、はつきりした返事をしないのだ。不思議に思ひながら行つて見ると、椽がわに、ずぶ濡れになつた和尚を横にさせてある。もう死んで居た。和尚はそこの椽から這ひ落ちて、庭の泉中へはまつたのださうだ。何、覺悟の上さ。辭世の歌が書いてあつた——何とかいふのだつたが忘れた。「……ついてござんせ、ついてござんせ」といふ歌なのだが——ええと、思ひ出さない。兎も角も、「いづれは皆行くところへ一足先に行くから皆の衆もついてござんせ、ついてござんせ」といふ意味だつた。和尚は病氣を苦にやんだのぢやない。それや病氣だから樂なことはあるまいが、相當の年をとつて自然にあちらこちらと衰へてから來る死は、自

然に枯れて行くやうなものだからさう苦しむものではない。この和尚は全く早く死にたかつたのだらう。愚直な信心で極楽へ行けるものと思ひ込んでゐた和尚には、自然の死を待つのが待ち遠しかつたのぢやあるまいか……

それからまだこんな話もある。やはり四五年前のことだが。

父の話その三

お前、北海道の十勝のうちの農場で働いてゐる野上を知つてゐたね。あれは船田（川向ふにある小さな村の名）の者だ。あれの母親といふのが六十幾つでね、祖母といふのが——つまり母親には姑にあたる人ぢやが、それが九十二か三であつた。

或る晩、たしか秋のことであつた。夜の九時ごろに野上の母親が私を迎へにきた。婆さまが死んだから見てくれと言ふのだ。それで行つて見た。婆さんは布團を着せられてゐて、枕もとには五六人の者がゐる。婆さんはもう全く死んでゐた。しかも今のさつき死んだのではなく、もう死んでから數時間も經つてゐる様子なのだ。見ると、婆さんの頸のあたりが少し赤くなつてゐて、みみづ腫れといふ程ではないが、もので擦れたやうなかすかな痕がある。私は妙に思つた第一にあまり時間が經過しすぎてゐるのと、次には今の痕である。その時私の思つたことは、この死んでゐる九十をすぎた婆さんと、その嫁の六十幾つかになる若婆さんとの間柄である。これは誰しも考へることだと思ふが、この若婆さんは北海道の野上のところへ行けば、息子のそばで隠居をしてゐられる人なのだ。それが大婆さんが、九十にもなつて北海道のやうなそんな住み慣れないところへ行きともないといふばかりに、船田に居殘つて姑の守をして仕へてゐるわ

けである。普段はよく仕へてゐたやうでもあり、朴訥さうな年寄りではあるが、この若婆さんが大婆さんさへ居なければ……と考へて見ないこともないとは言へまい。私は大婆さんの死態(しにざま)が腑に落ちないにつけてつひそんなことも思つて見たのである。それで私も當惑して、若婆さんをものかげへ呼んでから尋ねたのだ。

「一たい、婆さんは今死んだやうではない。晝のうちにでも死んで居たのぢやないかと私は思ふ。どうぢや。」すると、若婆さんの言ふには、「それが私にも解らぬ」といふのだ。さうしてそのわけをくどくど説明するのを聞くと、から——この婆さんは毎晩草履を編む。翌日になると川を渡つてそれを町へ賣りに出る。その留守にいつも大婆さんは草履を編む藁を打つて置いてくれたものである。それでも近頃はもう大婆さんの打つて置いてくれた藁は打ち足りないものだから、若い方の婆さんがいつも自分で打ち直した。で若婆さんはいつも町へ出る。さうして子供のやうになつてゐる大婆さんのために、おかずだとか駄菓子などを買つて來てやつた。さうして婆さんは町から歸つてくるといつも家の前の板橋のところから——この家といふのは山懐にあつてその前の小さな谷川が流れて居た、そこに板橋があつたが——その板橋のところから、毎日

「婆さま、今戻つたぞう」

と言つて聲をかけると、大婆さんは待ちあんぐんでゐたやうに障子をちよつと明けて

「おお、戻つたかあ」

と言つて喜んでくれる。これが毎日缺かさずの事であつた。それに今日に限つていつものやうに聲をかけても、何とも返事をしなかつた。妙だ、と思ひながら家のなかへ這入つて見ると、死んで居た——と言ふのだ。

そこで私は重ねて「それでは今日お前さんが町から歸つたのは何時ごろだつた」と尋ねた。「日の暮れだから五時ごろ

ちつた」といふから、私はまた「それではお前さんの私のところへ迎へに來たのは九時頃だが、五時から九時までの間、六時、七時、八時、九時と四時間も死んだ人をそのまゝにして醫者を呼びに來ないといふのは妙ではないか」と言つた。婆さんの言ふには、何しろうちにはこの年寄りの私一人でどうすることも出來なかつたから、大婆さんが死んで居るのを見ると、慌ててそのことを親類たちへ知らせて歩いた。田舍のことではあり親類と言つても遠くもあり、つひ時間が經つて仕舞つた。それにもういい年寄りではあり一旦死んで仕舞つたものだからお醫者へはおくれても仕方がないと諦めて居た、とも言つた。「それはさうだが、何しろ直ぐにも知らせてもらへばよかつたのに」と私は言つてから、たうとう思ひきつて死んでゐる人の頸の痕のことを言ひ出した。「何にしてもあの痕が私には腑に落ちない、疑うやうで濟まないが、何か間違つたとでもあつたのぢやあるまいか。さうして私とお前のうちとの間柄なら、どうにかして濟むものと思つて私を呼びに來たのぢやないか。」さう言つたが、婆さんは「決してそんなわけではない。たゞ死んで居たのだ」とより外に言はない。私ももうそれ以上に言へるべきものでもなし、さればと言つて腑に落ちないものを診斷書を書くこともならない。結局、私にはわからないからもう一人醫者を呼べと言つた。それから成川（隣りの村）へ使ひをやつて醫者を來させたが、その人の考へとても私と同じことであつた。どうも途方に暮れて私たちは警察醫を呼ばせることにした。警察醫の意見で死體を解剖することになつて私も立合つた。こんな高齢な人のことだから心臟の壁は紙のやうに薄くなつてゐるし、腦の血管は硬化して針金のやうになつてゐた。私も幾度か死體解剖をしたことがあるが、こんな年寄りのは初めで珍らしく思つた。それにしても死因らしいものをはつきりと發見することは出來なかつた。それは勿論、もうこの年であるから、心臟なり胸部なりに故障があつて頓死することは屢あることではある。それ故、あの頸のあたりの擦り痕さへなければどうにでも解釋出來ないとはなかつた。つまりは死體解剖までして見たところが頸の痕の疑問

は依然として解決出來さうもない。そこで大婆あさんの死は警察の方でも疑はれて、さうなると當然若婆さんが取調べられることになつたのだ。

婆さんはたうとう本當のことを言つたが、それは皆には意外なことであつた。九十以上にもなつたあの婆さんは自分で首をくくつて居たのださうだ。毎日のやうにあの谷川にかかつてゐる板橋の上から聲をかけたが返事がない。それで怪しみながら家のなかへ這入つて見ると、大婆さんは頸に繩を卷いたまま倒れて居る。近よつて見るともう死んでゐた。あたりをよく調べて見ると、あまり高いところではない細い横木が折れてゐてどうもそれにくびをくくつたのが、木が折れたために仰向けに倒れたのだらうと思つた。若婆さんはさう申し立てた。それから申譯けをして言ふには「何分、うちの恥になることではあり外へは洩したくはないと思つて隱してゐるうちに、つひ言ひそびれて何とも申しわけがない。それにしても婆さんは何が不足でもうこの年になつた身でどんなつもりでこんなことをしてくれたのだか私にも解らない。家はどうせ貧乏だから充分な養ひの出來やう筈もないが、それかと言つて別に婆さんに不自由をさせたのではなし、私も出來るだけのことはして仕へたつもりであつたのに。」若婆さんはさう警察で言つたさうだが、私も後にあつた時も同じことを言つて私にも訴へてゐた。この若婆さんの言つたことは皆本當であつたことがわかつた。その折れてゐる横木といふものも殘つてゐたし、この二人の婆さんが平和に暮してゐたことは、村の人が皆で證明をした。そこで若婆さんの疑も晴れた。

それにしてもこの九十からになつた婆さんが別に何の理由もなく自分で縊れて死んだといふ事が、私には不思議な感銘を與へるとともに、どうも解しかねることに思へてゐた。それが、この一二年の間に、いくらかわかるやうな氣がしないでもない。まあ考へても御覽。前には何の望みと言つてあるのではなし、子供とか孫とかと言つても、もうそれに

樂しみを繋がうにも、その子供なり孫なりが既にもう一人前の人間になつて仕舞つてゐる。この婆さんの場合には自分の息子——つまり若婆さんの連合ひになる人はもう自分よりさきに無くなつてゐる。さうかと言つて無學な人ならば世間のうつり變りを見て樂しむといふ力もない。また自然を樂しまうとしてもそれだけの素養もない、いやたとひその素養があつたところが、體のあらゆる機能が衰へてしまつて、どの機能にも何の生き生きした反應も呈しなくなる。一日一日はただ單調を繰り返しといふよりは外に意味もない。彈みのない張りのないほんの機械のやうな生存をひきずつてゐることは、考へただけでも苦しからうではないか。さうして時たまに昔のことを思ひ出して見れば、そのころの人たちは皆どこともしれない所へ行つて仕舞つてゐる。自分ひとりがとり殘されてゐるのである。かういふ人たちに、もし少しでも意志があり、その意志を實現して見やうといふ力があれば自然死んで見たくなりもしやう。あの九十婆さんの首くくりは——この老婆の死は死ではなしに、生の最後の飛躍であつたとも言へるやうに私は思ふ。



仇討三態

菊池寛

その一

越の御山永平寺にも、爽かな初夏が來た。

冬の間、日毎日毎の雪作務に、雲水達を苦しめた雪も、深い渓間からさへ、その跡を絶つてしまつた。

十幾棟の大伽藍を圍んで、矗々と天を摩して居る老杉に交じつて、栃や欅が、薄緑りの水々しい芽を吹き始めた。

山櫻は、散り果てゝしまつたが、野生の藤が、樹々の下枝にからみながら、ほのかな紫の花房を、ゆたかに垂れて居る。

惟念にも、僧堂の生活が、漸く慣れて來た。乍入當時の坐禪や作務の苦しさが今では夢のやうに淡く薄れてしまつた。曉天の坐禪に、とろとろと眠つて、巡香の警策を受くることも、數少くなつた。正丑の刻の振鈴に、床を蹴つて起き上ることも、あまり苦痛ではなくなつた。午前午后の作務、日中諷經、念經、夜座も、

日常の生活になつてしまつた。

掛塔を免されたのが、去年の霜月であつたから、安居はまだ半年に及んだばかりであつたけれども、惟念の念頭からは、諸々の妄念が、洗はるゝ如くに、消えて行つた。心事は元より未了であつたけれども、心澄み氣冴えた曉天の座などには、佛種子が知らず／＼増長して、かすかながらも、悟道に似た閃きが、心頭を去來することがあつた。

親の敵を求めて、六十餘州を血眼になつて探ね歩いた過去の生活が、惡夢のやうに、思ひ出される。父親を討たれたときの激怒、復讐を誓つたときの悲壯な決心、それが今でも、マザ／＼と思ひ出される。が、もう實感は伴はない。四五年の間は、關東關西と梭のやうに、馳け廻つた。が、その裡に、こんなに焦つても、時機が來なければ討てるものではないと考へた。彼は、江戸に腰を落付けて、二年ばかりゆつくりと、市中を探ね歩いた。が、敵の噂をさへ聽くことが出來なかつた。彼はまた焦せり始めた。江戸を立つて久し振りに、東海道を上つたのが、元祿三年の秋で、故郷の松江を出てから、八年目、彼は三十の年を迎へて居た。畿内から中國、九州と探し歩いたそれからの三年間にも、彼は敵に廻り合はなかつた。江戸を出るときに、用意した百兩に近い大金も、彼が赤間ケ關の旅宿で、風邪の氣味で、床に就いた時には、二朱銀が數へるほどしか殘つて居なかつた。

彼は、門付をしながら、中國筋を上つて、浪華へ出るまでに、半年もかゝつた。浪華表の宿屋敷で、彼は國許の母からの消息に接した。母は、自分が老衰のために、死の近づいたことを報じて、彼が一日も早く仇を討つて、歸參することを朝夕念じて居ると書いて居た。彼は、母の消息を手にして、心が傷んだ。十一年の間、空しく自分を待ちあぐんで居る痛ましい母の心が、彼を悲しませた。彼は新しい感激で、大和から伊勢へ出て、伊勢から東山道を江戸へ下つた。が、敵らしいものの、影をさへ見なかつた。探ねあぐんだ彼は、仕様事なしに奥州路を仙臺まで下つて見た。が、それ

も徒勞の旅だつた。江戸へ引つ返すと、碓氷峠を越えて信濃を經て、北陸地に出て、金澤百萬石の城下にも、足を止めて見た。が、その旅も空しい辛苦だつた。近江から京へ上つたのが、元祿九年の冬の初である。國を出てから、十四年の月日が、空しく流れて居た。故鄕の空が、矢も楯も堪らないやうに戀しかつた。二十二で、故鄕を出た彼は、既に初老に近かつた。母が戀しかつた。安易な家庭生活が戀しかつた。無味單調な仇討の旅に、彼はもう飽き〴〵して居た。が、一旦仇討を志した者が、敵を討たないで、おめ〳〵と歸れる譯はなかつた。行き暮れて辻堂に寢たときとか、汚い宿に幾日も、降り籠められて居たときなどには、彼はつく〴〵敵打が、嫌になつた。彼は、一層京か浪華かで、町人になり下つて、國許の母を迎へて、のどかな半生を過さうかとさへ思つた。が、少年時代に受けた武士としての教育が、それを許さなかつた。彼は自分の武運の拙さが、しみ〴〵歎ぜられた。それと同時に、自分の生涯を、これほど呪つて居る父の敵が、恨めしかつた。彼は、敵に對する憎惡を自分で振ひ起しながら、また〳〵二年に近い間、畿内の諸國を探し廻つた。

浪華の倉屋敷で、國許の母が死去したと云ふ知らせを得たのは、彼が三十八の年である。故鄕を出てから十六年目であつた。

恐ろしい空虛が、彼の心を閉した。凡てが煙のやうに、空しいことに思はれた。千辛萬苦の裡に過した十六年の旅が、馬鹿々々しかつた。敵に對する憎惡も、武士の意地も、亡父への孝節も、凡てが白々しい夢のやうに消えてしまつた。

彼は間もなく、浪華に近い曹洞の末寺に入つて得度した。其處で、一年ばかりの月日を過してから、雲水の旅に出て、故の御山を志して來たのである。

瞋恚の念が、洗はれた惟念の心には、枯淡な求の道の思しか殘つて居なかつた。長い〳〵鍛打の旅の生活が、別人の生涯のやうにさへ思はれ始めた。

その日は、維那和尚から、薪作務のお觸が出て居た、ほがらかな初夏の太陽が、老杉の梢を洩れて、しめつぽい青苔の近にも、明るい日脚が射して居た。

百名を越して居る大衆に役僧達も加つた。皆は思ひ〳〵の作務衣を着て、裏山へ分け入つた。ボロ〳〵になつた麻衣を着て居るものも居た。袖のない綿衣を着て居る者もあつた。雲水達の顔が變つて居るやうに、銘々の作務衣も變つて居た。惟念には初ての薪作務が、何となく嬉しかつた。彼は、僧堂の生活に入つて以來、兩腕に漲つて來る力の過剰に苦んで居た。

杣夫が、伐つてある生木を、彼は兩手に抱へ切れぬほどの束にした。二十貫に近い大束を、輕々と擔ぎ上げた。勾配の可なり烈しい坂を、驅けるやうに降つて來た。二十間ばかり勢よく走せ下つた彼は、前に行く雲水を追ひ越す譯にも行かないので、速度を緩めた。その男の擔いで居る束は、彼の束の三分一もなかつた。が、その男は、その束の下で、危う氣に足を運んで居る。

廣い道へ出るまでは、追ひ越す譯には行かなかつた。彼は、その男に隨いて歩いた。見るともう六十に近い老人である。同參の大衆ではなくして、役僧であることが直ぐ判つた。半町ばかり後から隨いて行く裡に、彼は老僧の着て居る作務衣に、氣が付いた。老僧の作務衣は、その男が在俗の時に着た黒紋附の羽織らしかつた。その羽二重らしい生地が、多年の作務に、色が褪せて、眞赤になつて居る。紋の所丈は、墨で消したと見え、變に黒ずんで居る。惟念はつひ

可笑しくなつて思はず、微笑を洩した。が、ふとその刹那に此の人も元は武士だつたなと思つた。彼は何氣なくその墨で黒ずんで居る紋を見詰めて居た。それは、殆ど消えかゝつて居るけれども、丸の内に二つの鎌が、並んで居ると云ふ珍らしい紋だつた。

惟念の全身の血が急に湧き立つた。二つの鎌が、並んで居る紋、それは彼が過去十六年の仇討の旅の間、夢にも忘れなかつた仇敵の紋である。父の敵は、召し抱へられてから間もない新參であつた爲、部屋住だつた彼は、ただ一二度顏を合はした丈である。その淡い記憶が、幾年と經つ裡に、薄れてしまつて、他人から聽いた人相丈が、唯一の手がかりであつた。その中でも、敵の珍らしい紋所と、父が敵の右の顴に與へてある筈の、無念の傷跡とが、目ぼしい證據として、彼の念頭を離れなかつた。彼は前に行く武士、擦れ違ふ武士、宿り合はした武士、さうした人々の紋所を、血走しつた眼で幾度か、睨んだことだらう。

惟念は擔いで居る時束を放り出して、老僧の首筋を、グイと掴んで、その顏を振り向けたい氣がした。彼の右の顴を見たかつたのである。十六年の苦しい旅の朝夕に、敵に對して懷いた呪咀と憎惡とが、ムク／＼と蘇つて來た。が、直ぐ彼に反省の心が動いた。一旦瞋恚の心を捨てゝ辨道の道に、いそしんで居る者が、敵の紋所を見たからと云つて、心を擾すべきではない。それは捨て去つた筈の煩惱に再び囚はれることである。まして、廣い日本國中に、二つない紋所とは限つて居ない。故鄕の松江でこそ珍らしい紋所でも、他國へ行けば、數多い紋所であるかも分らない。實際、江戸に町家住居をして居たとき、通りがゝりの若衆が、同じ定紋を付けて居るのを見て、驚破や敵の縁者とばかり、後を附けて行つて、彼が敵とは縁も、由緣もない、旗本の三男であることを、突き止めたことさへある。恐らく、この老僧も彼の若衆と同じい場台であらう。十六年の間、もがき苦しんでも邂逅し得なかつた敵に、得度した後に、悟道の妨げ

になるやうにと、邂逅會はせるほど、天道は無慈悲なものではあるまい。若しまたそれが、正眞の敵であつたとして、自分はどうしやうと云ふのだ。僧形になつてゐる身で、人を殺すことは出來ない。一旦還俗した後、僧形になつて居る敵を討つて、目出度く歸參をしようと云ふのか。おめ〳〵と敵を討ち得ないで、出家した者が、敵が見付かつたからと云つて、還俗することは、その事自身に於いて卑怯である。歸參のときに、一旦僧形になつた云ひ譯が立つ譯ではない。

彼は、ともすれば擾れ立たうとする心を、ぢつと抑へた。老僧が、蒔束を右の肩に、擔いで居るために、右の顎が隱されて居るのこそ幸ひである。彼は、その右の顎を見まいと思つた。丁度その時に、彼は廣い道へ出た。彼は老僧の方を振り向きもしないで、一目散に馳け拔けた。

が、天道は皮肉に働いた。午時の行齊が終つて、再び蒔作務が始まつたときである。彼は、燃え上らうとする妄念の炎を制しながら、蒔束を作つて居た。彼は、不足して居る蒔を蒐めようとして、周圍を見廻した。四五間彼方に生えて居る椎の樹の向ふに、伐られたその枝が、うづ高く積まれて居るのを見出した。椎の木の下を潜つて、彼が向ふ側へ出た時である。今までは、心付かなかつたその樹陰に、午前の老僧が俯向きながら、蒔を束ねて居る。と思つた刹那、老僧は彼の足音を聞いて、上半身を上げた。彼は、嫌でもその右の顎を見ずには居られなかつた。傷が古いために、色こそ褪せて居たが。右の口元から顎にかけて、かすつた太刀先が、アリ〳〵と殘つて居る。

「おのれ！」

彼は、口許まで、そんな言葉が出かゝつた。が、彼の道心は勝つた。彼は、一瞬の間老僧を見詰めると、踵を翻して自分の蒔束の所へ歸つた。

でも、彼の心は、容易には收まらなかつた。彼は、蒔束の中の太い棒を見て居ると、それを眞向に振り翳して、敵の

坊主頭を、叩き砕いてやりたかつた。まだ、一年と安居をして居ない彼の道心は、ともすれば崩れかけた。彼は、足下の時束を茫然と見詰めながら迷つた。迷つた末に、彼は、辛うじて自分の妄執に打ち勝つた。

が、自分の心が不安でならなかつた。一旦は思ひ捨てゝも、何う云ふ機會に、再び妄念に囚はれるかも知れない。どんな機みで、相手を打ち殺すかも知れない。彼は、自分の道心の勝利を、何かに誓つて置きたかつた。二度と再び、未練な亡執に囚はれないために、何かに誓つて置きたかつた。

それは、敵の老僧に打ち開けて置くより、いゝことはないと考へ付いた。在俗の折の妄執として、話して置かう。そして、現在の自分が、それに打ち勝ち得たことを相手に話して置かう。そして、敵と手を執つて、心よく笑はう。敵にそれと明した以上、どんなに妄執の力が強くとも、束ねた言葉を破ることはないだらう。彼はさう思ふと、出來上つた時束を、瘠せた肩に、擔ぎ上げて、歩み去らうとする老僧を呼び止めた。

「何御用!」

彼は、敵の言葉を初て、耳にしたのである。又、心が亂れようとするのを抑へた。

「貴僧に訊きたいことがある」

「何ぢや」

老僧は落着き返つて居る。

「餘の儀でない。貴僧はもと雲州松江の藩中にて、鳥飼八太夫とは申されなかつたか」

老僧の顔色は動いた。が、言葉は爽やかであつた。

「御言葉の通ちや」

「然らば重ねて尋ね申す。貴僧は松江に在した時、同家中の山村武兵衛を討つた覚が御座らうな」

過に老僧の顔色は變つた。が、言葉は尙、神妙であつた。

「なか〳〵。して、其許は何人に在すのぢや」

老僧は、可なり急き込んだ。

惟念は、努めて微笑をさへ浮べながら云つた。

「愚僧は、今申した山村武兵衛の悴、同苗武太郎と申したものぢや。御身を敵と付け狙つて、日本國中を遍歴いたすこと、十餘年に及んだが、武運拙くして會はざること、是非なしと諦め斯樣の姿になり申したのぢや。」

老僧は、老眼をしばたゝいた。

「近頃神妙に存ずる。愚僧は、今右申した通の者ぢや。御自分の父を打つて、松江表を立ち退き、其後諸國にて身上を稼ぎ申したが、人を殺した報は、覿面ぢや。何處にても有付く方なく、是非なく出家致したのぢや。茲で御身に廻り合ふのは、天運の定まるところぢや。僧形なれども仔細は御座らぬ。存分にお討ちなされい」

老僧の言葉は、凊々しかつた。

惟念は淋しい微笑を浮べた。

「討つ討たるゝは、在俗の折のことぢや。互に出家沙門の身になつて、今更何の意趣が殘り申さうぞ。たゞ、御身に隔意なきやうにと、かくは打ち明け申したのぢや。敵を打つ所存などは毛頭御座らぬわ」

老僧は折返して云つた。

「いや〳〵左樣では御座らぬぞ。茲は、御自分能く〳〵覺悟あるべき所ぢや。われらは、身上の有付なきための、是非

なき出家ぢや。御自分は違ふ。われらを打ち申されて、歸參なさるれば、本領安堵は、疑ないところぢや。その上、我慾を許して、安居を續けられようとも、現在親の敵を、眼前に置いては、所詮は悟道の妨ぢや。妄執の源ぢや。心事の了畢などは思ひも及ばないことぢや。在俗の折ならば、中々討たれ申すわれらではないが、斯様の恣なれば、手向ひは仕らぬ。早々お打ちなされい！」

老僧の言葉は、道理至極した。惟念は、老僧を討たうと云ふ烈しい誘惑を刹那に感じた。が、それにも、漸くにして打ち勝つた。

「はゝゝゝ、何を申さるのぢや。此期に及んで、武儀の頓着は一切無用ぢや。愚僧は、もはや分別を究め申した。御身を敵と思ふ妄念は一切斷ち申す。もし、貴僧にお志あらば、亡父の後生菩提をお弔ひ下されい！」

彼はさう、潔く云ひ放つと、兩手にも餘る蒔束を輕々と擔ぎ上げながら、御堂の倉庫を、指して一散に馳け下つた。

その夜は、「夜坐各寮」の觸があつた。それは、夜の禪坐の休止を意味して居た。が、惟念に臨作務があつたゝめに、その夜は大事の一夜であつたから、自分一人單前に打坐した。隣單の雲水達が、相集つて法螺を吹いてゐるのも、耳にかけず、坐禪三昧に心を浸した。いかに出家の身であるとは云へ、眼前に在る父の敵を、許したと云ふことが、執拗な悔恨となつて心頭を去來したが、それがいつの間にか薄れてしまふと、神々しい薄明が、心の裡をほのかに照すやうな心持がした。初更の來たことを報ずる更點の太鼓と共に、いつもは大衆と共に朗讀する「普勸坐禪儀」を、口の裡で誦へた。高祖開闢の道場で、高祖の心血の御作たる「坐禪儀」を拜誦する有難さが、彼の心身に、ひし〳〵と浸み渡つた。

彼が開枕板の鳴るのを合圖に、坐禪の膝を崩すまで、彼の心は、初夏の夜の空のやうに澄み渡つて、一片の妄念さへ痕を止めて居なかつた。

烈しい時作務の疲れの爲に、隣單の雲水達は、函櫃から、布團を取り出して、それに包まると間もなく、一齊に寢入つてしまつたのだらう。十四間四面の廣い僧堂の彼處からも、此處からも安らかな鼾の聲が、高く聞えて來た。が、惟念には、晝間の疲れにも拘はらず、眠はなか〳〵來なかつた。座禪のために、澄み切つた心が、いつまでも〳〵續いた。が、子の刻が近づくと、つひとろ〳〵した。

彼は、夜半何事となくふと覺めた。宵から、右の肩を下にし續けて居た爲だらう。右半身が、痺れたやうに痛んだ。彼は、寢返りを打たうとした。が、不思議に彼の身體は動かなかつた。彼は眼を開いた。彼は、自分の顏の上に、おぼろげながら、人の顏を見た。聖合龍の前の燈明の光しかない、ほの暗い堂内では、それが何人であるか、容易には分からなかつた。が、相手は彼が目覺めたのを知ると、明に狼狽した。

彼は、その狼狽に依つて、相手が晝間の老僧であることが、判つた。それと同時に、その老僧の右の手に、砥ぎ澄まされた剃刀が、ほの白く光つて居るのを見た。が、彼には、それを防がうと云ふ氣もなかつた。向ふから、害心を挾んで來たのを機會に、相手を討ち取らうと云ふ心も、起らなかつた。たゞ、自分が許し盡くして居るのに、それを疑つて自分を害さうと企てた相手を、憫む心丈が動いた。が、それも直ぐ消えた。彼には、右半身の痺れ丈が感ぜられた。

「愚僧は宵より、右肩を下につけ、痺れ申す。寢返りを許されい!」

彼は、口の裡で呟くやうに云ひながら、狭い五布の布團の中で、クルリと向きを變へた。夢とも現ともない瞬間の後に、彼は再び深い眠に落ちて居た。

役僧の一人が、永平寺を逐電したのは、その翌日である。

その二

越後國蒲原郡新發田の城主、溝口伯耆守の家來、鈴木忠次郎、忠三郎の兄弟は、敵打の旅に出てから、八年振りに、親の敵和田直之進が、京師室町四條上るに、兒醫師の看板を掲げて、和田淳庵と云ふ變名に、世を忍んで居るのを探り當てた。

それを初に知つたのは、弟の忠三郎であつた。二度目に、上方へ上つたとき、兄弟は京と大阪に別れて宿を取つた。別々に敵を探ぬるための便宜だつた。

弟の忠三郎が、三條通りを何氣なく歩いて居たとき、彼は町家の軒先に止まつた醫師のそれらしい籠を見た。籠の垂を、内から掲げながら、立ち出でた總髪の男を見たときに、彼は嬉しさの餘り、躍り上りたかつた。それは紛ぎれもなく和田直之進だつた。彼は、卽座に名乘りかけて、打ち果したいと思つたが、兄のことが直ぐ心に浮んだ。八年の間、狙ひながら、肝心の場所に、居合はさない兄の無念を想像すると、自分一人で手を下すことは、思ひも寄らなかつた。彼は逸やる心を抑へながら、直之進が再び籠に乘るのを待つたのである。

彼は、敵の在所を突き止めると、雀躍りしながら、直ぐ京を立つて、伏見から三十石で大阪へ下つた。が、その夜遲く、兄の宿まつて居る高麗橋の袂の宿屋を、尋ねたとき、不幸にも兄が大和から紀州へ廻ると云ひ置いて、三日前に出發したことを知つた彼の落膽は甚しかつた。彼は、油で煮らるゝやうないら／＼しさで、兄の歸宿を七日の間空しく待ち明かした。それでも、兄の忠次郎は、八日目に漂然として歸つて來た。

兄は弟から、敵發見の知らせを聞くと、涙を流して嬉しがつた。兄弟は、その夜の裡に、大阪を立つて、翌朝未明に京

へは入つた。

が、翌朝弟が、敵の家の様子を探ぐるため、その家の前を通つたとき、意外にも忌中の札が、半ば閉ざされた、門の扉に、貼られてあるのを見た。弟は、愕然とした。彼は、あはてふためきながら、隣家に就いて、死者の何人であるかを訊いた。死んだ者は、紛ぎれもなく和田直之進であつた。

弟は、最初それを容易には信ずることが出來なかつた。自分達に發見せられたのを氣付いたゝめに、自分達を欺かうとする、敵の謀計ではないかと思つた。が、吊問の客の顔にも、近隣の人々の振舞にも、死者を悼む心が、アリ〳〵と動いて居た。直之進の死を疑ふ餘地は、少しも殘つて居なかつた。

兄弟は、その夜三條小橋の宿屋で、相擁して慟哭した。短氣でわが儘な兄は、弟が見付けたときに、何故即座に打ち果さなかつたかを責めた。が、その叱責が無理であることは、叱責して居る兄自身がよく判つて居た。兄は、切腹する〳〵と叫びながら、幾度も短劍を逆手に持つた。その度に、温厚な弟が制した。果ては、兄弟が手を執つて慟哭した。彼等の慟哭は、夜明までも續いた。

八年の苦辛が、悉く水泡に歸した。張りつめた氣が、一時に拔けた。兄弟は、うつけ者の如く、たゞ茫然として數日を過した。

弟が、漸く兄を慰めて、郷里の新發田へ歸つて來た。弟は、京都を立つ前、私に所司代へ願ひ出て、敵直之進が、横死した旨の證狀を貰つた。

兄弟の家は、八百石を取つて、側用人を勤むる家柄であつた。藩では、遂に此の不幸な兄弟を見捨てなかつた。兄忠次郎に舊知半石を與へて、馬廻りに取り立てゝ呉れた。

が、忠次郎は快々として楽しまなかつた。その上、兄弟に就いての世評が、折々二人の耳には入つた。それは、決してよい噂ではなかつた。二人は、敵を見出しながら、躊躇して、得討たないで居る間に、敵に死なれたと云ふのは、まだよい方の噂だつた。悪い方の噂は、兄弟を可なり傷けて居た。和川淳庵と云ふ醫師が病死したからと云つて、それが直之進であるとは定まつて居ない。殊に、父が討たれたときに、弱冠であつた忠三郎が、敵の面體を、確に覺えて居よう筈がない。その忠三郎が、一目見たからと云つて、淳庵が直之進であると定めてしまふのは、不穿鑿であると。これは、兄弟には可なり手痛い非難であつた。が、もつとひどい噂があつた。兄弟は、敵打に飽いたのだ。わづか八年ばかりの辛苦で、復讐の志を捨てゝしまつたのだ。和田某と云ふ名もない醫師が死んだのを、直之進が病死したのだと云ひ作らへて、歸參の云ひ譯にしたのだと。兄は、そんな流言を聞く毎に、血相を變へていきり立つた。彼は、さうした噂を云ひ振すものと、刺し違へて死なうと思つて居た。が、さうした流言は、誰が云ひ觸すともなく、風の如く兄弟の身邊を包んで流れるのであつた。

兄弟に取つて、一番悲しいことは、さうした世の疑を解くべき機會が、永久に來ないことだつた。

年が明けると安政四年であつた。兄弟にまつはる悪評も、やつぱり年を越えて居た。が、安政四年の秋となり、冬となると、遂に、兄弟のことを取り立てゝ云ふ者もなくなつた。短氣な忠次郎も腹を立てる日が、少くなつて居た。

が、兄弟が喰ふべき非難は、まだ盡きては居なかつた。

それは、安政四年も押し詰まつた十二月十日、同藩士の久米幸太郎兄弟が、父の仇瀧謙休右衛門を討つて、故郷へ晴がましい錦を飾つたことである。

それが、何と云ふ辛抱強い敵討であつたらう。兄弟の父の彌五兵衛が、同藩士中六左衛門の家で圍碁の助言から、瀧

澤休右衛門に討たれたのが、文化十四年十二月長男幸太郎が七歳、次男盛次郎が五歳の時であつた。兄弟が伯父板倉留二郎の手に人と成つて、伯父甥三人、永の暇を願つて、敵打の旅に出たのが、文政十一年、兄幸太郎が十八才、弟盛次郎が十六才の秋だつた。伯父の留二郎は、四十二才であつた。

三人は、文政から天保弘化嘉永安政と、三十年間、日本國中を探し廻つた。幸太郎が、安政四年に、陸奥國牡鹿郡折の濱の小庵に、剃髪して獣昭と名乗つて、隠れて忍ん居る休右衛門を見出したのは、安政四年十月六日の事だつた。

不幸にも、弟の盛次郎と伯父の留二郎は、幸太郎と別れて關八州を尋ねて居た。幸太郎は思つた。弟や伯父の三十餘年に渡る艱難も、たゞ此敵に一刀恨まんためである。自分が一人で打つたならば、二人が嘸本意なく思ふであらうと。が幸太郎は思ひ返した。二人は、今何處に居るのか、先に手紙を出したが返事がない。敵の休右衛門は、七十を越した極老の者である。二人の音信を待つ裡に、何時病死するかも知れない。二人には、不義であらうとも、一日も早く多年の本懐を達するに若くはないと。幸太郎は、さう決心すると、翌七日獣昭を欺き寄せて多年の本懐を達したのである。

父の彌五兵衛が討たれてから、四十一年目、兄弟が敵討の旅に出てから三十年目、兄の幸太郎は四十七才、弟の盛次郎は四十四才、伯父の留二郎は七十二才の高齢であつた。

兄弟が目出度く歸參したときは、新發田藩では、嫡子主膳正直溥の世になつて居た。が、君臣は擧つて幸太郎兄弟が、三十年來の苦節を讃嘆した。幸太郎は、亡父の舊知百五十石に、新に百石を加へられた。盛次郎は、新に十五石五人扶持を給ふて近習の列に加へられた。

一藩は兄弟に對する讃美で、鼎の沸くやうであつた。が、その中で、鈴木兄弟丈は無念の涙を吞んで居た。

人々は、幸太郎兄弟を賞める引合として、きつと鈴木兄弟を貶した。

「鈴木忠三郎は、兄を迎へるために、便々と日を過したと云ふが、幸太郎殿の分別とは、雲泥の違ぢや。敵を探し出しながら、おめ〳〵と病死させるとは何と云ふうつけ者ぢや」

が、そんな非難はまだよい方だつた。

「三十年の辛抱に比ぶれば、八年の苦辛がなんぢや。」

「八年探して、根の盡きる武士に、幸太郎兄弟の爪の垢でも、煎じて飲ませたい」

世評は、成功者を九天の上に、祭り上げると共に、失敗を奈落の底へまで、突き落さねば止まなかつた。

幸太郎兄弟が、歸參してから十日ばかり經つた頃だつた。兄弟の歸參を祝ふ酒宴が、親類縁者に依つて開かれた。

幸か不幸か、鈴木忠次郎は、久米家とは遠い縁者に當つて居た。彼は、病氣と云つて、その席に連るまいかと思つた。が、惡意のある世評が、「あれ見よ。鈴木忠次郎は、面目なさに、幸太郎殿の祝宴から逃げたぞよ」と、後指を指すことは、目に見えて居るやうに思はれた。

利かぬ氣の彼は、必死の覺悟で、その宴席に連つた。彼は初から、默々として、一言も口を利かなつた。一座の者の幸太郎兄弟に對する賞讃が、悉く針のやうに、彼の胸に、突き刺さつた。が、中座することは、彼の利かぬ氣が許さなかつた。

夜の更けると共に、一座の客は減つて居た。幸太郎は鈴木兄弟の不運を、既に聞き知つて居たのだらう。客の減るのを計つて座を立つたかと思ふと、杯を持ちながら、忠次郎の前に來た。半知になつて居ても、忠次郎の方が、家柄は遙に上であつた。

「貴殿からも、杯を一つ頂戴いたしたい」

幸太郎は、忠次郎が蒼白な顔をしながら、指した杯を快く飲み乾しながら。

「御不運のほどは、既に聞き及んだ。御無念のほどはお察し申す」

幸太郎の言葉には、眞摯な同情が、籠つて居た。自分でも敵を狙つたものでなければ、持ち得ない同情が含まれた。

幸太郎はそれを聞くと、つひ愚痴になつた。無念の涙が、ハラ〳〵と落ちた。

「お羨やましい。お羨やましい。何と云ふ御幸運ぢや。それに比ぶれば、拙者兄弟は何と云ふ不運で御座らうぞ。敵をおめ〳〵と死なさせた上に、あられもない悪評の的になつて居るのぢや」

忠太郎は、聲こそ出さないが、男泣きに泣いた。

幸太郎は、それを制するやうに云つた。力強く云つた。

「何を仰せらるるのぢや。一旦敵を持つたものに、幸せなものが御座らうか。御身樣などは、まだいゝ。御身樣は、物心付いた七歳の時から、四十七歳の今日まで、人間の定命を、敵打ばかりに過した者の、悲しみを御存じないのぢや。

さう云つたかと思ふと、三十年間の櫛風沐雨で、銅のやうに、焼け爛れた幸太郎の双頬を、大粒の涙が、ホロ〳〵と流れた。

忠次郎の傷ついた胸が、温い手でサツと、撫でられたやうに一時に和んで居た。

二人は、眼を見合はしたまゝ、しばらくは涙を流し合つた。

その三

寶暦三年正月五日の夜の事である。

江戸牛込二十騎町の旗本鳥居孫太夫の家では、お正月の吉例として、奉公人一統にも、祝酒が下された。殊に、舊臘十二月に、主人の孫太夫は、新にお小姓組頭に取り立てられて居た。二十一になつた奥方のおさち殿が、この頃になつて、初て懐胎されたことが分つた。

慶びが、重つたので、家中が一入春めいた。例年よりは見事な年暮の下され物が、奉公人達を欣ばした。五日の晩になつて、年頭の客も絶えたので、奉公人一統に祝酒を許されたのであつた。

主人の孫太夫は、奉公人達の酒宴の興を妨げぬ心遣ひからであらう。日が暮れると、九段富士見町の縁類へ年始の、ためだと云つて、出かけて行つた。

家老や用人達は、表坐敷の方で、打ち寛いで居た。仲間や小者や女中などは、臺所の次ぎの間で、年に一度の公けの自由を享しんで居た。

二更を過ぎた頃になつても、酒宴の興は少しも衰へなかつた。若い草履取や馬丁は、此の時だと云ふやうに、女中に酌をして貰ひながら、グイ〳〵と飲み乾した。

松の葉崩しや深川節を、歌ひ出すものがある。此頃流行り出した吾妻拳を打ち出すものがある。立ち上つて踊り出すものがある。

臺所で、立ち働いて居た料理番の嘉平次までが、堪らなくなつて板前の方を打ち捨かして、酒宴の席へ顔を出した。

「嘉平次か！　御苦勞！　御苦勞！　もう喰ひ物の方は澤山だ。さあ！　貴公も其處へ坐つて一杯やれ！」

仲間頭の左平が、それを見ると、直ぐ杯を指した。

嘉平次は、六十を越して居た。が、彼は新參ではあるが一家中で誰知らぬ者もない酒好きであつた。先刻からも、酣

番をしながら、樽から徳利の方へ移すときに、茶碗で幾杯も／＼盗み飲みをしたので、既にトロリとした眼附をして居たが、眼の前に在つた杯洗の水を覆すと、元気よくこれを前に突き出した。

「親方、俺はそんなものぢや、まだるつこい！　これで、グイとやりてえ！」

「いよう豪勢だ！」

彼は、一座の賞讃を受けながら、杯洗で三杯まで重ねた。遂に最後の一杯は、飲み遺つた。酔が、健康らしい褐色の老顔にも、アリ／＼と現はれた。

「嘉平次さん！　お前さんの庖丁は、また格別だな。いつも、お上のお殘り頂戴で、本當に味つたのは——今日が初てだが、お前さんが自慢する丈あらあ！」

草履取の仲間が、眞正面から賞め立てた。

「えへえ、、、、、、、」

お調子者の嘉平次は、上機嫌になりながら、そのだらしない口元から、落ちさうになる涎を、左の手で幾度も拭つた。

「きけば、お前さんは、上方で錬上げた腕ださうだが、料理は何と云つても上方だなあ！」

仲間頭の左平までが、仔細らしく感心して見せた。

「えへ、、、、えへ、、、、」

嘉平次は、おだて上げられて、いやしい嬉しさうな笑ひが、止め度もなく唇を洩れた。

「何でもお前さんは、若い時はお大名のお膳番を勤めたことがあるさうだが、本當かな！」

お庭番の仲間が、意識して嘉平次を煽てにかゝつた。

「うむ！　なるほど、なるほど」
一座の者は、初て聴いたやうに感嘆した。好人物の嘉平次を、煽てゝやらうと云ふ心が、みんなの心に、少しづゝ湧いて居た。
「えへゝゝゝ。そいつを知つて居られると、お恥しい！」
嘉平次は、恥しさうに、頭を掻いた。が、恥しさうにしたのは、表面丈である。彼がお大名のお膳番を勤めたと云ふことは、彼の好んで吐く嘘だつた。彼は、酒を飲むと定まつたやうに、此の嘘を吐いた。もう、此屋敷へ来てからも、二三度は繰り返した嘘である。
本當に、讃州丸龜の京極家の藩中で、お膳番を勤めたのは、彼の舊主の鈴木源太夫である。彼は、その源太夫の家に、仲間として長い間仕へて居たゝめに、見樣見眞似に庖丁の使ひ方を覺えたのに、過ぎないのである。
「お膳番と云へば、立派なお武士だ！」
お庭番の仲間が、のしかゝるやうに、煽てた。嘉平次は、さう云つて呉れるのを待つて居たのである。が、彼はまた頭を掻いて見せた。
「お膳番なんて、武士のはしくれでさ。知行と云つて、僅か二十石五人扶持、足の裏にくつ付いてしまひさうな糊米ほどしかありませんや。」
彼は、いかにもそれを輕蔑したやうな口調で、二十石五人扶持と云つた。が、彼の舊主の鈴木源太夫の知行でさへ、本當は十石三人扶持しか取つて居なかつた。
「二十石五人扶持！　俺達は、生涯にたつた一度でもいゝから、有付いて見たいものだ！」

お庭番の仲間は、歓揃に油をかけた。

「立派な上士格だ！」

仲間頭の左平までが、合槌を打つた。

嘉平次は、相恰を崩しながら、えへら〳〵と笑つた。實際お膳番を勤めて居たのは、舊主の鈴木源太夫ではなくして、自分であつたやうな氣持にさへなつて居た。

「道理で、庖丁の切味が違つてらあ！」

「此の三杯酢の味なんか、お大名料理の味だ！」

嘉平次は、有頂天になつて居た。彼は、大名のお膳番の苦心談と云つたやうなものを、話し始めようかと思つて居た。が、話題は彼の豫期しない方へ外れてしまつた。

「そのお前さんが、何うして又、二十石の武士を棒に振りなさつたのだ！」

左平が、崩れて居た膝頭を立て直しながら訊いた。嘉平次は、一寸狼狽した。彼は、たゞ自分が昔、お膳番を勤めて居たと思はれさへすればよかつたのだ。それから先の嘘は、少しも準備しては居なかつたのだ。

「それがさあ！・それがさあ！」彼は、一寸云ひ澱んだが、直ぐ舊主の源太夫が、何うして二十石の武士を、棒に振つたかと云ふことを思ひ出した。それは、彼に用意されて居る手近の嘘だつた。

「それがさあ！ 酒の上の過ちで、つい朋輩と口論に及んで武士の意地から……」

嘉平次は、いつの間にか、無意識の裡に、武士らしい口調になつて居た。

「よくある奴だ！ それで相手を見事にやりなさつたのだな！」

「全く……」

嘉平次は武士らしく凛然と答へた。

「うむ！」

「なるほど」

「うむ！」

一座は片唾を呑んでしまつた。それは今までのやうな、媚て半分の感嘆ではなかつた。それは、料理と云つたやうな人間として、武士としての末技に對する感嘆ではなかつた。武士そのものに對する感嘆だつた。嘉平次は、自分が本當の武士であり、勇士であるやうな幻覺を感じた。

一座の者は、みんな熱心にその詳細を知りたさうな顔付をして居る。彼は一座の者を滿足させると同時に、もつと自分が英雄視せらるゝ快感を味ひたかつた。彼は舊主の鈴木源太夫が、朋輩の幸田某を打ち果した前後の様子を、古い二十年近い昔の記臆から探ぐり出して居た。が、舊主の源太夫の刄傷には、少しも武士らしいところはなかつた。朋輩の幸田某の妻に横戀慕をして、聽かれなかつた恨から、幸田の家を訪ねて對談中に、相手の油斷を見すまして、不意に斬りかけたのである。その上に、逃げ出さうとする所を、幸田の妻に追ひかけられて、一太刀斬り付けられたやうに覺えて居る。それをその儘に、話すことは、一座の不快と反感とを買ふことである。彼は、その話を訂正しながら話し始めた。

「口論の始まりと云ふのはな。その男が、槍術が自慢でな、その日も、俺と槍術の話になつたのぢやが、つひ議論になつてなあ。相手が、「料理番の貴殿に、武術の詮議は無用ぢや」と、口を滑らしたのが、お互の運の盡きぢや。武士とし

て、聞き捨てならぬ一言と思つたから、「料理番の刀が切れるか切れぬか、受けて見い！」と斬り付けたのぢや」

「うむ！」

「うむ！」

「うむ！」

一座の仲間達は、嘉平次の話振りに、スッカリ魅せられてしまつた。嘉平次は、自分の云つて居ることが、本當は嘘でなくして眞實であるやうな得意さを感じて居た。

「俺はな、小供の時から、竹内流の居合が自慢でなあ！」

彼はさう云つて、皆に氣を持たせた。

「うむ！」

「うむ！」

仲間達は、口々に呻つた。

「抜打の勝負ぢやハヽヽヽヽ」

嘉平次は、浩然として笑つた。

一座はしーんとした。

「柄に手がかゝつたと思つた時きには、もう相手の肩口から、迸つた血が、さつとまだ替へてから間もない青疊の上に散つて居た。」

實際嘉平次の頭の中にも、さうした光景が、マザ／＼と浮んだ。

「ほゝう！」

「うむ！」

仲間達の感嘆は絶頂に達した。

「家人なども定めし、出合ひましたらうな」

仲間頭の左平の言葉使ひ迄が、スッカリ改つて居た。仲間達は、嘉平次が斬りかゝる仲間小者などを、左右に斬り拂ふ勇壯な光景を豫想して居た。が、嘉平次は、もつと別な點で、自分の武士を上げたかつた。

「いや、仲間小者などは、俺の大刀尖に恐れをなして、誰一人向つて來ぬ。が、追は連れ添ふ內儀ぢや。夫の敵とばかり、懷劍を逆手に俺に斬りかゝつて來た。」

話が急に、戲曲的な轉廻をしたので、一座はハツとどよめいた。嘉平次は、自分の話の効果を確めるやうに、悠然と一座を見廻した。」

「不憫ながら、一刀の下におやりなすつたか。」

お庭番の仲間が、待ち切れないやうに訊いた。先刻のやうな煽て半分、揶揄半分の口調などは、微塵も殘つて居なかつた。

「さうは思つたが、餘りに不憫でな。しかも、まだ緣付いて來てから、一年にもならない若い內儀ぢや。殊に、深い宿意があつて、打ち果したと云ふ敵ぢやなし、女房の命迄も取るのは無益だと思つたから、斬りかゝる懷劍の下を、潜つて相手の利腕を捕へた。ハヽヽ、その時にな、女と思つて油斷をしたゝめに、つひ薄手を負つたのが、此の二の腕の傷ぢや。」

彼は、自分の腕を捲くつて、二の腕の傷を見せた。それは、彼が丸龜を退散して、京の四條の茶屋の板前を勤めて居たとき、血氣の朋輩と喧嘩をして、お手の物の庖丁で、斬り付けられた傷である。彼は、それを時にとつての證據として、自分の話に動かせない眞實性を加へたのであつた。彼は、自分の當意即妙に、自分で感心した。

「どれ！　どれ！」

一座の者は、杯盤の間を渡つて來て、彼の傷に見入つた。もう、誰一人として、彼の話を疑つて居るものはなかつた。

「それで、その內儀はどうなすつた！」

皆は、話の結末を聽きたがつた。

「持つて居た懷劍を放させて、其處へ突き放したまゝ、悠々と出て來たが、追に誰も後を追ふて來るものはなかつた。その足で、直ぐ退轉いたしたが、もう二十年に近い昔ぢや。今から、考へると短慮だつたと云ふ氣もするが、武士の意地でな。武士としてこれ堪忍ならぬところぢや！」

「道理ぢやなあ。が、御身樣の仕儀に、一點の怯いところもない。それを云ひ立てゝ、立派な主取りでも出來る位ぢや」

「料理人などをさせて置くのは、全く以て惜しいものだ！推擧さへあれば、その腕で三十石や、五十石は直ぐぢや！」

嘉平次は、鷹揚に笑つた。

「かう年が寄ると、仕官の望みなどは、毛頭ないわ。御身達に、かうして昔話などをするのが、何よりの樂しみぢやハ、、、、、」

「嘉平次殿のお杯を頂戴しよう」

皆は大ぎく\に嘉平次の杯を貰つた。

彼は、生れて六十幾年の間に、今宵ほど、得意な時はなかつた。彼は、平生の大酒に輪をかけて、二升に近い酒を浴びて居た。

その夜、大酔した嘉平次が、蹣跚として自分のお長屋へ歸らうとして、臺所口を出たときだつた。

「親の敵!」と云ふ悲痛な叫びと共に、匕首が闇に閃めいたかと思ふと、彼は左の脇腹を抉られて、臺所口の敷居の上に、のけ様に轉倒した。

家人達が、銘々醉類を携げて、走せ集つたとき、つひ先頃奉公に上つたばかりの、召使ひのおとよと云ふ女が、半身に血を浴びながら、

「親の敵を打ちました。親の敵を打ちました」と、絶叫して居た。

幸田とよ女の敵打は、丸龜藩孝女の仇討として、寶暦年間の江戸市中に響き渡つた。江戸の市民は、まだ二十にかならぬかの、かよわい少女の悲壯な振舞ひを讃嘆し合つた。とよ女の仇討談が、講釋にまで歌はれて居た。それに依ると、父の幸田源助が、打たれたときとよ女は、母の胎内に宿つてから、まだ三月にしかなつて居なかつた。母は、夫の横死の原因が、自分であることを知つて居たために、亡夫のために、貞節を立て通した。とよ女が、十六のときに、母は不幸にして、他界した。彼女は、死床にとよ女を呼んで、初て父の横死の仔細を語つて、仇討の一儀を誓はしめたと云ふのであつた。貞節悲壯な母子に對する賞讚は、江戸の隅々にまで傳はつた。

喜平次が、敵の鈴木源太夫であることに就いては、誰人も疑を挟まなかつた。町奉行の役人が、検屍の時、念のためにと云ふので、丸龜藩の屋敷へ人を迎へにやつたが、丁度藩主が、在國して居たので、定府達の間には、鈴木源太夫を見知つて居るものは、一人も居なかつた。

たゞ、當人のとよ女丈には、敵の傷の場所が、母の遺言の通り、眉間になくして、二の腕に在つたのが、一寸氣になつた。が、直ぐ母は夫を打たれたときに、氣が動轉して居たために、相手の眉間に、飛び付いて居た血潮を、手傷だと思ひ違つたのだらうと思ひ直した。

とよ女の孝節が、藩主の上聞に達して、召し還された上、藩の家老の次子を、婿養子として、幸田の跡目を立てられて、舊知の倍の百石を下し置かれたのは、同じ寶暦五年の九月のことである。

編輯局だより

■灼鑠眞金を溶かす盛夏の前の梅雨、欝陶しいが已むを得ぬ天地の運行である。空は曇り、天、時に雨を降すも、同人の心胸はイツモ眞夏のそれの如く、赤熱的で、日本晴れで、豁然たるものである。

■六月號の「集中」問題として「社會主義者首領及新人の見たる十年後の日本の」標題で堺、大杉等の寄稿を見たが、その筋で許して貰へぬのでヤメにした、三君の折角の骨折も水泡に歸した、讀者と筆者とに厚く謝する、だから來月號は大に陣容を整へて讀者諸君に見えたい。堺君のホワイト・ファングも同氏多忙の故を以て本月だけは休掲した。

■同人室伏は六月早々獨逸を經て、露西亞に潜入る筈だ、彼一流の燃犀の筆鋒で近く大氣焰を擧げることだろう。

■ラッセル教授未だに全快の域に達せず、隨つて來朝の期日も決定せぬ。一日も早く氏の元氣な顏が見たい。

■七月號には穗積重遠博士より「三くだり半」といふ面白い寄稿がある筈だ、重厚なる博士の執筆だけに一段と期待さるるものがある。

■その他、七月號こそは大に同人がヘビーをかけたものであれば、讀者も待ち甲斐のあるものだと自信している。

■東北大學の石原博士及廣島高師の高田保馬君等久しく病んで學界聊か寂寞を感ず、我社同人は篤學なる兩氏の一日も早く本復されんことを希望するものである。

■出版小僧よりの傳言をそのまま取次ぐ、賀川氏の「死線を越えて」の續篇は六月下旬脱稿、七月下旬に發賣する、山川均氏の「レーニンとトロツキー」はいよいよ發賣することとなつた、氏一流の辛辣な人物評は天下一品だと

■編輯締切間際に大本教の出口と淺野が縛られたとかで校正子なぞはワイワイ騷いで「改造」の殊勳を高唱しておる、ナンノ、ナンノ、落ち目には眞の男氣を出して同情すべきだ、死屍に鞭打つことは武士の情を知らぬもの。

■政界も學界も腐氣充滿し、教界にも些の權威がない、權威のないのは自己のないことだ、われ〳〵は眞に自分に生きたい、人に依つて生きたくない、自己に強く生くるものにして始めて權威があり、創作があるのだ、人の困憊を見て誹謗するを止めて、眞に偉大なる自分に生きねばならぬ。

■緑に征服せられたる世界、生氣横溢、我等同人の仕事はこれからだ、炎天に曝らされて氣持のよい汗をかいて病氣なぞは撃退することだ、同人十七名無病息災。

■同人讀本は四國、中國へ、犬伏は九州、京阪へ、村田は信越へ、大塚は神戸へ旅立つた、ホンの二三日の飛脚視察だ。

■本社へ向つて講演を依頼するものが多い、一々斷はるのも面倒だ、我社同人は今の所では、その爲めには絶對に應じがたいから、ドウか宜しく御承知置を乞ふ。

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	七十錢	二錢
半ケ年	四圓二十錢	不要
壹ケ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

本號特價　金八拾錢

大正十年五月二十日印刷納本
大正十年六月一日發行

編輯兼發行印刷者　東京府下中目黒七七〇　横關利藤太
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二